中　田　遺　跡

財団法人八尾市文化財調査研究会報告49

Ⅰ　中 田 遺 跡（第５次調査）

Ⅱ　中 田 遺 跡（第６次調査）

Ⅲ　中 田 遺 跡（第８次調査）

Ⅳ　中 田 遺 跡（第24次調査）

Ⅴ　中 田 遺 跡（第28次調査）

１９９５年

財団法人　　八尾市文化財調査研究会

中　田　遺　跡

財団法人八尾市文化財調査研究会報告49

Ⅰ　中 田 遺 跡（第５次調査）

Ⅱ　中 田 遺 跡（第６次調査）

Ⅲ　中 田 遺 跡（第８次調査）

Ⅳ　中 田 遺 跡（第24次調査）

Ⅴ　中 田 遺 跡（第28次調査）

１９９５年

財団法人　　八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の中央東部に位置し、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれ、中央部の南東から北西にかけては、旧大和川が形成した三角洲状の沖積平野が広がっています。生駒山地の西側斜面や羽曳野丘陵の先端部には、古く旧石器時代にまで遡ることのできる恩智遺跡や八尾南遺跡があります。一方、平野部には弥生時代前期まで遡ることのできる遺跡が、点々と位置しています。

今回報告の運びとなりました中田遺跡は、八尾市中央部の中田・八尾木北・刑部一帯に所在しており、すでに昭和40年代後半に大規模な発掘調査が行われた所です。中田遺跡では、これまでに、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会などによって、60件以上にのぼる数多くの調査が行われています。それらの調査の結果、中田遺跡は弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが明らかにされています。

今回ここに集録したものは、中田遺跡第５次調査・第６次調査・第８次調査・第24次調査・第28次調査の５件で、第５次調査では古墳時代前期、第６次調査では弥生時代中期から近世～近代、第８次調査では平安時代後期から室町時代、第24次調査では平安時代末期、第28次調査では平安時代末期～鎌倉時代の遺構や遺物が検出され、中田遺跡の豊富な内容が明らかにされました。

最後になりましたが、これらの発掘調査費用は、すべて事業者負担で行われたもので、事業者皆様方のご理解・ご協力のもとに調査業務が遂行できたことを感謝いたします。

平成７年11月30日

財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　木　山　丈　司

序

1、本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、平成2年度から6年度にかけて、中田遺跡内で実施した発掘調査の一部の報告書を集録したものである。

1、本書に集録した発掘調査報告書は、下記の目次のとおりである。

1、本書に集録した発掘調査報告書は各調査員が作成し、文責等の詳細はそれぞれの例言に著したが、本書をまとめるにあたっては、成海佳子が編集作業を行った。

1、本書に掲載した地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1（昭和61年8月編集）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成5年10月）を元に作成した。

1、本書で用いた高さの基準「T.P.」は、東京湾標準潮位である。

1、本書では磁北・真北を併用している。

1、遺構は、以下の略号で表した。

掘立柱建物：ＳＢ、井戸：ＳＥ、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、柱穴・小穴：ＳＰ

1、掲載図面の縮尺は、1/6000、1/5000、1/300、1/200、1/150、1/60、1/50、1/40、1/10、1/8、1/6、1/5、1/4、2/3を使用した。

1、遺物実測図については、断面の表示によって、以下のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・瓦・木製品：白、石製品：斜線、須恵器・陶器・磁器：黒

1、各調査については、実測図・写真などのほか、カラースライドも作成している。広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき

埋蔵文化財分布図

Ⅰ　中田遺跡（第5次調査）…… 1

Ⅱ　中田遺跡（第6次調査）……21

Ⅲ　中田遺跡（第8次調査）……37

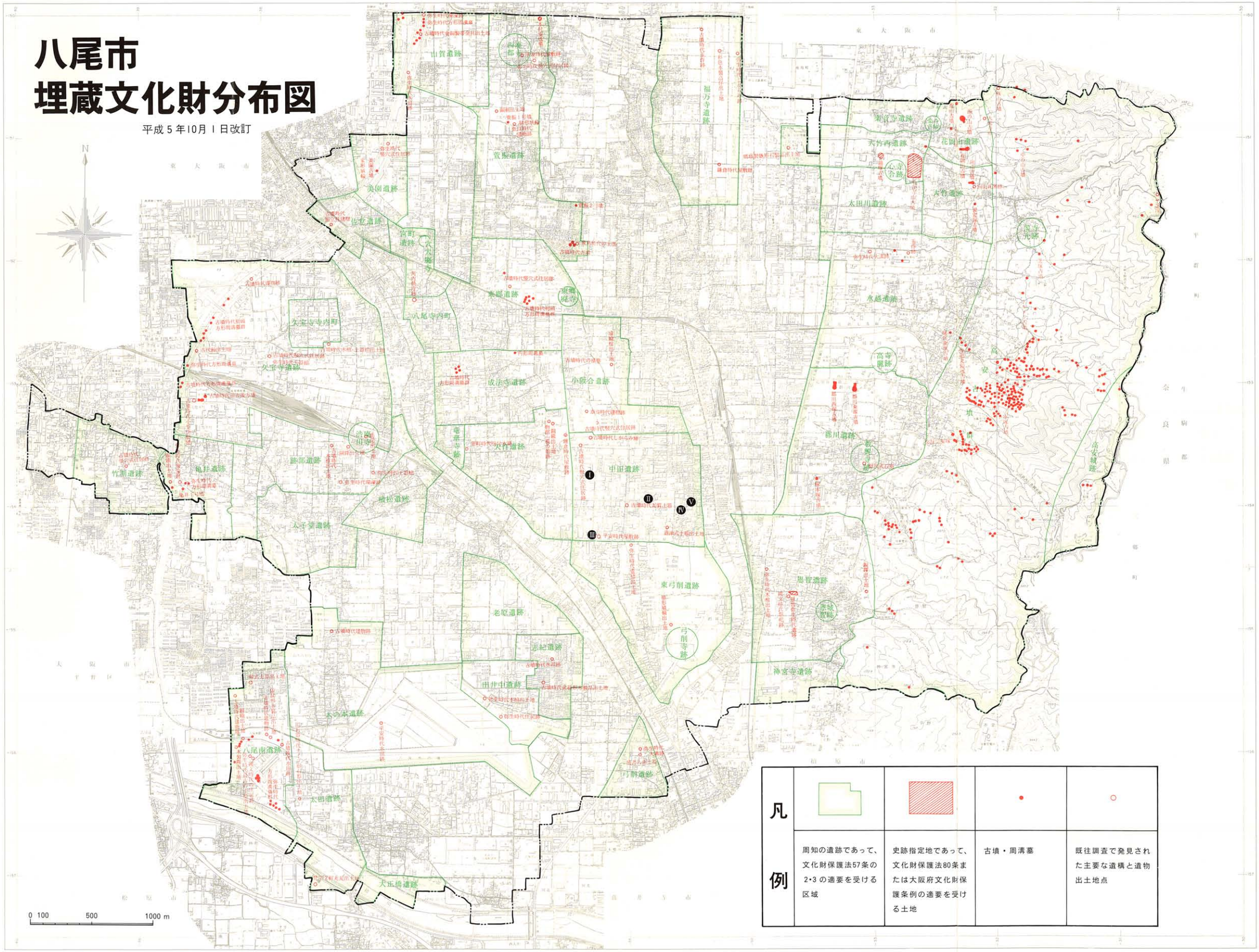
Ⅳ　中田遺跡（第24次調査）……85

Ⅴ　中田遺跡（第28次調査）……95

報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成５年10月１日改訂



凡例			
周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適要を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法80条または大阪府文化財保護条例の適要を受ける土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

Ⅰ　中田遺跡第５次調査（NT90－５）

例　　言

1、本書は、八尾市八尾木北１丁目37番地２で実施した関西電力鉄塔建て替えに伴う発掘調査の報告である。

1、本書で報告する中田遺跡第５次調査（NT90－５）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第68号　平成２年８月６日付）に基づき、関西電力株式会社から委託を受けて実施したものである。

1、現地調査は、平成２年11月26日から12月４日（実働８日間）にかけて成海佳子を担当者として実施した。

1、調査面積は約80㎡を測る。

現地調査には、岡田聖一・坂下　学・松下哲也・宮崎寛子が参加した。

1、内業整理には、上記に加えて、磯上サカエ・高柳恵美・村井俊子・山内千恵子が参加した。

1、土器の胎土および石材の鑑定については、奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託　奥田　尚氏にお願いし、土器の胎土について、御玉稿を賜った。

目　　次

1　はじめに…… 1

2　調査の方法と経過…… 1

3　調査概要…… 4

1）層序…… 4

2）検出遺構…… 4

3）出土遺物…… 7

4　まとめ……12

5　出土遺物観察表……14

6　土器の表面に見られる砂礫……（奥田　尚）…17

Ⅰ　中田遺跡第５次調査（NT90－５）

１　はじめに

中田遺跡は、八尾市中央部の中田・八尾木北一帯に所在しており、南は東弓削遺跡・西は矢作遺跡・北西は成法寺遺跡・北は小阪合遺跡と接している。当遺跡は昭和45年、区画整理事業に伴って発見されたもので、弥生時代後期から中近世に至る複合遺跡であることが明らかにされている。それ以後も断続的に調査が実施されており、その結果、弥生時代前期に遡る遺構・遺物も検出され、古墳時代前期が当遺跡の中心となる時期であることが明らかにされている。

今回の調査地である八尾木北１丁目は、中田遺跡の北西側にあたり、これまでに近隣では３件の調査が行われている。調査地の北東40ｍ地点（⑱）では、八尾市教委が平成元年度に発掘調査を行っており、古墳時代後期の遺物を含む土坑を検出している。また、南東50ｍで市教委が平成２年度に行った調査（㉛）でも、６世紀中葉を主とする良好な遺物包含層を確認している。また、当地の西40ｍ地点で当研究会が行った第16次調査（㊸）では、古墳時代前期布留式期の古相と同新相の二時期の遺構面が確認されている。（第２図・調査地一覧表参照）

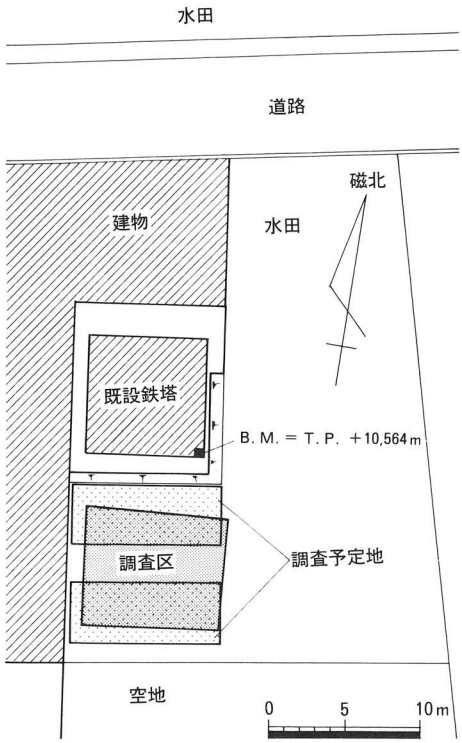
今回の調査は関西電力鉄塔建て替え工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で実施した発掘調査の第５次調査にあたる。

２　調査の方法と経過

調査面積は80㎡であるが、西側との敷地境界・北側の既存の鉄塔との位置関係から、調査区は、当初市教育委員会から指示された位置とは、若干異なっている。現地調査の期間は平成２年11月26日から12月４日までの８日間である。

掘削に際しては、現地表下0.7～0.8ｍの旧耕土・床土等を機械掘削した後、以下0.3～0.5ｍの遺物包含層などを手掘りとした。調査の結果、平安時代以降の農耕に伴う上層遺構と、古墳時代前期（布留式古相）の下層遺構を検出した。

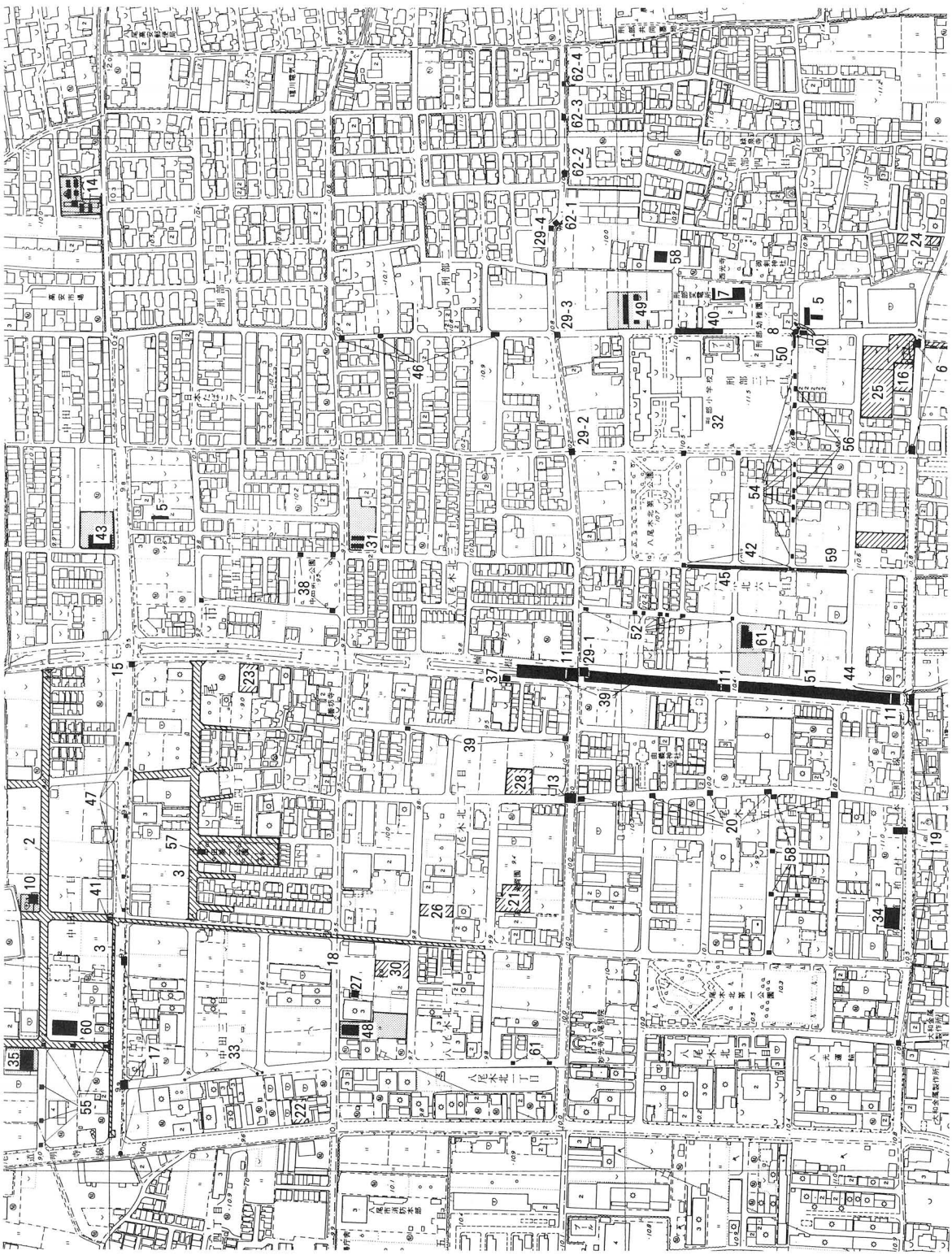
なお、地区割については、中心杭によって４分割し、小区画の地区を設定した。各小区画の名称は南西部から時計回りに１区～４区と呼んだ。



第１図　調査区設定図（Ｓ＝1:500）

中田遺跡調査地一覧表（平成７年３月31日現在）

番号	調査主体	所 在 地	面積(㎡)	調査原因	調査期間	文献		発行	発行年	備考
1	大阪府教育委員会	中田１～５		道路敷設	710225～710312	1	中田遺跡発掘調査概要	大阪府教育委員会		
2	中田遺跡調査会	中田１		区画整理	721016～7303	2	中田遺跡〈北区〉発掘調査概要	中田遺跡調査会		
3	中田遺跡調査会	中田４	5,073	区画整理	730501～7309	3	中田遺跡〈南区〉発掘調査概要	中田遺跡調査会		
4	中田遺跡調査センター	中田１・３・４		電話線埋設	731113～740129	4	中田遺跡：中田遺跡調査報告Ⅰ	中田遺跡調査センター	1974. 5	
5	八尾市教育委員会	青山町３・中田５他		遺跡範囲確認	740726～740903	5	中田遺跡：中田遺跡調査報告Ⅱ	八尾市教育委員会	1975. 3	
6	八尾市教育委員会	八尾木北５・６他		送水管敷設	751208～760331	6	八尾市文化財報告３	八尾市教育委員会	1976. 4	東弓削遺跡
7	八尾市教育委員会	刑部３		変電所建設	7609～7610	7	八尾市文化財報告４	八尾市教育委員会	1979	
8	八尾市教育委員会	刑部３		電気管路埋設	7804	8	八尾市文化財報告７	八尾市教育委員会	1981. 3	
9	八尾市教育委員会			電話線埋設	7911	8				
10	八尾市教育委員会	中田１－39		倉庫・事務所	820227～810306	9	八尾市文化財紀要２	八尾市教育委員会	1986. 12	
11	大阪府教育委員会	中田１・八尾木北５		公共下水道	85年度	10	中田遺跡発掘調査概要	大阪府教育委員会	1986. 3	
12	市教委（86-532）	八尾木北６－166	68	共同住宅	870819～870905	11	八尾市文化財調査報告17	八尾市教育委員会	1988. 3	
13	市教委	八尾木北５他		公共下水道	871214～880311	12	八尾市文化財調査報告18	八尾市教育委員会	1988. 3	
14	研究会（NT87-01）	中田１－29・39	100	共同住宅建設	880222～880311	13	(財)八尾市文化財調査研究会報告16	(財)八尾市文化財調査研究会	1988. 12	
15	市教委（63-393）	中田４	21.28	公共下水道	890222～890223	14	八尾市文化財調査報告21	八尾市教育委員会	1990. 3	
16	市教委（89-331）	刑部３－５－２他	4	事務所・住宅	890921	15	八尾市文化財調査報告20	八尾市教育委員会	1990. 3	
17	研究会（NT89-02）	中田２～４	70	公共下水道	891013～891127	16	(財)八尾市文化財調査研究会報告28	(財)八尾市文化財調査研究会	1990. 12	
18	市教委（01-221）	中田３・八尾木北	4	公共下水道	891031	14				
19	研究会（NT89-03）	八尾木北４～５	132	公共下水道	891202～900331	17	(財)八尾市文化財調査研究会報告35	(財)八尾市文化財調査研究会	1992. 10	
20	研究会（NT89-04）	八尾木北５	95	公共下水道	891212～900118	17				
21	市教委（89-484）	八尾木北２－41－２	8	倉庫・事務所	900112	15				
22	市教委（90-69）	中田３－11・12		店舗・事務所	900731	18	八尾市文化財調査報告22	八尾市教育委員会	1991. 3	
23	市教委（90-540）	中田４－142の一部	6	共同住宅建設	900801	18				
24	市教委（90-260）	刑部４－407－２・４・８	12	社屋・住宅	900921	18				
25	市教委（90-330）	刑部３－53－１	11.25	倉庫建設	901023	18				
26	市教委（90-427）	八尾木北２－15－13	4	工場付住宅	901120	18				
27	**研究会（NT90-05）**	**八尾木北１－37－２**	**80**	**送電鉄塔建替**	**901126～901204**					**今回報告**
28	市教委（90-412）	八尾木北２－56－２	9	共同住宅建設	901211	18				
29	**研究会（NT90-06）**	**八尾木北３・刑部２**	**180**	**公共下水道**	**910108～910216**					**今回報告**
30	市教委（90-520）	八尾木北１－340他	8	工場建設	910123	18				
31	研究会（NT91-07）	八尾木北３－340他	90	共同住宅建設	910517～910527	19	(財)八尾市文化財調査研究会報告34	(財)八尾市文化財調査研究会	1992. 9	
32	市教委（91-141）	八尾木北６		公共下水道	910909～911116	20	八尾市文化財調査報告26	八尾市教育委員会	1992. 3	
33	市教委（91-293）	中田３		公共下水道	910914～910929	20				
34	**研究会（NT91-08）**	**八尾木北５－98他**	**500**	**温泉旅館建設**	**911105～911201**					**今回報告**
35	研究会（NT91-09）	中田１－３	294	共同住宅建設	911205～911218	19				
36	市教委（91-353）	八尾木北２	8	公共下水道	911210	21	八尾市文化財調査報告28	八尾市教育委員会	1993. 3	
37	市教委（91-354）	八尾木北２		公共下水道	911213	21				
38	市教委（91-503）	中田５－75－107	16	公共下水道	920109・27	21				
39	研究会（NT92-10）	八尾木北３	450	河川改修工事	921026～930122	22	平成４年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告	(財)八尾市文化財調査研究会	1993. 3	
40	研究会（NT92-11）	刑部３	81	公共下水道	921106～930322	23	(財)八尾市文化財調査研究会報告39	(財)八尾市文化財調査研究会	1993. 12	
41	市教委（92-312）	中田１	8	公共下水道	921124～921126	21				
42	市教委（92-314）	八尾木北６	8	公共下水道	921215～921216	21				
43	研究会（NT92-12）	中田２－405	120	共同住宅建設	930119～930130	23				
44	研究会（NT92-13）	八尾木北５	123	電気管路埋設	930128～930303	23				
45	研究会（NT92-14）	八尾木北６	170	公共下水道	930130～930304	22				
46	研究会（NT92-15）	刑部２	35	公共下水道	930308～930415	22				
47	市教委（92-598）	中田１～４	15.75	公共下水道	930311～930316	24	八尾市文化財調査報告30	八尾市教育委員会	1994. 3	
48	研究会（NT93-16）	八尾木北１－33他	170	共同住宅建設	930517～930527	25	(財)八尾市文化財調査研究会報告43	(財)八尾市文化財調査研究会	1994. 10	
49	研究会（NT93-17）	刑部４－357	150	共同住宅建設	930728～930811	25				
50	研究会（NT93-18）	刑部３	10	電気管路埋設	931004～931009	25				
51	研究会（NT93-19）	八尾木北６	390	河川改修工事	931012～931201	26	平成５年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告	(財)八尾市文化財調査研究会	1994. 5	
52	研究会（NT93-20）	八尾木北６	28	公共下水道	931012～931015	25				
53	市教委（93-289）	八尾木北５		公共下水道	931013～931122	24				
54	研究会（NT93-21）	刑部３	28	公共下水道	931020～931022	25				
55	市教委（93-355）	中田１・３		公共下水道	931112～931216	24				
56	研究会（NT93-22）	刑部３・八尾木北６	22.5	電気管路埋設	940118～940214	25				
57	研究会（NT93-23）	中田４－118	64	防火水槽	940301～940304	25				
58	**研究会（NT94-24）**	**刑部４－210－１**	**184**	**共同住宅建設**	**940413～940426**					**今回報告**
59	研究会（NT94-25）	八尾木北６	90	公共下水道	940530～940622	27	平成６年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告	(財)八尾市文化財調査研究会	1995. 5	
60	研究会（NT94-26）	中田１－20他	200	共同住宅建設	940704～940715	27				
61	研究会（NT94-27）	八尾木北６－19	160	共同住宅建設	941107～941122	27				
62	**研究会（NT94-28）**	**刑部２**	**20.96**	**公共下水道**	**941118～941205**	**27**				**今回報告**



第２図　中田遺跡調査位置図（Ｓ＝1:6000）

3　調査概要

1）層序

調査地の現地表面の標高はT.P.＋9.4～9.5m程度で、旧状は水田である。基本層序は、上層から第1層灰黒色礫混じり粘土（旧耕土）、第2層茶褐色礫混じり粘土（床土）、第3層黄褐色礫混じり粘土、第4層黄色シルト、第5層黄灰色粘土、第6層暗灰黄色粘土、第7層赤褐色礫混じり砂質土、第8層黄灰色～青灰色シルト、第9層青灰色～灰色粗砂の9層を確認した。

第1層灰黒色礫混じり粘土は、調査直前まで耕作されていた土で、層厚は0.15～0.2mを測る。第2層茶褐色礫混じり粘土は第1層に伴う床土で、層厚は0.15～0.3m、西側の上部には0.05～0.1mの厚さでグライ化した土層が見られる。

第3層黄褐色礫混じり粘土には、礫とともに中世～近世の陶磁器片や土師器片・瓦片などが若干含まれており、層厚は0.1～0.2mを測る。

第4層黄色シルトは洪水層の可能性があり、層厚は0.05～0.2mを測る。第5層黄灰色粘土の上面には波状痕跡がみられ、第4層によって埋没した水田耕作土の可能性がある。第5層の層厚は0.2～0.3m、上面のレベル高はT.P.＋8.9m前後である。

第6層暗灰黄色粘土は層厚0.05～0.15m、粘性が強く土器類の小破片が若干含まれている。

第7層赤褐色礫混じり砂質シルトは古墳時代前期の遺物包含層で、層厚は0.1～0.3mを測り、遺物の包含量は多い。調査区北西部では、グライ化し、暗緑灰色を呈する部分がある。上層遺構は、この層上面から構築されている。

第8層黄灰色～青灰色シルトが古墳時代前期の遺構面で、層厚は0.2～0.4mを測る。上面のレベルはT.P.＋8.4～8.6mを指し、北側が下がっている。

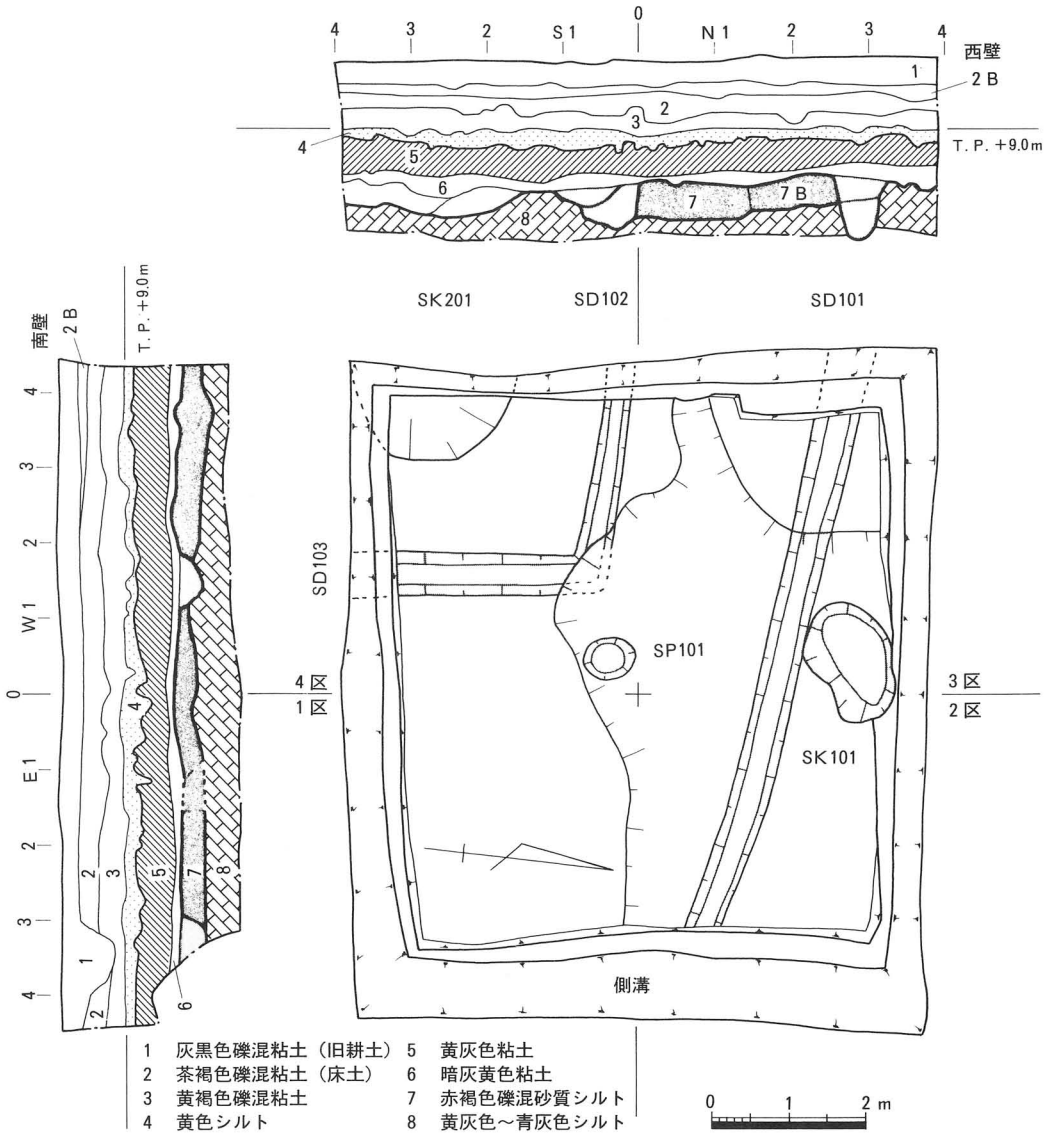
第9層青灰色～灰色粗砂は部分的に確認した土層で、河川内堆積土の可能性があり、含水量が多く、層厚は0.5m以上を測る。

2）検出遺構

上層遺構

SK101：調査区北端中央部（2区～3区）で検出した。上面の形状は北西－南東に長軸を持つ隅丸長方形で、長径1.9m・短径0.9mを測る。断面の形状は逆台形で直線的に掘られ、深さは0.6m、底は平坦である。内部には、上層から①灰色粘土・②青色粘土のブロック・③青色粘土と灰色シルトのブロック・④青黒シルト～微砂の4層が堆積している。

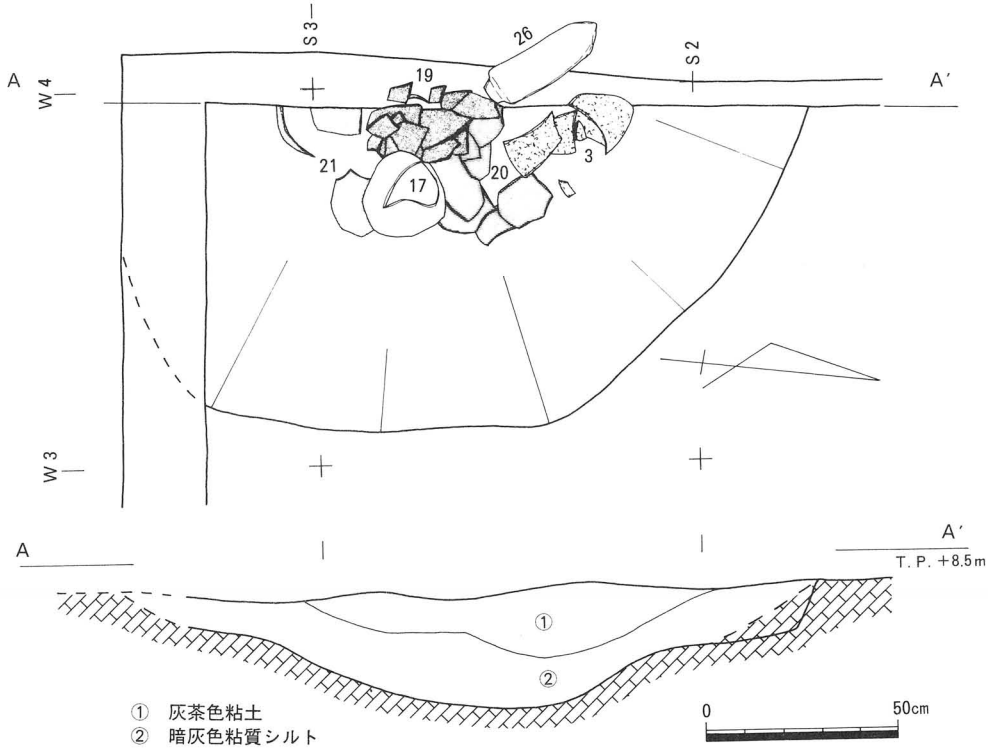
SD101：調査区北部（2区～3区）で検出した。ほぼ東西に伸びるもので、中央北端はSK101に切られている。断面の形状は逆台形～V字形で、検出長7.0m・幅0.5～0.6m・深さ0.4～0.5mを測る。内部堆積土は暗緑灰色粘土である。



第３図　平面図・壁面図（水平Ｓ＝1:100、垂直Ｓ＝1:50）

SD102：調査区南西部（１区）、SD101から南2.0～2.2ｍで検出した。SD101に並行して伸びるもので、東端はSD103とほぼ直角に交わる。断面の形状は半円形で、検出長2.5ｍ・幅0.3～0.5ｍ・深さ0.2ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粘土である。

SD103：調査区南西部（１区）、SD102の東端から南北に伸びている。断面の形状は半円形で、検出長2.5ｍ・幅0.3～0.5ｍ・深さ0.2ｍを測る。内部堆積土は暗灰色粘土である。



第４図　ＳＫ201平断面図（Ｓ＝1:20）

SP101：調査区中央部南西より（１区）で検出した。長径0.68ｍ・短径0.55ｍ・深さ0.35ｍ程度で南北にやや長い円形のピットで、断面はU字形を呈し、柱痕は認められなかった。内部堆積土は灰色シルト混じり粘土で、炭化物が少量出土している。

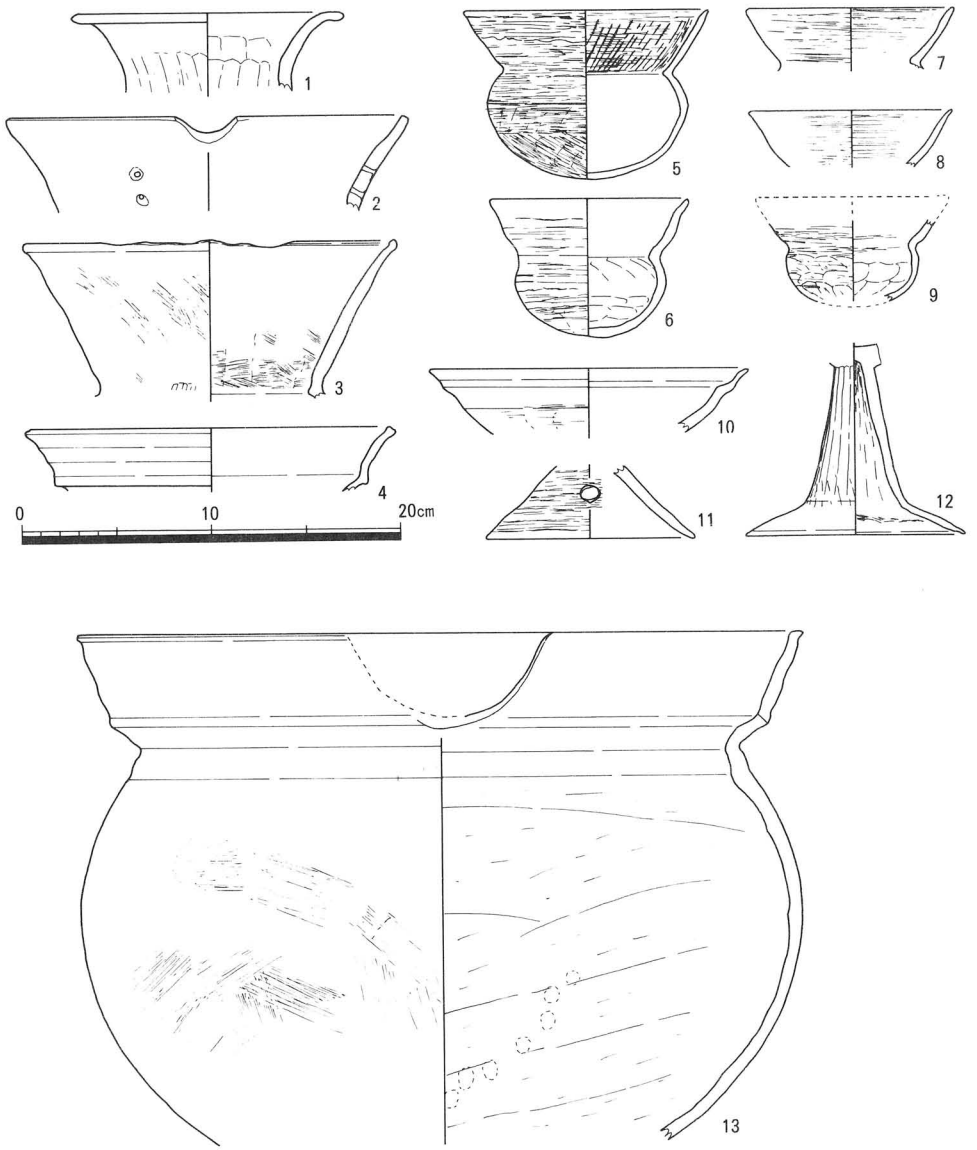
下層遺構

SK201：調査区南西隅（１区）で検出した。南側・西側は側溝に一致したため全体の形状は不明であるが、東西1.8ｍ・南北0.6ｍ程度の楕円形を呈するものと考えられる。断面の形状はゆるやかな二段の掘り形をもち、底部中央は浅く窪み、深さは0.3ｍ前後を測る。内部堆積土は、上層の①灰茶色粘土と下層の②暗灰色粘質シルトに分かれる。遺物は①層から遺存状態の良い土器がきわめて多量に出土している。器種は庄内系の甕・布留傾向甕が十数個体とほとんどを占め、直口壷・小型壷・小型鉢・大型鉢・高杯などが少量ずつ含まれており、紀伊・阿波・吉備など他地方の土器も若干認められる。その他の遺物としては、砥石（26）の他、径２～３㎝程度の白色の円礫（いわゆる白石）をはじめとして、礫が少量混在している。

３）出土遺物

SK201出土遺物

広口壷（１）は、直立する頸部をもつもので、口縁部は水平近くに大きく開く。頸部には内外ともにヘラによる面取りが残され、やや粗いつくりである。胎土はⅠ類型－石川に分類される。直口壷（２・３）はともに口縁端部が欠損後研磨されているようで、（２）は口縁端部に径３㎝前後の打ち欠きおよび頸部に0.4㎝の小孔２個が穿たれている。ともに茶褐色を呈する



第５図　出土遺物実測図－１（Ｓ＝１：４）

河内（生駒西麓）の土器で、分析結果からもⅡ類型－河内の砂礫を使用していることが明らかとなった。複合口縁壷（４）は淡灰褐色の色調や形態は、他地方の特徴をもつが、使用された砂礫のタイプはⅡ類型－河内に分類される。

小型壷（５～９）のうち（５）は、口径13cm・器高8.9cmとやや大型で、極めて精緻なつくりである。体部の最大径は上位⅓にあり、そこに鋭い稜線が一周する。その他の小型壷はおおむね口径９cm・器高７cm前後におさまるものと考えられ、（６・９）にみられるようにヘラケズリの痕跡が顕著に見られる。含まれる砂粒のタイプは（５）がⅣ類型－播磨、（７）がⅠ類型－在地とされたが、他は砂粒が細かく分類不可能であった。

小型有段鉢（10）、小型器台（11）はこの時期に通有の器形であるが、ともに火をうけたためか煤が付着し、器表面の剥離する部分がある。（10）はⅠ類型－吉備？、（11）はⅠ類型－在地に類別される。高杯（12）は丈高の柱状部に比し、小さく開く裾部がつくもので、裾端部は先細となって狭い面を有する。柱状部の内外面には、ヘラによる面取りや絞り目の痕跡が残る。砂礫からはⅡａ吉備に類別される。

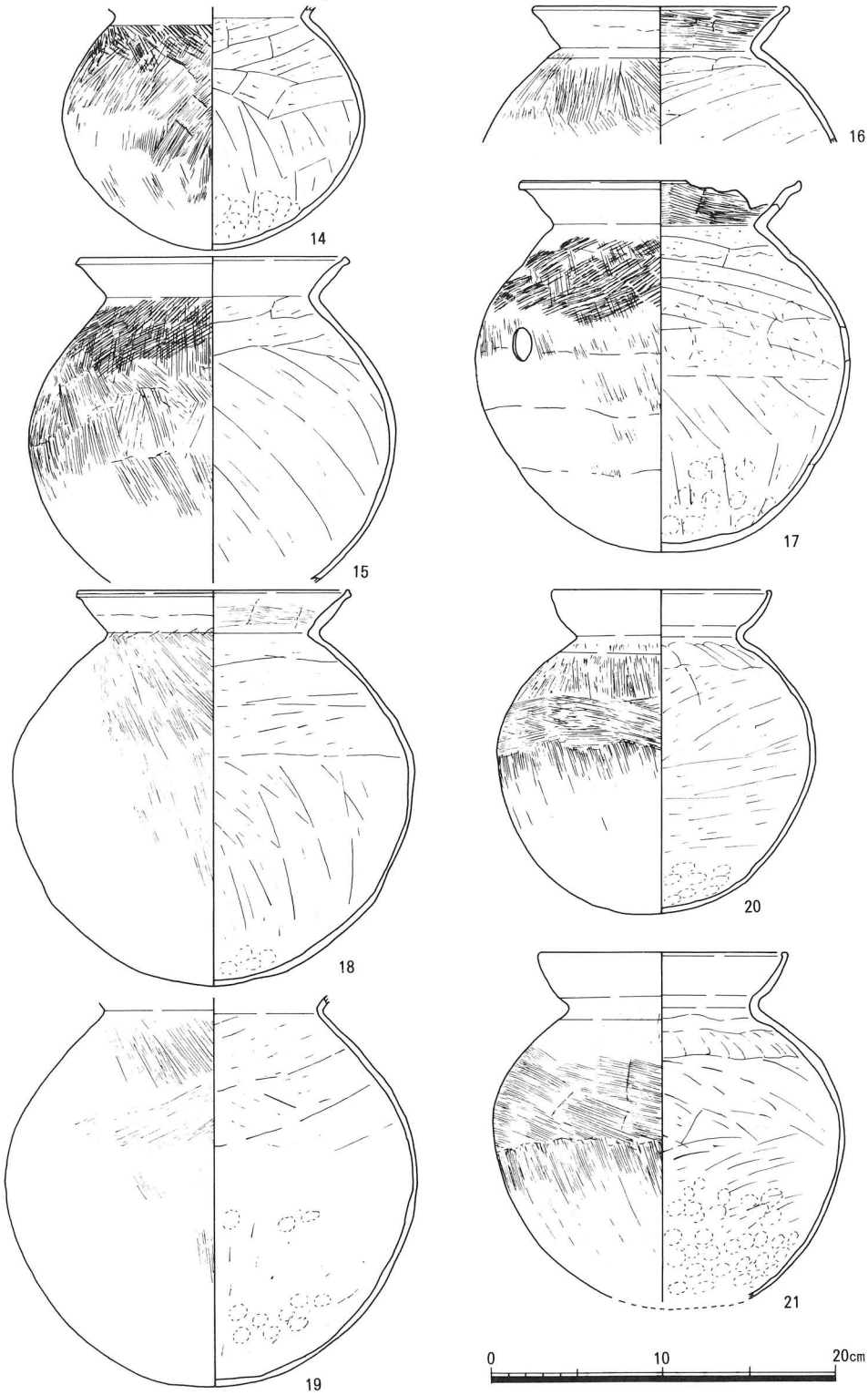
大型の鉢（13）は器表面の剥離・風化が著しく、口縁部に径10cm程度の打ち欠きがあり、口縁端部も壷（２・３）のように研磨されている可能性がある。形態・色調などから山陰系のものとされており、砂礫からもⅣｅ山陰に類別される。

甕（14～25）にはさまざまなものが見られる。まず、いわゆる庄内甕の系譜を引くもの（14・15・17）、次いで同様の形態を有するがタタキ目の見られないもの、またはあっても細かいハケ調整でタタキ目が消えているもの（16・18・19）、いわゆる布留式甕の傾向をもつもの（20・21）、複合口縁を持つもの（22・23）、長胴で粗いハケ調整、内面に指頭圧痕を残すもの（24・25）の４種がある。

庄内甕の系譜を引く甕（14・15）は、ともに茶褐色～黒褐色の色調を呈するもので、Ⅱ類型河内の砂礫を使用する。

（14）はきわめて扁平な体部のみ遺存するもので、外面の調整は左上がりタタキの後右上りのハケ、内面底部には指押えの圧痕があり、ヘラケズリは下半を左下から右上、上半を右から左へと行っている。内面底部には炭化物が付着し、外面の腹部以下には煤が厚くこびりついている。

（15）は球形に近い体部に「く」の字形に屈曲して口縁部にいたるもので、屈曲部内面の稜線・口縁部の外反はともににぶい。口縁端部はわずかにつまみ上げられ、外傾する面を作る。外面の調整は、上位が右上がりタタキ、下位が左上りタタキの後連続しない左傾～縦ハケ、内面のヘラケズリは下半が左下から右上へ、上半肩の部分が右から左方向である。外面の腹部以下および口縁部に煤が厚く付着する。



第６図　出土遺物実測図－２（Ｓ＝１：４）

（17）は淡褐色を呈し、接合部の段が顕著に認められるもので、体部の形態は、肩が張り、底は平たい。口縁部の屈曲は鈍く、端部近くで外反し、わずかにつまみ上げられ、直立気味の側面を作る。外面は右上がりタタキの後左傾のハケ調整を施すが、下半の接合部はなでられている。内面は底部および胴部中位の接合部を指押えの後ヘラケズリを行うが、ヘラケズリの方向は、底部が下から上・体部下半が左下から右上・中位が左から右・体部上半左下から右上、肩部を右から左と５方向に行われている。口縁部内面には横方向のハケが施される。口縁部には打ち欠き、体部中位には長径2.0㎝・短径1.7㎝の穿孔がある。煤や炭化物の付着はなく、未使用のようである。胎土はⅣ類型で、播磨に比定される。

（16）は肩から丸みを持って屈曲し、口縁部に至るもので、口縁端部は丸みを持って立ち上がる。外面には右上がりタタキがあるが、その後ていねいな左傾のハケが施されるため、わずかしか残らない。内面のヘラケズリは左下から右上方向で、口縁部内面には横ハケが施されている。胎土は（17）と同様、Ⅳ類型播磨である。

（18・19）はともにほぼ球形の体部を呈するもので、胎土はⅡａ類型河内である。（18）の口縁部の形態は（15）に似ており、外傾する狭い面を作る。外面は右上がりタタキの後左傾のハケ調整であるが、タタキ目はごくわずかしか見られない。内面底部に指押えの圧痕、ヘラケズリは下半が左下から右上、上半が右から左方向、口縁内面には横方向のハケが施される。

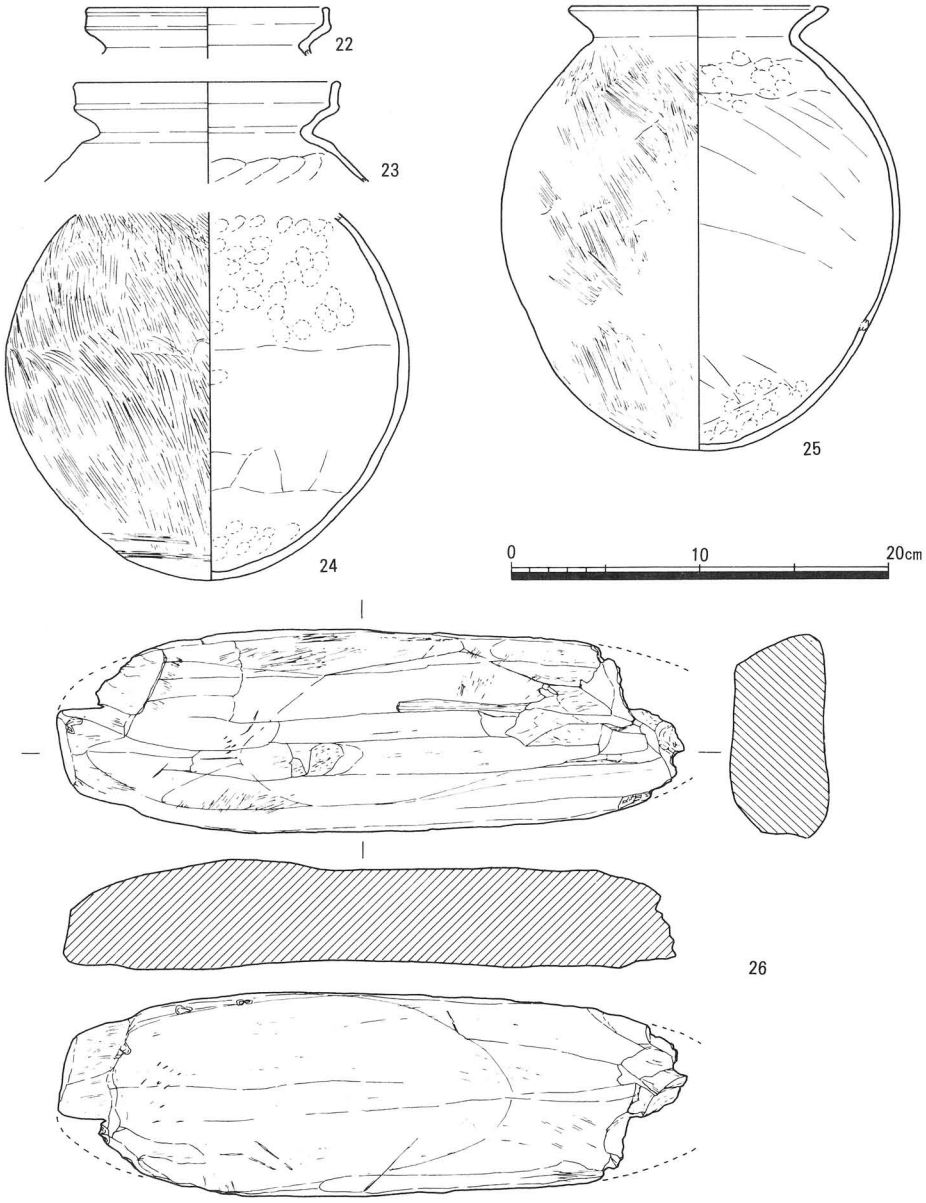
（19）は表皮の剥離が甚だしく、調整は不明瞭である。外面はハケ、内面には底部の指押えとヘラケズリが見られる。

布留式甕の傾向をもつ甕（20・21）はともに淡褐色を呈し、胎土はⅣ類型加賀である。形態はほぼ相似形で、やや上方で張る扁平な倒卵形の体部から内湾する口縁部、口縁端部は内に巻き込み、上方に水平な狭い面ができる。外面の調整はともに縦ハケの後中位上半に連続しない横ハケ、内面は底部指押えの後ヘラケズリ、肩部のみなでられる。指押えの圧痕は、（20）では底部のみに残るだけであるが、（21）では体部中位にまで及ぶ。

複合口縁を持つ甕（22）は、いわゆる吉備系の甕の形態を有するが、（23）は肩に鋭い稜線が一周し、特異な形態を呈している。砂礫の観察では（22・23）ともにⅣ類型播磨の特徴を示している。

（24・25）は外面の粗い縦ハケ、体部上位にまで及ぶ内面の指押えの圧痕、短く折れる口縁部などから阿波の甕の特徴を有するもので、砂礫の観察からも片岩を含むⅧ類型阿波のものである。

砥石（26）は長楕円形の石材を使用しており、両端は折損、上面・下面の平坦面が主な使用面で、側面にも細かい使用痕が無数にある。現存長33.3㎝・最大幅11.7㎝・厚さ4.9～5.6㎝、石材は泥岩である。



第７図　出土遺物実測図－３（Ｓ＝１：４）

SK201内部からは、土器類以外に礫が10数個出土している。中には偶然混入したものも含まれているであろうが、調査地付近にない石については、運ばれ、土器とともにSK201におさめられたものと考えられる。なかでもめだつものは、石英質片岩である。石英質片岩は、いわゆる「白石」と呼ばれるもので、古墳などのある特定の場所に敷きつめられることの多いものである。産地は紀ノ川・吉野川下流域に限定される。

SK201から出土した白石は10個で、大きさは最小のものが短径1.5cm・長径2.0cm・厚さ0.6cm、最大のものは短径2.5cm・長径4.0cm・厚さ1.2cmを測る。その他同様の大きさの石英および石英質砂岩が各1個ずつ出土している。このほかに、他の地方から持ち運ばれたと考えられるものには、紀ノ川流域を産地とする絹雲母片岩（1個）、石川流域を産地とする礫岩（1個）、玢岩（2個）等がある。在地のものと考えられるものには、安山岩・閃緑岩・チャート（各1個）、アプライト（3個）がある。

第7層出土遺物

甕には、遺構出土のものと同様、庄内甕の系譜を引くもの（27～32）、布留式甕（33・34）、阿波の甕（35・36）などが見られる。庄内甕の系譜を引く甕は、いずれも口縁端部のつまみあげは鈍く、球形に近い体部を持つものである。阿波の甕は、外面の調整が粗い縦ハケ、内面には指頭圧痕が体部上位にまで及んでいる。

壷には、大型広口壷（37）をはじめとして、直口壷（38～41）、小型壷（42・46・47）、複合口縁壷（43）がある。直口壷には大型（38・39）・小型（40・41）の2種があり、小型壷には、精製された器種（46）や、やや粗雑で器肉の厚い（47）、特異な形態の（42）などがある。

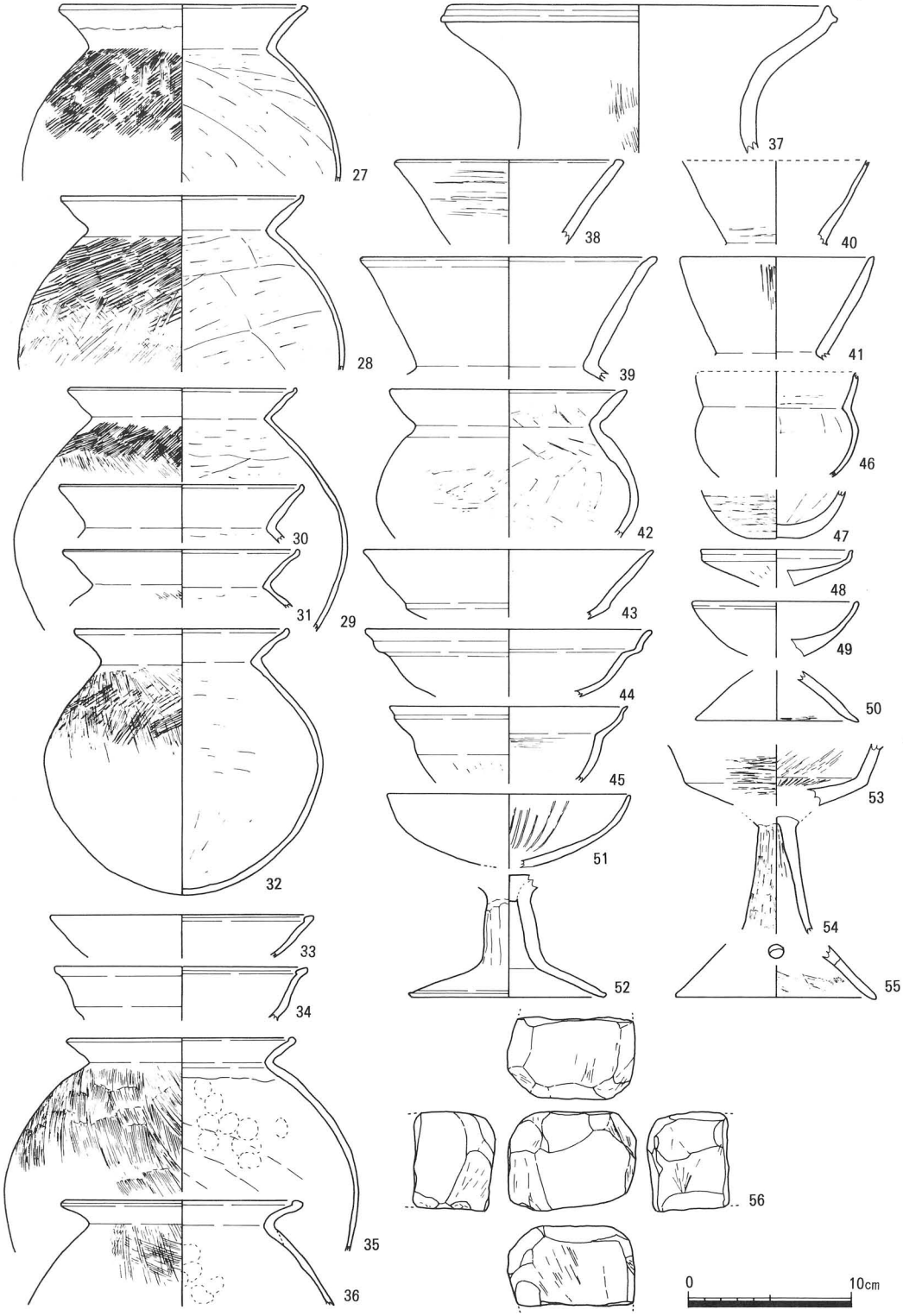
二段に屈曲する鉢には浅いもの（44）と深いもの（45）があり、小型器台には受け部が浅い皿形を呈する（48）と椀形の（49）が、高杯には杯部が椀形の（51）と段を持つ（53）がある。

砥石（56）は折損面以外の5面に使用痕を持つもので、縦6.0cm×横7.8cm×高さ5.0cmの直方体を呈する。石材は流紋岩である。

4　まとめ

今回の調査では、SK201から古墳時代前期（布留式古相）の甕を主とする良好な一括資料が得られた。土器に含まれる砂粒の分析から、阿波、吉備、播磨、山陰、加賀、河内、石川下流域、在地の各地域が抽出され、広範囲に及ぶ地域間の交流が明らかになった。今回の分析結果からは、庄内甕の系譜を引くものは河内・播磨に、布留甕の傾向を持つものは加賀に、その産地がおおむね限定されたようである。

一方、SK201から出土したものには、口縁部を打ち欠いたもの（壷　第5図－2・3、鉢－13、甕　第6図－17）や穿孔を持つもの（壷　第5図－2、甕　第6図－17）も見られることや、白石（図版五）が含まれていることなどから、SK201が墓に関連する施設、あるいは祭祀の場であったことが考えられ、ここが、この時期の中田遺跡の重要なポイントであったといえる。



第８図　出土遺物実測図－４（Ｓ＝１：４）

5　出土遺物観察表

番号	器種・部位	出土地点	法量（cm）	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
1	広口壷 口縁部	SK201	口　径　13.9	暗茶褐色	密～ やや粗	良好	直立する頸部から水平近くに屈曲する口縁部、端部は丸く終る。 指押え、ヘラによる面取り後ヨコナデ。	生駒西麓
2	直口壷 口縁部	SK201	口　径　20.5	茶褐色	粗	良好	口縁端部は外傾する面を持つ。ヨコナデ。 口縁端部・頸部下端は打ち欠き・研磨の可能性あり、頸部に２孔（径３㎜）を穿つ。	生駒西麓 表皮剥離する
3	直口壷 口縁部	SK201	口　径　19.3	茶褐色	粗	良好	直線的に開く口縁部、端部はわずかに巻き込む。 外面縦ハケ・内面横ハケ後ヨコナデ。 口縁端部打ち欠き・研磨の可能性あり。	生駒西麓
4	複合口縁壷 口縁部	SK201	口　径　18.9	淡灰褐色	密～ やや粗	良好	下段口縁部から一旦直立し、外反する上段口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 ヨコナデ。	口縁部外側面に煤付着
5	小型壷 完形	SK201	口　径　13.0 器　高　8.9	淡赤褐色	密	良好	体部中位には鋭い稜線が一周する。口縁部は内湾気味に伸び、端部は反り、尖る。 口縁内面に暗文状の放射状ヘラミガキを施す。 ヘラケズリ後細かいヘラミガキ、内面体部ナデ。	体部中位に煤付着
6	小型壷 ほぼ完形	SK201	口　径　10.7 器　高　7.3	淡赤褐色	精良～ 密	良好	浅くて張りの弱い体部から内湾気味に伸び、端部近くで外反気味に開く口縁部、端部は尖る。 ヘラケズリ後細かいヘラミガキ、内面体部ナデ。	
7	小型壷 口縁部	SK201	口　径　10.9	淡赤褐色～ にぶい褐色	密	良好	内湾気味に伸びる口縁部、端部は尖り気味に終る。 ヘラミガキ、ナデ、ヨコナデ。	
8	小型壷 口縁部	SK201	口　径　10.7	にぶい褐色	密～ やや粗	良好	内湾気味に伸びた後、端部は反り、尖る。 ヘラミガキ、ナデ、ヨコナデ。	
9	小型壷 口縁～体部	SK201	最大径　7.1	赤褐色	密	良好	浅くて張りの少ない体部から、口縁部は内湾して開く。 ヘラケズリ、細かいヘラミガキ、内面体部ナデ。 ヘラケズリは内外の体部上位まで及ぶ。	
10	小型有段鉢 口縁～体部	SK201	口　径　16.9	暗赤褐色～ にぶい褐色	密	良好	深い体部、口縁部の屈曲は鈍い、口縁端部は尖る。 ヘラケズリ後細かいヘラミガキ、ナデ、ヨコナデ。	口縁端部に煤付着
11	小型器台 脚部	SK201	裾　径　11.0	淡茶褐色	密	良好	円錐形の脚台、端部は尖る。１孔残存。 ナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ。	裾端部に煤付着
12	高杯 脚部	SK201	裾　径　11.5	淡褐色～ にぶい褐色	密	良好	丈高の杵状部からゆるやかに開き、内湾気味の裾部に至る。端部は下へ巻き込む。 外面ヘラによる面取り後ヨコナデ、内面絞り、指押え、横ハケ後ヨコナデ。	裾端部に黒斑
13	大型有段鉢 口縁～体部	SK201	口　径　37.9	灰褐色 中核灰黒色	粗	良好	口縁上下端部は外へわずかにつまみ出される。口縁部打ち欠き？ 外面ハケ、ヨコナデ、内面指押え、ヘラケズリ、ハケ、ヨコナデ。	山陰系 表皮剥離する
14	甕 体部	SK201	最大径　17.5 体部高　13.6	茶褐色～ 黒褐色	粗	良好	きわめて扁平な倒卵形の体部、底は尖り気味。 外面左上がりタタキ後右傾の縦ハケ、内面底部指押え後ヘラケズリ（下半左下→右上、上半右→左）。	庄内系 体部中位以下に厚く煤付着
15	甕 口縁～体部	SK201	口　径　15.4 最大径　21.2	茶褐色～ 黒褐色	粗	良好	球形に近い体部、口縁部は外反し、端部のつまみ上げは強く、外傾する面を持つ。外面肩部上位右上り・下位左上りタタキ後乱方向ハケ、内面ヘラケズリ（肩部右→左・腹部以下左下→右上）。	庄内系　外面口縁部・体部下半に煤付着
16	甕 口縁～肩部	SK201	口　径　14.3	淡赤褐色	やや粗	良好	口縁部は先細となり、端部は丸くつまむ。 外面右上り極細タタキ後縦ハケ、内面ヘラケズリ（左下→右上）口縁部横ハケ。	
17	甕 完形	SK201	口　径　16.1 器　高　21.5 最大径　21.6	淡褐色～ にぶい褐色	やや粗	良好	体部は扁平な倒卵形、底はやや平たい。外面右上りタタキ後左傾のハケ、内面底部・腹部指押え後ヘラケズリ（底部下→上・腹部左下→右上・肩部右→左）、内面口縁部横ハケ。	口縁部・体部に打ち欠き
18	甕 ほぼ完形	SK201	口　径　15.7 最大径　23.2 器　高　22.9	淡赤褐色～ 黄褐色	やや粗	良好	球形に近い体部。底はやや尖り気味。 外面右上り極細タタキ後左傾のハケ、内面底部指押え、ヘラケズリ（下半左下→右上・上半右→左）、口縁部横ハケ。	腹部以下に煤付着
19	甕 体部	SK201	最大径　23.8 体部高　21.9	赤褐色～ 茶褐色	粗	良好	球形に近い体部。 外面ハケ、ヨコナデ、内面指押え、ヘラケズリ。	表皮剥離
20	甕 完形	SK201	口　径　12.6 最大径　18.4 器　高　18.7	淡褐色～ 淡赤褐色	密～ やや粗	良好	最大径はやや上位にある。口縁部は内湾し、端部は内に巻き込み、上端は狭い平面をなす。外面縦ハケ後肩部に横ハケ、内面底部に指押え後ヘラケズリ（下位右→左・中位右下→左上）、肩部ナデ。	布留系　腹部以下に煤、内底面に炭化物

番号	器種・部位	出土地点	法量（cm）	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
21	甕 口縁～体部	SK201	口　径　14.5 最大径　20.5 現存高　20.3	淡褐色～ 淡赤褐色	密～ やや粗	良好	最大径はやや上位にある。口縁部は内湾し、端部は内に巻き込み上端は狭い平面をなす。 外面縦ハケ後中位に横ハケ、内面指押え後ヘラケズリ（下位右→左・上位左下→右上）、肩部ナデ。	布留系　腹部以下に煤、内底面に炭化物
22	甕 口縁部	SK201	口　径　12.6	淡褐色	やや粗 ～粗	良好	上方へ拡張する口縁部、拡張部は内傾気味で、外側面には直線文が施される。 ナデ、ヨコナデ。	吉備系　口縁部外側面に煤表皮剥離する
23	甕 口縁部	SK201	口　径　13.8	灰褐色	やや粗	良好	外面の肩に鋭い稜を持ち、「く」の字形に屈曲し、上方へ拡張する口縁部、拡張部は外反気味となる。 口縁外側面ハケ状のナデ、内面ヘラケズリの痕跡、口縁部内外面ヨコナデ。	
24	甕 体部	SK201	最大径　21.4 現存高　19.6	灰褐色	密～ やや粗	良好	最大径はほぼ中位にある長円形。 外面左傾のハケ後底部に横ハケ・ナデ。内面指押え、体部下半のみヘラケズリ。	阿波系 外面下半に煤付着
25	甕 図上で完形	SK201	口　径　12.8 最大径　21.0 器　高　23.8	灰褐色	密～ やや粗	良好	口縁部は短く直線的で、端部は先太で内に巻き込み、水平に近い面を持つ。 外面左傾のハケ、内面指押え後ヘラケズリ（左下→右上）、口縁部ヨコナデ。	阿波系　外面下半煤、内底面炭化物付着
27	甕 口縁～肩部	1区～ 3区	口　径　14.8 最大径　19.4	暗茶褐色	やや粗 ～粗	良好	体部から「く」の字形に屈曲して外反する口縁部。端部はつまみ上げ外傾する面を持つ。 外面右上りタタキ後左傾のハケ、内面ヘラケズリ（左下→右上）。	庄内系 肩部以下に煤付着
28	甕 口縁～肩部	3区	口　径　14.6 最大径　20.0	茶褐色	やや粗 ～粗	良好	体部から「く」の字形に屈曲して外反する口縁部。端部は先細となり、丸くつまみ上げられる。 外面右上りタタキ後右傾・左傾のハケ、内面ヘラケズリ（右下→左上）。	庄内系
29	甕 口縁～体部	2区	口　径　13.7 最大径　20.3	茶褐色	粗	良好	強く張る体部から「く」の字形に屈曲し、口縁部に至る。端部は丸くつまみ上げられる。 外面右上りタタキ後左傾のハケ、内面ヘラケズリ（下半左下→右上、上半右下→左上）赤色顔料付着？	庄内系　外面煤、内面下半炭化物付着
30	甕 口縁部	1区	口　径　14.7	淡茶褐色	やや粗 ～粗	良好	体部から「く」の字形に屈曲する口縁部、端部は内につまみ上げられ、外傾する狭い面を持つ。 内面ヘラケズリ（右→左）。	庄内系
31	甕 口縁部	1区	口　径　14.4	茶褐色	やや粗 ～粗	良好	体部から「く」の字形に屈曲外反する口縁部。端部は丸くつまみ上げられる。 外面左上りタタキ、ハケ、内面ヘラケズリ。	庄内系 外面に煤付着
32	甕 完形	2区	口　径　12.8 最大径　16.9 器　高　15.4	茶褐色	やや粗 ～粗	良好	扁平な倒卵形～球形の体部、口縁部は鈍く外反し、端部は丸くつまみ上げられる。 外面右上りタタキ後左傾のハケ、内面ヘラケズリ（下位下→上・上位右→左）。	庄内系　外面煤、内面下半炭化物付着
33	甕 口縁部	3区	口　径　15.8	赤褐色	やや粗	良好	内湾して開く口縁部、端部は内に肥厚してやや内傾する面を持つ。 ヨコナデ。	布留系 表皮剥離する
34	甕 口縁部	2区	口　径　15.3	淡褐色	やや粗	良好	内湾して開く口縁部、端部は内外に肥厚し、内傾する広い面となる。 ヨコナデ。	布留系
35	甕 口縁～体部	3区	口　径　13.7 最大径　21.4	にぶい褐色	密～ やや粗	良好	張りの強い体部から丸味を持って屈曲し、直線的に開く口縁部に至る。端部は内へつままれ、外傾する面を持つ。 外面縦ハケ、内面指押え後ヘラケズリ、ナデ。	阿波系 外面に煤付着 表皮剥離する
36	甕 口縁～肩部	1区	口　径　14.1	にぶい褐色	密～ やや粗	良好	体部から丸く屈曲し、内湾気味に開く口縁部に至る。端部は肥厚気味につまみ上げられ、外傾する面を持つ。 外面太・細２種のハケ、内面指押え後ナデ。	阿波系 内外に煤付着 表皮剥離する
37	大型広口壷 口縁部	1区	口　径　23.0	赤褐色～ 茶褐色	密～ やや粗	良好	直立する頸部から内湾気味に開く口縁部、端部は上下につまみ上げられ、外傾する凹面を持つ。 外面ナデ後縦ハケ、内面ナデ、ヨコナデ。	
38	直口壷 口縁部	1区	口　径　13.5	灰褐色 中核は灰色	やや粗	良好	直線的に伸びる口縁部、端部は外へわずかにつまみ出される。外面横ヘラミガキ、ナデ、ヨコナデ。	黒斑あり
39	直口壷 口縁部	1区	口　径　18.0	茶褐色	粗	良好	体部からくの字形に屈曲する口縁部、端部は外へ開き、丸く終る。ナデ、ヨコナデ。	内面に赤色顔料付着？
40	直口壷 口縁部 （端部欠損）	1区～ 2区	頸部径　6.1	灰褐色	やや粗	良好	内湾気味に上外方へ開く口縁部、端部は欠損。 ヘラミガキ、ヨコナデ。	表皮剥離する
41	直口壷 口縁部	2区	口　径　11.8	赤褐色～ 明橙色	密～ やや粗	良好	内湾気味に伸びる口縁部、端部は尖って終る。 外面ナデ後縦ヘラミガキ、内面ナデ。	

番号	器種・部位	出土地点	法量（cm）	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
42	壷 口縁～肩部	2区	口　径　14.6 最大径　16.0	灰褐色	密～ やや粗	良好	扁平な体部から「く」の字形に屈曲する口縁部。端部は尖り気味に終る。 外面横ハケ、内面ヘラケズリ後ナデ、口縁部横ハケ。	内面体部・外面腹部に黒斑
43	複合口縁壷 口縁部	4区	口　径　17.4	明橙色	やや粗	良好	下段の口縁部から鈍く立ち上がり、外反気味に開く上段口縁部に至る。端部は尖る。 ヨコナデ。	表皮剥離する
44	小型有段鉢 口縁～体部	1区～ 4区	口　径　17.4	赤褐色～ 明橙色	密～ やや粗	良好	浅い体部から水平近くに開いた後、強く外反してさらに開く。端部は丸く終る。 ナデ、ヨコナデ。	表皮剥離する
45	小型有段鉢 口縁～体部	2区	口　径　14.5	明橙色～ 淡褐色	密	良好	深い体部から内湾して開いた後、短く外反してさらに開く口縁部に至る。端部は尖る。 細かいヘラミガキ、ヨコナデ。	外面に煤付着
46	小型壷 口縁～体部	3区	口　径　9.7 最大径　10.0	にぶい褐色	密	良好	上位に最大径のある体部から屈曲し、内湾気味に立ち上がる口縁部に至る。端部は欠損。 外面細かいヘラミガキ、内面ナデ、口縁部ヘラミガキ。	
47	小型壷 底部	2区	底　径　3.1	暗茶褐色	密	良好	半球形の体部下半のみ遺存、わずかに平たい底を持つ。 外面細かいヘラミガキ、内面ナデ。	黒斑あり
48	小型器台 受部	2区～ 3区	口　径　9.1	暗赤褐色 中核－灰色	密	良好	浅い円錐形の受け部、口縁部の立ち上がりは鈍く、口縁端部はわずかに外へつまみ出される。脚部との接合部で欠損。 細かいヘラミガキ、ナデ。	
49	小型器台 受部	2区	口　径　10.0	灰褐色	密～ やや粗	良好	半球形の受部、端部はわずかに立ち上がり、外に凹線状の窪みがめぐる。脚部との接合部から欠損。調整不明。	表皮剥離
50	小型器台 脚部	2区	裾　径　9.9	にぶい褐色 ～淡褐色	密	良好	内湾気味に開く脚部、端部は尖る。 外面調整不明、内面ナデ、端部近くにハケ。	
51	高杯 杯部	2区～ 3区	口　径　4.8	淡褐色	密～ やや粗	良好	半球形の杯部、端部は丸く終わる。脚部との接合部から欠損。 外面ナデ、内面ナデ後暗文状の放射状ヘラミガキ。	表皮剥離
52	高杯 裾部	4区	裾　径　1.8	淡褐色	やや粗	良好	柱状部から鈍く屈曲して開く裾部に至る。端部は先細となってわずかにつまみ、内傾する面を持つ。 ナデ、ヨコナデ、内面裾部にハケ。	
53	高杯 杯体部	3区	杯底径　11.3	赤褐色～ 明橙色	密～ やや粗	良好	水平近くに開く杯底部からわずかに屈曲し、外反気味に立ち上がる口縁部に至る。端部は欠損。 ヘラミガキ、内面杯底部は放射状に施される。	
54	高杯 脚柱状部	2区	脚頂径　2.3	暗赤褐色	密～ やや粗	良好	ゆるやかに開く脚柱状部のみ遺存、杯部・裾部との接合部からの欠損。 外面ヘラによる面取り後ハケ、内面絞り後ナデ。	表皮剥離する
55	高杯 脚裾部	1区	裾　径　12.2	淡褐色～ にぶい褐色	密～ やや粗	良好	直線的に開く脚裾部。端部は尖る。1孔残存。 内面ハケ。	

6　土器の表面に見られる砂礫

奥田　　尚

中田遺跡から出土した庄内式期の土器の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。中田遺跡では非常に多くの搬入土器が報告されている。今回の観察結果も従来の結果と同じように吉備、播磨、阿波、加賀と各地からの土器が集まっている。観察方法は、最初に裸眼で全体を観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察は砂礫の種類、粒径、粒形、量等に注意して行った。石英と長石が噛み合っているから花崗岩とした砂礫であっても大きなものであれば、花崗閃緑岩あるいは片麻状花崗岩のようになる場合もある。また、見えている部分だけでの判断であるため粒径については長径を示していると言い難い。粒径は目測により㎜単位で行った。また、量についても目測により行った。

構成砂礫種は岩石片として花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。これら砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大９㎜である。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大６㎜である。長石・角閃石、角閃石・黒雲母が噛み合っている。

流紋岩：色は灰色、灰白色、暗灰色、茶褐色、淡茶褐色、赤茶色である。粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大６㎜である。石基はガラス質である。

砂岩：色は灰色、茶褐色で、粒形が亜角、粒径が最大１㎜である。細粒砂からなる。

泥岩：色は灰色で、粒形が亜角、粒径が最大１㎜である。

チャート：色は灰白色、灰色、褐色で、粒形は角、亜円、粒径が最大0.7㎜である。

片岩：色は褐色、灰色、灰褐色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、亜円、粒径が最大10㎜である。泥質片岩、石英質片岩、紅廉石片岩等である。

火山ガラス：無色透明、黒色透明で、粒径が最大0.7㎜である。貝殻状、フジツボ状である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大１㎜である。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、粒径が最大８㎜である。

黒雲母：金色、黒色で、板状である。粒径が最大６㎜である。

角閃石：黒色、茶褐色で、粒形が角、粒状、柱状をなし、粒径が最大８㎜である。結晶面が認められるものがある。また、くさっているものもある。

輝石：褐色透明、黒色透明で、粒形が角、柱状をなし、粒径が最大0.3㎜である。自形をなすものが多い。

以上のような砂礫種から源岩を予測した砂礫種構成を求めれば、流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなるⅣ類型、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫からなるⅡ類型が多く、花崗岩質岩起源と推定される砂礫からなるⅠ類型、片岩起源と推定される砂礫からなるⅧ類型がごく僅かである。僅かに含まれる砂礫種から亜類型に区分すれば、Ⅰb類型、Ⅰbd類型、Ⅰbdg類型、Ⅱa類型、Ⅳe類型、Ⅳegh類型、Ⅷh類型、Ⅷn類型の8亜類型に区分される。

各類型について述べる。

Ⅰ類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる ……Ⅰb類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる ……Ⅰbd類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートを僅かに含む砂礫からなる ……Ⅰbdg類型

Ⅱ類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる ……Ⅱa類型

Ⅳ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる ……Ⅳe類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩、片岩を僅かに含む砂礫からなる ……Ⅳegh類型

Ⅷ類型：片岩起源と推定される砂礫を主とする。

片岩起源と推定される砂礫からなる ……Ⅷh類型

片岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石を僅かに含む砂礫からなる ……Ⅷn類型

土器に含まれる砂礫の採取地を土器が出土した大阪府八尾市中田を中心にして求める。中田遺跡は大和川の冲積地に形成された遺跡で、東に生駒山地、西に上町台地が南北にのびているほぼ中央部に位置する。大和川は柏原市船橋付近で石川と合流して北流する。このような地形と岩石分布から流出する河川の砂礫は場所により若干異なる。山地から流出する谷川等の河川の砂礫には比較的長石が多く、砂礫の供給地が遠くなる大和川では長石が比較的少ない。また、上町台地近くの西部になればチャートが比較的多くなる。河内一帯の山地には花崗岩類が広く

分布するため花崗岩類を主とする砂礫となる。流紋岩質岩起源と推定される砂礫や片岩起源と推定される砂礫を主とする砂礫は明らかに他地の砂礫である。

砂礫構成の特徴（砂礫相）を基に砂礫の採取地を推定すれば次のようになる。

Ⅰb類型で比較的長石が少ない砂礫構成は船橋以北の大和川の砂礫と推定され、中田遺跡付近の砂礫とも同じである。Ⅰb類型で比較的長石が多い砂礫は生駒山地から流出する谷川の砂礫に似ているものがある。場所は限定出来ない。Ⅰbd類型に属する砂礫は自形の石英を含み、角閃石に結晶面が見られ、閃緑岩に柱状で自形をなす角閃石が見られることから吉備足守川流域の加茂遺跡付近の砂礫に酷似する。チャートや片岩も含めば旭川流域の百間川遺跡付近の砂礫に酷似する。Ⅰbdg類型に属する砂礫はチャートや砂岩を含み、比較的長石が多く、自形の石英が僅かに含まれることから石川下流域の古市から玉手山付近にかけての石川の砂礫に酷似する。Ⅱａ類型に属する砂礫で角閃石が柱状で結晶面がみられるものが多く、閃緑岩に柱状自形の角閃石がみられ、自形の石英もみられる砂礫は、吉備足守川加茂遺跡付近の砂礫と推定される。裸眼で白色の長石や黒色粒状の角閃石が目立ち、花崗岩質岩起源の砂礫が少なく、角閃石に風化しているものが多い砂礫相を示すものは河内とした砂礫構成である。このような砂礫構成は砂礫が角張っており、閃緑岩の媒乱砂に中田付近の粘土を混ぜて胎土としたものであると推定される。このような砂礫構成の土器は中田遺跡出土の弥生時代後期の大型器台に始まるといえる。恩智神社東方で砂礫が得られる。このような砂礫構成を河内タイプとした。Ⅳe類型の砂礫は播磨、山陰、加賀では砂礫相が若干ことなることから区分される。Ⅳegh類型の砂礫は片岩やチャート等がふくまれることから播磨付近の砂礫と推定される。Ⅷ類型の砂礫には砂岩や泥岩、花崗岩等が認められないことから吉野川下流の阿波付近の砂礫と推定される。

以上のように在地で採取される砂礫もあるが、吉備の足守川中流付近、播磨南部付近、吉野川下流の阿波付近、加賀南部、近くでは石川下流域の砂礫で製作されたと推定される土器が中田遺跡から出土しているといえる。

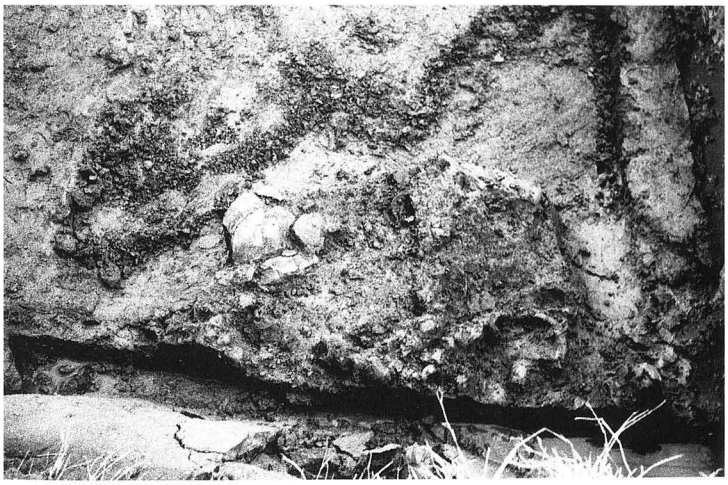
試料番号	器種	岩石																鉱物										海面の骨片	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石			
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍		
1	直口壷				M 稀角		L 稀角						M-微角						L-中	M-中	M-多				M-稀				Ⅰbdg 石川
2	直口壷	L-稀角	L-稀角	L-稀角															S 稀	L-中	L-中		M 稀板	L-僅	L-多 EF微				Ⅱa 河内
3	直口壷			L-稀角	L-稀角														L-稀	L-微	L-中	M-稀板	L-中粒	L-多	L-多				Ⅱa 河内
4	複合口縁壷		L-僅角		L-稀角														L-僅		L-多				M-中				Ⅱa
5	小型丸底壷					L-稀亜角	M-僅角												S 微 E 僅		S 僅				S 稀		S 稀 E 非		Ⅳe 播磨
6	小型丸底壷																		S 稀		S 稀		S 稀板		S 僅				砂礫細粒 区分不能
7	小型丸底壷																		M-中 E 稀		S 僅		S 稀板		S 微				Ⅰb 在地
8	小型丸底壷																		S 僅		S 多		S 稀板		S 僅				砂礫細粒 区分不能
9	小型丸底壷																				S 僅		S 稀板		S 中				砂礫細粒 区分不能
10	小型有段鉢		M 稀角														M 稀 貝 フ		L-中 E 微		M-中		S 稀板		S 中 EF中				Ⅰbd 吉備？
11	小型器台		M 稀角														M 稀 貝		M-中		M-中		S 稀板		S 微 EF僅				Ⅰb
12	高杯				S 稀角														S 僅		S 中		S 稀板		S 僅 EF僅				Ⅱa 吉備
13	鉢					L-僅亜角	M-僅角										M 稀 貝 フ		L-中 E 多	M-微	L-微		S 稀粒		S 稀 E 中				Ⅳe 山陰？
14	甕 庄内				M 稀角												M-稀 貝		M-微	L-僅	M-中		M-微粒 板	L-僅	L-多				Ⅱa 河内
15	甕 庄内																		L-微	L-中	L-僅			L-中	L-非				Ⅱa 河内
16	甕 庄内					L-中角	L-中角										M-稀 貝	M-僅	L-中	M-微	M-僅		M-微粒 板		S 微		S 稀 E 中		Ⅳe 播磨
17	甕 庄内					L-微亜角	L-中角												L-多 E 僅	M-僅	M 僅		S 稀粒		S 稀 E 中				Ⅳe 播磨
18	甕 庄内		M 稀角																L-稀	L-僅	M-僅	L-微板	M-僅板	M-微	L-非				Ⅱa 河内
19	甕 庄内		L 稀角																L-微	L-中	L-中	M-稀板	M-僅粒 板	M-僅	L-多				Ⅱa 河内
20	甕 布留傾向					L-中角	L-中亜角										M 稀 貝	M-中	M-僅 E 中	S 稀	M 微	L-微板			M-稀		S 稀 E 中		Ⅳe 加賀
21	甕 布留傾向					M-僅角	L-僅亜角											M-僅	M-僅 E 中		L-僅	M-微板	M 微板				S 稀 E 多		Ⅳe 加賀
22	甕 吉備					L-稀角	L-多角				L 稀亜角				M 稀亜円			M-僅	M-僅 E 僅	M-微	M-微	M-稀板					S 稀 E 非		Ⅳegh 播磨
23	甕 吉備					M-中角	L-中角											M-僅	M-僅 E 僅		M-微						S 稀 E 非		Ⅳe 播磨
24	甕 阿波													L-微角	L-中角		S 中 フ		M-僅						S 稀				Ⅷn 阿波
25	甕 阿波													L-僅角	L-中角				L-僅		L-微								Ⅷh 阿波

裸眼＝裸眼観察　　裸眼による観察：L＝粒径　2㎜以上　M＝粒径　2㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満
非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か

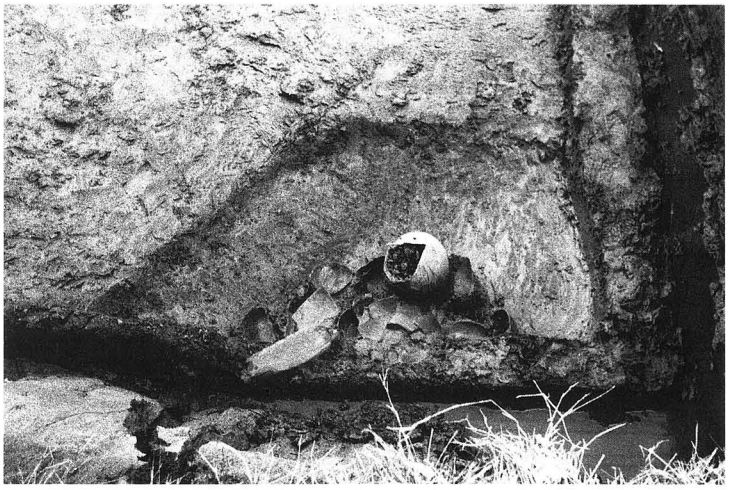
30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径　1㎜以上　M＝粒径　1㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　量は裸眼に同じ
－＝以下の粒径がある　F＝自形　EF＝結晶面がある　W＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　束＝束状　フ＝フジツボ状

図　　版

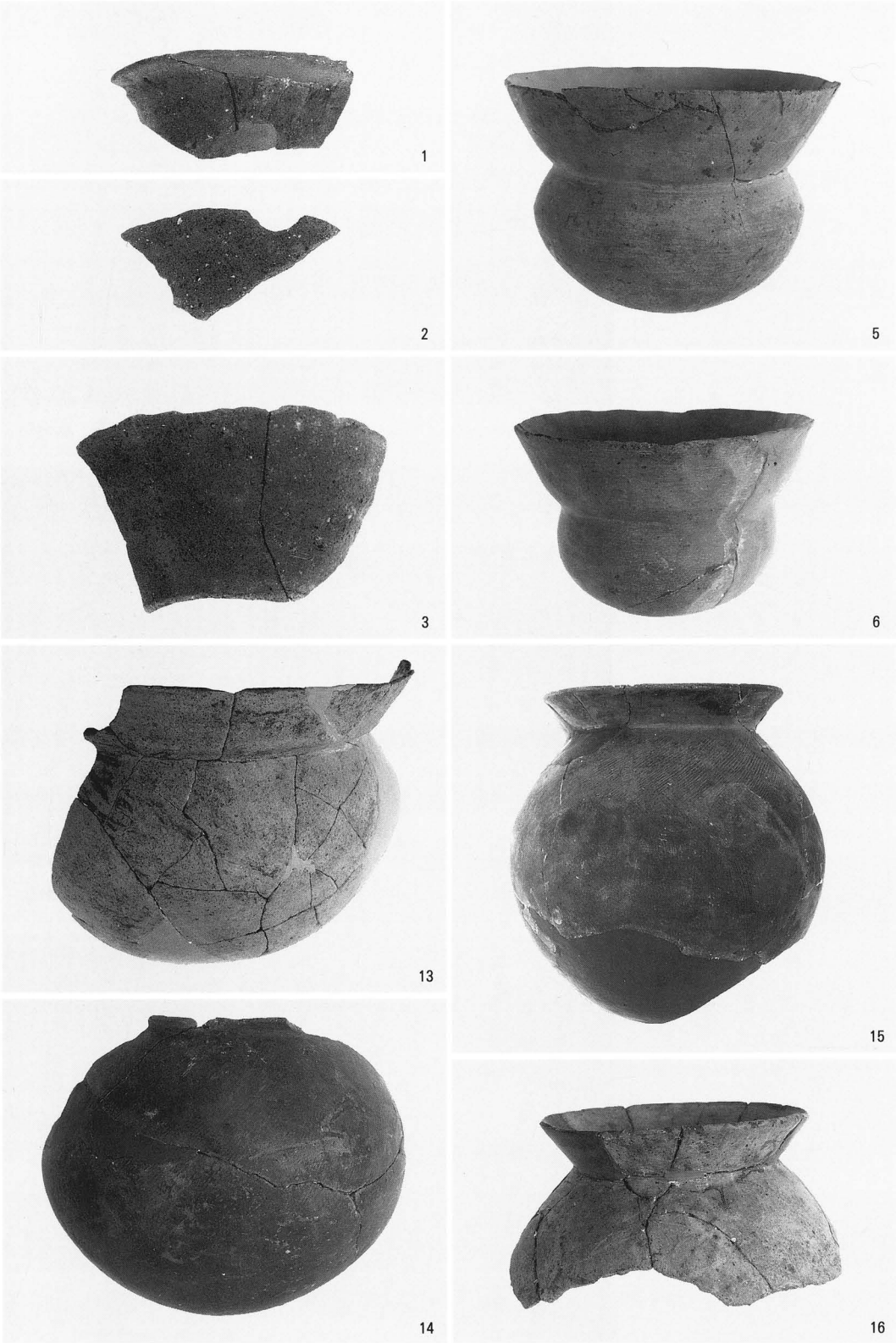
全景（西から）



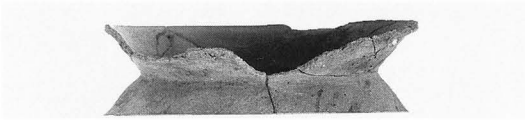
ＳＫ201遺物出土状況（西から）

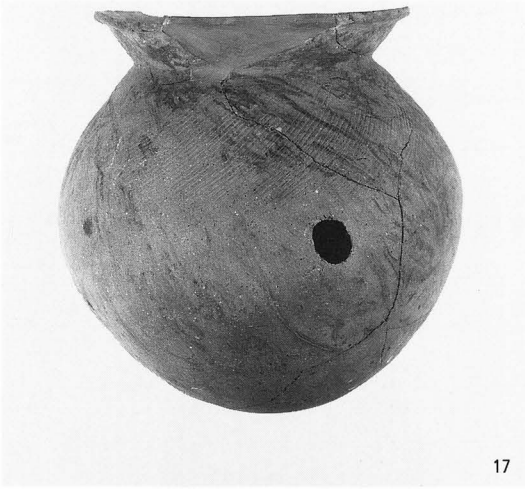


ＳＫ201完掘（西から）



ＳＫ201出土遺物





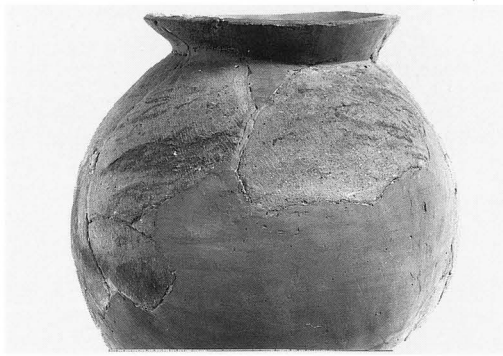
17

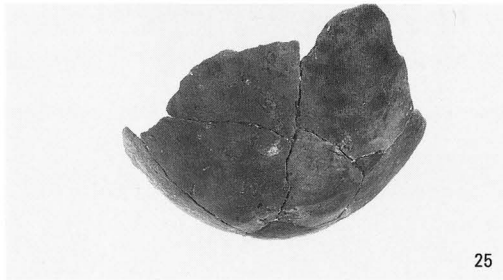
18

19

20

21





25

ＳＫ201出土遺物

27

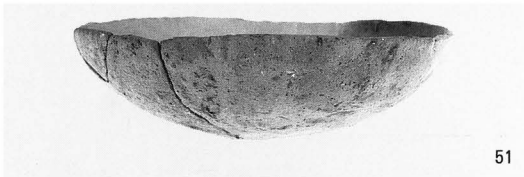
28

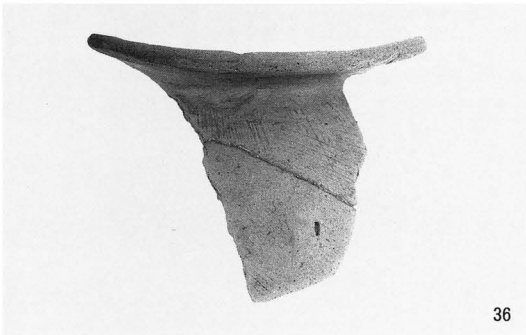
29

32

35

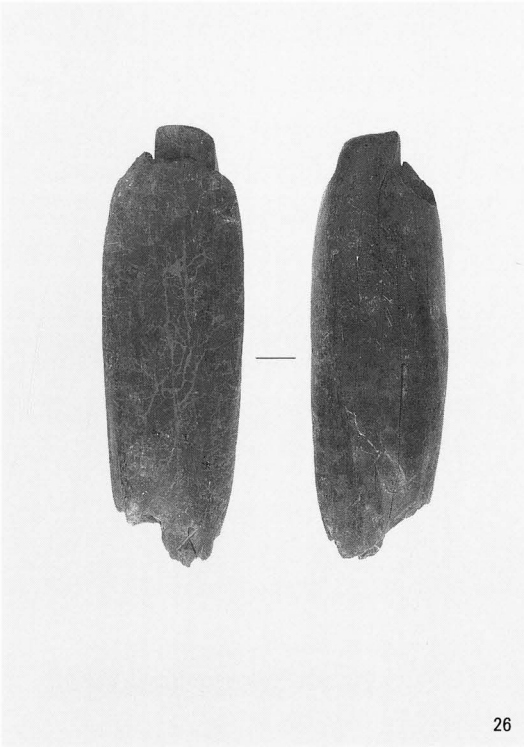
41

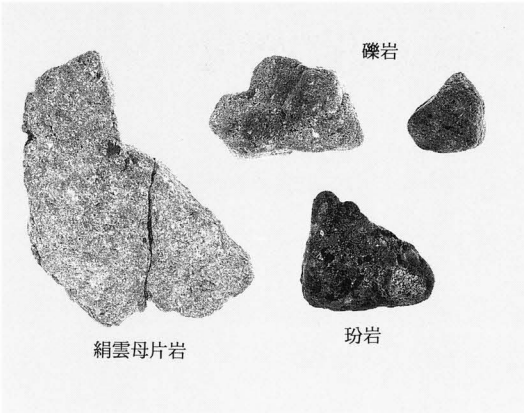

51

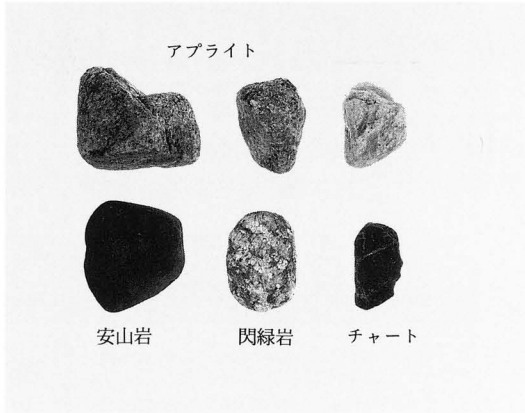

36

52

第７層出土遺物







ＳＫ201出土遺物（26他）、第７層出土遺物

Ⅱ　中田遺跡第６次調査（NT90－６）

例　　言

1、本書は、八尾市八尾木北３丁目～刑部２丁目地内で実施した公共下水道工事（平成２年度第22工区）に伴う発掘調査の報告である。

1、本書で報告する中田遺跡第６次調査（NT90－６）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第72号　平成２年８月22日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。

1、現地調査は、平成３年１月８日から２月15日（実働９日間）にかけて成海佳子を担当者として実施したが、１区～４区の調査区のうち、２区・３区は坪田真一、４区は高萩千秋が補佐した。

1、調査面積は約180㎡を測る。

1、現地調査には、岡田聖一・濱田千年が参加した。

1、内業整理には、磯上サカエ・高柳恵美・宮崎寛子・村井俊子・山内千恵子が参加した。

目　　次

1　はじめに……21

2　調査の方法と経過……21

3　調査概要……22

　1）１区……22

　2）２区……24

　3）３区……26

　4）４区……30

4　まとめ……31

5　出土遺物観察表……32

Ⅱ　中田遺跡第６次調査（NT90－６）

１　はじめに

今回の調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で実施した発掘調査の第６次調査にあたる。調査地である八尾木北３丁目～刑部２丁目は中田遺跡の南東部に位置しており、遺跡内の北西部に位置する第５次調査地（NT90－５＝本書Ⅰ）とは400～800ｍ隔たっている。

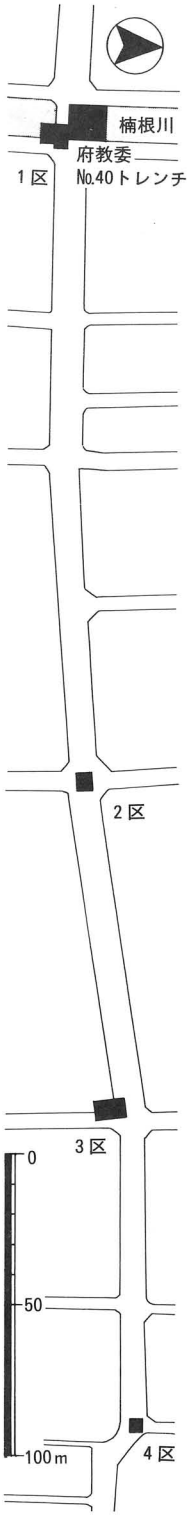
当地周辺では、大阪府教育委員会85年度調査地№40トレンチ（本書Ⅰ第２図－⑪）が１区の北隣に接しており、そこからさらに西100ｍに市教委87年度調査地（⑬）が位置している。さらに１区の南側の楠根川では、92年度・93年度に河川改修工事に伴う発掘調査が当調査研会によって行われている（㊷・㊼）。また、３区の南側に位置する刑部小学校を中心とした地区では、1974年度以降多くの調査がなされており、多大な成果が上がっている（本書Ⅰ　第２図・一覧表参照）。

２　調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事（平成２年度第22工区）に伴うもので、八尾木北３丁目から刑部２丁目に至る東西約450ｍの道路下の工事の範囲のうち、４か所の立坑構築部分を調査対象としたものである。総調査面積は約180㎡、調査期間は平成３年１月８日から２月15日までの９日間である。

４か所の調査区は、西から１区～４区と呼び、まず西端の１区から調査を実施した。１区の調査終了後３区の調査を行い、工事の進捗状況に合わせて、２区、４区の順に調査を行った。各調査区では、現地表下1.3～1.5ｍまでの盛土や撹乱・旧耕土などを機械掘削した後、以下の0.3～0.5ｍ程度の厚さの遺物包含層を手掘りとして、遺物・遺構の検出に努め、写真撮影・図面作成などの記録保存を随時行った。調査終了後は、各調査区で工事による掘削が終了する時点まで立ち会い、下層の状況を確認した。

１区は楠根川左岸に位置する調査区である。平成３年１月８日から機械掘削を開始し、１月12日に現地表下4.2ｍまでの掘削を終了した。調査面積は67㎡である。



第１図　調査区設定図
（Ｓ＝１：2500）

2区は1区から東約200mに位置する調査区で、平成3年2月4日に機械掘削を開始し、同日に現地表下3.8mまでの掘削を終了した。調査面積は20㎡である。

3区は2区からさらに東約100mに位置する調査区で、平成3年1月16日から機械掘削を開始し、1月18日に現地表下4.1mまでの掘削を終了した。調査面積は74㎡である。

4区は3区からさらに東約100mに位置する調査区で、平成3年2月15日に機械掘削を開始し、同日に現地表下4.0mまでの掘削を終了した。調査面積は17㎡である。

3　調査概要

1）1区

調査期間：平成3年1月8日～12日

調査面積：67㎡

楠根川左岸の調査区で、北西側は大阪府教育委員会昭和60年度調査地№40トレンチに接している。現地表面の標高はT.P.＋10.4mで、盛土は1.5～2.0mの厚さでなされている。西半分は盛土以下が現在の楠根川の流路と一致しており、調査区の中央部では盛土の直下（T.P.＋8.5m前後）で楠根川右岸が認められた。

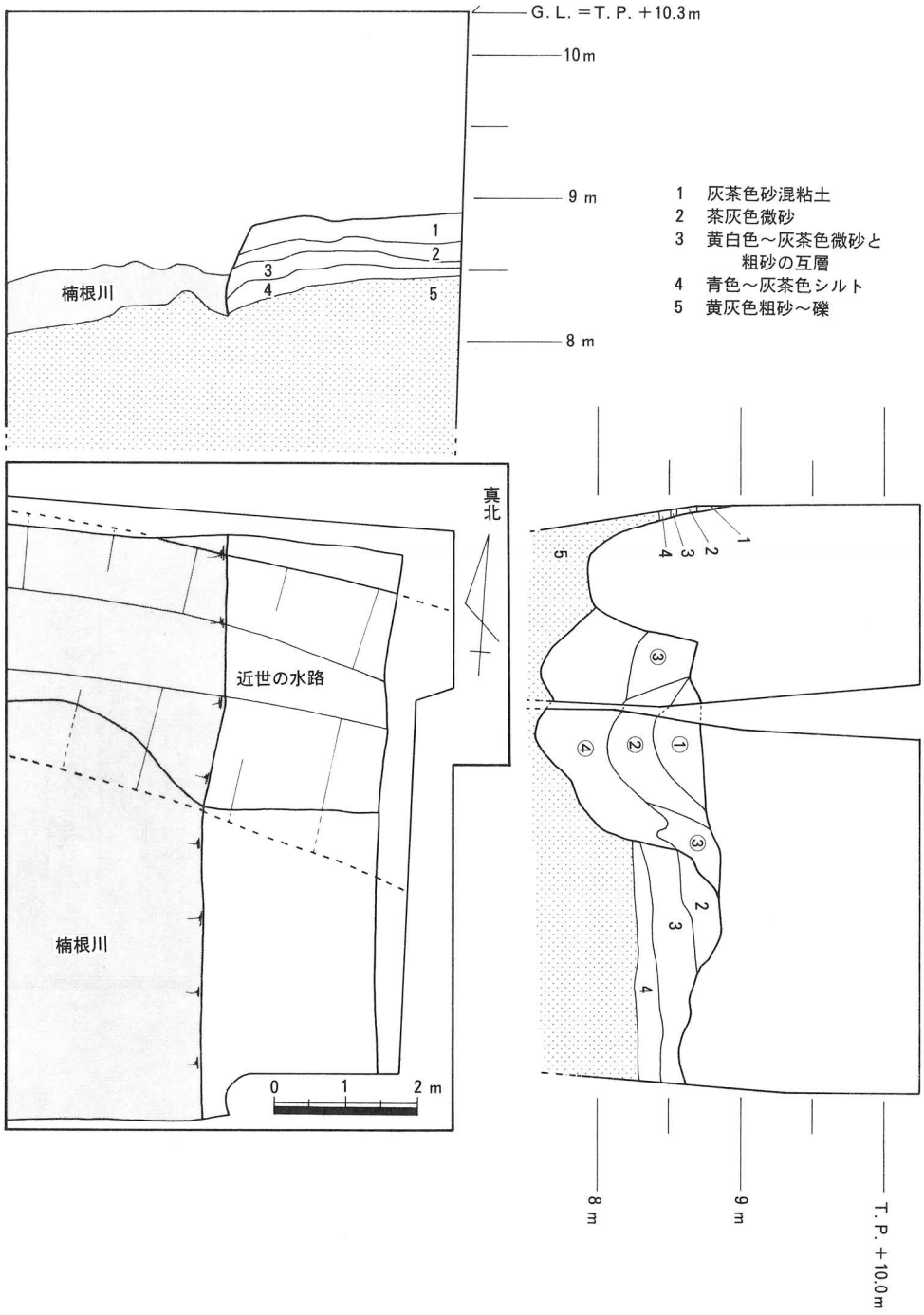
東半分の基本層序は、盛土以下第1層灰茶色砂混じり粘土（層厚0.15～0.2m）、第2層茶灰色微砂（層厚0.1～0.3m）、第3層黄白色～灰茶色微砂と粗砂の互層（層厚0.05～0.3m）、第4層青色～灰茶色シルト（層厚0.05～0.3m）、第5層黄灰色粗砂～礫（層厚2.5m以上）である。第1層～第4層は流路に切られる形で東半分にのみ堆積する土層である。第5層は調査区全体に堆積しており、改修以前の楠根川旧流路と考えられる。

このうち第1層上面で**近世～近代の溝**などを検出したが、いずれも楠根川改修直前までのものである。また、第5層からは、コンテナ1箱分の土器が出土している（第3図1～22）。

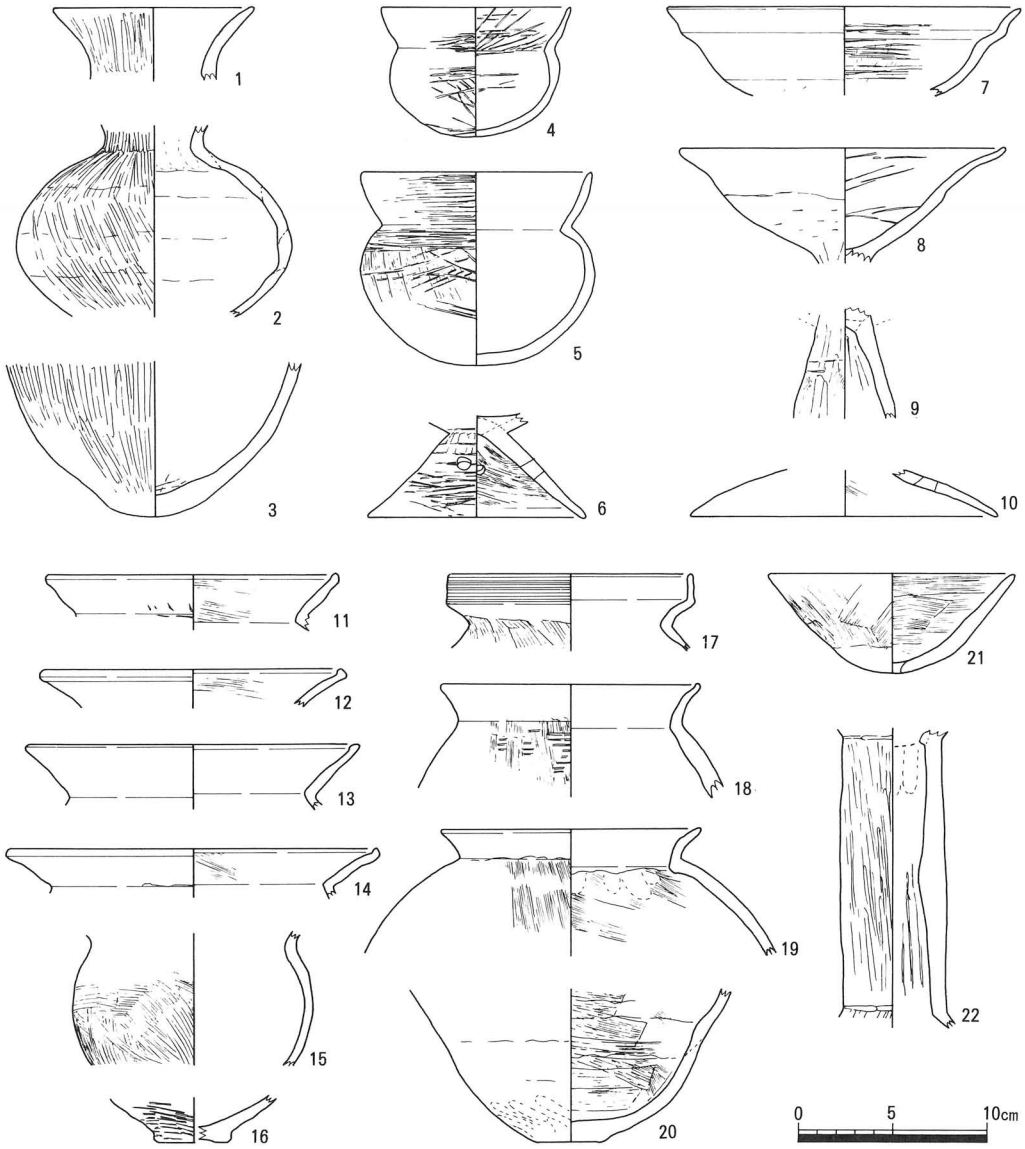
近世～近代の溝：調査区北側で検出した。東から西への流路をもつが、西側半分は楠根川の流路によって上面が削平されている。検出レベルはT.P.＋8.65～8.85mの第2層上面であるが、構築面はそれよりも上方の可能性がある。北側の肩は現代（楠根川改修以前）の水路によって切られているが、上面の幅は、約1.9m程度、深さは1.05mを測る。内部堆積土は、上から①灰褐色微砂、②灰褐色シルトと微砂の互層、③灰褐色粗砂混じりシルト、④灰褐色シルト～微砂と粗砂～礫の互層である。

第5層出土遺物：第5層出土遺物の時期は、おもに古墳時代前期初頭（庄内式期）であるが、弥生時代中期（Ⅲ様式期）の高杯（22）なども含まれている。

古墳時代前期初頭の土器には小型直口壷（1）・細頸壷（2）・小型壷（4・5）・小型器台（6）・二段屈曲の小型鉢（7）・高杯（8～10）・甕（11～19）・底部有孔鉢（21）などの多く



第２図　１区平断面図（Ｓ＝水平１：100、垂直１：50）



第３図　１区出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

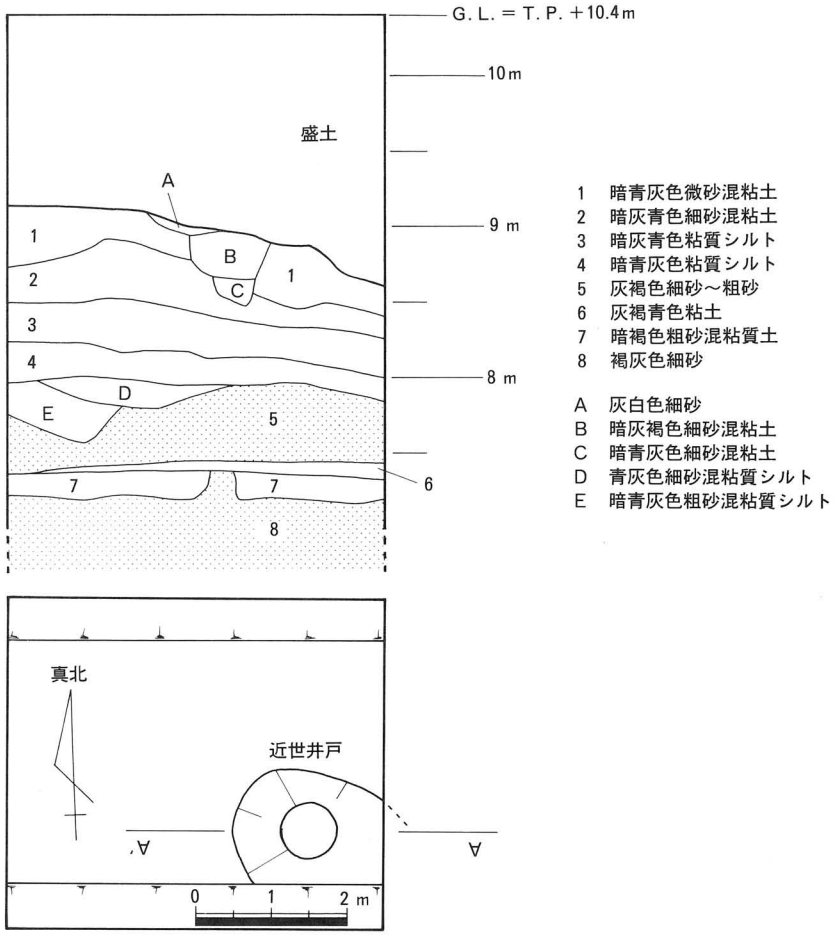
の器種があり、吉備（12・21）・阿波（19）など他地方の土器がかなり含まれている。遺存状態は比較的良好で、ごく近隣から河川内に流入したものと考えられる。

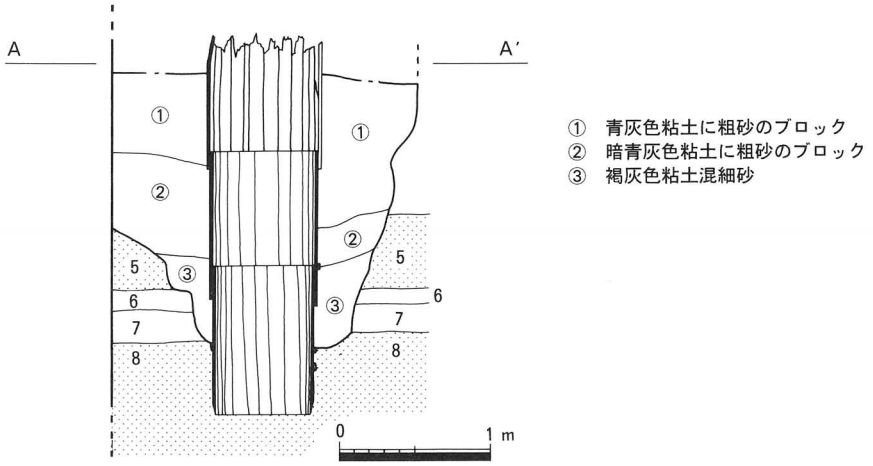
２）２区

調査期間：平成３年２月４日

調査面積：20㎡

１区から東方約200ｍ地点に位置する調査区で、現地表面の標高はT.P.＋10.4ｍ前後を測る。調査区南部のほとんどは撹乱をうけていた。北側で認めれらた基本層序は、盛土（層厚1.3～





第４図　２区平断面図（Ｓ＝水平１：100、垂直１：50)、近世井戸断面図（Ｓ＝１：50）

1.6m）以下第1層暗青灰色微砂混じり粘土（層厚0.15～0.4m）、第2層暗灰青色細砂混じり粘土（層厚0.2～0.4m）、第3層暗灰青色粘質シルト（層厚0.3～0.35m）、第4層暗青灰色粘質シルト（層厚0.15～0.25m）、第5層灰褐色細砂～粗砂（層厚0.2～0.5m）、第6層灰褐青色粘土（層厚0～0.1m）、第7層暗褐色粗砂混じり粘質土（層厚0～0.2m）、第8層褐灰色細砂（層厚0.6m以上）で、このうち第5層以下が埋没河川の土層である。

ここでは、調査区南東隅で**近世井戸**を検出したが、上面はほとんどが削平されているため、構築面は不明である。

近世井戸：井戸掘形上面の径は2m前後、深さ2.2m程度あり、井戸底は、湧水層である第8層にまで達している。井戸側は、桶を積み上げたもので、3段分が遺存していた。井戸側は径0.65～0.75m、高さ1m前後、板の厚さ1.5cm前後である。井戸掘り形の堆積土は、上から①青灰色粘土に粗砂のブロック、②暗青灰色粘土に粗砂のブロック、③褐灰色粘土混じり細砂である。井戸掘形内部から磁器碗1点が出土している。

3）3区

調査期間：平成3年1月16日～18日

調査面積：74㎡

1区から東350m、2区から150m地点に位置する調査区で、現地表面の標高はT.P.＋10.3m前後を測る。調査区のほとんどでは、現地表から1～1.5m程度の深さまで撹乱が及んでおり、旧状をとどめていたのは南東部のみであった。南東部では、盛土が0.65m程度なされており、盛土以下第1層旧耕土（層厚0.2m）、第2層床土（層厚0.05～0.1m）、第3層褐色礫混じり粘質土（層厚0.15～0.2m）、第4層淡褐色礫混じり粘質シルト（層厚0.15～0.2m）、　第5層淡褐色粘質シルト（層厚0.1～0.15m）、第6層淡青灰色シルト（層厚0.15～0.2m）、第7層淡青灰色～青灰色微砂（層厚0.3～0.4m）、第8層黄白色粗砂（層厚3.5m以上）である。

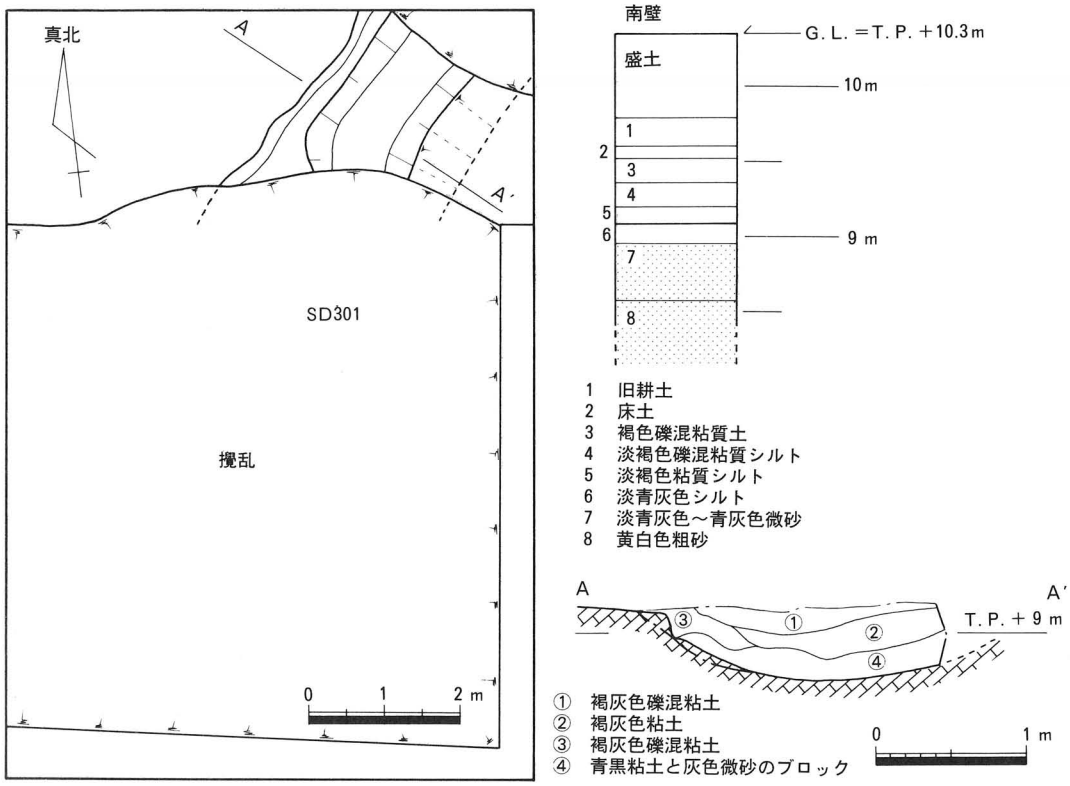
このうち第6層上面で、奈良時代の溝SD301を検出した。第6層中からは、弥生時代中期（Ⅲ様式期）～古墳時代前期（布留式期）の土器類が少量出土しているが、いずれも摩耗をうけた小片である。

SD301：調査区北東部で検出した。東部・南部は削平されている。北東－南西に流路をもつもので、検出長3.2m、検出幅2.0mを測る。2段の掘り形を持つもので、深さは0.5mを測る。内部堆積土は上から①褐灰色礫混じり粘土、②褐灰色粘土、③褐灰色礫混じり粘土、④青黒色粘土と灰色微砂のブロック層である。このうち①層には炭が多量に含まれている。

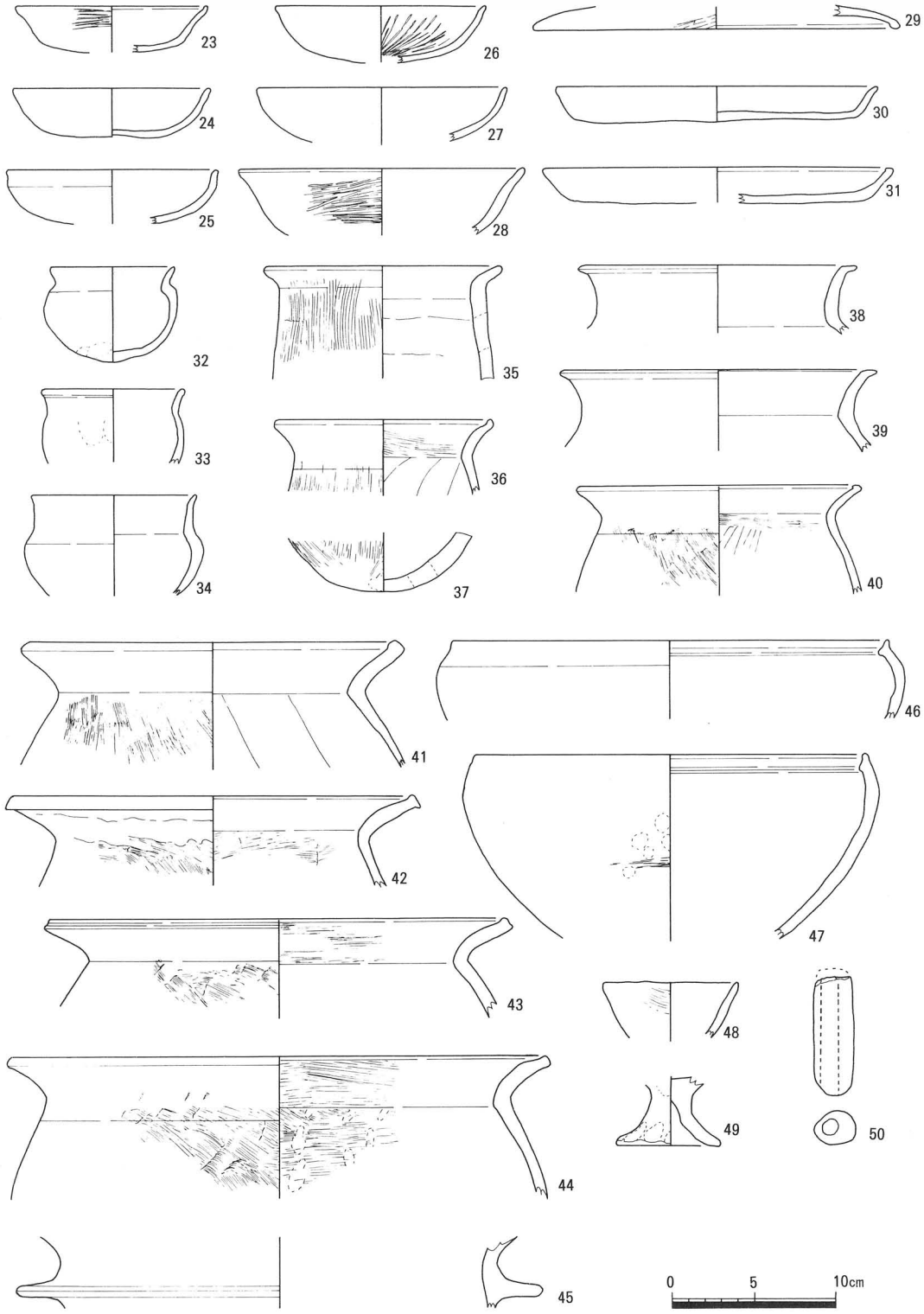
①・②層からは、土師器杯（23～31）・小型壷（32～34）・短頸壷（38・39）・甕または鍋（35～37・40～44）・羽釜（45）・鉢（46・47）・小型椀（48）・小型高杯（49）、須恵器長頸壷（53・54）・壷（55～59）・杯（60～63）・甕などの多量の土器のほか、土錘（50）・砥石（S1・

S2）がコンテナに２箱分出土している（第６図・第７図)。土錘（50）はややいびつな管状土錘で、上端および下端の一部が折損している。表皮の剥離が甚だしく、紐ずれ等の使用痕は未確認である。短径2.1cm・長径2.3cm・現存長7.2cm、孔の径は１cm前後で、中心からずれた位置に穿たれている。砥石（S1）は平面が台形を呈し、上端は折損する。横断面は台形、縦断面は長方形を呈する石材で、平坦な４面に使用痕が認められる。現存長8.4cm・最大幅6.3cm・厚さ4.8cmを測る。砥石（S2）は平面の形状が三角形、断面長方形を呈する石材で、上下の２面に使用痕が認められる。長さ7.5cm・最大幅8.6cm・厚さ2.7cmを測る。

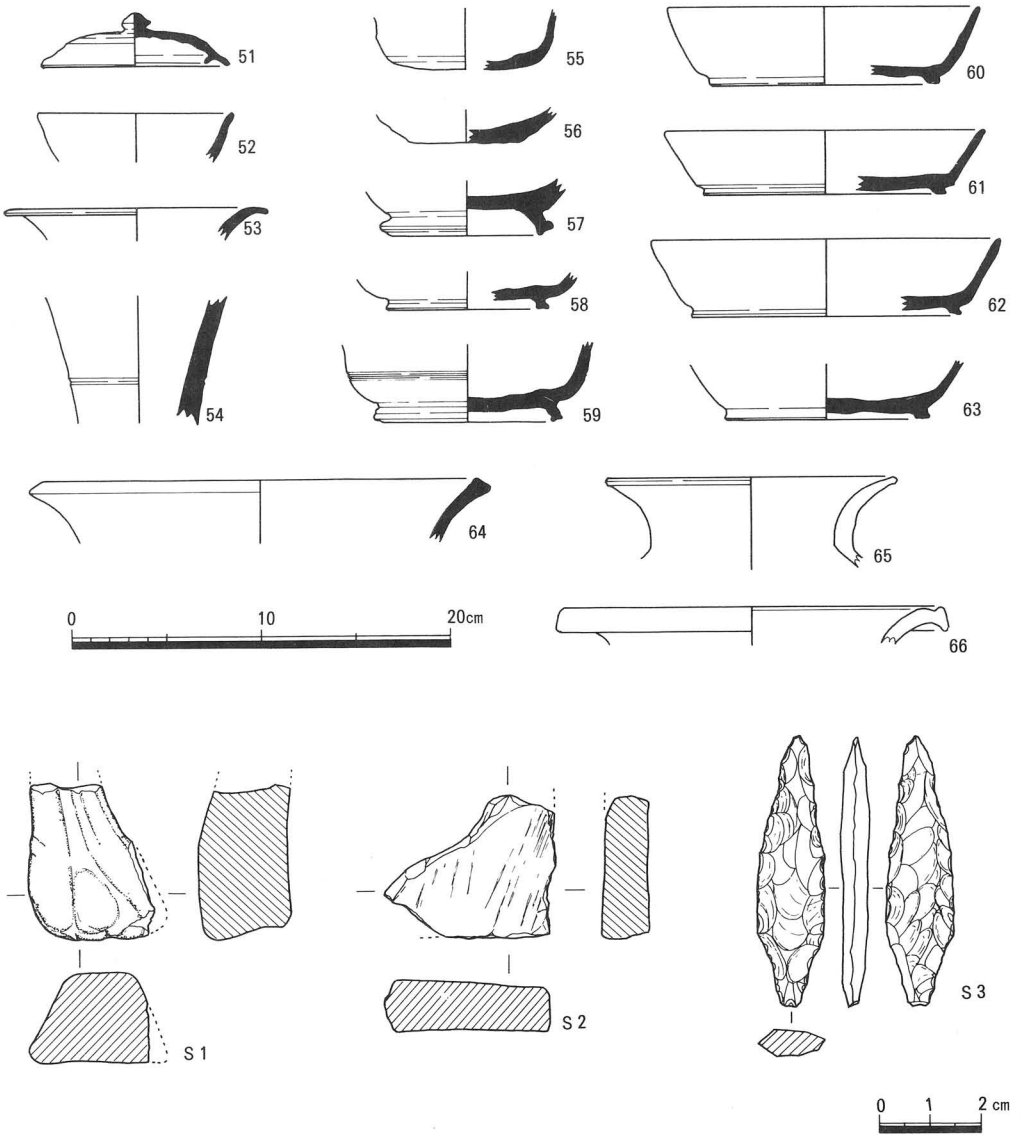
第６層出土遺物：第６層中からは、弥生時代後期の壷（65)、同中期の壷（66)、石鏃（S3）が出土している。石鏃は有茎式で細身、断面の形状は薄い菱形を呈している。長さ5.3cm・最大幅1.3cm・厚さ0.5cm前後を測る。



第５図　３区平面図（S＝１：100)、柱状図（S＝１：50)、ＳＤ301断面図（S＝１：50)



第６図　３区出土遺物実測図－１（Ｓ＝１：４）



第７図　３区出土遺物実測図－２（Ｓ＝１：４、石鏃のみ２：３）

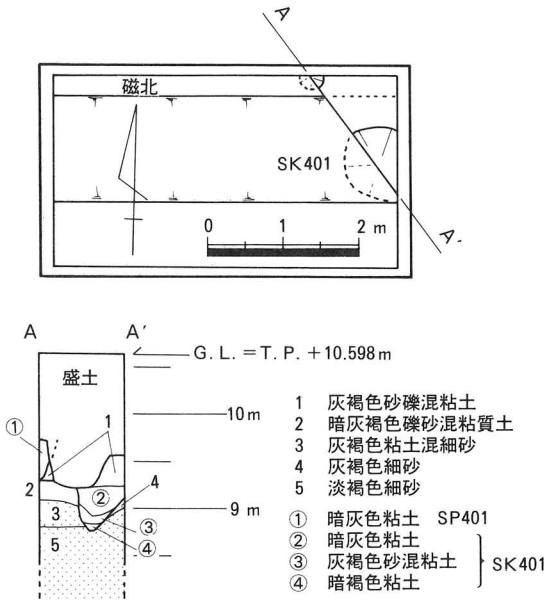
4）4区

調査期間：平成3年2月15日

調査面積：17㎡

東端の調査区で、3区から東約100mの地点にあたり、現地表面の標高はT.P.＋10.6m前後を測る。調査区内のほとんどが水道管布設の際に現地表から0.9m程度の深さまで削平されている。

基本層序は、盛土以下第1層灰褐色砂礫混じり粘土（層厚0.2m）、第2層暗灰褐色礫砂混じり粘質土（層厚0.3～0.4m）、第3層灰褐色粘土混じり細砂（層厚0.15～0.2m）、第4層灰褐色細砂（層厚0.15～0.3m）第5層淡褐色細砂（3m以上）が確認できた。



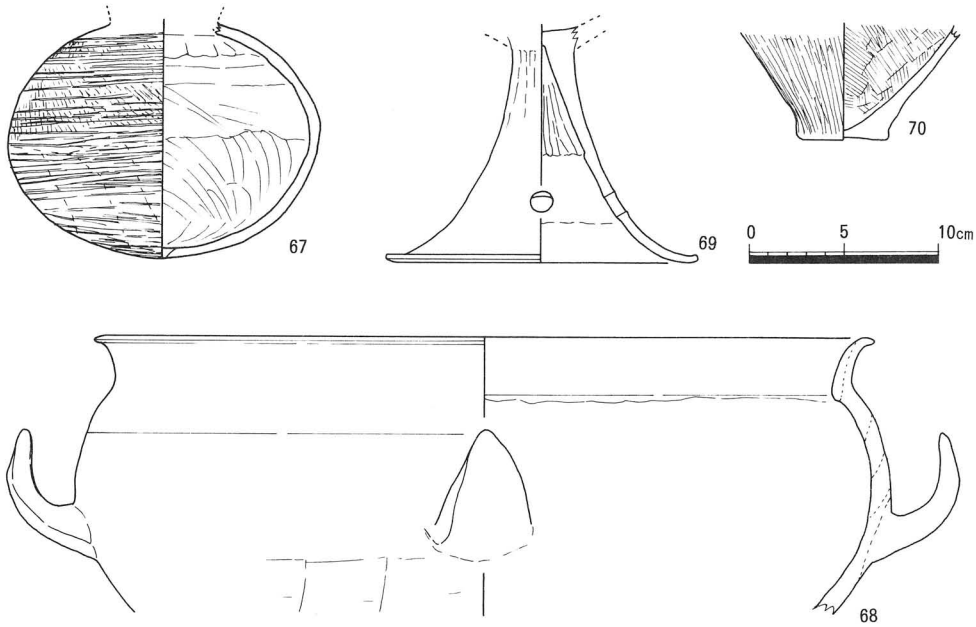
第8図　4区平断面図
（S＝水平1：100、垂直1：50）

そのうち第1層は鎌倉時代以降の瓦器片を含む土層、第2層は古墳時代前期（布留式期）の遺物を含む土層で、上面に奈良時代の小穴SP401が切り込まれている。第3層は弥生時代後期（V様式期）の遺物を含む土層で、上面に古墳時代前期（布留式期）の土壙SK401が切り込まれている。また、第5層は1区～3区までの下層部分同様、埋没河川の堆積状況を示しており、弥生時代中期～後期の遺物（第9図69・70）が含まれている。

SP401：調査区北東部で検出した。北部は調査区外に至り、南部は削平されているため、平面の形状は明確ではないが、検出部での東西幅30㎝、深さ30㎝を測る。断面の形状はU字形を呈しており、内部には①暗灰色粘土が堆積している。内部から、土師器鍋（68）が口縁部を下に向けた状態で出土している。

SK401：調査区東部で検出した。SP401同様、南部は削平され、東部は調査区外に至るため、平面の形状は不明であるが、検出部での南北の径約1m、深さ50㎝を測る。断面の形状は半球形を呈し、上から②暗灰色粘土、③灰褐色砂混じり粘土、④暗褐色粘土の3層がレンズ状に堆積している。底部付近から壷（67）が口縁部を下に向けた状態で出土している。壷は口縁部が打ち欠かれており、底部には焼成前に小孔が穿たれている。

第5層出土遺物：第5層からは、弥生時代後期の高杯（69）、同中期の甕（70）が出土している。ともに遺存状態は良く、1区の遺物同様、近隣の集落からの流出遺物と考えられる。



第９図　４区出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

４　まとめ

古墳時代前期初頭の遺構には、１区の楠根川の旧流路、４区の土壙SK401がある。前者は大阪府教育委員会昭和60年度調査地№40トレンチで検出されているように、弥生時代から古墳時代前期までの流路である。また、土器の出土状況もこの調査と同様の状況を示しており、近隣の集落から流入したことが窺える。土壙SK401は、口縁部を打ち欠き、底部に穿孔をもつ壷（第９図－67）が埋められていたが、この出土状況から、なんらかの祭祀にかかわる土器埋納遺構と考えられる。また、１区で検出された土器の一群には、他地方の特徴を持つものが多く含まれており、この時期に他地方との交易や交流が広範囲に及んでいることを示唆している。

奈良時代の遺構には、３区の溝SD301、第４区の小穴SP401がある。SD301からは、奈良時代前期（８世紀前半）の土器が多量に出土している。調査地付近一帯は「弓削行宮、由義宮＝西ノ京」の推定地として一般に広く知られている地域であるが、土器の所属時期はこれらの時期よりもやや古く、両者の関係を追う必要があろう。また、小穴SP401からは、土師器鍋（第９図－68）が伏せられた状態で出土しており、下層遺構の土坑SK401と同様の土器埋納遺構とも考えられる。

各調査区の下層部には砂・礫が0.6～3.5ｍ以上堆積しており、層中から弥生時代中期中頃（Ⅲ様式期）～古墳時代前期（庄内期）の遺物が出土していることから、当地一帯が古墳時代前期（庄内期）までは河川の氾濫の影響を受けやすい不安定な土地であったことが推定される。

5　出土遺物観察表

番号	器種・部位	出土地点	法量（cm）	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
1	小型直口壷 口縁部	1区 5層	口　径　10.4	黄褐色	やや粗	良好	外反して開く口縁部、端部は尖る。 外面縦ヘラミガキ、内面ナデ。	
2	壷 体部	1区 5層	最大径　14.6	灰黒色	やや粗	良好	扁平な球形の体部、頸部は細く締まる。 外面縦ヘラミガキ、内面指押え。	
3	壷 底部	1区 5層	－	にぶい褐色	やや粗	良好	尖り気味の丸底。 外面縦ヘラミガキ、内面ナデ。	
4	小型壷	1区 5層	口　径　10.1 器　高　6.9	明橙色	密	良好	浅い半球形の体部、直線的に伸びる口縁部、端部は尖る。 口径は腹径を凌ぐ。 ナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ。	外面に煤付着
5	小型壷	1区 5層	口　径　12.0 器　高　10.3	にぶい褐色	密	良好	扁平な倒卵形の体部、内湾する口縁部、端部は尖る。口径<腹径 ナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ。	外面に煤付着
6	小型器台 脚部	1区 5層	裾　径　11.5	明橙色	密	良好	円錐形の脚部、端部は尖る。4孔を有する。 外面ヘラミガキ、ナデ、内面ハケ、ヨコナデ。	
7	鉢	1区 5層	口　径　18.5	淡褐色	やや粗	良好	半球形の体部から一旦鈍く屈曲して開いた後、外反気味にさらに開く口縁部。端部は尖る。 外面ヘラケズリの痕跡、内面ヘラミガキ、ナデ。	外面表皮剥離
8	高杯 杯部	1区 5層	口　径　17.1	暗茶褐色	やや粗 ～粗	良好	円錐形の杯底部から鈍い稜を持って外反気味に開く口縁部に至る。端部はわずかにつまみ上げ気味。 外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、ヘラミガキ。	粗製
9	高杯 脚柱状部	1区 5層	－	明橙色	密	良好	ゆるやかに開く円錐形の脚柱状部のみ遺存。 外面ヘラミガキ後ハケ、内面絞り目、下半ナデ。	
10	高杯 脚裾部	1区 5層	裾　径　16.2	黄褐色	密	良好	内湾気味に大きく開く脚裾部のみ遺存、端部は尖り気味に丸く終る。1孔残存。 外面ヘラミガキの痕跡、内面ハケ、ナデ。	
11	甕 口縁部	1区 5層	口　径　15.2	淡茶褐色	やや粗	良好	直線的に開く口縁部、端部はつまみ上げられ、丸みのある面を持つ。 ヨコナデ、内面横ハケ。	布留傾向
12	甕 口縁部	1区 5層	口　径　15.4	黒褐色	密	良好	外反気味に開く口縁部、端部はつまみ上げられ、外傾する面を持つ。 ヨコナデ、内面横ハケ。	庄内甕
13	甕 口縁部	1区 5層	口　径　17.2	暗褐色	やや粗	良好	体部からくの字形に屈曲し、わずかに内湾気味に開く口縁部、端部は内に巻き込む。 ヨコナデ。	布留傾向 煤付着
14	甕 口縁部	1区 5層	口　径　19.6	黄褐色	密	良好	外反気味に開く口縁部、端部はつまみ上げられ、外傾する面を持つ。 ヨコナデ、内面横ハケ。	庄内甕
15	甕 体部	1区 5層	最大径　12.7	にぶい褐色	やや粗	良好	球形に近い体部上半のみ遺存、鈍く屈曲して口縁部に至る。 外面ハケ、ヨコナデ、内面ナデ。	V様式系
16	甕 底部	1区 5層	底　径　3.6	暗茶褐色	やや粗	良好	体部から突出する平底、底面中央はわずかに窪む。 外面左上りタタキ、内面・外底面ナデ。	V様式系
17	甕 口縁～肩部	1区 5層	口　径　12.7	にぶい褐色	やや粗	良好	体部から外反して開いた後上方へ拡張する口縁部、拡張部外側面には10条の直線文。 外面体部縦ハケ、内面・口縁部ヨコナデ。	吉備の甕
18	甕 口縁～肩部	1区 5層	口　径　13.5	茶褐色	やや粗	良好	体部から丸く屈曲し、外反気味に開く口縁部、端部は丸くつまみ上げられる。 外面水平タタキ後縦ハケ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	他地方の甕
19	甕 口縁～肩部	1区 5層	口　径　13.5	外面明橙色 内面緑灰色	やや粗	良好	強く張る体部から一旦立ち上がり、強く外反する口縁部に至る。端部は尖り気味に丸く終る。 外面縦ハケ、内面指押えナデ、ハケ、口縁部ヨコナデ。	阿波の甕
20	鉢 底部	1区 5層	底　径　3.4	黄褐色	やや粗	良好	底部はわずかに突出する平底、口縁部は内湾気味に開く。体部と口縁部・底部の境は不明瞭。 外面指押えナデ、内面横ハケ。	

番号	器種・部位	出土地点	法量（cm）	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
21	有孔鉢	１区 ５層	口　径　13.0 器　高　5.3	黄褐色	やや粗	良好	直口の小型鉢、口縁端部は尖り気味に丸く終る。 底部中央に焼成後の孔。 手づくね成形後ハケ、ナデ。	吉備？の甕
22	弥生土器 高杯 脚柱状部	１区 ５層	径　5.2～5.6	黄褐色	やや粗	良好	丈高の柱状部のみ遺存、杯部との接合は円板充填。 外面縦ヘラミガキ、内面絞り目、指押え。	Ⅲ様式
23	土師器 杯	３区 SD301 ②層	口　径　13.6 器　高　3.8	にぶい褐色	やや粗	良好	底部から外反気味に開き口縁部に至る。端部は内に丸くおさめる。 ナデ、ヘラミガキ。	
24	土師器 杯	３区 SD301 ②層	口　径　11.7 器　高　3.0	淡褐色	やや粗	良好	浅い半球形、底部中央はわずかに窪む。口縁端部は丸く終る。 指押えナデ、ヨコナデ。	
25	土師器 杯	３区 SD301 ①層	口　径　12.8 器　高　3.3	にぶい褐色	やや粗	良好	やや深い半球形、口縁部は直立し、端部は外へわずかにつまみ出される。 指押えナデ、ヨコナデ。	
26	土師器 杯	３区 SD301 ②層	口　径　12.7 器　高　3.5	にぶい褐色	密	良好	半球形の体部、口縁部は外反気味で、端部は外へわずかにつまみ出される。 指押え、ナデ、ヨコナデ、内面放射状ヘラミガキ。	
27	土師器 杯	３区 SD301 ②層	口　径　13.1	にぶい褐色	やや粗	良好	26に似る。 ナデ、ヨコナデ。	
28	土師器 杯	３区 SD301 ①層	口　径　17.3	にぶい褐色	やや粗	良好	23に似る大型の器種。 ナデ、ヘラミガキ。	
29	土師器 杯蓋	３区 SD301 ②層	口　径　21.8	にぶい褐色	やや粗	良好	内湾して開く低い器形、口縁端部は下へ丸くおさめる。 ナデ、ヘラミガキ。	
30	土師器 杯	３区 SD301 ②層	口　径　19.6 器　高　2.2	明橙色	やや粗	良好	平坦な底部から屈曲し、直線的に開く口縁部へ至る、端部は外へわずかにつまみ出される。 ナデ、ヨコナデ。	
31	土師器 杯	３区 SD301 ②層	口　径　20.1 器　高　2.2	にぶい褐色	やや粗	良好	平坦な底部から内湾して開く口縁部へ至る。端部は内へ巻き込む。 ナデ、ヨコナデ。	
32	土師器 小型壷	３区 SD301 ②層	口　径　7.5 最大径　8.1 器　高　5.8	にぶい褐色	やや粗	良好	やや尖り気味の丸底を持つ体部から、鋭い稜を持ち、内湾して伸びる口縁部に至る。端部は尖る。 手づくね成形後、ナデ、ヨコナデ。	黒斑あり
33	土師器 小型壷	３区 SD301 ②層	口　径　8.4 最大径　8.6	にぶい褐色	やや粗	良好	張りの少ない体部から丸く屈曲して口縁部に至る。 端部は外に丸くつまみ出される。 指押え、ナデ、ヨコナデ。	黒斑あり
34	土師器 小型壷	３区 SD301 ②層	口　径　10.0 最大径　10.8	にぶい褐色	やや粗	良好	体部からゆるやかに屈曲して直立気味の口縁部に至る。端部は薄く尖る。 指おさえ、ナデ、ヨコナデデ。	
35	土師器 小型甕	３区 SD301 ①層	口　径　13.9	にぶい褐色	やや粗	良好	張りの少ない体部から外上方へ折れる短い口縁部に至る。端部は丸く終る。 粘土紐巻上後外面縦ハケ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	長胴甕
36	土師器 小型甕	３区 SD301 ②層	口　径　13.0	明橙色	やや粗	良好	体部から鈍く屈曲し口縁部に至る。端部はつまみ上げられ、外傾する面を持つ。 外面縦ハケ、ヨコナデ、内面ヘラケズリ、口縁部横ハケ。	長胴甕
37	土師器 小型甕 底部	３区 SD301 ②層	－	にぶい褐色	やや粗	良好	器肉の厚い丸底、35の底部か。 粘土紐巻上後外面縦ハケ、ナデ、内面ナデ。	長胴甕
38	土師器 甕	３区 SD301 ②層	口　径　16.4	淡褐色	やや粗	良好	体部から屈曲した後直立気味の口縁部に至る。端部は外へつまみ出され、上方に水平な面を持つ。 ナデ、ヨコナデ。	
39	土師器 甕	３区 SD301 ②層	口　径　18.4	淡褐色	やや粗	良好	38に似るが、口縁部は外傾する。 ナデ、ヨコナデ。	
40	土師器 甕	３区 SD301 ②層	口　径　16.9	淡黄褐色	やや粗	良好	張りの少ない体部から丸みのあるくの字形に屈曲し、口縁部に至る。端部は内へ大きくつまみ出される。外面縦ハケ、内面ヘラケズリ後横ハケ、口縁部ヨコナデ。	長胴甕

番号	器種・部位	出土地点	法量（cm）	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
41	土師器 甕	3区 SD301 ②層	口　径　22.5	淡黄褐色	やや粗	良好	体部からくの字形に屈曲し、口縁部に至る。端部は丸くつまみ上げられ、外傾する面を持つ。 外面縦ハケ、内面縦ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	長胴甕
42	土師器 甕	3区 SD301 ②層	口　径　24.6	明橙色	やや粗	良好	体部から丸みのあるくの字形に屈曲し、口縁部に至る。端部は上下につまみ出され、外傾する面を持つ。 内外面ハケ、口縁部ヨコナデ。	長胴甕
43	土師器 甕・鍋	3区 SD301 ②層	口　径　28.0	にぶい褐色	やや粗	良好	体部からくの字形に屈曲し、外反気味の口縁部。端部は内にわずかにつまみ上げられ、外傾する凹面となる。 外面ハケ、ヨコナデ、内面体部ナデ、口縁部横ハケ。	
44	土師器 甕・鍋	3区 SD301 ②層	口　径　32.8	にぶい褐色	やや粗	良好	体部から丸みのあるくの字形に屈曲し、外反する口縁部、端部は内にわずかにつまみ上げられ、外傾する面となる。 外面ハケ、ヨコナデ、内面指押え、横ハケ。	
45	土師器 羽釜	3区 SD301 ②層	鍔　径　32.2	暗褐色	やや粗	良好	水平に伸びる鍔周辺のみ遺存。 ナデ、ヨコナデ。	鍔の下面に煤付着
46	土師器 鉢	3区 SD301 ②層	口　径　26.8	外面淡褐色 内面黒褐色	やや粗	良好	内湾する口縁部、端部は内外につまみ出され、内傾する凹面となる。 ヨコナデ。	
47	土師器 鉢	3区 SD301 ①層	口　径　24.1	淡褐色	やや粗	良好	内湾する口縁部、端部は内外につまみ出され、内に段を持つ。 指押え、ヨコナデ。	
48	土師器 小型椀	3区 SD301 ②層	口　径　8.0	淡黄褐色	やや粗	良好	手ずくねの小型椀。 指押えナデ、ハケ。	
49	土師器 小型高杯 脚部	3区 SD301 ②層	裾　径　6.2	にぶい褐色	やや粗	良好	手ずくねの小型高杯。 指押えナデ、ナデ。	
50	土師質 土錘	3区 SD301 ②層	長　さ　7.3 径　2.0～2.5	灰褐色	やや粗	良好	やや扁平な管状土錘、紐孔は径1cm前後で中心からずれる。	
51	須恵器 蓋（壷）	3区 SD301 ②層	口　径　7.3 器　高　2.9	灰色	密	良好	浅い半球形、擬宝珠状のつまみを有する。 回転ケズリ後回転ナデ。	灰かぶり
52	須恵器 小型杯 （身）	3区 SD301 ①層	口　径　10.3	白灰色	密	良好	丸みのある椀形の器形、口縁部はわずかに外反し、端部は丸く終る。 回転ナデ。	
53	須恵器 壷	3区 SD301 ②層	口　径　13.4	灰黒色	密	良好	強く外反する口縁部、端部は丸く終る。 回転ナデ。	灰かぶり
54	須恵器 長頸壷	3区 SD301 ②層	－	黒灰色	密	良好	外傾する頸部のみ遺存、1条の凹線を有する。 回転ナデ。	自然釉
55	須恵器壷 底部	3区 SD301 ②層	－	灰黒色	密	良好	丸底の底部から内湾して立ち上がる体部に至る。 底部回転ケズリ後回転ナデ。	
56	須恵器壷 底部	3区 SD301 ①層	底　径　6.0	外面灰色 内面白灰色	やや粗	良好	平底の底部から直線的に開く体部に至る。 外底面ヘラキリ後静止ナデ、内面回転ナデ。	
57	須恵器壷 底部	3区 SD301 ①層	高台径　9.2 高台高　1.4	青灰色	密	良好	ハの字形に開く丈高の高台、端部は外傾する面を持つ。 回転ナデ。	
58	須恵器壷 底部	3区 SD301 ②層	高台径　8.4 高台高　0.5	灰色	密	良好	ハの字形に開く低い高台、端部は水平な面を持つ。 回転ナデ、内底面静止ナデ。	
59	須恵器壷 底部	3区 SD301 ②層	高台径　10.0 高台高　1.0	灰色	密	良好	ハの字形に開く丈高の高台、端部はわずかに外傾する凹面を持つ。体部は高台際から内湾した後直立する。体部に2条の凹線、回転ナデ、内外の底面静止ナデ。	灰かぶり
60	須恵器 杯（身）	3区 SD301 ②層	口　径　16.4 器　高　4.2	灰色	密	良好	垂直に下がる低い高台、端部は水平な面を持つ。体部は高台際から内湾し、直線的に開く。口縁端部は尖る。 回転ナデ、内外の底面静止ナデ。	

番号	器種・部位	出土地点	法量（cm）	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
61	須恵器 杯（身）	３区 SD301 ①層	口　径　17.0 器　高　3.4	暗青灰色	密	良好	ハの字形に開く低い高台、端部は水平な面を持つ。体部との境には稜を持ち直線的に開く。口縁端部は丸く終る。 回転ナデ、内外の底面静止ナデ。	
62	須恵器 杯（身）	３区 SD301 ②層	口　径　18.4 器　高　4.1	灰色	密	良好	ハの字形に開く低い高台、端部は内傾する面を持つ。体部は高台際から内湾して開く。口縁端部は尖る。 回転ナデ。	
63	須恵器 杯（身）	３区 SD301 ②層	高台径　10.9 高台高　0.5	灰黒色	密	良好	ハの字形に開く低い高台、端部は水平な面を持つ。 回転ナデ、内外の底面静止ナデ。	
64	須恵器 壷	３区 SD301 ②層	口　径　23.0	灰色	密	良好	外反して開く口縁部、端部は外傾する面を持つ。 回転ナデ。	
65	弥生土器 短頸壷	３区 ６層	口　径　15.1	にぶい褐色	やや粗	良好	体部から屈曲して外反する口縁部に至る、端部は丸い。 ヨコナデ。	Ⅴ様式
66	弥生土器 広口壷	３区 ６層	口　径　20.0	茶褐色	やや粗	良好	外反する口縁部、端部は上下に拡張し、外傾する面を持つ。 ヨコナデ。	Ⅲ様式
67	土師器（古） 壷体部	４区 SK401	最大径　16.4 現存高　12.3	にぶい褐色	やや粗	良好	扁平な球形の体部、底部中央に焼成後の孔を穿つ。外面ヘラケズリ後ハケ、ナデ、ヘラミガキ、内面指押えナデ。	内面に赤色顔料付着
68	土師器鍋	４区 SP401	口　径　41.5	にぶい褐色	やや粗	良好	半球形の体部から外傾気味に開く口縁部に至る。端部は尖る。把手は舌状。 ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ。	
69	弥生土器 高杯脚部	４区 ５層	裾　径　7.6	淡褐色	やや粗	良好	鈍く外反して下る丈高の脚部、４孔を有する。外面ヘラによる面取り後ナデ、ヨコナデ、内面絞り後ヨコナデ。	Ⅴ様式
70	弥生土器 甕底部	４区 ５層	底　径　4.5	茶褐色	やや粗	良好	体部から突出する平底、外底面中央はわずかに窪む。 外面縦ヘラミガキ、外底面～底部側面ナデ、内面ハケ。	Ⅱ～Ⅲ様式

図　　版

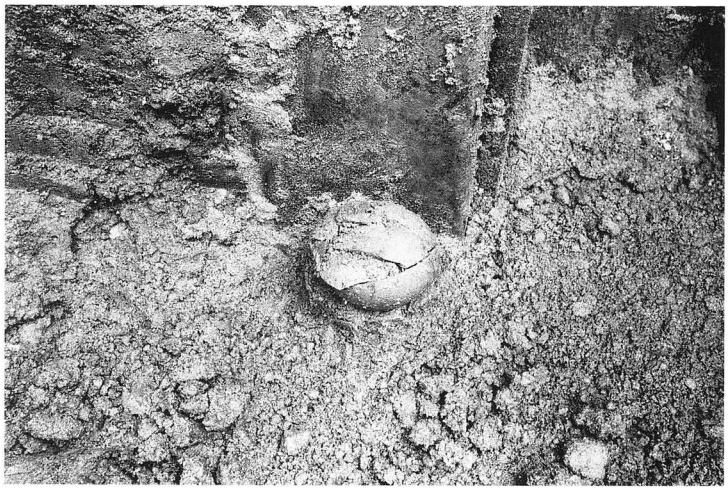
1区全景（東から）

3区全景（西から）

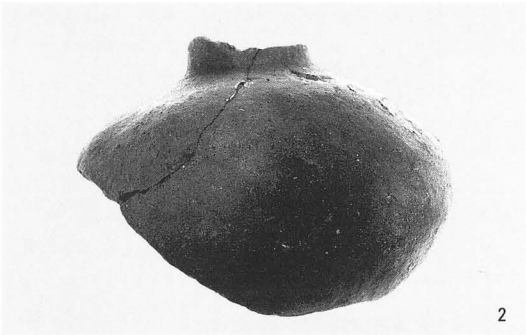
3区ＳＤ301断面

2区北壁

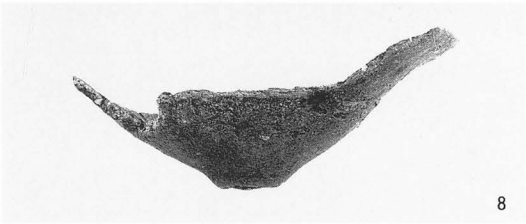
2区近世井戸



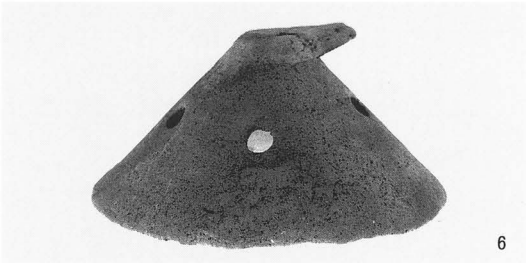
4区ＳＰ401遺物出土状況

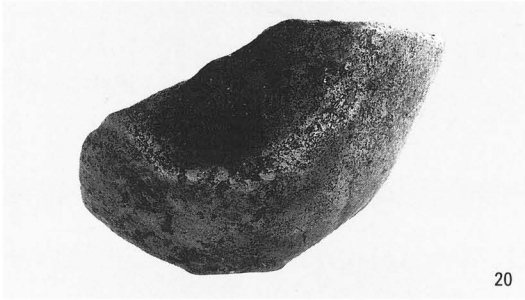

2

4

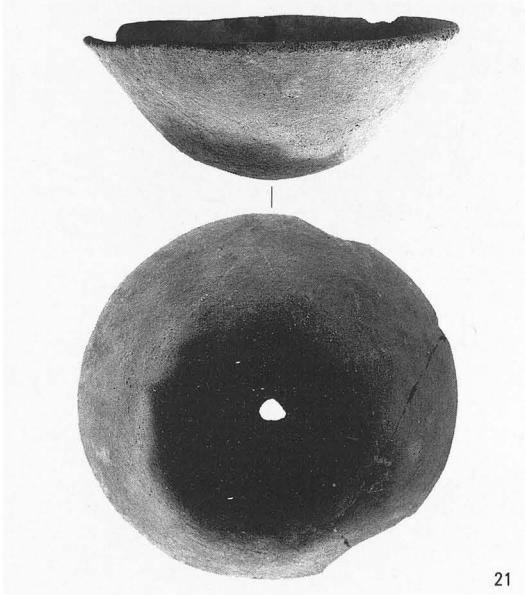

8

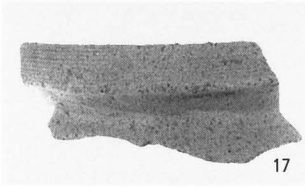
5

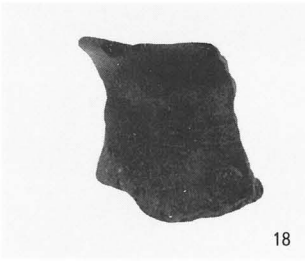

6

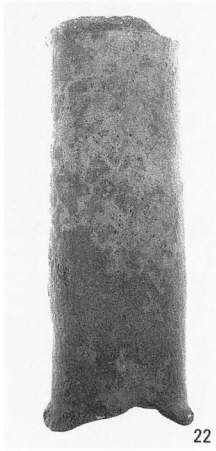

20

19

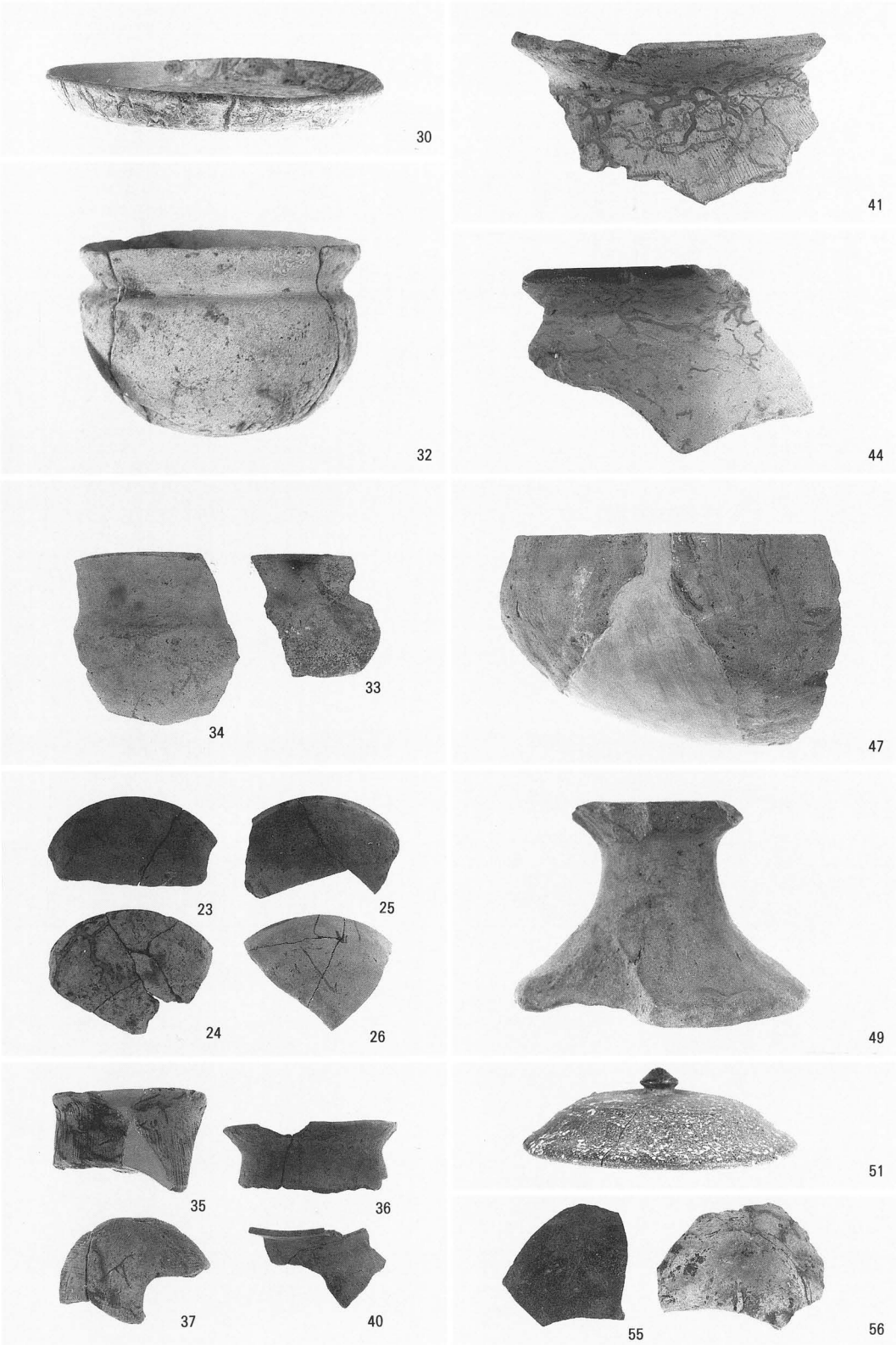

21


17

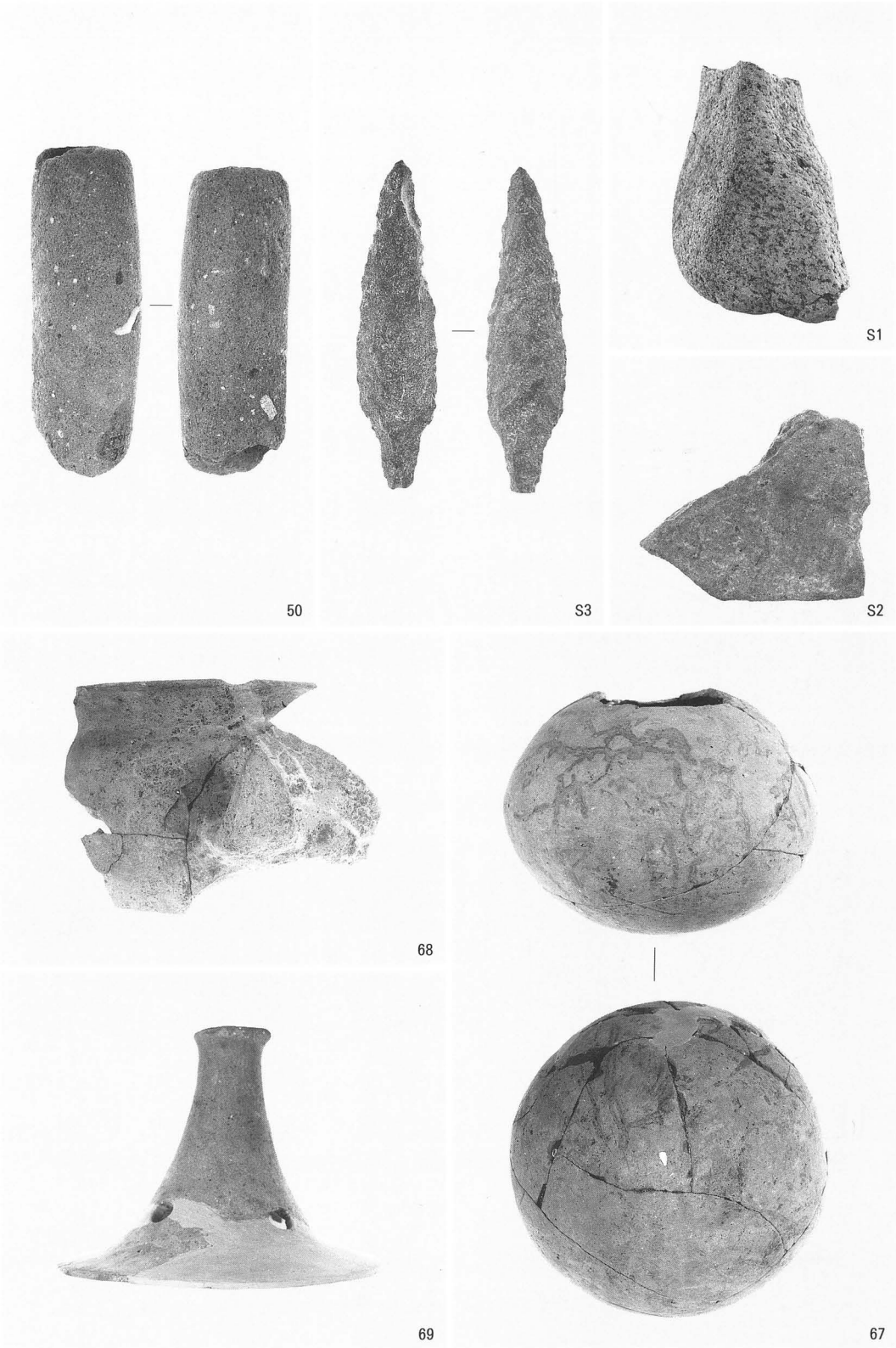

18


22

1区出土遺物



3区ＳＤ301出土遺物



3区ＳＤ301（50、・S1・S2）、第6層（S3）4区ＳＫ401（67）、ＳＰ401（68）、第5層（69）出土遺物

Ⅲ　中田遺跡第８次調査（NT91－８）

例　　言

1、本書は、八尾市八尾木北５丁目98～105で実施した温泉旅館新築に伴う中田遺跡第８次調査（NT91－８）の報告書である。

1、本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第70号　平成３年８月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が㈱日本海から委託をうけて実施したものである。

1、調査は、当調査研究会　坪田真一を担当者として実施した。

1、現地調査は、平成３年11月５日から12月１日にかけて実施した。調査面積は500㎡を測る。

1、現地調査には垣内洋平・坂下　学・浜田千年・福島友香・山内千恵子が参加した。

1、内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子が参加した。

1、本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の１地図から起こした座標北である。

1、本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を主に田島が作成した。

本　文　目　次

第１章　はじめに……37

第２章　調査概要……39

　第１節　調査方法……39

　第２節　基本層序……40

　第３節　検出遺構と出土遺物……41

第３章　出土遺物観察表……72

第４章　まとめ……82

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/5000）……38
第２図　地区割図（Ｓ＝1/300）……39
第３図　調査区北壁断面図
（Ｓ＝縦：1/40、横：1/200）……40
第４図　第１次面平面図（Ｓ＝1/150）……41
第５図　第３層出土遺物（Ｓ＝1/4）……42
第６図　第２次面平面図（Ｓ＝1/150）……43
第７図　第５層出土遺物（Ｓ＝1/4）……44
第８図　SE201平・断面図（Ｓ＝1/20）…45
第９図　SE202平・断面図（Ｓ＝1/20）…46
第10図　SE202出土遺物
（Ｓ＝1/4、1/5）……47
第11図　SE203平・断面図（Ｓ＝1/20）…48
第12図　SE203出土遺物（Ｓ＝1/4）……48
第13図　SE204平・断面図（Ｓ＝1/20）…49
第14図　SE204出土遺物
（Ｓ＝1/4、1/5）……50
第15図　SE205平・断面図（Ｓ＝1/20）…51
第16図　SE205出土遺物（Ｓ＝1/4）……52
第17図　SK206・205、SP207出土遺物
（Ｓ＝1/4）……53
第18図　SD201・204出土遺物
（Ｓ＝1/4）……55
第19図　SD205出土遺物①（Ｓ＝1/4）……56
第20図　SD205出土遺物②（Ｓ＝1/4）……57
第21図　SD206出土遺物①（Ｓ＝1/4）……58
第22図　SD206出土遺物②（Ｓ＝1/4）……59
第23図　SD207平・断面図（Ｓ＝1/60）…61
第24図　SD207出土遺物①（Ｓ＝1/4）……62
第25図　SD207出土遺物②
（Ｓ＝1/6、1/4）……63
第26図　SD207出土遺物③（Ｓ＝1/8）……64
第27図　第３次面平面図（Ｓ＝1/150）……66
第28図　SD302、SP304・313出土遺物
（Ｓ＝1/4）……67
第29図　SW301・302平面図
（Ｓ＝1/10）……68
第30図　SW301出土遺物（Ｓ＝1/4）……69
第31図　SW302出土遺物（Ｓ＝1/4）……71
第32図　第８層出土遺物（Ｓ＝1/4）……71

表　目　次

表１　第１次面　溝法量表 ……42
表２　第２次面　土坑法量表 ……53
表３　第２次面　溝法量表 ……54
表４　第２次面　ピット法量表 ……65
表５　第３次面　ピット法量表 ……66
表６　SW301出土土師器皿分類表 ……70
表７　SW302出土土師器皿分類表 ……70

図　版　目　次

図版一　西区第１次面（北から）
　　西区第２次面（北から）
図版二　東区第２次面（北から）
　　SE201断割り（北から）
図版三　SE202（北から）
　　SE202断割り（北から）
図版四　SE204（北から）
　　SE204断割り（北から）
図版五　SE205断割り（南から）
　　SD206南端側溝内遺物出土状況
　　（北から）
図版六　SD207全景（南から）
　　瓦質製品（184）出土状況（西から）
　　SD207北壁
図版七　SD207橋脚部分（南東から）
図版八　西区第３次面（北から）
　　SP313（北から）
図版九　SW301（東から）
　　SW301下層（東から）
図版十　SW302（東から）
　　西区下層確認トレンチ（北西から）
図版十一　出土遺物　第３層（２・４）
　　第５層（23～29）
　　SE202（41～43）
　　SK206（59・60）
図版十二　出土遺物　SE204
図版十三　出土遺物　SE204（48～51）
　　SE205（54・56・57）
　　SD201（69・70）
　　SD204（73）
　　SD205（77・79・81）
図版十四　出土遺物　SD205
図版十五　出土遺物　SD205（104・105・110～
　　113・115・116）
　　SD206（他）
図版十六　出土遺物　SD206
図版十七　出土遺物　SD206（151•154•163•164）
　　SD207（165•166•168•169）
図版十八　出土遺物　SD207
図版十九　出土遺物　SD302（190）
　　SW301（他）
図版二十　出土遺物　第８層（291・293）
　　SW302(他)

第１章　はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目の東西約1.1km・南北約0.8kmがその範囲とされている。旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は、昭和45年以降の八尾都市計画曙川北土地区画整理事業の際発見された遺跡で、昭和46年に大阪府教育委員会により最初の発掘調査が実施された。以後中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

このような情勢下の平成３年、㈱日本海より、八尾市八尾木北５丁目98～105における温泉旅館新築の届出書が八尾市教育委員会文化財室（現文化財課）に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成３年８月21日に遺構確認調査を実施した。その結果、古墳時代後期頃に埋まったと思われる自然流路の堆積、中世の遺物包含層が確認され、同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査[註1]を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

次にこれまでの中田遺跡発掘調査の成果から、主に当調査地周辺の概要について簡単に記す。

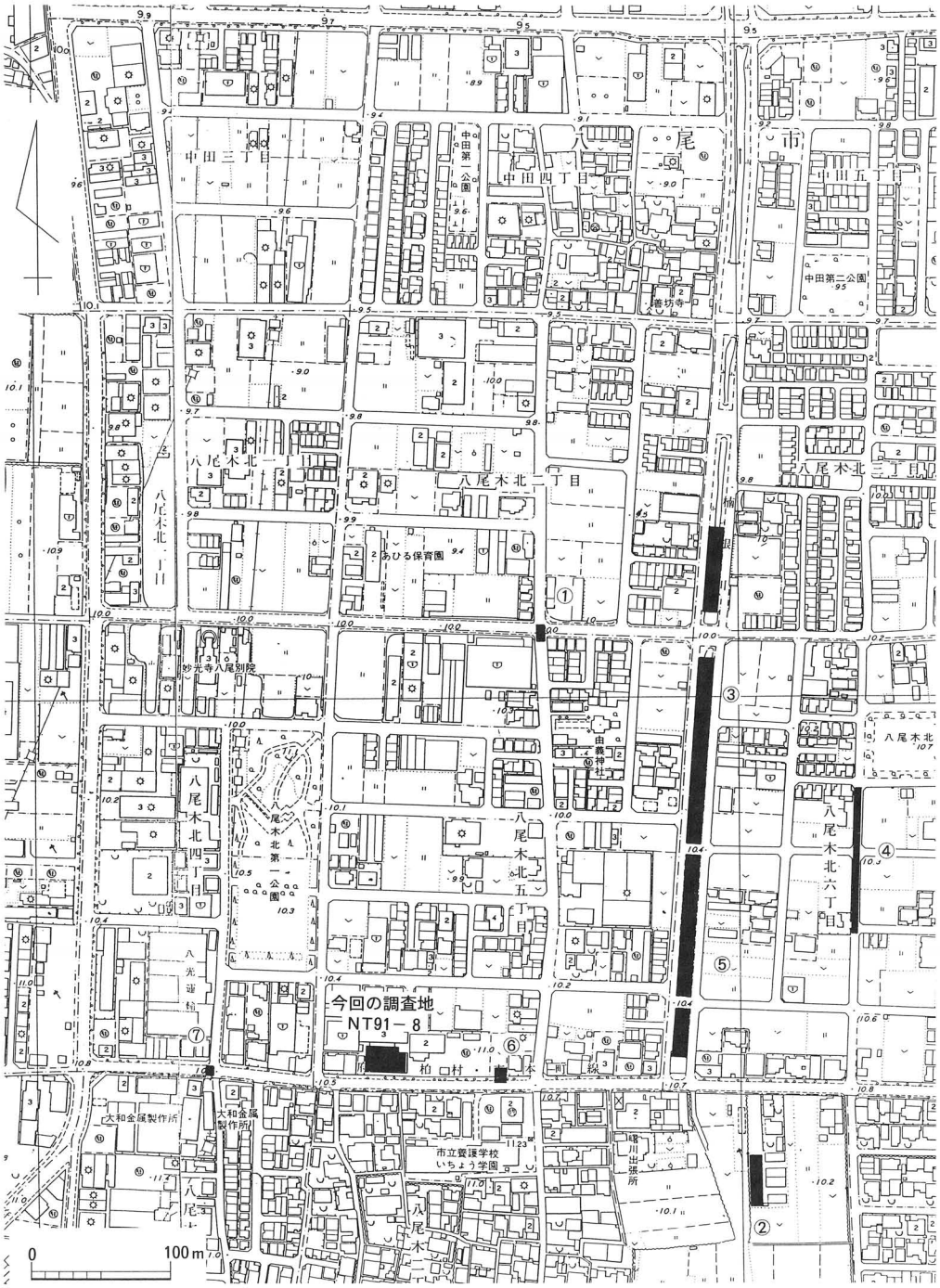
弥生時代前期から中期では、遺跡範囲の中部・南部から南に隣接する東弓削遺跡にかけてが集落域と考えられている。第４次調査①では前期の土坑、東弓削遺跡にあたる②では中期後半の壷・高杯からなる土器棺が検出されている。弥生時代中期から後期では数か所で河川が検出されており、遺跡南部中央付近から北西方向に流路をもつ河川の存在が想定されている。

古墳時代前期になると遺構はほぼ全域で検出されている。注目すべきものとして、第10次調査③では布留式期古相の土坑から朝鮮半島系の土器、第14次調査④では丸太くり抜き井戸がある。また第19次調査⑤では４世紀後半の古墳が検出され、周溝からは船形・家形埴輪等が出土している。中期～後期と集落は衰退してゆくようであるが、ただ遺跡北西部では、隣接する矢作遺跡にかけて、後期から奈良時代に続く集落が存在する可能性がある。

中世以降は鋤溝が検出され、主に生産域となっている。

今回の調査地は中田遺跡の南西部端に位置しており、周辺での発掘調査は少ない。そのため遺跡の概要についてはまだ不明確な地域といえる。当地の東約70ｍ・西約110ｍでは下水道工

事に伴う調査（第３次調査）が実施されている。東の⑥では弥生時代中期・古墳時代前期初頭の遺構と、これら以前に埋没した河川が検出され、また西の⑦では近世盛土以下は河川堆積が続くことが確認されている。



第１図　調査地位置図（Ｓ＝1／5000）

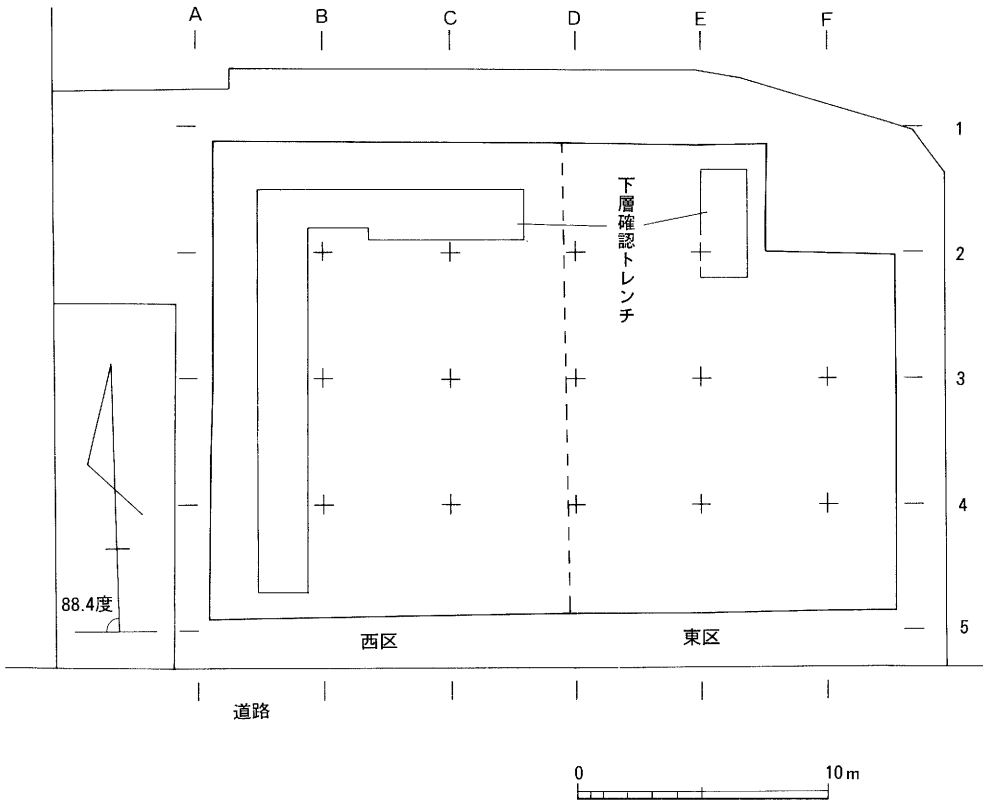
第２章　調査概要

第１節　調査方法

今回の調査は温泉旅館新築に伴うものである。掘削排土処理の都合上、調査区を東西に二分割することになった。そして西区から調査を実施し、終了後東区の調査を実施した。

調査は、西区では現地表下約1.0ｍまで、東区では約1.2ｍまでを機械掘削により除去した後、以下約0.4ｍを対象として人力掘削により実施した。なお検出井戸の断割りには随時機械を使用した。その後、西区ではＬ字型のトレンチ（東西約16ｍ＋南北約10ｍ、幅約２ｍ）を設定して人力掘削により、また東区では機械と人力掘削を併用して、約４ｍ×２ｍの範囲で下層確認調査を実施した。

地区割は、調査区平面形に合わせて５ｍ方眼を任意に設定した。そして南北ラインにアルファベット（西からＡ～Ｆ）、東西ラインに数字（北から１～４）を冠し、地区名は北西交点番号に代表させた。なおこの方眼の南北ラインは北から東に約1.6度振っている。

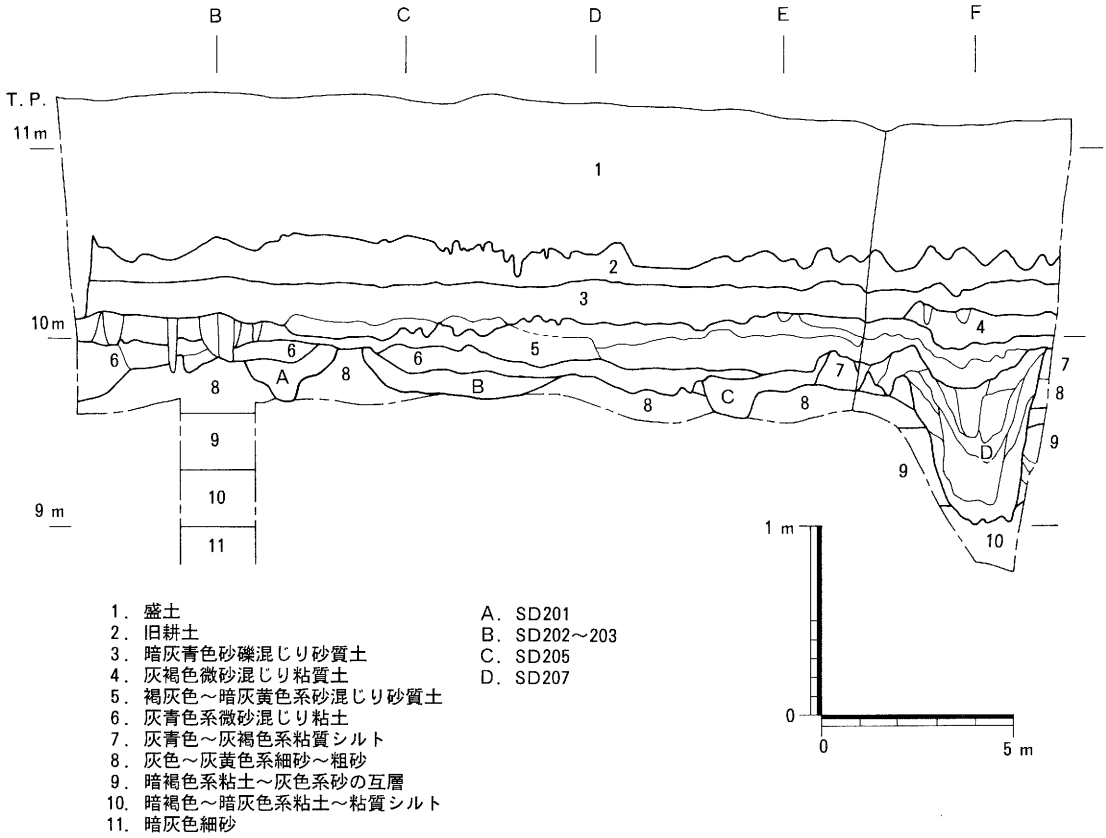


第２図　地区割図（Ｓ＝1／300）

第２節　基本層序

第１層は盛土、第２層は旧耕土である。第３・４層は、近世までの遺物、特に中世の遺物を多く含んでおり、第４層は調査区の東部のみに堆積している。第５層は調査区全域にみられ、中世の遺物を含み、非常に固く締まっており整地層と考えられる。この上面が第１次面で、標高は約10.1ｍである。第６・７・８層の上面が第２次面で、標高は約10.0ｍを測る。第６層は調査区の中央部から西半部にみられた粘性の強い粘土層であり、落ち込み状の堆積である。第２次面の溝遺構の埋土となる部分もあり、これらの遺構埋没後、当地が沼沢地となっていた時期があったものと考えられる。また西端部ではこの下部の第８層上面でも遺構が確認でき、この部分を第３次面とした。標高は約9.8ｍを測る。

以下は下層確認調査の結果、粘土～砂が互層状に堆積しており、河川の様相を呈している。第８層の砂層は弥生時代後期から奈良時代の遺物を含んでいるが、断面観察ではこの直下の第９層上面で土坑状の落ち込みが数か所にみられ、当該時期の遺構が存在する可能性がある。第11層の砂層上面の標高は、調査区南西部では約9.3ｍと高くなっている。



第３図　調査区北壁断面図（Ｓ＝縦：1／40、横：1／200）

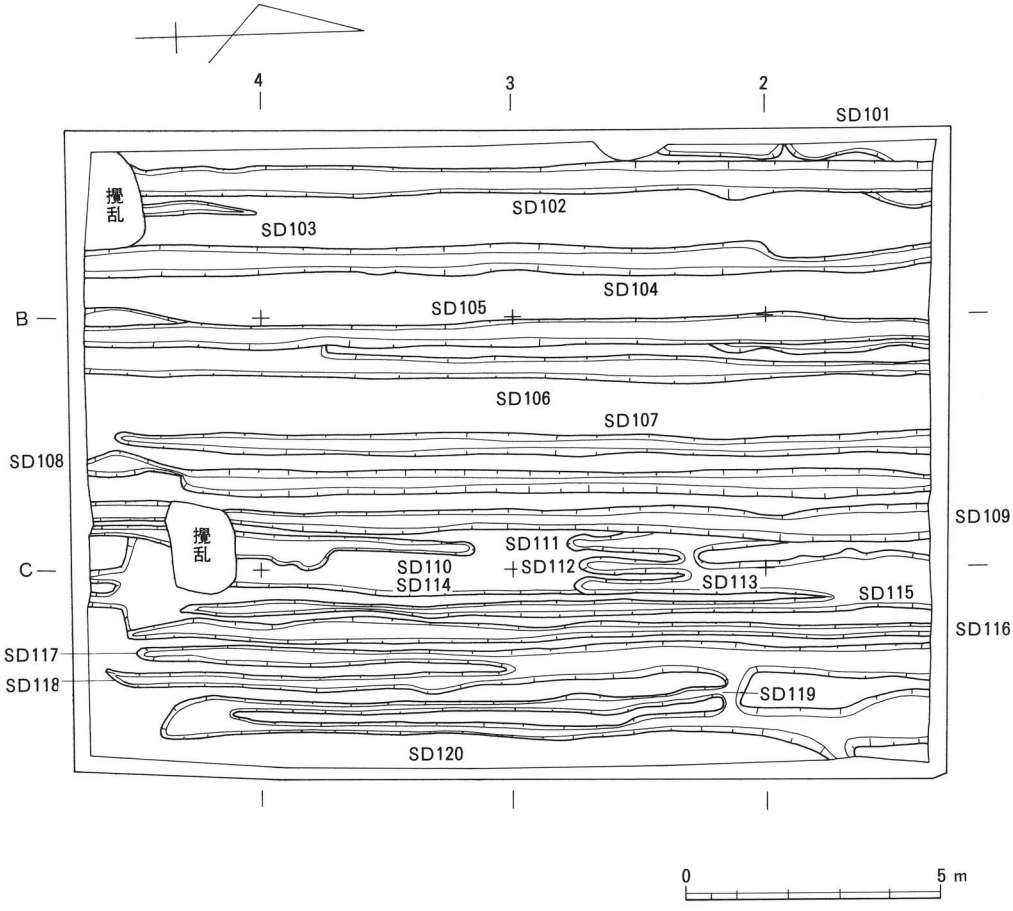
第３節　検出遺構と出土遺物

西区で第１～３次面の３面を、東区ではこのうち第２次面を調査した。

〈第１次面〉

西区全域で、南北方向に平行して直線的にのびる溝20条（SD101～120）を検出した。西部に位置するSD102・105は幅約50cm・深さ６cm～20cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は上層が灰褐色荒砂混じり粘質土、下層が灰黄褐色細砂～微砂であり、溝掘削当初の流水状況が窺える。何らかの水路と考えられる。他の溝は幅20cm～60cm程度・深さ５cm～10cm程度のもので、断面は皿状・逆台形を呈し、埋土はいずれも暗灰色粗砂混じり砂質土である。

SD110～113はSD114の底部の検出である。SD105とSD106、SD119とSD120は調査区南部で、SD117と118は中央部で合流して１条の溝となっている。SD111～113やSD117～120の間には、これらを連結するような東西方向の溝もみられる。



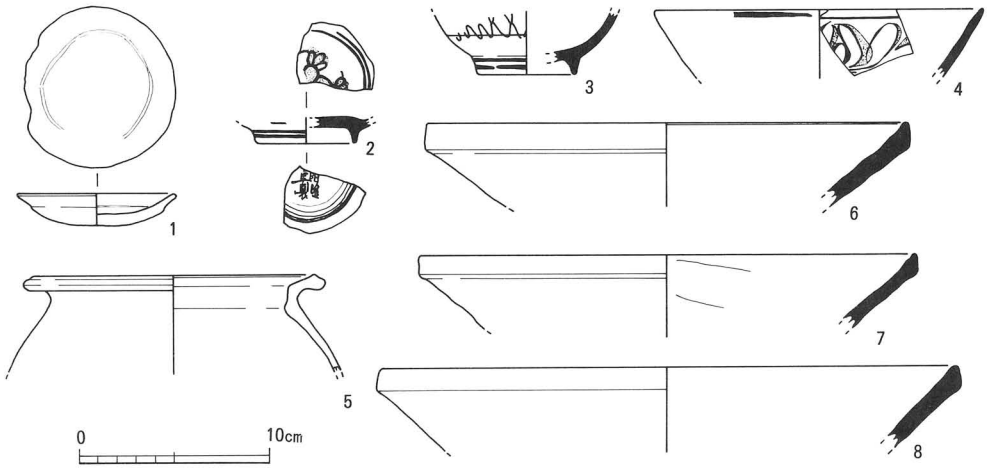
第４図　第１次面平面図（1／150）

これらの溝からの出土遺物は小片のみで、図化し得るものは無かった。この面を覆う第３層出土遺物には、12世紀～13世紀のもの、16世紀～17世紀のものがある。前者には瓦器皿（１）、中国製青磁（４）、東播系須恵器鉢（６～８）、後者には青花と考えられる饅頭心碗（２）、大和型羽釜（５）、17世紀代の伊万里碗（３）がある。（２）は伊万里の可能性もある。

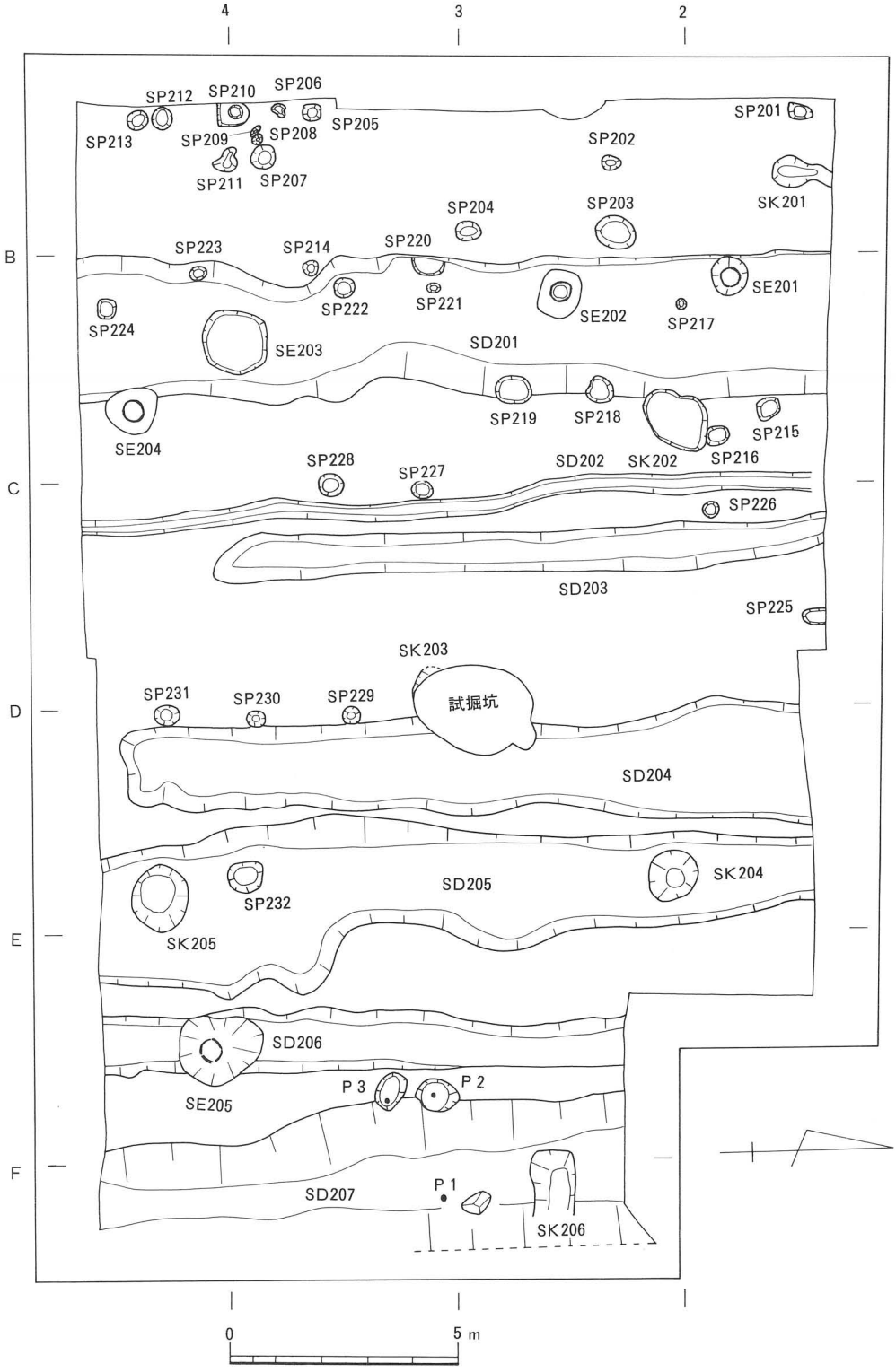
これらの溝は農耕に関する溝と考えられ、時期は近世頃のものであろう。法量等は表１にまとめた。

ＳＤ	幅	深さ	間隔(cm)
101	36以上	6	
102	50～95	19	0～10
103	27	11	10～38
104	25～65	11	57～66
105	48～84	18	61～107
106	25～60	7	11～34
107	24～45	7	101～129
108	15～59	8	18～42
109	32～74	7	22～56
110	19～68	10	8～24
111	27～40	2	－
112	24～35	4	13～26
113	25～34	4	10～14
114	－	1	－
115	10～35	6	16～33
116	24～54	6	8～28
117	24～42	6	7～27
118	25～42	5	17～26
119	18～40	4	20～30
120	18～39	7	15～32

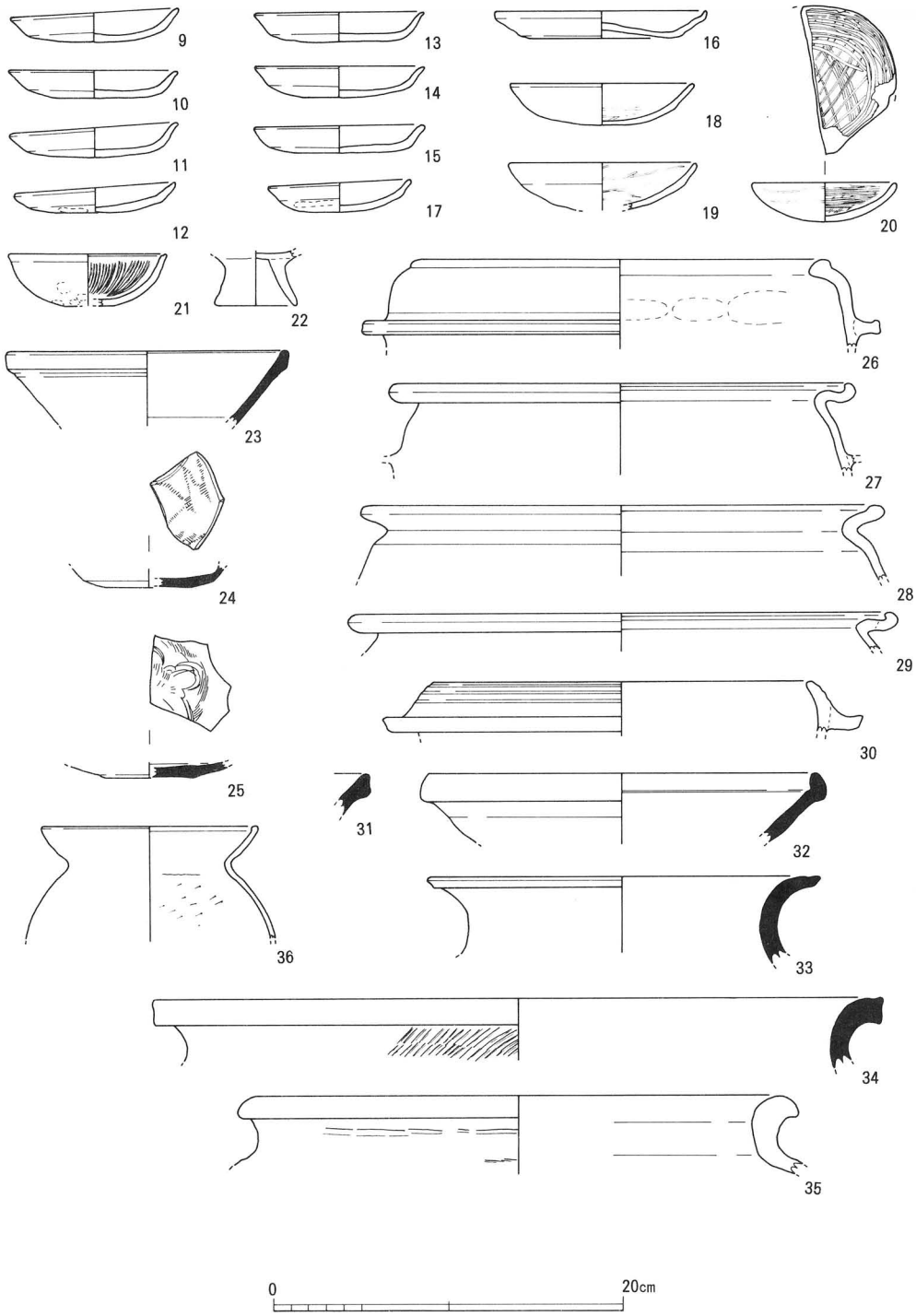
表１　第１次面　溝法量表



第５図　第３層出土遺物（Ｓ＝1／4）



第６図　第２次面平面図（1／150）



第７図　第５層出土遺物（１／４）

〈第２次面〉

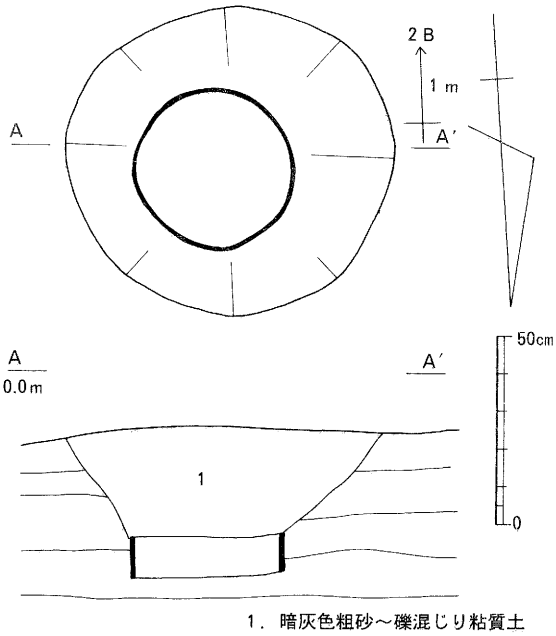
井戸５基（SE201～205）・土坑６基（SK201～206）・南北方向にのびる溝７条（SD201～207）・ピット32個（SP201～232）を検出した。このうち西区西部の整地層の上面のものはSP201～214である。またこの整地部分の東側は、SD207の西肩まで浅い落ち込み状を呈し（第６層）、他の遺構はその底部の検出である。

第２次面を覆う第５層からは、主に12世紀から14世紀の遺物が出土している。瓦器椀は高台の消失した最終形態のものがみられる（18・19）。羽釜には大和型（26～29）と河内型（30）がある。輸入陶磁器には白磁碗（23）・皿（25）、同安窯系青磁皿（24）がある。

SE201

調査区の北西部１Ｂ区で検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.85ｍである。掘形平面形はほぼ円形で、規模は約0.9ｍ×0.8ｍを測り、検出面からの深さは約40㎝である。曲物は直径約40㎝を測り、最下段の下部約10㎝のみが遺存している。埋土は暗灰色粗砂～礫混じり粘質土で、井戸廃絶の際に埋められた土であろう。本来の掘方埋土は遺存していない。

出土遺物には土師器・瓦器の小片があるが、図化し得るものは無く、時期は不明である。



第８図　ＳＥ201平・断面図（Ｓ＝１／20）

SE202

２Ｂ区、SE202の南約2.9ｍで検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.8ｍである。掘形平面形は東西に長い長方形に近い偏円形で、規模は約1.1ｍ×0.9ｍ、検出面からの深さは約82㎝を測る。曲物は掘形のほぼ中央に位置し、直径約40㎝を測るもので、下から３段が遺存している（下から曲物１～３）。曲物の積み方は、曲物２は曲物１の外側に、そして曲物３は曲物２の内側にというものである。

掘方埋土は淡灰色細砂～粗砂の単一層である。枠内埋土は上層が暗灰色細砂混じり粘質土、下層が黒灰色粗砂礫混じり粘質土である。

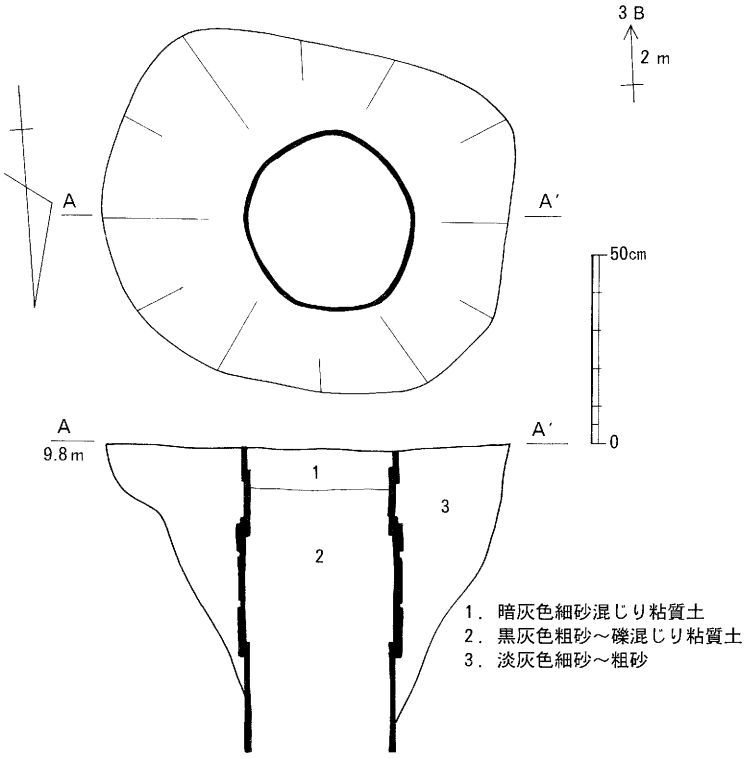
曲物は下から２段を図化した（42・43）。両方とも二重構造で、外側は三段巻きである。曲

物２（42）には、内側と外側の間に補強の為の板が挟まれている。

出土遺物には土師器皿（37）、瓦器椀（38～41）がある。完形の瓦器椀（41）は枠内最下部からの出土である。これらの土器の時期は12世紀後半から末頃に比定される。

SE203

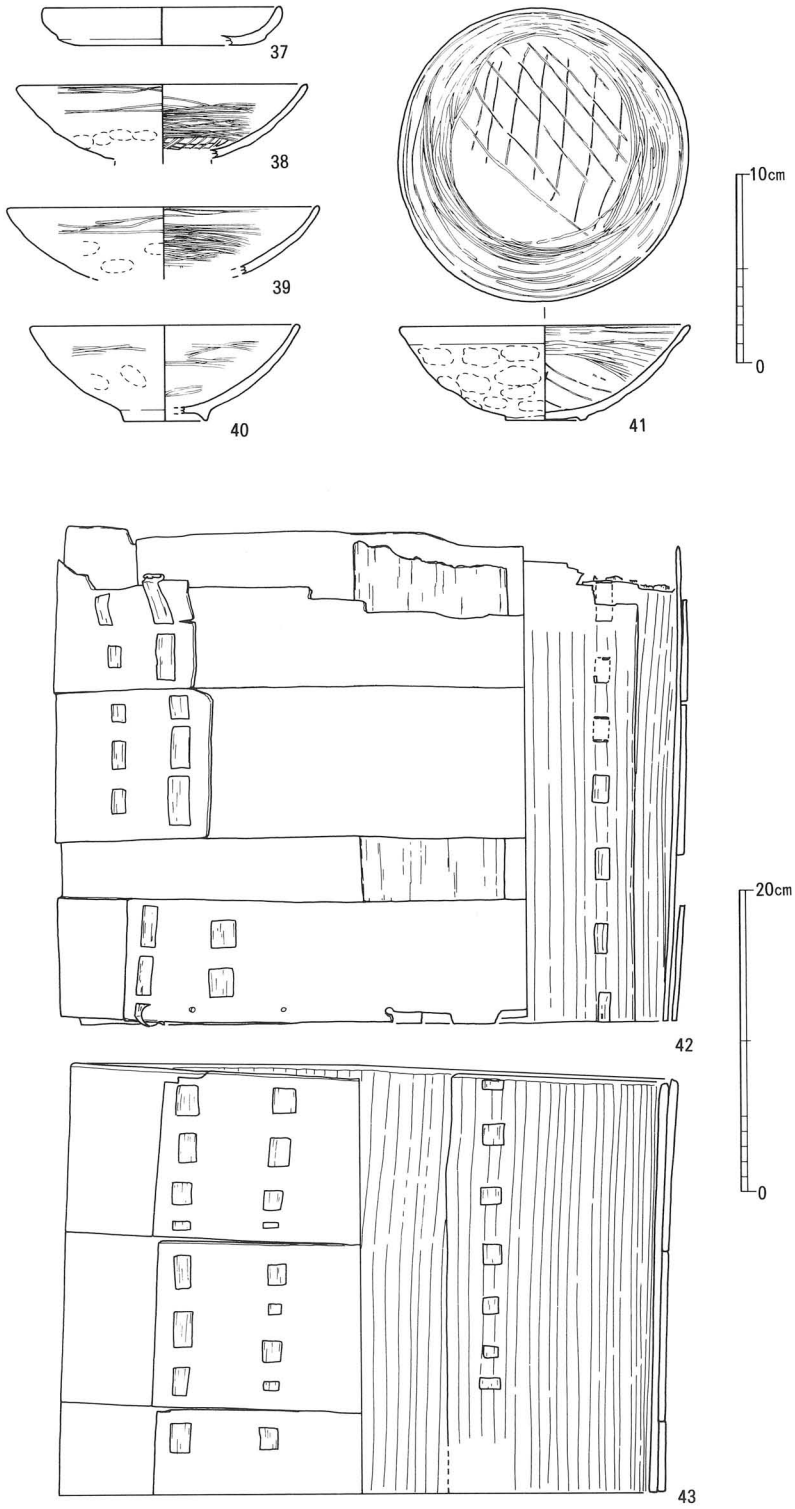
調査区の南西部３～４Ｂ区で検出した。検出面の標高は約9.95ｍである。形状と埋土の様相等から井戸とした。平面形は偏円形で、検出時の規模は径約1.35ｍ×1.55ｍ・深さ約0.7ｍであったが、断ち割りによる南壁断面観察で直径約1.75ｍになることが確認された。埋土は上層が暗灰青色砂礫混じり粘質土、下層が暗灰色砂礫混じり粘質土で、東部には暗褐灰色粗砂～礫混じり粘質土・明灰色細砂～礫の堆積が認められる。断面観察から、何らかの井戸枠施設が存在していた可能性があり、この場合、東部の堆積土が元々の掘方埋土であろう。



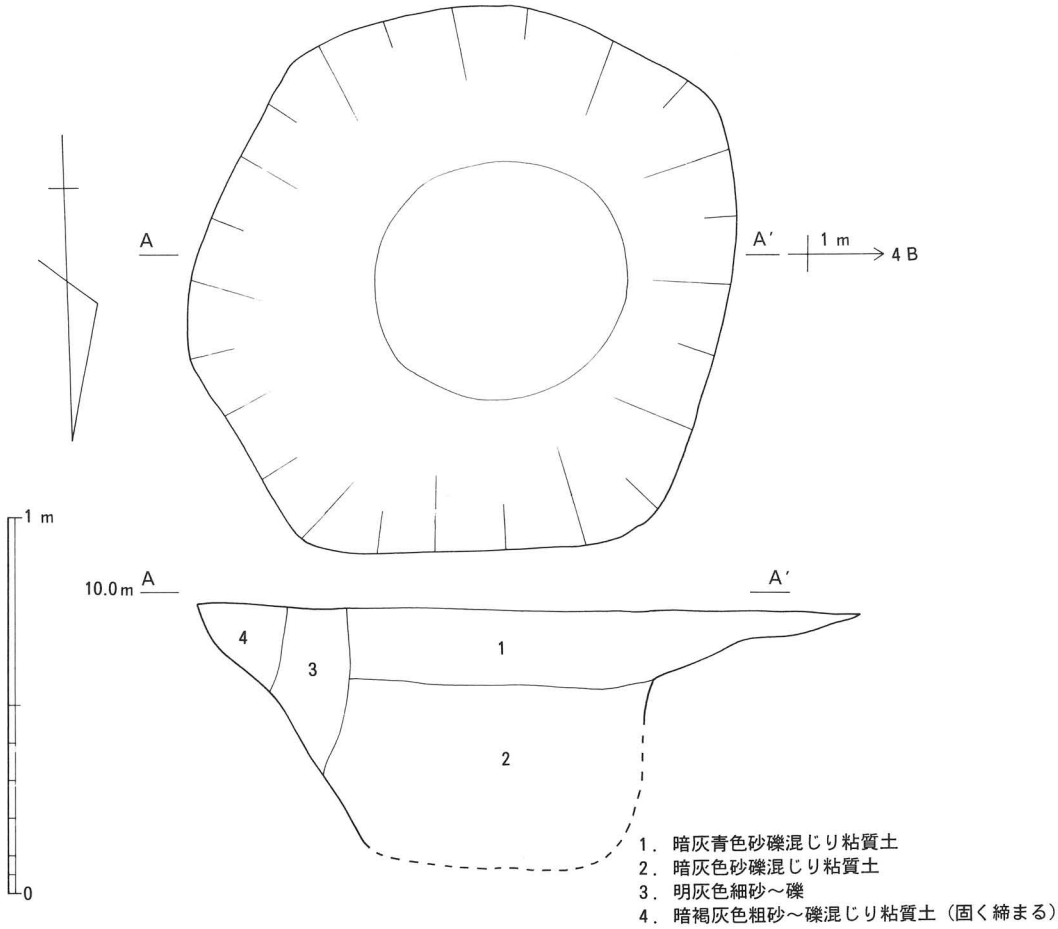
第９図　ＳＥ202平・断面図（Ｓ＝１／20）

なお、壁面崩壊のため出土状況・位置等は不明確であるが、中央部やや西において、検出面から埋土を約20㎝掘り下げたところで立位の竹を検出した。この竹は直径５㎝・長さ約20㎝を測り、節を２か所に残すものである。一端は節部で、他端は斜めに切断されており、こちらを上にしている。また間の節はくり抜かれている。井戸廃絶に際しての祭祀の可能性があり、広島県草戸千軒町遺跡や兵庫県姫路市加茂遺跡に類例がある。[註2]

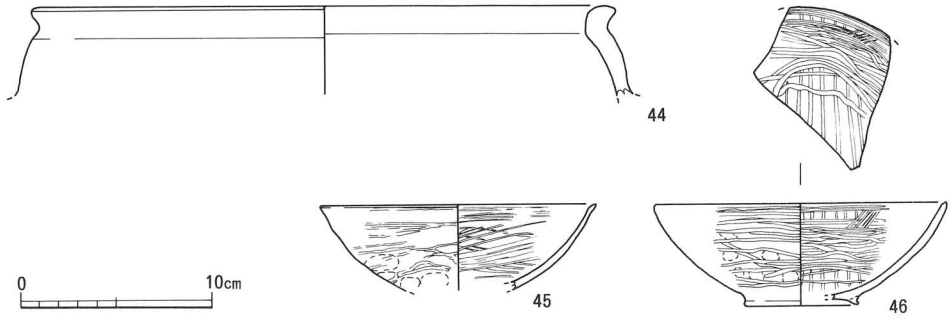
出土遺物には土師器羽釜（44）、瓦器椀（45・46）がある。これらの土器の時期は、12世紀後半に比定される。



第10図　ＳＥ202出土遺物（Ｓ＝１／４、１／５）



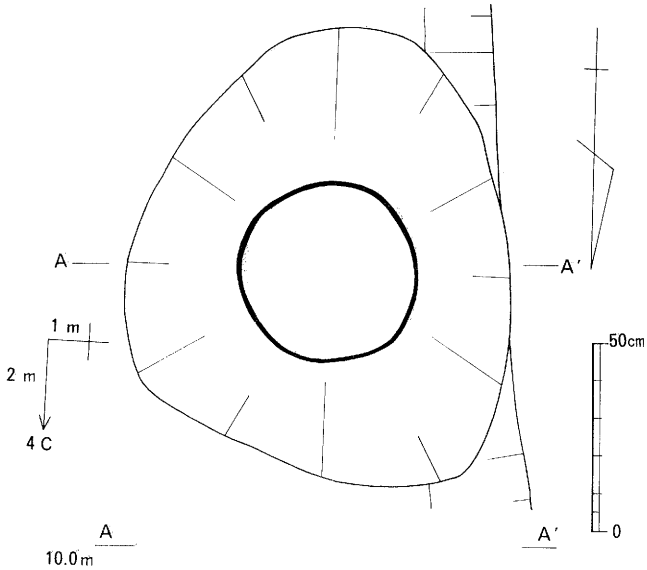
第11図　ＳＥ203平・断面図（Ｓ＝１／20）

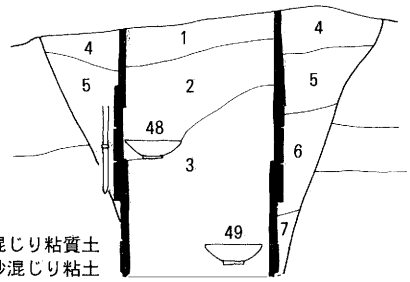


第12図　ＳＥ203出土遺物（Ｓ＝１／４）

SE204

４Ｂ区、SE203の南東約1.4ｍで検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.9ｍである。掘形平面形は偏円形で、規模は約1.2ｍ×1.0ｍ、検出面からの深さは約72㎝である。曲物は掘方のほぼ中央に位置し、直径約40㎝で、下から３段が遺存している。なお出土遺物の土師器羽釜は井戸枠であった可能性がある。曲物の積み方はSE202とは異なり、下のものより径の大きい曲物を上に重ねているようである。また曲物の周囲には立位の竹が巡っている痕跡が認められたが、補強のためであろう。このような類例は八尾市老原遺跡に認められる（当調査研究会第２次調査　SE－３）。[註3]





1．黒灰色砂礫混じり粘質土
2．暗黒灰色粗砂混じり粘土
3．暗黒灰色細砂混じり粘土（ブロック状）
4．暗灰黄色粘土混じり細砂～粗砂
5．灰黄色粗砂～細砂
6．暗灰色粗砂混じり粘土
7．灰色礫混じり粗砂

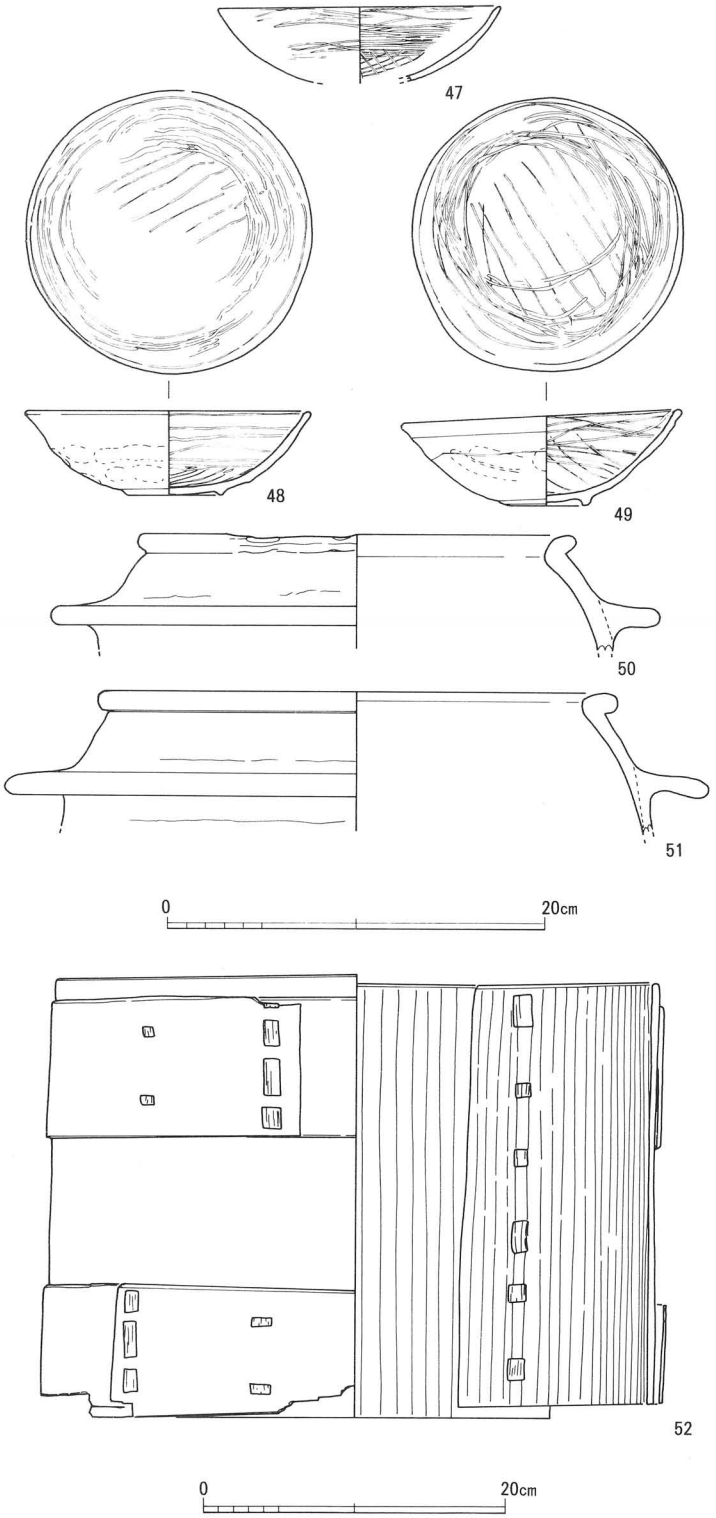
第13図　ＳＥ204平・断面図（Ｓ＝１／20）

掘方埋土は上から暗灰黄色粘土混じり細砂～粗砂、灰黄色粗砂～細砂、暗灰色粗砂混じり粘土、灰色礫混じり粗砂である。枠内埋土は上から黒灰色砂礫混じり粘質土、暗黒灰色粗砂混じり粘土、暗黒灰色細砂混じり粘土（ブロック状）である。

出土遺物には瓦器椀（47～49）、土師器羽釜（50・51）がある。（48・49）は完形品で、48は枠内最下層の上位、49は下位から、それぞれ正位で出土したものである。これらの土器の時期は、12世紀後半から13世紀前半に比定される。

最下段の曲物（52）は二重構造で、外側は上端と下端の二段巻きである。なおこの外側二段の間の外面、つまり外から見える部分に墨書を確認した。文面は以下のとおりである。

「□安二二年カ□□　　□□□□」

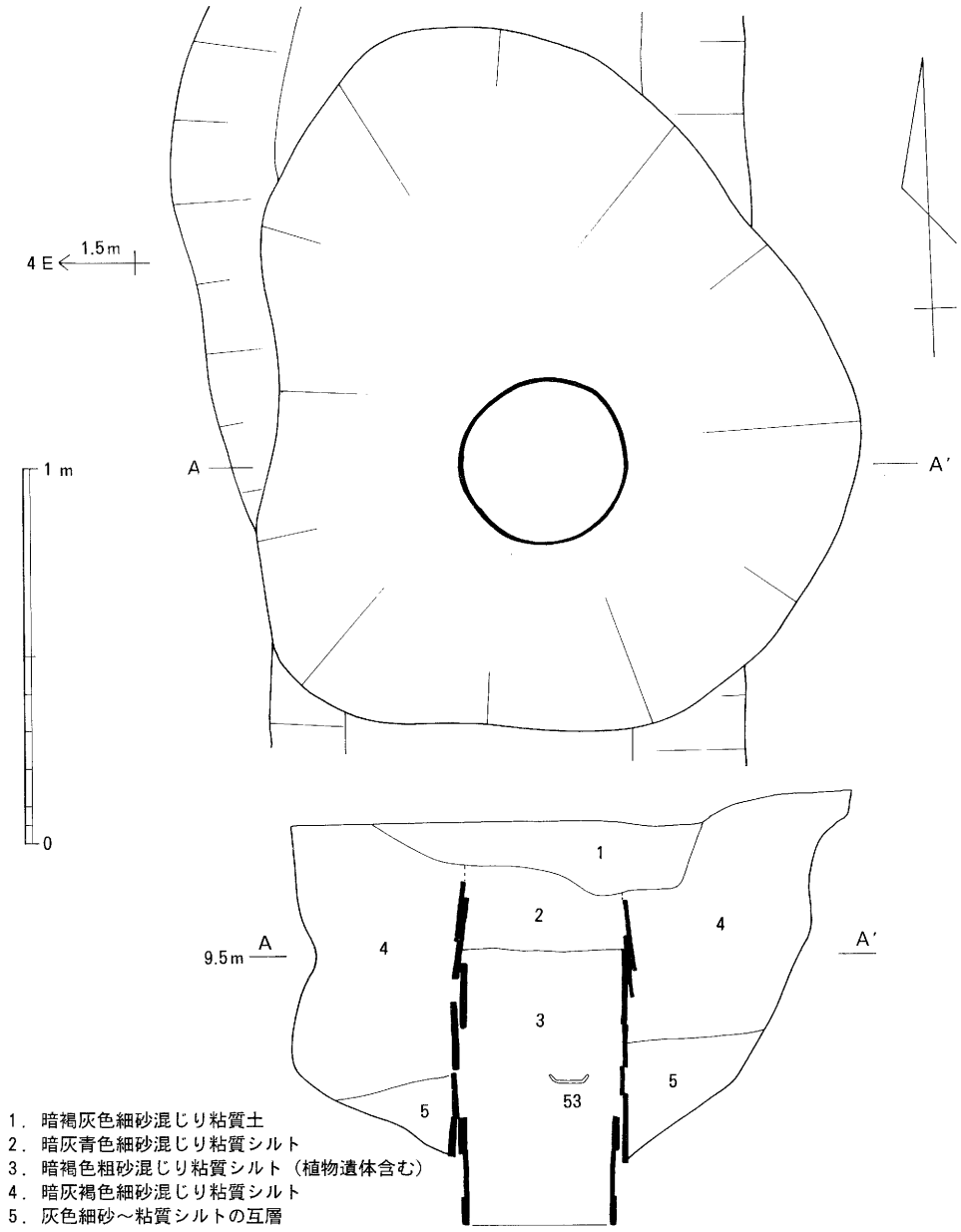


第14図　ＳＥ204出土遺物（Ｓ＝１／４、１／５）

判読しえる部分は少ない。５文字目が「年」ならば、最初の二文字は年号と考えられる。出土遺物の時期を下限とし、また曲物の耐久期間等を考慮して推定される年号は『保安(1120年～1123年)』、『久安（1145年～1150年)』、『仁安（1166年～1168年)』、『承安（1171年～1174)』の四例があげられる。一文字目の偏部分からは『久安』・『承安』の可能性が高い。年号とするならば、続く「二二」については22ではなく４（２＋２、あるいは２×２）の意味ととるのが妥当であろう。また最後の文字は『義』、あるいは花押である可能性もある。[註4]

SE205

調査区の南東部３～４Ｅ区で検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.9ｍで



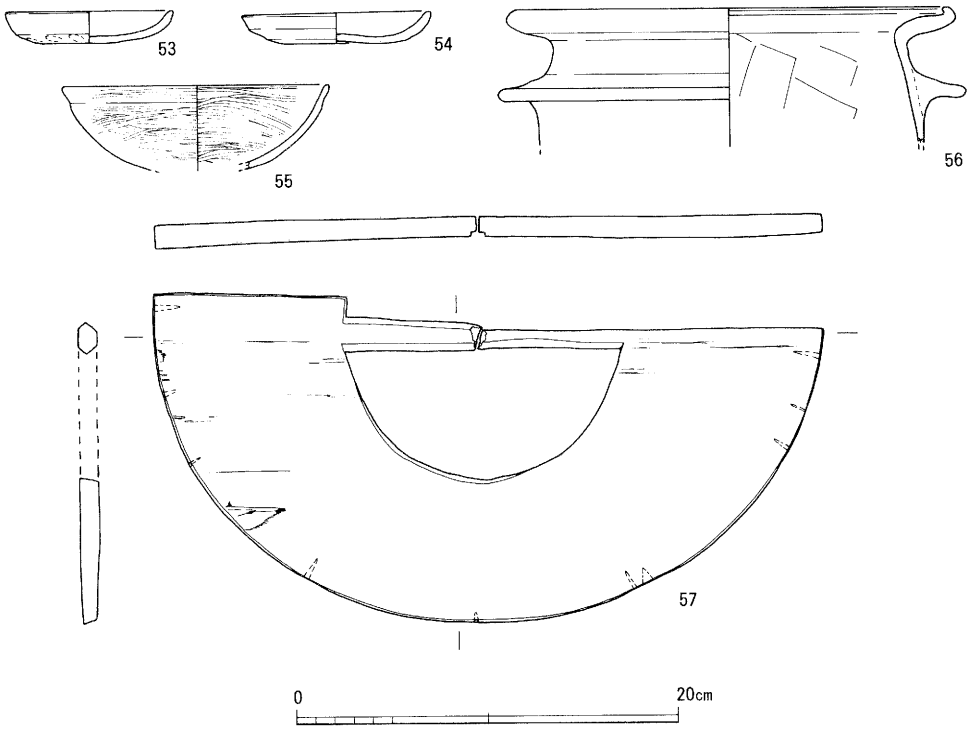
第15図　ＳＥ205平・断面図（Ｓ＝１／20）

ある。掘形平面形は偏円形で、規模は約1.85ｍ×1.6ｍ、検出面からの深さは約1.15ｍである。曲物は直径約40㎝で、下から４段が遺存している。曲物の積み方はSE202と同様で、下から２・４段目が外側になっている。

掘方埋土は上層が暗灰褐色細砂混じり粘質シルト、下層が灰色細砂～粘質シルトの互層であ

る。枠内埋土は上層が暗灰青色細砂混じり粘質シルト、下層が暗褐色粗砂混じり粘質シルト（植物遺体含む）である。

出土遺物には土師器皿（53・54）・羽釜（56）、瓦器椀（55）、木製品（57）がある。土師器皿（54）は完形品で、下から２段目の曲物中位付近の出土である。土師器羽釜（56）は大和Ｃ型式に分類されるものである。（57）は井戸枠の補強に使用されていたものである。曲物の底部の半分と考えられ、周縁には釘穴が認められる。中央にはおそらく一対の半円形の窓を施しており、蒸籠の底部であろうか。これらの時期は12世紀中頃から後半に比定される。[註5]



第16図　ＳＥ205出土遺物（Ｓ＝１／４）

SK201～SK205

SK204・SK205は形状や埋土の状況から井戸である可能性がある。SK203は試掘坑にほとんど削平され、肩の一部を検出したのみであり、全容は不明である。SK205からは土師器皿（61）、瓦器皿（62）、土師器羽釜（63）が出土しており、これらの時期は12世紀後半に比定される。他の土坑からは図化しえる遺物は出土していない。法量等は表２にまとめた。

SK206

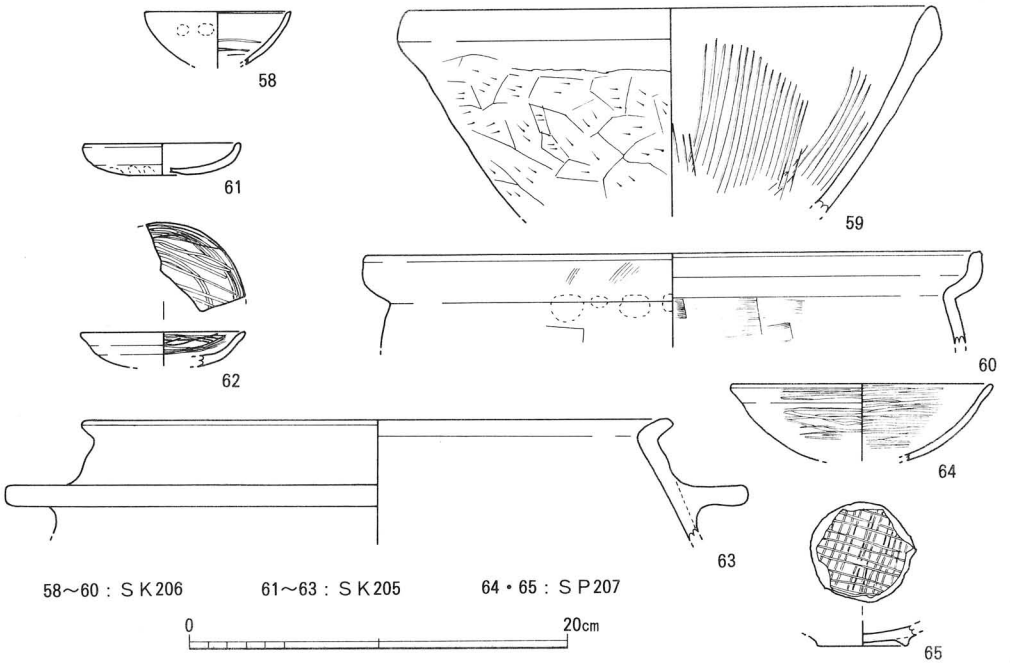
２Ｅ～Ｆ区で検出した土坑で、SD207埋没後に掘られている。東は調査区外に続き、平面形は不明であるが、検出部分は長方形を呈している。規模は105cm×155cm以上・深さ約60cmを測

る。断面逆台形で、埋土は上から淡黄灰褐色粗砂混じり粘土・淡灰褐色粘質シルト・暗灰褐色粘質シルト・暗褐色微砂混じり粘土である。

出土遺物には瓦器椀（58)、瓦器摺鉢（59)、瓦器鍋（60）がある。(60）は山城型鍋Ｂ型に分類され、13世紀代に比定されるものである。(59）の時期は15世紀末頃と考えられ、出土遺物にはやや時期差がある。[註6]

ＳＫ	地区	平面形	短辺×長辺	深さ(cm)	埋土（上から）
201	１Ａ	不定形	40×134	30	暗灰色細砂混じり砂質土 暗灰黄色細砂混じり粘質土
202	１～２Ｂ	不整形	112×168	22	灰褐色粗砂混じり粘質土
203	３Ｃ	不　明	－×50以上	46	暗灰色細砂混じり粘質土
204	１～２Ｄ	偏円形	107×127	58	暗灰色細砂混じり粘土
205	４Ｄ	偏円形	124×152	46	暗灰色細砂混じり粘土

表２　第２次面　土坑法量表



第17図　ＳＫ206・205、ＳＰ207出土遺物（Ｓ＝１／４）

SD201～SD206

ほぼ南北方向に平行して伸びる断面皿状の溝である。検出状況は、ベースが主に砂層ということもあって肩が崩れており、溝というよりは砂の起伏という状態であった。また調査区の中央から西部では、第２次面を覆う第６層がこれらの溝に落ち込んでおり、SD204はこの第６層が埋土となっている。

出土遺物はほとんどが破片であり、かなりの時期幅が認められる。SD206の南端部では土器

溜り状の出土状況がみられた。

各溝の法量等は表3にまとめた。出土遺物、及びその時期は後述のとおりである。

SD	幅	深さ	間　隔（cm）	埋　土
201	242～324	11～26	160～285	暗灰色粗砂混じり粘質土
202	33～ 47	2 ～12	28～ 85	暗灰色粗砂混じり粘質土
203	74～112	4 ～12	290～348	暗灰色粗砂混じり粘質土
204	175～273	9 ～14	12～ 74	灰青色微砂混じり粘土
205	143～390	15～26	22～196	暗褐色粗砂混じり粘土
206	90～141	8 ～11	60～164	暗褐色微砂混じり粘質シルト
207	340	90		（本文参照）

表3　第2次面　溝法量表

・出土遺物

SD201－土師器皿（66・67）、黒色土器椀（68）、瓦器椀（69・70）。〈11C後半～13C後半〉

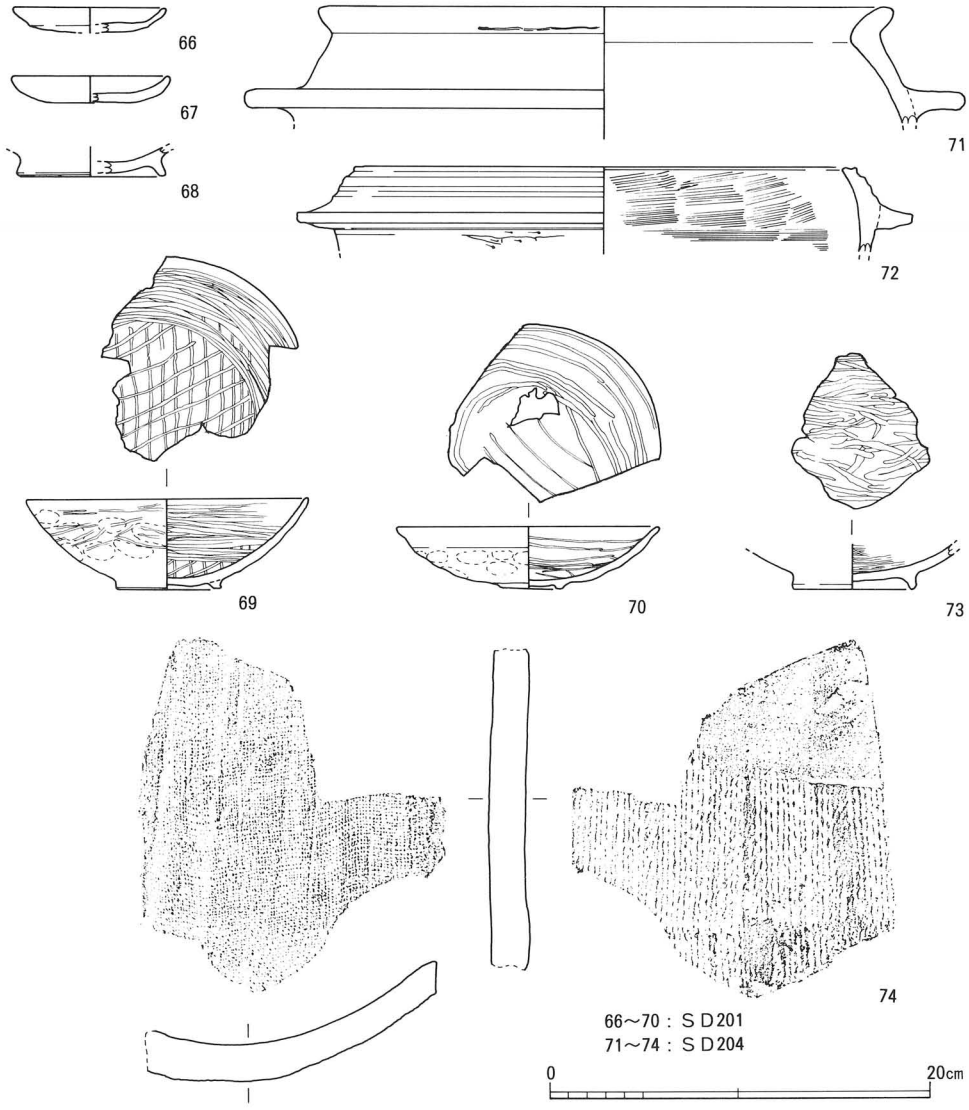
SD204－土師器羽釜（71）、瓦器羽釜（72）・椀（73）、平瓦（74）。〈11C末～15C前半〉

SD205－土師器皿（75～83）・高台付き皿（84）・椀（85）・羽釜（110～114）、瓦器皿（86～89）・椀（90～98）・鉢（99）・甕（115）、中国製青磁（100・101）・白磁（102・103）、人形（104）・木錘（105）、東播系須恵器鉢（106～109）、常滑焼甕（116）、丸瓦（117）・平瓦（118）。〈12C前半～14C末〉

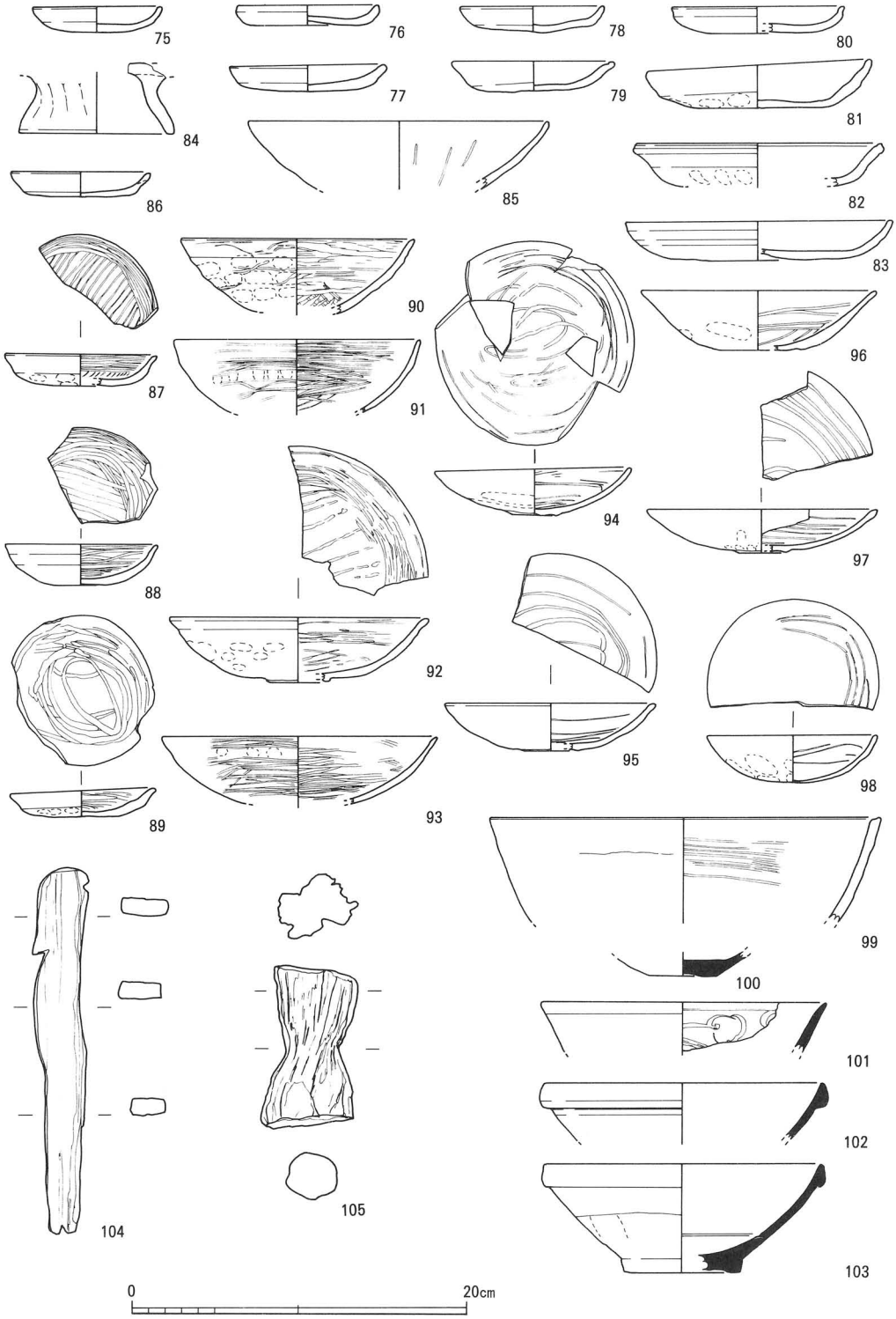
SD206－土師器皿（119～134、138～143）・高杯（152）・高台付き皿（153）・羽釜（160）、瓦器皿（135～137）・椀（144～149）・鉢（150・151）・三足釜（157～159）、陶器鉢（154）、中国製青磁（155）・白磁（156）、東播系須恵器鉢（161～162）・甕（163）、下駄（164）。〈12C代～13C後半〉

SD205出土の人形（104）は、厚さ約1.0cmの板を切り抜いたもので、下部は欠損し、残存長22.2cmを測る。側面全身人形に分類されるものである。顎は深く切り込みをいれて尖らせ、尻は浅く切り欠いて表現している。鼻・口等の顔の表現はない。後頭部上位の切り込みは被りものの表現と思われる。人形は八尾市域では初めての出土である。また共伴遺物は12世紀前半～14世紀末に比定され、人形としては新しい例の一つであろう。土師器羽釜（113）は大和D型式に分類されるものである。

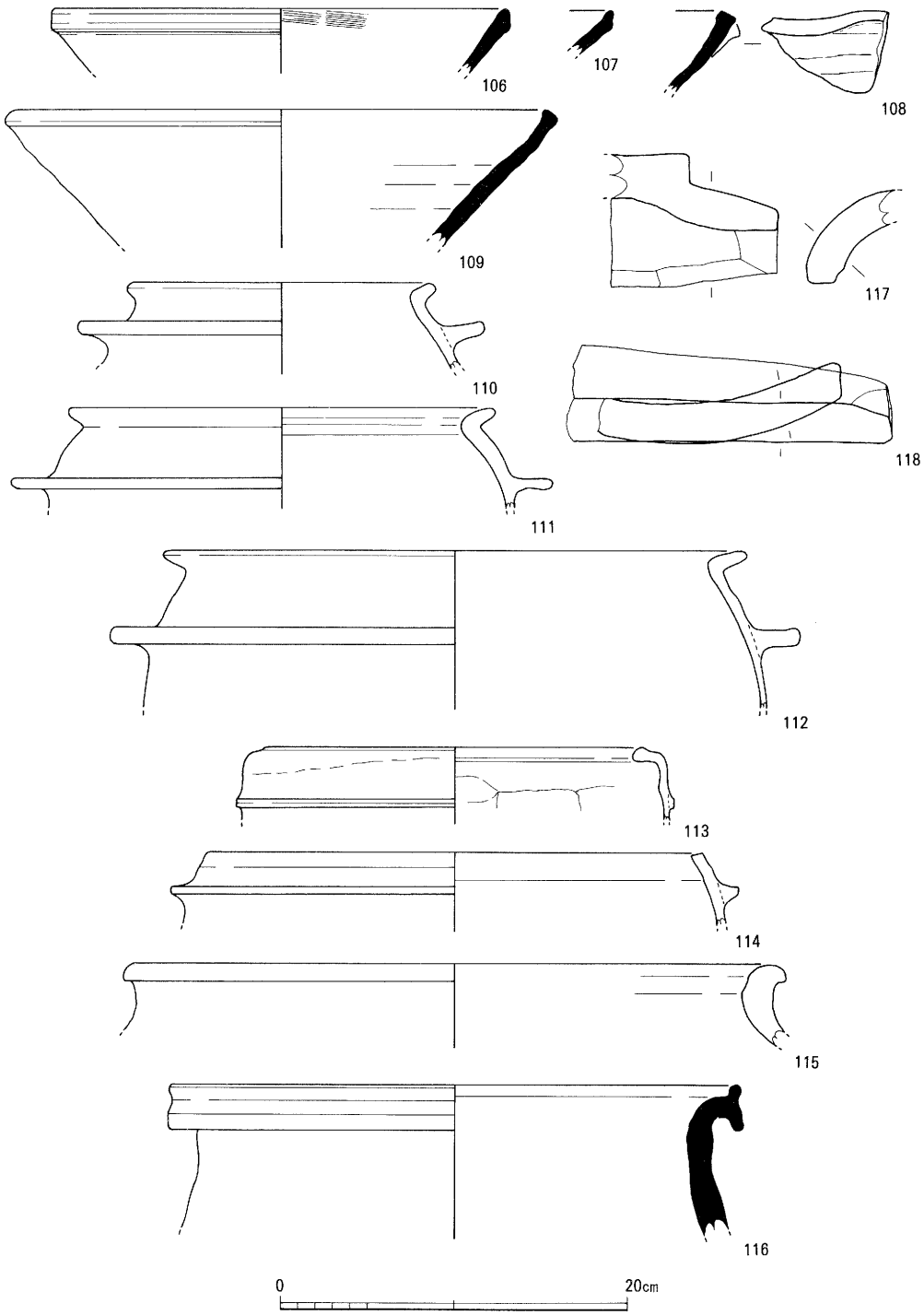
SD206出土の陶器鉢（154）[註7]は、貼り付け高台を有し、胎土中には砂粒を多く含むものである。常滑等の東海地方の窯産の可能性が高い。下駄（164）は平面小判形で、法量は長さ17.0cm・幅9.5cm・高さ2.9cmを測る。台と歯を一木から作る連歯下駄に分類される。前壷は後壷に比して小さく、中央に位置する。台上面には足裏による摩滅痕があり、後歯や台後部裏はかなり磨り減っている。



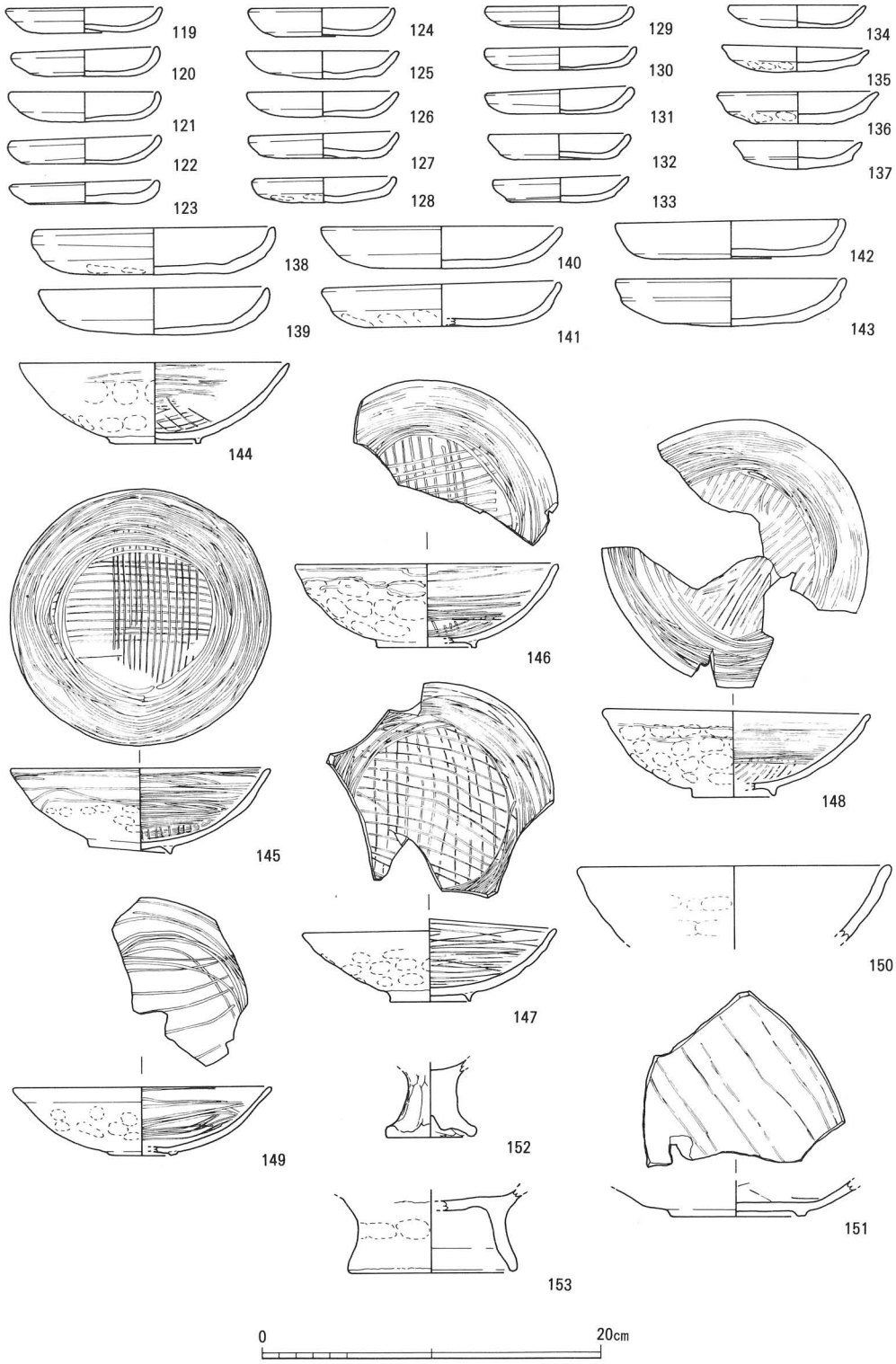
第18図　ＳＤ201・204出土遺物（Ｓ＝１／４）



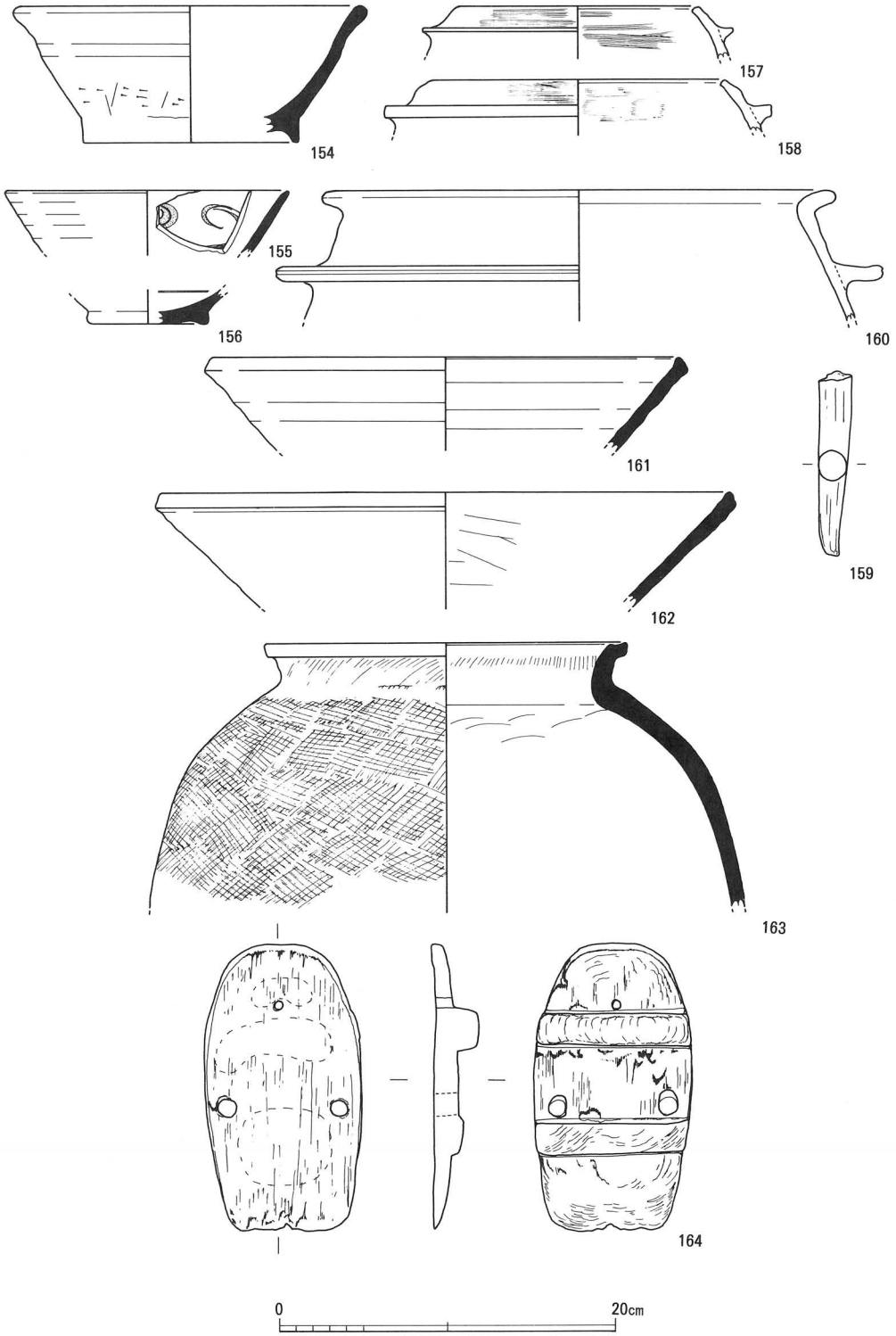
第19図　ＳＤ205出土遺物①（Ｓ＝１／４）



第20図　ＳＤ205出土遺物②（Ｓ＝１／４）



第21図　ＳＤ206出土遺物①（Ｓ＝１／４）



第22図　ＳＤ206出土遺物②（Ｓ＝１／４）

SD207

調査区の東端で検出したほぼ南北方向の溝である。規模は幅約3.4m・深さ約0.9mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は大まかにみて上層が暗灰青色粗砂混じり粘質土、中層が淡褐色微砂混じり粘質シルト、下層が暗灰色粗砂混じり粘質土で、中層には多量の植物遺体が含まれている。埋土の状況から滞水状態にあったことが窺える。

当溝には橋が架けられていたようで、溝の西肩に2基、中央に1基、計3基の折り取られた橋脚（P1～P3）が遺存していた（187～189）。橋脚間の距離は東西約2.3mで、橋幅は親柱にあたるP2・P3間の内寸から約90cmと想定できる。P1は溝中央付近にあたると考えられ、溝底部に約80cmが打ち込まれている。P2・P3には掘形があり、規模はP2－98cm×70cm・深さ42cm、P3－83cm×61cm・深さ42cmを測る。橋脚には直径約12cmの木材が使用され、下端部は尖らせ、上端部には鋸痕が認められる。この鋸痕が加工痕か、あるいは折り取る際のものかは不明である。P1は他より丁寧な作りで、表面は六角形に面取りされ、また規則的な手斧痕を残している。これらの処理を装飾と考えると、P1は見えることを前提として作られた橋脚であることが窺えよう。なお第2次面上面では、P2の北約4m地点でもこれらと同様の木材を検出している。P1付近の上層、溝底部から約60cm上からは約70cm×45cmを測る巨石が出土しており、礎石であった可能性がある。

P1（187）－残存長152.9cm・直径12.5cm。断面六角形。

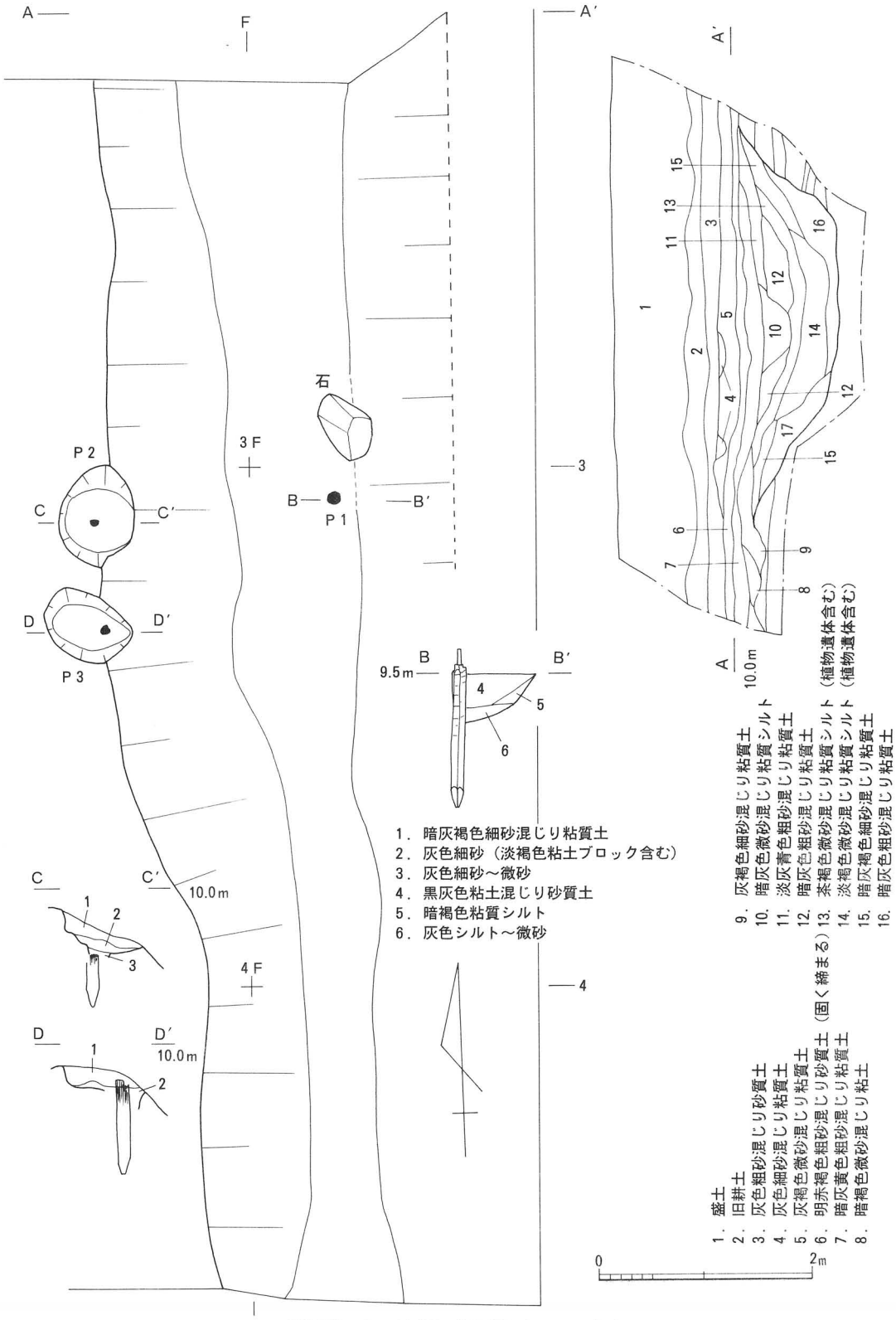
P2（188）－残存長 52.3cm・直径11.4cm。断面丸みを帯びた六角形。

P3（189）－残存長 92.3cm・直径11.7cm。断面丸みを帯びた六角形。

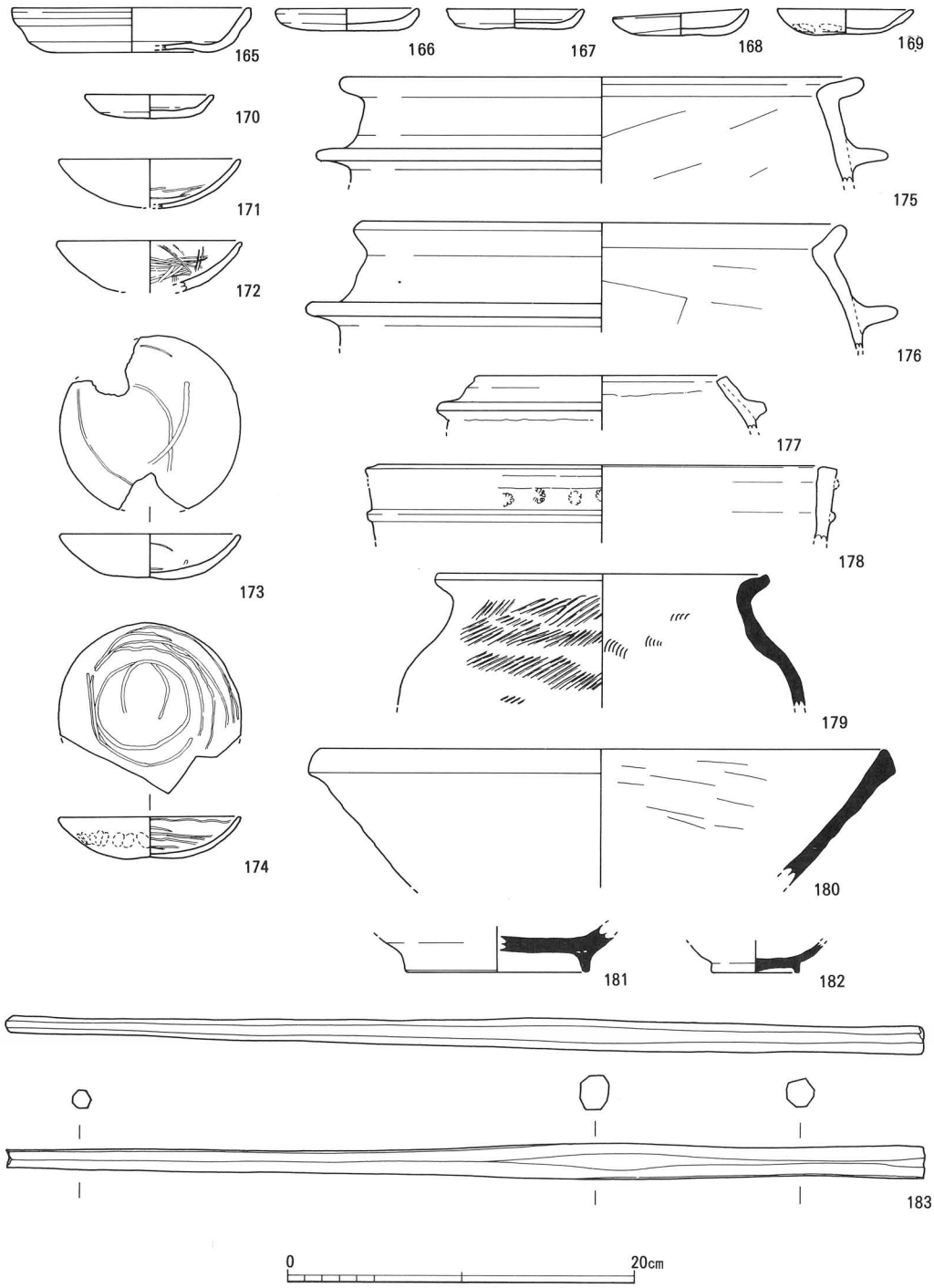
出土遺物には土師器皿（165～170）・羽釜（175・176）、瓦器椀（171～174）・三足釜（177）・火鉢（178）、東播系須恵器甕（179）・鉢（180）、不明陶器（181）、中国製白磁（182）、棒状木製品（183）、瓦質不明製品（184）、瓦（185・186）がある。時期は12世紀後半から14世紀末に比定されるものである。瓦器椀は高台の消失した最終形態のものである。（183）は長さ53.3cmを測り、全体が六角形・八角形に面取りされた精製品である。細い方の端部には切り込みがある。（184）は高さ37.8cmを測り、裏面には藁？の痕跡が明瞭に遺存し、土壁に貼り付けていたような状況である。また部分的に炭が付着している。形状とこれらのことを考え合わせると、かまどの焚き口部分である可能性がある。軒平瓦（185）は顎が欠損しているが、瓦当の文様は連珠文が確認できる。

SP201～SP232

調査区南西部3～4A区のSP205・210・212は、約1.7m間隔でほぼ南北方向に並び、掘立柱建物を構成する柱穴である可能性がある。3～4D区のSP229・230・231は約2.0m間隔でSD204の西肩に並んでおり、何らかの関連が考えられる。これら以外のピットには関連性は見

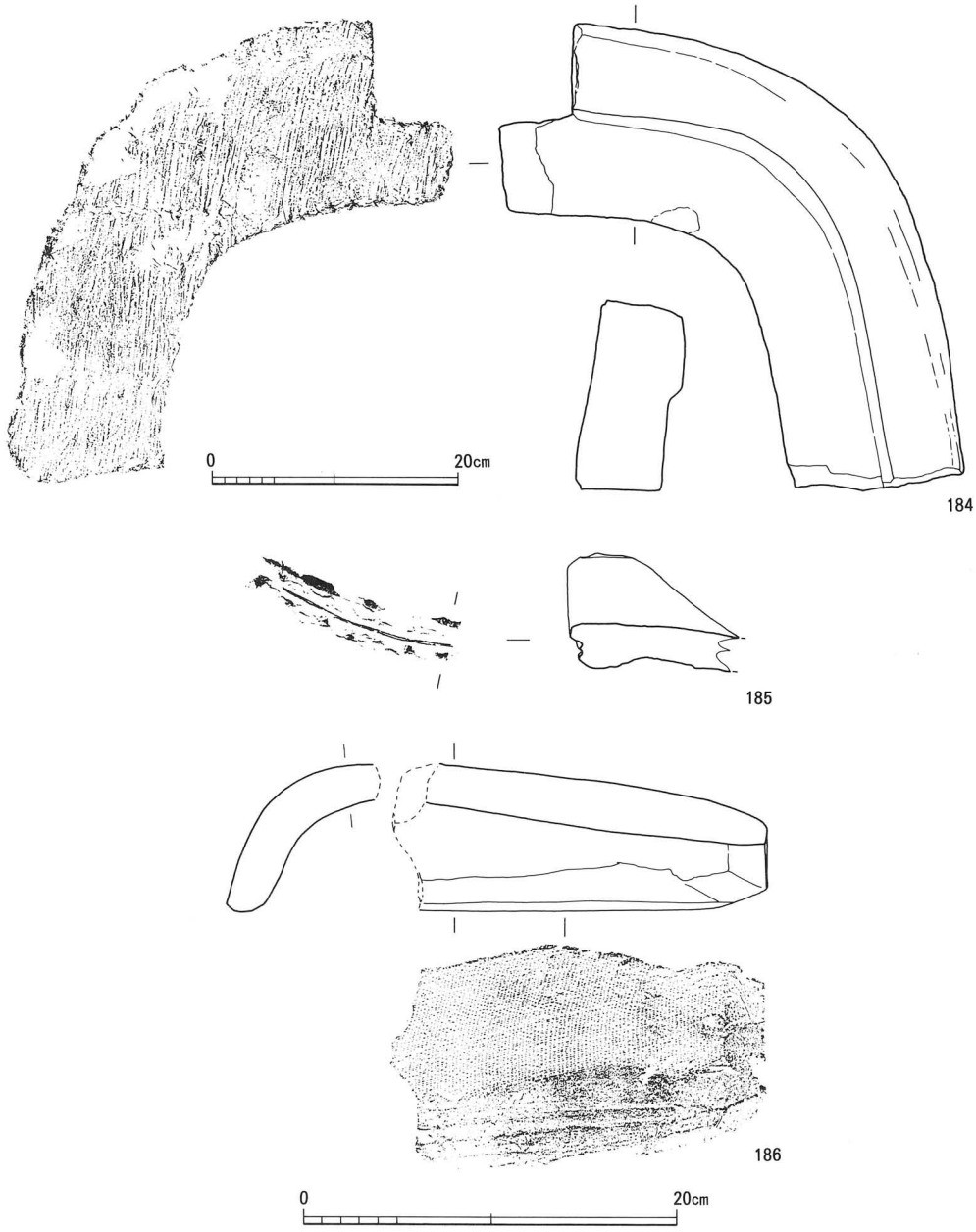


第23図　ＳＤ207平・断面図（Ｓ＝１／60）

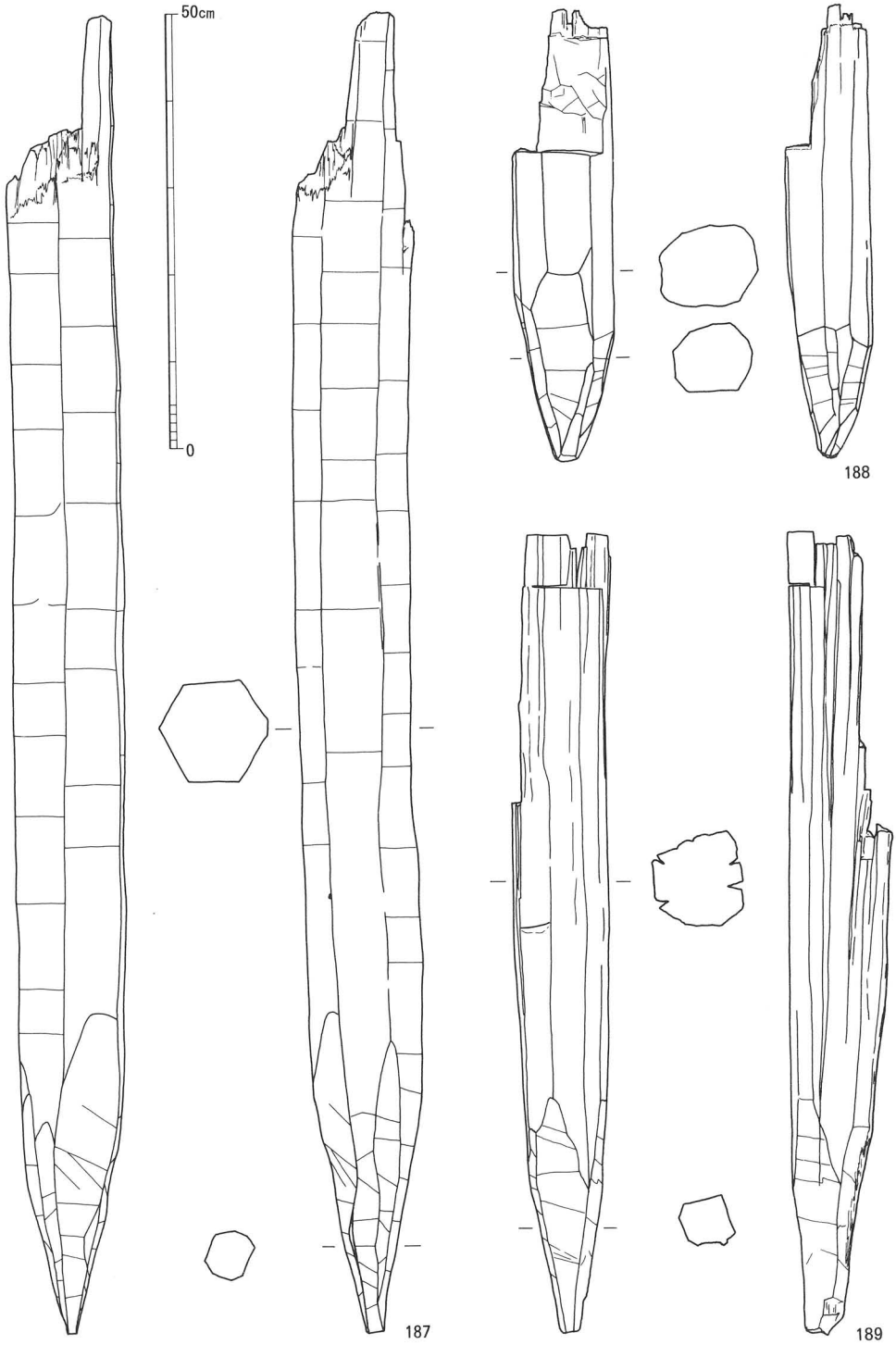


第24図　ＳＤ207出土遺物①（Ｓ＝１／４）

いだせないが、分布は調査区西部ほど密といえる。なおSP217・220～224はSD201の底部、SP232はSD205の底部で検出された。SP207から12世紀後半に比定される瓦器椀（64・65）が出土しているが、他のピットからは図化しえる遺物は出土していない。法量等は表４にまとめた。



第25図　ＳＤ207出土遺物②（Ｓ＝１／６、１／４）



第26図　ＳＤ207出土遺物③（Ｓ＝１／８）

ＳＰ	地区	平面形	径	深さ(cm)	埋土（上から）
201	１Ａ	偏円形	24×55	14	明褐色細砂
202	２Ａ	偏円形	35×44	10	灰色細砂混じり粘質土
203	２Ａ	偏円形	78×90	12	灰色細砂混じり粘質土
204	２Ａ	偏円形	46×55	6	褐灰色粗砂
205	３Ａ	方　形	39×47	13	灰褐色細砂混じり粘質土
206	３Ａ	不定形	25×35	4	灰褐色細砂混じり粘質土
207	３Ａ	偏円形	48×57	17	灰褐色粘質土・灰褐色細砂混じり粘質土
208	３Ａ	楕円形	22×29	10	灰褐色粘質土
209	３Ａ	長円形	14×31	10	灰褐色粘質土
210	３～４Ａ	不整形	52以上×72	20	淡灰色細砂混じり砂質土
211	３～４Ａ	不定形	40×52	14	灰褐色粘質土・灰褐色細砂混じり粘質土
212	４Ａ	円　形	43×53	14	明褐色細砂
213	４Ａ	円　形	44×46	14	明褐色細砂
214	３Ｂ	偏円形	32×37	15	暗灰黄色粗砂混じり粘質土
215	１Ｂ	不整形	46×57	7	灰褐色粗砂混じり粘質土
216	１Ｂ	不整形	43×48	9	灰褐色粗砂混じり粘質土
217	１～２Ｂ	偏円形	22×24	17	灰褐色粘土混じり粗砂
218	２Ｂ	偏円形	54×60	10	灰褐色粗砂混じり粘質土
219	２Ｂ	偏円形	61×84	10	灰褐色粗砂混じり粘質土
220	３Ｂ	不　明	40以上×75	5	暗灰黄色粗砂混じり粘質土
221	３Ｂ	楕円形	21×29	7	暗灰色細砂混じり粘土
222	３Ｂ	円　形	43×47	12	暗灰色細砂混じり粘土
223	４Ｂ	偏円形	31×39	12	暗灰色粗砂混じり粘質土
224	４Ｂ	偏円形	45×52	18	暗灰色粗砂混じり粘質土
225	１Ｃ	不　明	35×50以上	15	灰褐色粗砂混じり粘質土
226	１Ｃ	円　形	37×39	6	灰褐色粗砂混じり粘質土
227	３Ｃ	偏円形	43×50	7	灰褐色粗砂混じり粘質土
228	３Ｂ～Ｃ	偏円形	55×57	13	灰褐色粗砂混じり粘質土
229	３Ｄ	円　形	40×43	9	暗灰色細砂混じり粘質土
230	３Ｄ	円　形	34×40	13	暗灰色細砂混じり粘質土
231	４Ｄ	円　形	45×54	17	暗灰色細砂混じり粘質土
232	３～４Ｄ	偏円形	68×84	29	暗褐灰色細砂混じり粘土

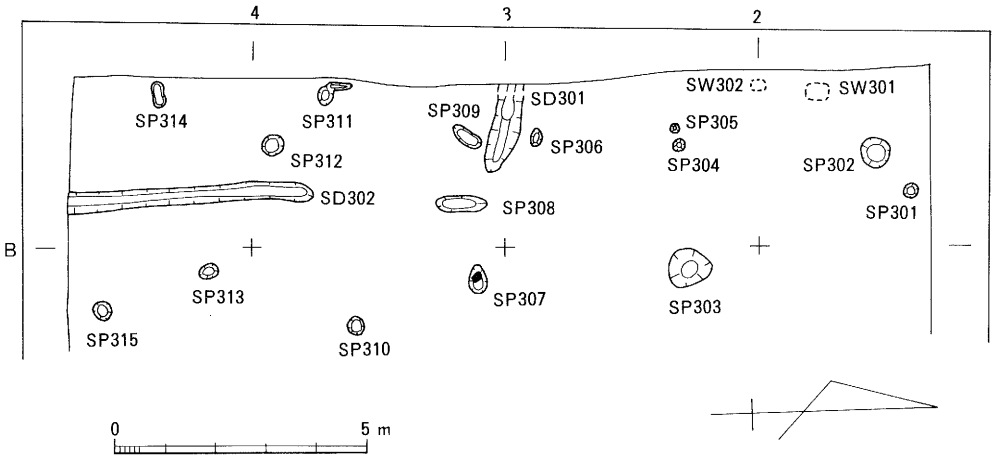
表４　第２次面　ピット法量表

〈第３次面〉

西区西部の整地面下で溝２条（SD301・302）・ピット15個（SP301～315）・土師器皿の集積２か所（SW301・302）を検出した。

SD301・302

SD301は東西方向（幅50～60cm・深さ18～22cm）、SD302は南北方向（幅33～45cm・深さ12～22cm）の溝で、埋土は暗灰色粗砂混じり粘土である。ピットとしたSP308は、その形状からSD302に連続すると考えられ、このことから両溝は直角に屈曲する溝であった可能性がある。SD302上層部からは、11世紀末から12世紀初頭に比定される瓦器椀（190）が出土している。



第27図　第３次面平面図（Ｓ＝１／150）

SP301～315

これらのピットの位置等からは関連性は認められない。SP307には根石が遺存している。法量等は表５にまとめた。

ＳＰ	地区	平面形	径	深さ(cm)	埋土	遺物
301	１Ａ	円　形	30×28	7	灰黒色粗砂混じり粘質シルト	
302	１Ａ	偏円形	59×55	18	暗灰青色粗砂混じり粘質シルト	
303	２Ｂ	偏円形	84×73	18	暗灰青色粗砂混じり粘質シルト	
304	２Ａ	円　形	26×24	7	灰黒色粗砂混じり粘質シルト	191
305	２Ａ	円　形	18×17	5	灰黒色粗砂混じり粘質シルト	
306	２Ａ	楕円形	36×22	16	暗灰色粘土混じり粗砂	
307	３Ｂ	楕円形	60×34	3	暗灰色粘土混じり粗砂	（根石）
308	３Ａ	長円形	96×32	8	暗灰色粘土混じり粗砂	
309	３Ａ	長円形	64×27	3	暗灰色粘土混じり粗砂	
310	３Ｂ	円　形	37×34	10	暗灰色粘土混じり粗砂	
311	３Ａ	不定形	50×16	17	暗灰色粘土混じり粗砂	
312	３Ａ	円　形	46×43	21	暗灰色粗砂混じり粘土	
313	４Ｂ	楕円形	38×28	16	暗灰色粗砂混じり粘土	192
314	４Ａ	長円形	53×20	16	暗灰色粗砂混じり粘土	
315	４Ｂ	円　形	38×36	13	暗灰色粗砂混じり粘土	

表５　第３次面　ピット法量表

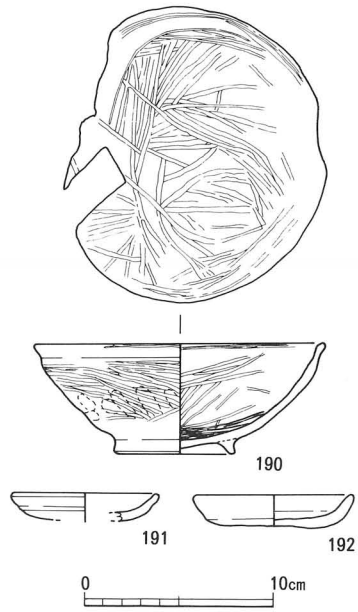
SW301

調査区の北西角の整地面下で検出した土師器皿の集積である。掘形は無く、南北約76㎝・東西約48㎝の範囲に拡がっている。構造は上部と下部に分かれ、上部に小皿48枚（193～240）以上、下部に大皿12枚（241～252）の計60枚以上で構成され、厚さは約15㎝を測る。上部の小皿は主に正位、下部の大皿は主に逆位であった。

小皿は口縁部の形態から２種類（Ⅰ類・Ⅱ類）に、また色調では大皿も含めて３種類（Ａ～Ｂ）に、次のように分類できる。

・形態
- Ⅰ類：いわゆる「て」の字状口縁皿の系譜上に位置付けられるもの。
- Ⅱ類：直線的、または外反気味な口縁のもの。

・色調
- Ａ　：淡茶灰色系。
- Ｂ　：乳白色系で、部分的に赤味を帯びるものもある。
- Ｃ　：灰白色～灰黄色系。



第28図　ＳＤ302、ＳＰ304・313
出土遺物（Ｓ＝１／４）

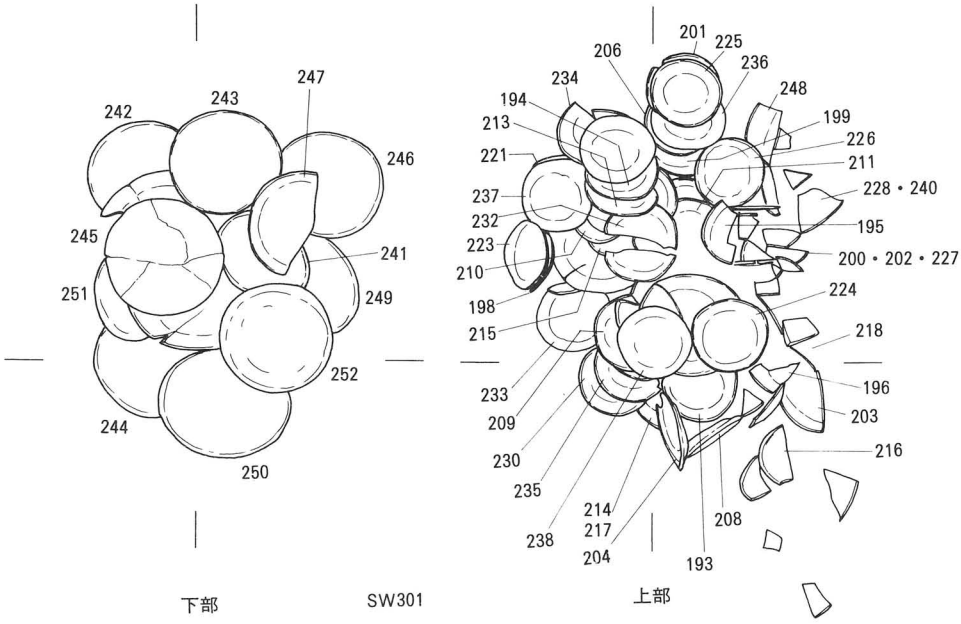
形態では、小皿のうち60％近くの28枚（193～220）がⅠ類である。色調では、Ⅰ類においてはＡが１点のみで、他はＢである。Ｂの部分的な赤味は焼きむらと考えられ、Ⅰ類のほとんどがこのＢであり、これらは一括して焼成されたものであろう。Ⅱ類ではＡが75％を占め、Ｂは無い。大皿では逆にＡの割合が少なく25％となっている。

小皿はいずれも口縁部ヨコナデ、底部はナデで指頭圧痕が遺存するという技法である。ただⅡ類の口縁部はヨコナデの強さにより、外反するものと直線的なものがみられる。また底部と口縁部との境は、稜を成すものと不明瞭なものがある。これらは明確には区別しえないもので、個体差の範囲で捉えられるものと思われ、分類はしなかった。ただⅡＣ類の多くが底部と口縁部との境の不明瞭なものである。

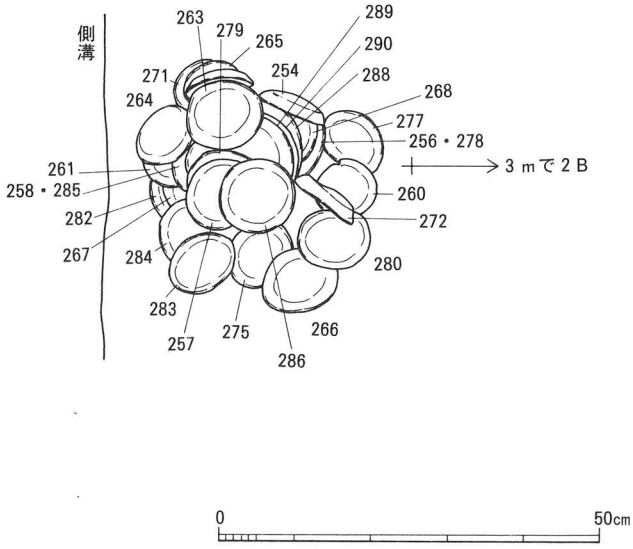
法量はⅠ類とⅡ類にはほとんど差は無く、口径9.0㎝～10.3㎝で、平均値は9.6㎝となる。

大皿は口縁部ヨコナデ、底部ナデで、底部外面には指頭痕が遺存する。法量は、口径14.8㎝～16.1㎝で、平均値は15.3㎝となる。

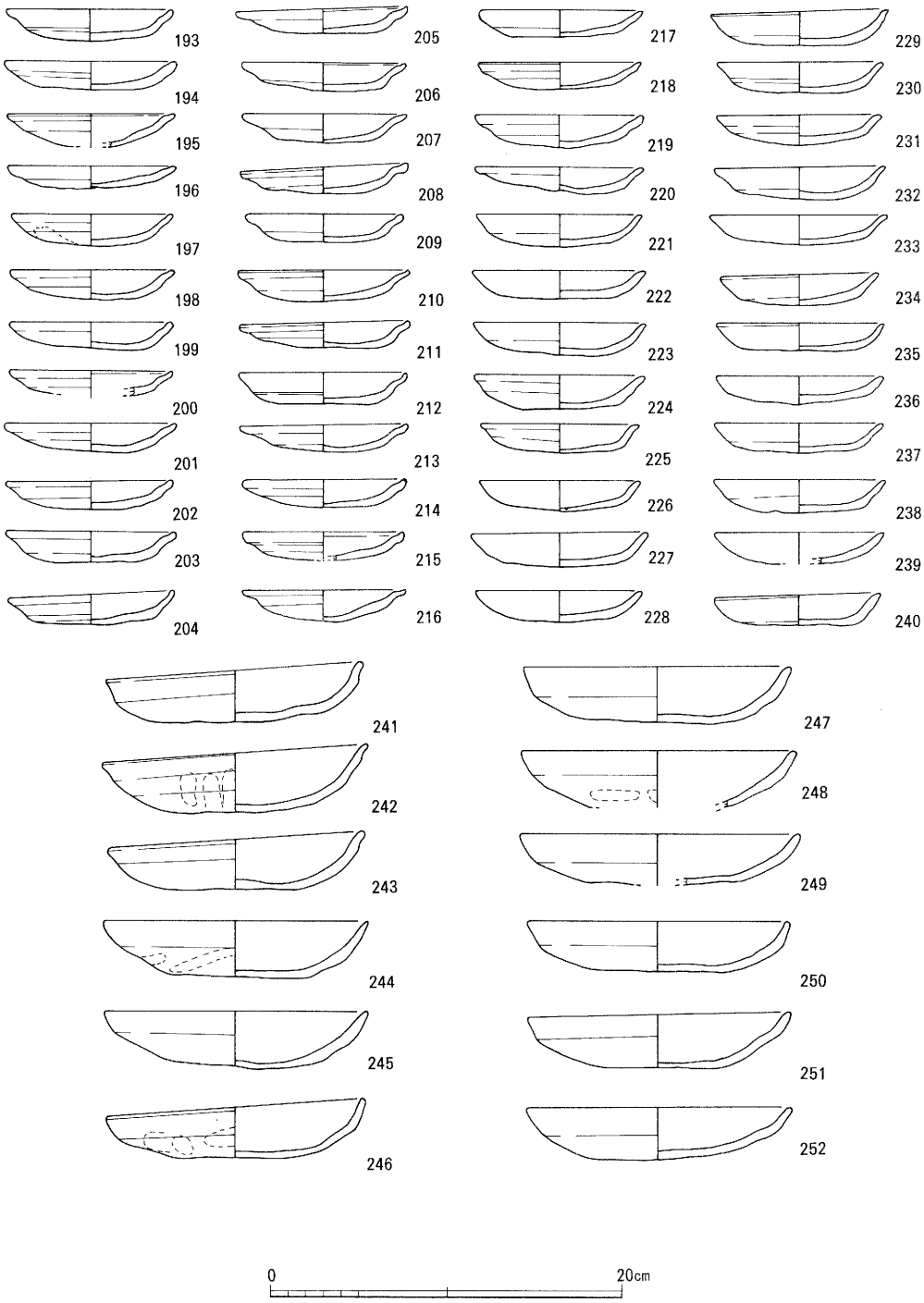
皿の規格・形態・色調による分類は表６にまとめた。なお第３章での個々の観察表は省略した。



SW302



第29図　ＳＷ301・302平面図（Ｓ＝１／10）



第30図　ＳＷ301出土遺物（Ｓ＝１／４）

		法量・形態				
		小皿			大皿	計
		Ⅰ類	Ⅱ類	計		
色調	A	1（ 193 ）	15（221～235）	16	3（241～243）	19
	B	27（194～220）	－	27	－	27
	C	－	5（236～240）	5	9（244～252）	14
	計	28	20	48	12	60

表６　ＳＷ301出土土師器皿分類表

SW302

SW301の南約0.8ｍに位置し、南北約34㎝・東西約33㎝の範囲に拡がる。SW301と同じ構造で、上部に小皿35枚（253～287）、下部に大皿３枚（288～290）の計38枚で構成され、正位に大皿３枚を重ね、その周囲と上部を覆うように小皿が積まれている。厚さは約15㎝を測る。上部の小皿は主に正位であるが、横位に立てられているものもある。

皿の規格・形態・色調からSW301と同様の分類が可能であり、表７にまとめた。なお第３章での個々の観察表は省略した。

形態的に注目されることは、小皿においてはSW301と異なりⅠ類が一点も含まれていない。また色調ではＢが無く、ＡとＣでは逆にＣの占める割合が多くなり60％程度となっている。両遺構を合わせてＢはⅠ類固有の色調といえる。大皿はＡのみである。

調整技法においては、小皿・大皿ともにSW301のものとほぼ同様であるが、大皿の口縁部のヨコナデがいずれも二段である。

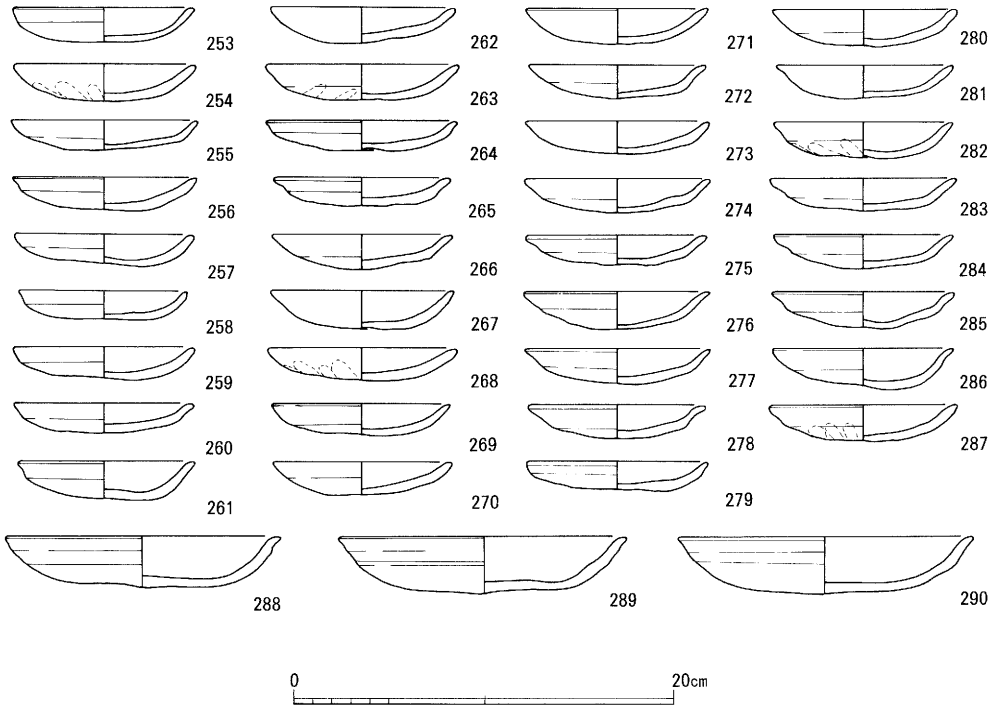
法量は小皿が口径9.1㎝～10.25㎝で、平均値は9.7㎝、大皿が口径14.75㎝～15.6㎝で、平均値は15.2㎝となる。

		法量・形態				
		小皿			大皿	計
		Ⅰ類	Ⅱ類	計		
色調	A	－	13（253～265）	13	3（288～290）	16
	B	－	－	－	－	－
	C	－	22（266～287）	22	－	22
	計	－	35	35	3	38

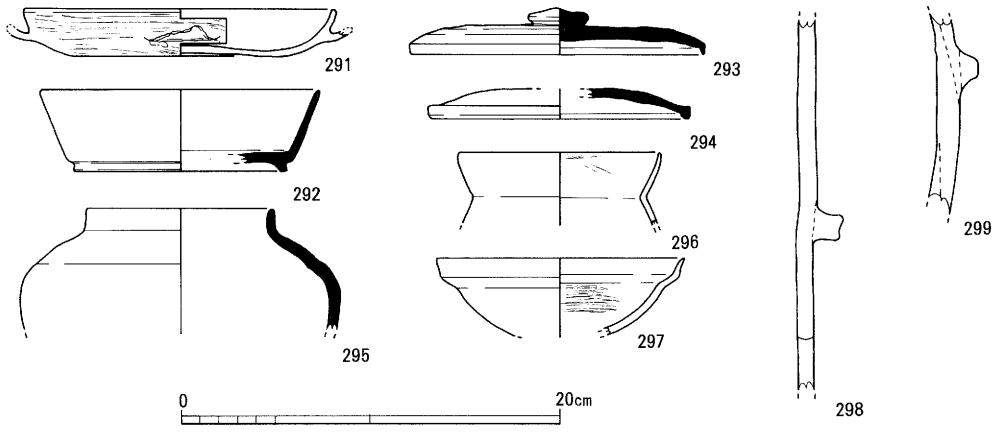
表７　ＳＷ302出土土師器皿分類表

SW301との関係であるが、小皿Ⅰ類が含まれていないこと等、皿の構成比率に違いはあるものの、層位的にも、また同様の構造であることからも同時に構築されたものであろう。

SW301・302の土器の時期は、11世紀末から12世紀初頭と考えられる。遺構の性格としては整地にともなう地鎮の可能性がある。八尾市域での類例として、跡部遺跡第２次調査において、土師器小皿を一括埋納した12世紀頃のピットが検出されている。[註8]



第31図　ＳＷ302出土遺物（Ｓ＝１／４）



第32図　第８層出土遺物（Ｓ＝１／４）

〈下層出土遺物〉

第8層の砂層からは、弥生時代後期から奈良時代までの遺物が出土している。土師器杯（291）は、口縁部外面横方向、底部外面一定方向の密なヘラミガキを施す。二方向あるいは三方向に三角形把手を付し、杯としては特異な形状のものである。8世紀初頭、平城Ⅱの段階に比定される平城京左京三条二坊七・八坪長屋王邸宅跡SD4750の出土遺物に類例が認められる。註9 須恵器（292～295）も同時期に比定されるものであろう。円筒埴輪（298）は横断面の円弧の形状から、楕円筒埴輪の可能性がある。（299）は形象埴輪で、突帯が屈曲するようである。

第3章　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm)（復元値） 口径 器高	色調 外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
1	瓦器 皿	2～3A 第3層	8.5 1.7	灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。内面一重の圏線状暗文。	ほぼ完形
2 十一	青花 碗	2C 第3層	高台径　(5.3) 高台高　0.9	乳青灰色	密	良好	饅頭心碗。高台内に銘款－『□明□□年製』。	底部1／4 反転
3	伊万里 碗	2C 第3層	高台径　(5.4) 高台高　1.0	乳灰青色	密	良好	網目文。	1／3 反転
4 十一	青磁 碗	西区 第3層	(17.4)	淡緑灰色	密	良好	内面片切彫りによる蓮華文。	極小 反転
5	土師器 羽釜	2B～C 第3層	(15.9)	淡橙色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	1／3 反転
6	東播系 須恵器 鉢	3D～E 第3層	(25.7)	灰茶色	密0.3㎜以下の砂粒含む	良好	回転ナデ。	極小 反転
7	東播系 須恵器 鉢	4D～E 第3層	(26.6)	淡灰青色	密1.5㎜以下の砂粒含む	良好	回転ナデ。	極小 反転
8	東播系 須恵器 鉢	4D～E 第3層	(31.1)	灰色	密1.5㎜以下の砂粒含む	良好	回転ナデ。	極小 反転
9	土師器 皿	3A 第5層	9.75 2.0	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
10	土師器 皿	3A 第5層	9.85 1.6	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	4／5
11	土師器 皿	3A 第5層	9.85 2.05	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
12	土師器 皿	1～2C 第5層	9.45 1.8	明乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
13	土師器 皿	3A 第5層	9.75 1.75	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
14	土師器 皿	3A 第5層	9.75 1.8	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
15	土師器 皿	３Ａ 第５層		9.85 1.65	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
16	土師器 皿	３～４Ｅ ～Ｆ 第５層		12.35 1.6	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	２／３ 一部反転
17	瓦器 皿	１Ａ 第５層		8.2 1.9	白灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	口縁部 １／３欠損
18	瓦器 椀	３～４Ｄ ～Ｆ 第５層		(10.7) 2.45	淡灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	１／３ 一部反転
19	瓦器 椀	３～４Ｅ ～Ｆ 第５層		(11.0)	淡灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	１／４ 反転
20	瓦器 皿	東区 第５層		(8.3) 2.3	淡灰黒色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。内面斜格子・圏線状ヘラミガキ。	１／２ 反転
21	土師器 杯	３～４Ｃ 第５層		(9.2)	淡橙灰色	密１㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ。内面放射状ヘラミガキ。	１／４ 反転
22	土師器 高台付き皿	４Ａ 第５層	脚底径 脚高	(4.8) 2.6	乳茶色	密	良好	ナデ。	脚部１／４ 一部反転
23 十二	白磁 碗	４Ｄ～Ｅ 第５層		(16.4)	淡灰白色	密	良好	回転ナデ・回転ヘラケズリ。	１／10 反転
24 十二	青磁 皿	２Ｂ 第５層	底径	(5.0)	淡緑灰色	密	良好	回転ナデ・回転ヘラケズリ。内面櫛によるジグザグ文。底部外面露胎。	１／４ 反転
25 十二	白磁 皿	２Ｂ 第５層	底径	(5.4)	乳白青色	密	良好	内面ヘラ描きによる花文。底部外面露胎。	１／４ 反転
26 十二	土師器 羽釜	４Ｄ～Ｅ 第５層	鍔径	(24.1) (29.8)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部は端部～外面ナデ、内面ヨコナデ。鍔ヨコナデ。	１／10 反転
27 十二	土師器 羽釜	４Ｄ～Ｅ 第５層		(26.8)	淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面ナデ。	極小 反転
28 十二	土師器 羽釜	３～４Ｅ ～Ｆ 第５層		(30.1)	淡茶灰色	密１㎜以下の砂粒含む	良好	ナデ。	極小 反転
29 十二	土師器 羽釜	４Ｄ～Ｅ 第５層		(31.6)	淡乳茶色	やや粗	良好	ヨコナデ。	極小 反転
30	瓦器 羽釜	３Ｄ～Ｅ 第５層	鍔径	(21.8) (27.5)	淡灰色	密１㎜以下の砂粒含む	良好	ヨコナデ。鍔下面ヘラケズリで煤付着。	極小 反転
31	東播系 須恵器 鉢	４Ｄ～Ｅ 第５層			灰色	密	良好	回転ナデ。内面ナデ。	極小
32	東播系 須恵器 鉢	３～４Ｃ 第５層		(22.4)	灰色	密	良好	回転ナデ。口縁部外面自然釉。	極小 反転
33	東播系 須恵器 甕	１Ｂ 第５層		(22.6)	淡茶色	密	良好	回転ナデ。	１／８ 反転
34	東播系 須恵器 甕	３Ｂ 第５層		(42.0)	暗灰色	密	良好	ナデで、外面タタキ残る。	極小 反転
35	瓦器 甕	３Ｄ～Ｅ 第５層		(32.2)	灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ナデ。	極小 反転

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
36	布留式土器 甕	3 B 第5層		(12.6)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	1／8 反転
37	土師器 皿	SE202 曲物内		(12.7) 2.03	暗乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／4 反転
38	瓦器 椀	SE202 曲物内		(15.5)	淡灰色 灰黒色	密	良好	外面粗なヘラミガキ。内面は見込み斜格子、体部密なヘラミガキ。	1／8 反転
39	瓦器 椀	SE202 曲物内		(16.6)	暗灰黒色	密	良好	外面粗なヘラミガキ。内面は、体部密なヘラミガキ。	1／8 反転
40	瓦器 椀	SE202 曲物内	高台径	(14.4) 5.0 (4.5)	黒灰色	密	良好	外面粗なヘラミガキ。内面は、体部粗なヘラミガキ。 高台高　0.6	極小 反転
41 十一	瓦器 椀	SE202 曲物内	高台径	15.4 5.05 (4.3)	黒灰色	密	良好	内面は、見込み斜格子、体部粗なヘラミガキ。 高台高　0.3	完形
42 十一	曲物	SE202 下から二段目	直径 高さ	41.6 33.0				外側は三段巻きで、下段のみ巻き方向が逆。内側と外側の間には、補強のための長方形の板を挟んでいる。裾には釘穴が巡る。	
43 十一	曲物	SE202 最下段	直径 高さ	40.0 28.5				外側は三段巻き。	
44	土師器 羽釜	SE203		(31.0)	暗乳茶色	やや粗	良好	口縁部ナデで、端部外面ヨコナデ。	極小 反転
45	瓦器 椀	SE203		(14.8)	黒灰色	密	良好	外面粗なヘラミガキ、内面密なヘラミガキ。	1／5 反転
46	瓦器 椀	SE203	高台径	(15.6) 5.4 (6.1)	黒灰色	密	良好	外面やや密なヘラミガキ、内面は見込み平行、体部密なヘラミガキ。 高台高　0.6	1／6 反転
47	瓦器 椀	SE204 曲物内	高台径	(15.6) 5.4 (6.1)	灰黒色	密	良好	外面粗なヘラミガキ、内面は見込み格子状、体部密なヘラミガキ。 高台高　0.6	1／8 反転
48 十三	瓦器 椀	SE204 曲物内	高台径	15.25 4.45 5.0	黒色	密	良好	内面見込み平行、体部粗なヘラミガキ。 高台高　0.4	完形
49 十三	瓦器 椀	SE204 曲物内	高台径	15.0 5.1 4.9	黒灰色	密	良好	内面見込み平行、体部粗なヘラミガキ。 高台高　0.5	完形
50 十三	土師器 羽釜	SE204 曲物内	鍔径	(23.4) (32.6)	暗乳茶色	やや粗	良好	ナデ。鍔ヨコナデ。口縁端部の二か所にくぼみ有り。	1／4 反転
51 十三	土師器 羽釜	SE204 曲物内	鍔径	(27.8) (37.6)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部～体部外面ヨコナデ。内面ナデ。鍔下面煤付着。	1／5 反転
52 十三	曲物	SE204 最下段	直径 高さ	41.5 29.0				外側は上部と下部の二段巻きで、巻き方向は逆。外面に墨書。	
53	土師器 皿	SE205 曲物内 最下層		(8.9) 1.7	暗乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。内面煤付着。	1／2 一部反転
54 十三	土師器 皿	SE205 曲物内		10.05 1.7	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
55	瓦器 椀	SE205 曲物内 最下層		(14.2)	淡黒灰色	密	良好	内外面密なヘラミガキ。	1／5 反転
56 十三	土師器 羽釜	SE205 曲物内 最下層	鍔径	(23.7) (24.7)	褐灰色	やや粗3.5㎜以下の砂粒含む	良好	ナデ。外面煤付着。	1／5 反転

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
57 十三	曲物底	ＳＥ205 掘形内	直径 厚さ	35.4 1.1					
58	瓦器 小椀	ＳＫ206		(7.8)	淡灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ、内面圏線状の粗なヘラミガキ。	1／5 反転
59 十一	瓦器 摺鉢	ＳＫ206		(29.0)	黒灰色	やや粗5.0㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面卸し目。	1／4 反転
60 十一	瓦器 鍋	ＳＫ206		(33.1)	淡灰色	密0.5㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデで、外面ハケ残る。口縁部～体部間外面ユビオサエ。体部外面ナデ、内面ハケ。	極小 反転
61	土師器 皿	ＳＫ205		(8.5) 1.65	乳茶色	密	良好	口縁部～体部内面ヨコナデ、底体部外面ユビオサエ、底部内面ナデ。	1／4 反転
62	瓦器 皿	ＳＫ205		8.8 1.9	淡灰色	密1.5㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部外面ヨコナデ。底体部外面ナデ。内面は見込み平行＋圏線状ヘラミガキ。	1／4 反転
63	土師器 羽釜	ＳＫ205	鍔径	(31.6) (39.6)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部～体部外面ヨコナデ。体部内面ナデ。煤付着。	1／8 反転
64	瓦器 椀	ＳＰ207		(14.0)	淡灰黒色	密	良好	外面はやや密な、内面は密なヘラミガキ。	1／8 反転
65	瓦器 椀	ＳＰ207	高台径 高台高	4.9 0.5	黒灰色	密	良好	底部外面ナデ。見込み格子状ヘラミガキ。	高台のみ 一部反転
66	土師器 皿	ＳＤ201		(8.2) 1.4	淡灰茶色	密	良好	ナデで、口縁部内面ヨコナデ。	1／4 反転
67	土師器 皿	ＳＤ201		(8.5) 1.4	乳灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／4 反転
68	黒色土器 椀	ＳＤ201	高台径 高台高	(8.0) 1.0	乳灰茶色	やや粗	良好	外面ナデ。内面ヘラミガキ。A類（内黒)。	1／2 反転
69 十三	瓦器 椀	ＳＤ201	高台径	(15.1) 4.8 5.6	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。外面粗なヘラミガキ。内面は見込み斜格子＋体部密なヘラミガキ。高台高 0.6	1／4 一部反転
70 十三	瓦器 椀	ＳＤ201	高台径	(14.1) 3.3 3.4	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。内面見込み平行＋体部粗なヘラミガキ。高台高　0.3	1／3 一部反転
71	土師器 羽釜	ＳＤ204	鍔径	(30.7) (38.0)	褐茶色	やや粗２㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ナデ。鍔ヨコナデ。	極小 反転
72	瓦器 羽釜	ＳＤ204	鍔径	(26.7) (32.7)	灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。体部外面ヘラケズリ。	1／8 反転
73 十三	瓦器 椀	ＳＤ204	高台径 高台高	6.5 0.8	黒灰色	密	良好	底体部外面ナデ。高台ヨコナデ。見込み一定方向のヘラミガキ。	高台のみ 一部反転
74	平瓦	ＳＤ204	長辺 短辺	(19.0) (15.5)	白灰色	やや粗	良好	凹面布目。凸面縄目後、一部横方向のヘラケズリ。端面ナデ。	1／5
75	土師器 皿	ＳＤ205		7.85 1.6	乳灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	3／4
76	土師器 皿	ＳＤ205		(8.6) 1.2	乳灰茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／3 反転
77 十三	土師器 皿	ＳＤ205		9.35 1.7	乳灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	2／3

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
78	土師器 皿	SD205		8.75 1.65	乳灰茶色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	1／2
79 十三	土師器 皿	SD205		9.9 1.8	淡茶灰色	密0.2㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
80	土師器 皿	SD205		(10.25) 1.6	乳茶色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナデ。	1／4 反転
81 十三	土師器 皿	SD205		13.5 2.95	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
82	土師器 皿	SD205		(15.0)	淡茶灰色	密1㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	1／8 反転
83	土師器 皿	SD205		(15.9) 2.3	淡灰茶色	密1㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／8 反転
84	土師器 高台付き皿	SD205	脚底径 脚高	(9.4) 3.5	乳茶色	密	良好	脚部ナデ。	1／4 反転
85	土師器 椀	SD205		(18.0)	淡茶灰色	密1㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部外面ナデ、内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ、内面ヘラミガキ。	1／8 反転
86 十四	瓦器 皿	SD205		(8.5) 1.5	黒灰色	密	良好	口縁部～内面ナデ。底体部外面ユビオサエ。	1／5 反転
87 十四	瓦器 皿	SD205		(9.2) 1.9	黒灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ。内面見込み平行＋体部密なヘラミガキ。	1／3 反転
88 十四	瓦器 皿	SD205		(9.2) 2.5	黒灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ。底体部外面ナデ。内面見込み平行＋体部密なヘラミガキ。	1／4 反転
89 十四	瓦器 皿	SD205		8.9 1.8	黒灰色	密	良好	口縁部外面ナデ。底体部外面ユビオサエ。内面渦巻き状ヘラミガキ。	ほぼ完形
90 十四	瓦器 椀	SD205		(14.0)	黒灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ。外面は粗なヘラミガキ。内面は見込み格子＋体部密なヘラミガキ。	1／3 反転
91 十四	瓦器 椀	SD205		(14.8)	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。外面は粗なヘラミガキ。内面は体部密なヘラミガキ。	1／5 反転
92 十四	瓦器 椀	SD205	高台径	(15.6) 3.9 (3.9)	黒灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。内面は見込み平行＋体部粗なヘラミガキ。高台高 0.3	1／4 反転
93 十四	瓦器 椀	SD205		(16.6)	淡灰色	密	良好	内外面密なヘラミガキで、外面上位にユビオサエ残る。	1／5 反転
94 十四	瓦器 椀	SD205	高台径	12.0 2.95 2.85	黒灰色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ。内面渦巻き状ヘラミガキ。 高台高　0.2	4／5
95 十四	瓦器 椀	SD205	高台径	(12.8) 2.85 3.3	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ナデ。内面渦巻き状ヘラミガキ。 高台高　0.1	1／4 反転
96 十四	瓦器 椀	SD205		(14.0)	灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。内面見込み平行＋体部粗なヘラミガキ。	1／5 反転
97 十四	瓦器 椀	SD205	高台径	(13.8) 2.6 2.8	黒灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ。 内面渦巻き状ヘラミガキ。高台高 0.2	1／5 反転
98 十四	瓦器 椀	SD205		10.1 2.9	白灰色	密	良好	口縁部ナデ。底体部外面ユビオサエ。内面渦巻き状ヘラミガキ。	1／2

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm) (復元値)	口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
99 十四	瓦器 鉢	ＳＤ205		(23.2)	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラミガキ。	極小 反転
100 十四	青磁 皿	ＳＤ205	底径	4.0	乳灰緑色	密	良好	回転ナデ。回転ヘラケズリ。底部外面釉掻き取り。	底部のみ 一部反転
101 十四	青磁 碗	ＳＤ205		(17.2)	淡緑灰色	密	良好	内面片切彫りによる花文。	１／８ 反転
102 十四	白磁 碗	ＳＤ205		(17.4)	乳茶灰色	密	良好	回転ナデ。回転ヘラケズリ。	極小 反転
103 十四	白磁 碗	ＳＤ205	底径	(16.8) 6.5 (7.0)	乳灰色	密	良好	回転ナデ。回転ヘラケズリ。外面下半露胎。	１／３ 反転
104 十五	人形	ＳＤ205	長さ 幅 厚さ	22.2 2.8 1.0				下端部欠損。	
105 十五	木錘	ＳＤ205	長さ 幅	9.8 3.0～5.5					
106	東播系 須恵器 鉢	ＳＤ205		(26.6)	灰色	密0.5㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部外面回転ナデ、内面ナデで、内面にハケ残る。	極小 反転
107	東播系 須恵器 鉢	ＳＤ205			灰色	密	良好	口縁部外面回転ナデ、内面ナデ。外面自然釉。	極小
108	東播系 須恵器 鉢	ＳＤ205			灰色	密	良好	口縁部ナデ。	極小
109	東播系 須恵器 鉢	ＳＤ205		(32.0)	灰色	やや粗	良好	回転ナデ。	極小 反転
110 十五	土師器 羽釜	ＳＤ205	鍔径	(17.9) (23.6)	乳茶色	やや粗３㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部～鍔外面ヨコナデ。内面ナデ。口縁端部と鍔に煤付着。	１／８ 反転
111 十五	土師器 羽釜	ＳＤ205	鍔径	(24.9) (33.0)	灰褐色	やや粗1.5㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部～体部ナデ。鍔ヨコナデ。	１／５ 反転
112 十五	土師器 羽釜	ＳＤ205	鍔径	(33.9) (40.0)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。鍔ヨコナデで煤付着。	１／５ 反転
113 十五	土師器 羽釜	ＳＤ205	鍔径	(22.2) (25.3)	淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部～鍔ヨコナデ。内面ナデ。外面煤付着。	極小 反転
114	土師器 羽釜	ＳＤ205	鍔径	(28.8) (33.0)	黒灰色	やや粗	良好	口縁部～鍔ヨコナデ。体部ナデ。	極小 反転
115 十五	瓦器 甕	ＳＤ205		(38.4)	暗灰色	やや粗	良好	口縁部回転ナデ。	極小 反転
116 十五	常滑 甕	ＳＤ205		(33.2)	淡褐灰色	密1.5㎜以下の砂粒含む	良好	回転ナデ。	極小 反転
117	丸瓦	ＳＤ205			淡灰黒色	密	良好	凹面布目。凸面ナデ。玉縁凹面端部ヘラケズリ。	極小
118	平瓦	ＳＤ205	長辺 短辺	18.9 14.0	黒灰色	やや粗	良好	凹面ナデ。凸面縄目。側面ナデ。端部ヘラケズリ。	１／５
119 十五	土師器 皿	ＳＤ206		9.3 1.6	乳灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	３／４

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm)（復元値） 口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
120	土師器 皿	ＳＤ206	8.85 1.7	淡乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	4／5
121 十五	土師器 皿	ＳＤ206	9.1 1.7	淡灰茶色	密0.2㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
122	土師器 皿	ＳＤ206	9.1 1.65	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	7／8
123	土師器 皿	ＳＤ206	8.9 1.4	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
124	土師器 皿	ＳＤ206	(8.7) 1.65	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／2 反転
125 十五	土師器 皿	ＳＤ206	9.1 1.7	淡茶灰色	密1.5㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
126	土師器 皿	ＳＤ206	9.1 1.5	淡灰茶色	密0.5㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
127 十五	土師器 皿	ＳＤ206	8.95 1.55	明乳茶色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
128	土師器 皿	ＳＤ206	8.6 1.55	乳灰茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	3／4
129	土師器 皿	ＳＤ206	(9.0) 1.3	淡茶灰色	密1.5㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナデ。	1／2 一部反転
130	土師器 皿	ＳＤ206	9.1 1.4	乳灰茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
131 十五	土師器 皿	ＳＤ206	8.95 1.6	暗灰茶色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	完形
132 十五	土師器 皿	ＳＤ206	8.5 1.6	淡灰茶色	密1㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
133	土師器 皿	ＳＤ206	8.1 1.55	乳茶色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
134	土師器 皿	ＳＤ206	8.2 1.3	淡灰茶色	密1㎜以下の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
135 十五	瓦器 皿	ＳＤ206	(8.75) 1.4	灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ、内面ナデ。底部ナデ。	1／2 一部反転
136 十五	瓦器 皿	ＳＤ206	9.6 1.9	黒灰色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
137	瓦器 皿	ＳＤ206	(7.7) 1.7	淡灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。底体部ナデ。	1／2 反転
138 十六	土師器 皿	ＳＤ206	14.4 2.8	暗乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
139	土師器 皿	ＳＤ206	13.8 2.7	淡茶灰色	密0.5㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／2
140 十六	土師器 皿	ＳＤ206	14.35 2.5	暗乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量（㎝） （復元値）	口径 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
141 十六	土師器 皿	ＳＤ206		14.3 2.6	暗乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
142 十六	土師器 皿	ＳＤ206		13.6 2.3	暗乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
143 十六	土師器 皿	ＳＤ206		(13.7) 2.8	乳灰茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。内面煤付着。	１／２ 反転
144 十六	瓦器 椀	ＳＤ206	高台径	(16.0) 4.75 (5.4)	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ナデ。高台ヨコナデ。外面粗なヘラミガキ。内面見込み格子＋体部やや密なヘラミガキ。高台高　0.4	１／３ 反転
145 十六	瓦器 椀	ＳＤ206	高台径	15.4 4.9 5.0	淡灰黒色	密	良好	体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。外面粗なヘラミガキ。内面見込み格子＋体部密なヘラミガキ。高台高　0.5	完形
146 十六	瓦器 椀	ＳＤ206	高台径	(15.7) 4.9 (6.1)	黒灰色	密	良好	体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。外面粗なヘラミガキ。内面見込み格子＋体部粗なヘラミガキ。高台高　0.5	１／３ 反転
147 十六	瓦器 椀	ＳＤ206	高台径	(15.2) 4.2 (4.9)	黒灰色	密	良好	体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。内面見込み格子＋体部粗なヘラミガキ。高台高　0.6	１／２ 一部反転
148 十六	瓦器 椀	ＳＤ206	高台径	15.85 5.1 (4.95)	黒灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。高台ヨコナデ。底部外面ナデ。外面粗で、内面は見込み平行＋体部密なヘラミガキ。高台高　0.6	１／４ 一部反転
149 十六	瓦器 椀	ＳＤ206	高台径	(15.4) 4.0 4.0	灰黒色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。内面見込み平行＋粗なヘラミガキ。高台高　0.25	１／４ 反転
150	瓦器 鉢	ＳＤ206	高台径	(15.4) 4.0 4.0	灰色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ヘラミガキ。 高台高　0.25	極小 反転
151 十七	瓦器 鉢	ＳＤ206	高台径 高台高	7.95 4.0	黒灰色	密	良好	底部外面ナデ。内面見込み平行ヘラミガキ。	高台３／４ 一部反転
152 十六	土師器 高杯	ＳＤ206	脚底径 脚高	5.4 3.5	乳茶色	密	良好	ナデ。	脚のみ 一部反転
153 十六	土師器 高台付き皿	ＳＤ206	脚底径 脚高	10.0 3.8	乳灰茶色	やや粗	良好	底部ナデ。脚部ヨコナデで、外面上位ユビオサエ。	脚のみ
154 十七	陶器 鉢	ＳＤ206	高台径	(21.2) 8.1 (12.9)	淡灰色	やや粗	良好	口縁部～内面回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。底部ナデ。高台貼付け。 高台高　1.5	１／４ 反転
155	青磁 碗	ＳＤ206		(17.0)	緑灰色	密	良好	内面片切り彫りによる花文。	極小 反転
156	白磁 碗	ＳＤ206	底径	(7.2)	乳灰色	密	良好	回転ナデ。底部外面露胎。	１／２ 反転
157	瓦器 羽釜	ＳＤ206	鍔径	(14.4) (18.6)	黒灰色	密	良好	口縁部ハケで、端部ヨコナデ。鍔ヨコナデ。	１／８ 反転
158	瓦器 羽釜	ＳＤ206	鍔径	(17.65) (23.2)	黒灰色	密	良好	口縁部ハケで、端部ヨコナデ。鍔ヨコナデ。鍔煤付着。	極小 反転
159	瓦器 三足釜	ＳＤ206	残存長	11.0	白灰色	やや粗	良好	ナデ。	脚のみ
160	土師器 羽釜	ＳＤ206	鍔径	(30.8) (36.4)	乳茶色	やや粗５㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部ナデで、端部ヨコナデ。口縁部～体部外面煤付着。	極小 反転
161	東播系 須恵器 鉢	ＳＤ206		(29.0)	暗灰色	密	良好	口縁部回転ナデ。体部ナデ。	１／４ 反転

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm) 口径 (復元値) 器高	色調　外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
162	東播系 須恵器 鉢	S D206	(34.8)	暗灰色	密 2 ㎜以下の 砂粒を含む	良好	口縁部回転ナデ。体部ナデ。	極小 反転
163 十七	東播系 須恵器 甕	S D206	(21.8)	暗灰色	密	良好	口頸部回転ナデで、頸部外面タタキ残る。体部外面タタキ、内面ナデ。	1／4 反転
164 十七	下駄	S D206	長さ　17.0 幅　9.5 高さ　2.9					完形
165 十七	土師器 皿	S D207	(14.0) 2.6	淡茶灰色	密1.5 ㎜以下 の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／3 反転
166 十七	土師器 皿	S D207	8.3 1.3	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
167	土師器 皿	S D207	(8.0) 1.1	淡灰茶色	密 1 ㎜以下の 砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／3 反転
168 十七	土師器 皿	S D207	8.0 1.55	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
169 十七	土師器 皿	S D207	(7.6) 1.4	灰色	密	良好	口縁部～内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。底部ナデ。	ほぼ完形
170	土師器 皿	S D207	7.8 1.5	淡灰茶色	密0.2 ㎜ 以下 の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1／4 反転
171	瓦器 椀	S D207	(10.6) 2.8	灰黒色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。底体部外面ナデ。内面粗なヘラミガキ。	反転
172	瓦器 椀	S D207	(10.9)	淡灰色	密 3 ㎜以下の 砂粒を含む	良好	外面ナデ。内面乱方向のヘラミガキ。	1／4 反転
173 十八	瓦器 椀	S D207	10.6 2.5	灰黒色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ。底体部外面ナデ。内面渦巻き状ヘラミガキ。	4／5
174 十八	瓦器 椀	S D207	10.7 2.4	淡灰茶色	密 2 ㎜以下の 砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。内面渦巻き状ヘラミガキ。	3／4
175 十八	土師器 羽釜	S D207	(30.2) 鍔径　(33.0)	淡茶橙色	やや粗 2 ㎜以 下の砂粒を含 む	良好	口縁部ナデ。鍔部ヨコナデで下面に煤付着。	1／8 反転
176 十八	土師器 羽釜	S D207	(28.6) 鍔径　(34.3)	淡茶灰色	密2.5 ㎜ 以下 の砂粒を含む	良好	口縁部ナデ。鍔部ヨコナデで下面に煤付着。	1／5 反転
177 十八	瓦器 羽釜	S D207	(14.7) 鍔径　(19.2)	黒灰色	密	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。鍔部ヨコナデで下面に煤付着。	1／6 反転
178 十八	瓦器 火鉢	S D207	(27.3)	暗灰色	密	良好	口縁部回転ナデ。口縁部 2 条の突帯間に菊花スタンプ文。	極小 反転
179 十八	東播系 須恵器 甕	S D207	(19.5)	灰色	密	良好	回転ナデで、体部タタキ残る。	1／3 反転
180 十八	東播系 須恵器 鉢	S D207	(33.9)	灰緑色	密 1 ㎜以下の 砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	極小 反転
181 十八	陶器 鉢	S D207	高台径　(10.8) 高台高　1.2	灰色	やや粗	良好	回転ナデ。底部外面未調整。高台貼付け。	1／5 反転
182	白磁 碗	S D207	高台径　(5.2) 高台高　0.6	乳灰色	密	良好	回転ヘラケズリ、回転ナデ。底部外面露胎。見込み蛇の目状に釉掻き取り。	底部のみ 一部反転

遺物番号 図版番号	器　種	出土 地点	法量(cm)（復元値） 口径 器高	色調 外 内	胎　土	焼成	技法・形態等の特徴	残　存 備　考
183 十八	木製品	ＳＤ207	長さ　53.3 幅　1.0～2.0				表面は六角形～八角形に面取りされる。細い方の端部には切り込みが入る。	
184 十八	瓦質製品	ＳＤ207	高さ　37.8 幅　37.5	灰色	密	良好	表面から側面はナデ。上小口面は粘土切り取り後未調整。裏面には藁？の痕跡。煤付着。断面15.1×9.0	１／２？
185	軒平瓦	ＳＤ207	長辺　9.0	褐灰色	密３㎜以下の砂粒を含む	良好	凹面布目。側面ナデ。連珠文。	極小
186	丸瓦	ＳＤ207	長辺　18.7 高さ　8.8	白灰色	粗	良好	凹面布目。凸面ナデ。端部面ナデ。	１／４
190 十九	瓦器 椀	ＳＤ302	15.6 5.8 高台径　6.4	灰黒色	密	良好	口縁部ヨコナデ。高台ヨコナデ。底部外面ナデ。外面は密で分割した、内面は密で放射状のヘラミガキ。高台高　0.8	４／５
191	土師器 皿	ＳＰ304	7.8 1.5	淡灰茶色	密１㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナデ。	１／４ 反転
192	土師器 皿	ＳＰ313	8.6 1.6	淡灰茶色	密１㎜以下の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
291 二十	土師器 杯	２Ｂ 第８層	(16.7) 2.5	乳茶色	密	良好	外面ヘラミガキで、底部にヘラケズリ残る。内面は口縁部回転ナデ、底部ナデ。耳はナデで、２～３方向。	１／２ 反転
292	須恵器 杯身	西区 第８層	(14.9) 4.3 高台径　(11.4)	白色	密	良好	回転ナデ。 高台高　0.5	１／５ 反転
293 二十	須恵器 杯蓋	西区 第８層	(15.7) 2.45 つまみ径　3.3	灰色	密0.2㎜以下の砂粒を含む	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。つまみナデ。灰かぶり。 つまみ高　0.9	１／４ 一部反転
294	須恵器 杯蓋	西区 第８層	(14.0)	灰色	密	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ。	１／６ 反転
295	須恵器 広口短頸壷	西区 第８層	(10.1)	灰色	密	良好	回転ナデ。肩部外面ナデ。灰かぶり。	１／６ 反転
296	土師器 壷	西区 第８層	(10.8)	乳茶色	密	良好	ナデ。口縁部内面ヘラミガキ。	１／６ 反転
297	土師器 鉢	西区 第８層	(13.2)	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラミガキ。	極小 反転
298	円筒埴輪	西区 第８層	突帯高　1.4 突帯幅　1.3	暗灰茶色	やや粗	良好	ナデ。平面楕円形？	極小
299	形象埴輪	東区 第８層	突帯高　1.0 突帯幅　0.9	暗灰茶色	やや粗	良好	ナデ。突帯は屈曲する。	極小

第4章　まとめ

今回の調査では、特に平安時代後期から室町時代の遺構・遺物を検出した。

第2次面では南北方向に平行する7条の溝（SD201～207）を検出した。出土遺物からみると、調査区西部のSD201と中央部のSD204が11世紀後半から、東部のSD205・206・207がやや遅れて12世紀中頃からとなる。そしてSD201・SD206は13世紀末頃には埋没し、その後SD204・205・207は14世紀末まで機能していたと思われる。

これらの溝のうち東端に位置するSD207は、規模や埋土の点から他の溝とは性格を異にするものである。SD207には橋が架けられており、また埋土の状況からも流路というよりは、「堀」、すなわち集落・屋敷地を区画する区画溝としての機能が考えられる。埋土中には建築材と考えられる多量の加工木材や、少量ではあるが瓦が含まれており、また上層からは礎石に使用されたとも思える巨石が出土している。これらのことからもSD207の東側に屋敷等の建物の存在も想定できよう。SD207の出土土器の時期には12世紀末から14世紀末の幅があり、鎌倉時代から室町時代前半という長期間にわたる集落の存在が窺える。同時期のこのような区画溝は、八尾市域では成法寺遺跡[註10]や福万寺遺跡[註11]で確認されている。

井戸は5基（SE201～205）を検出した。出土遺物の時期は12世紀後半から13世紀初頭に比定される。これらの井戸は溝（SD201・206）に重複しており、同時に機能していたとも考えられよう。

第2次面の西部では、地鎮遺構と考えられる土師器皿集積を伴う整地層が確認され、整地層の下、第3次面では11世紀末～12世紀前半の遺構が検出された。調査区の西側に平安時代後期の集落遺構が存在する可能性がある。

下層確認調査では砂層中から弥生時代後期～奈良時代の遺物が検出されている。古墳時代前期までの土器はかなり摩滅しており、河川による流入が主であろう。埴輪については、東部の調査で検出されている古墳との関連が注目される。奈良時代の土器にはかなり遺存状態の良好なものがあり、周辺に8世紀初頭頃の集落の存在が十分考えられる。

註

註1　八尾市教育委員会「15. 中田遺跡（91－207）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』1992. 3

註2　水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒No.36』）

註3　財団法人八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度」〈Ⅱ老原遺跡

（第２次調査）〉『財団法人八尾市文化財調査研究会報告13』1987年

この例では、補強のため曲物周囲に隙間なく竹を打ち込んでいる。当例は竹の遺存が悪く断言はできないがこれほど強固な補強ではなかったようである。

註４　墨書の解読については、八尾市立歴史民俗資料館　尾崎良史・小谷利明氏から御教示を得た。

註５　森島康雄「中河内の羽釜」（日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990年12月）

註６　伊野近富「12～16世紀の京都の土器」（日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ⅴ』1989年11月）

註７　前掲書　註４

註８　八尾市教育委員会文化財室「跡部遺跡発掘調査報告」『八尾市文化財紀要５』1991. 3

註９　古代の土器研究会編「古代の土器１　都城の土器集成」

註10　財団法人八尾市文化財調査研究会「成法寺遺跡」〈第６章　第６次調査（SH90－６）発掘調査報告〉『財団法人八尾市文化財調査研究会報告33』1991

註11　財団法人八尾市文化財調査研究会「福万寺遺跡－上之島町北３丁目22－１の調査－」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告24』1990. 6

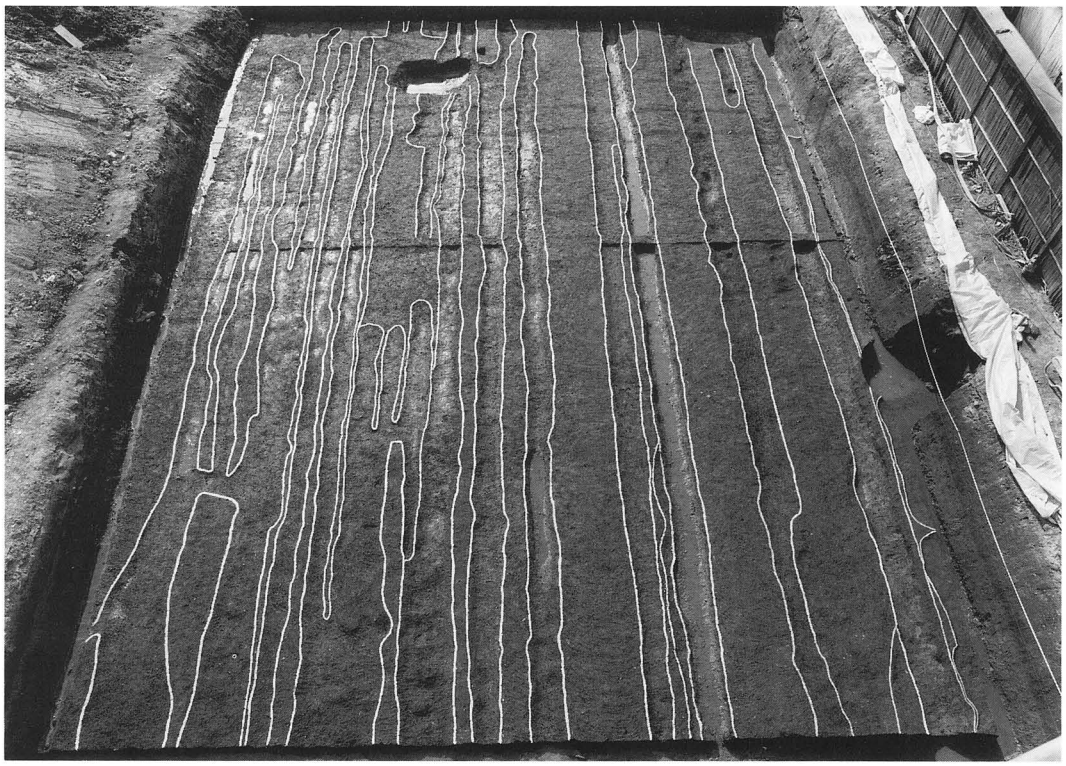
参考文献

財団法人八尾市文化財調査研究会「Ⅰ萱振Ａ遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』1987

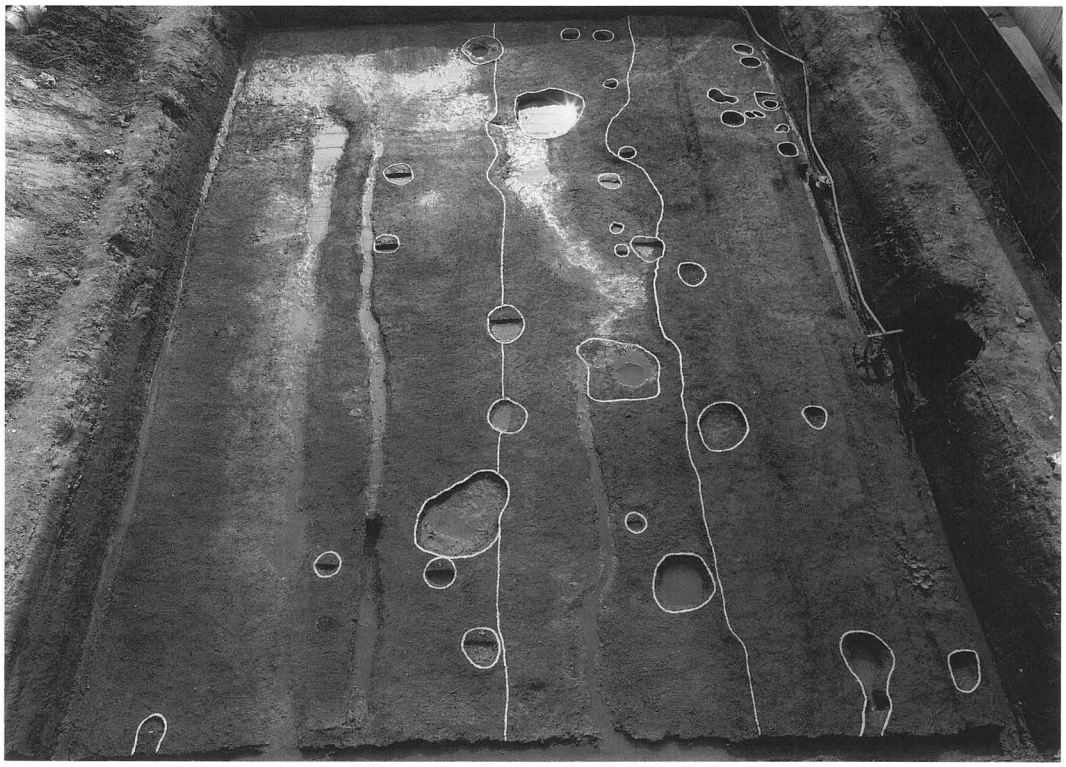
奈良国立文化財研究所「木器集成図録　近畿古代篇」1984

乙益重隆・金子裕之「人形」（『神道考古学講座』第三巻　原始神道期二　1981）

図　　版

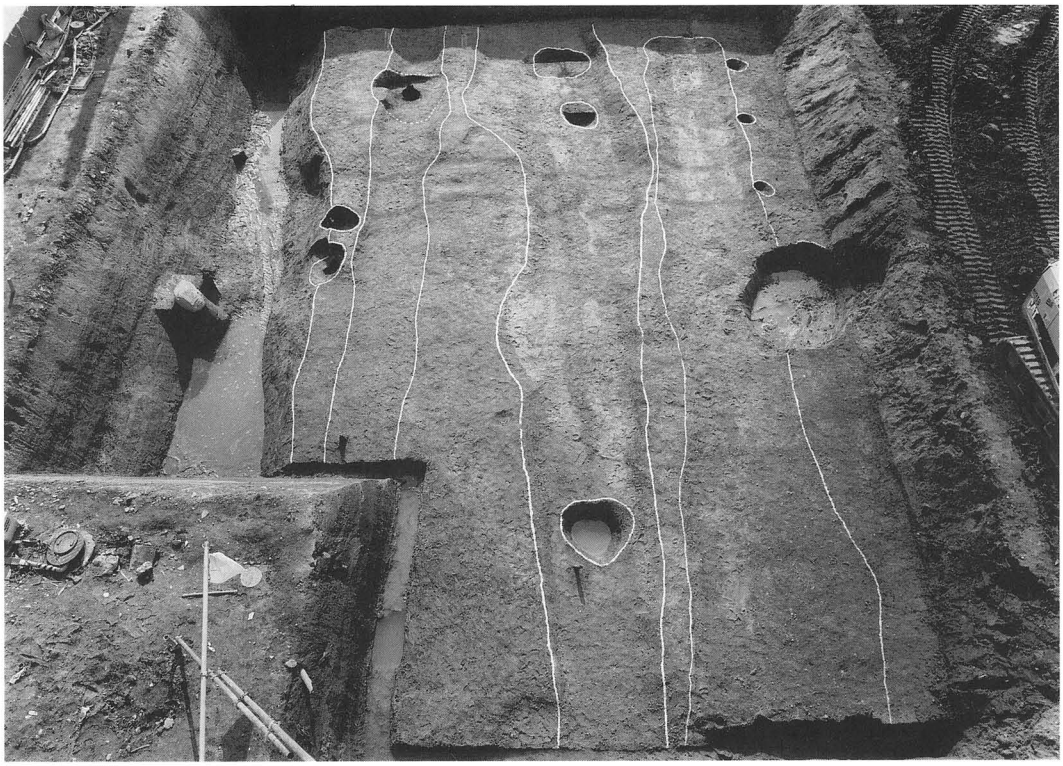


西区第１次面（北から）



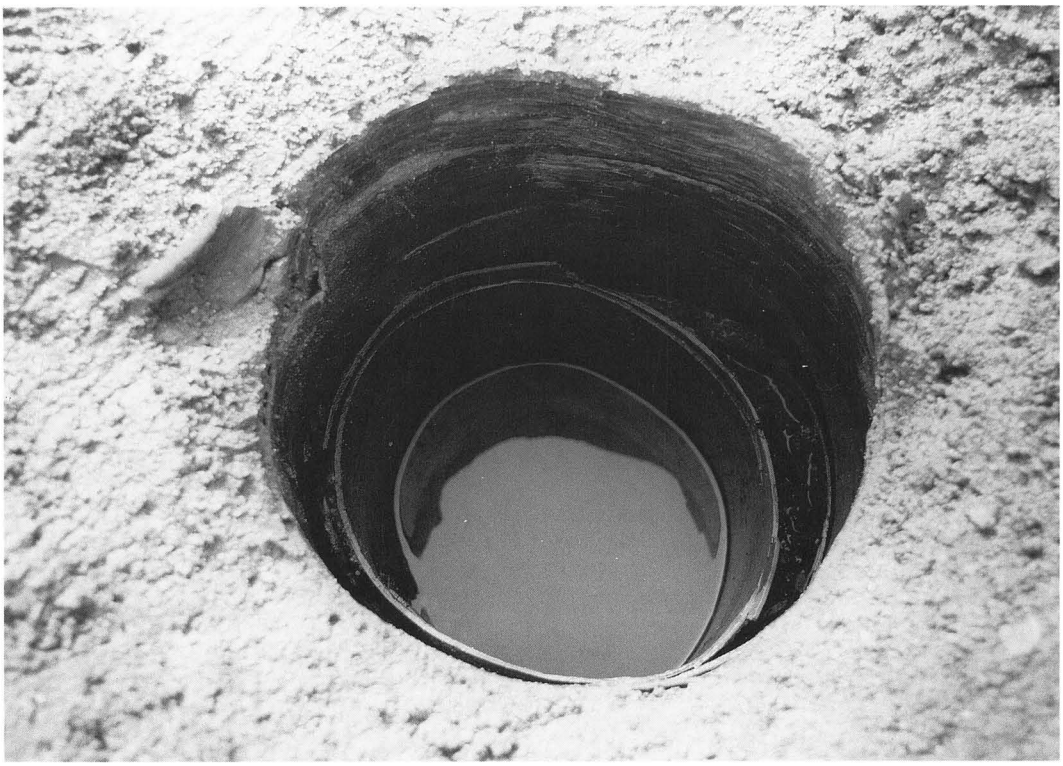
西区第２次面（北から）

図版二



東区第２次面（北から）

ＳＥ201断割り（北から）



ＳＥ202（北から）

ＳＥ202断割り（北から）

ＳＥ204（北から）

ＳＥ204断割り（北から）

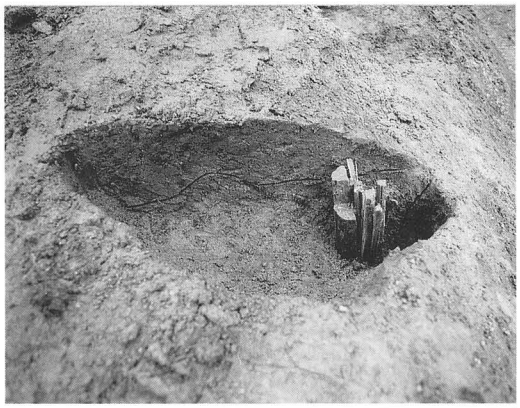
ＳＥ205断割り（南から）

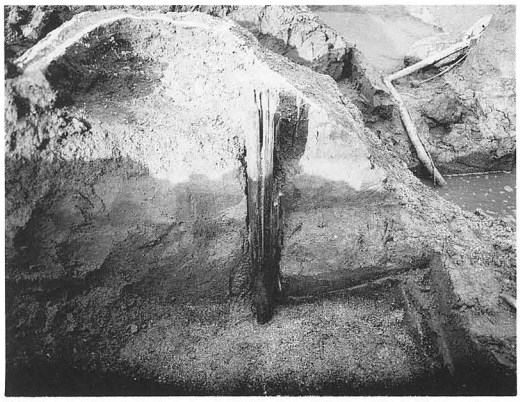
ＳＤ206南端側溝内遺物出土状況（北から）

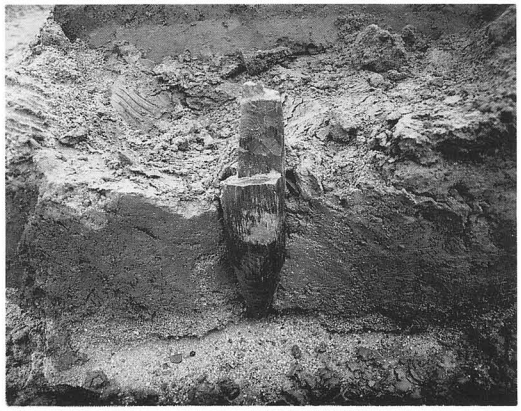
ＳＤ207全景（南から）

瓦質製品（184）出土状況（西から）

ＳＤ207北壁



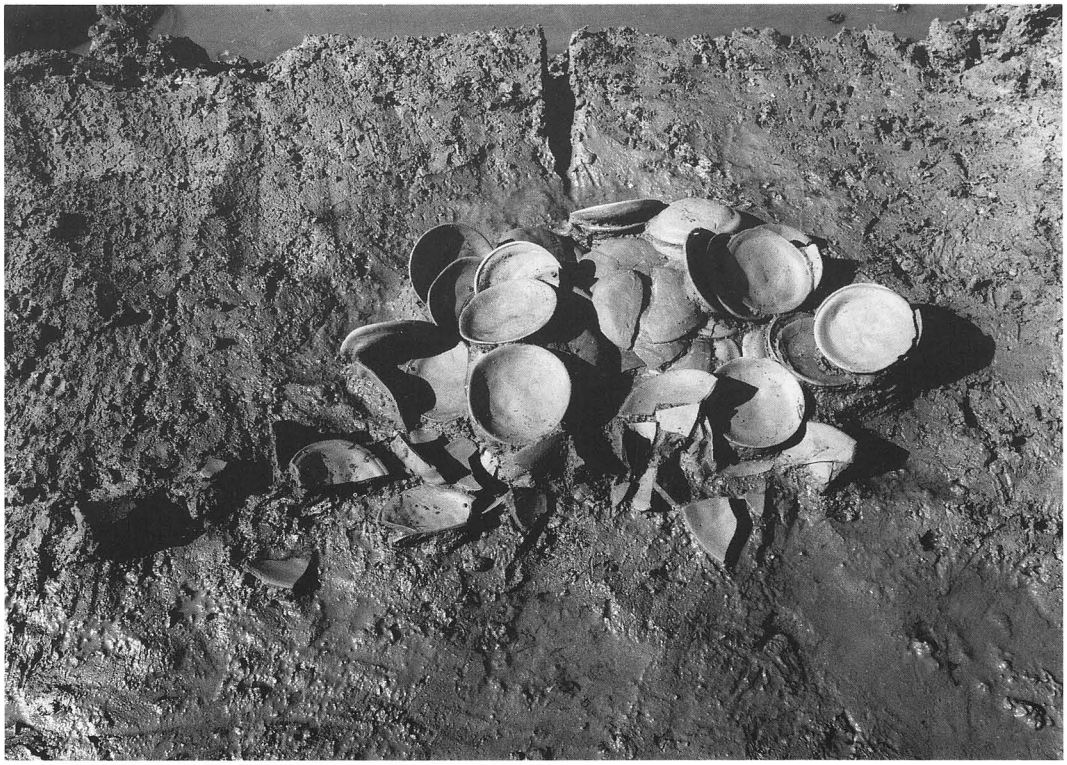




ＳＤ207橋脚部分（南東から）

西区第３次面（北から）

ＳＰ313（北から）

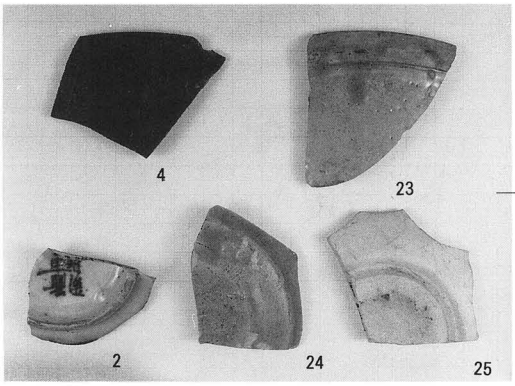


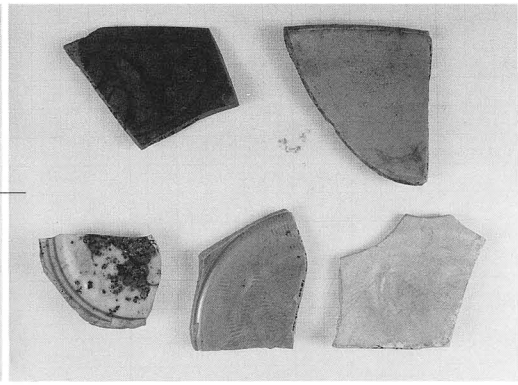
ＳＷ301（東から）

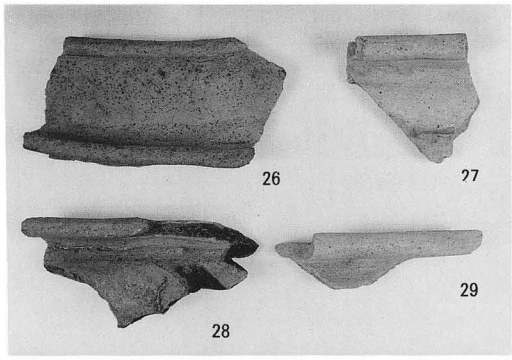
ＳＷ301下層（東から）

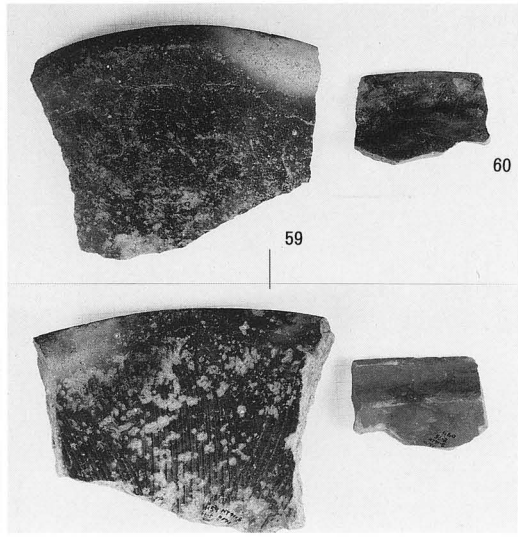
ＳＷ302（東から）

西区下層確認トレンチ（北西から）



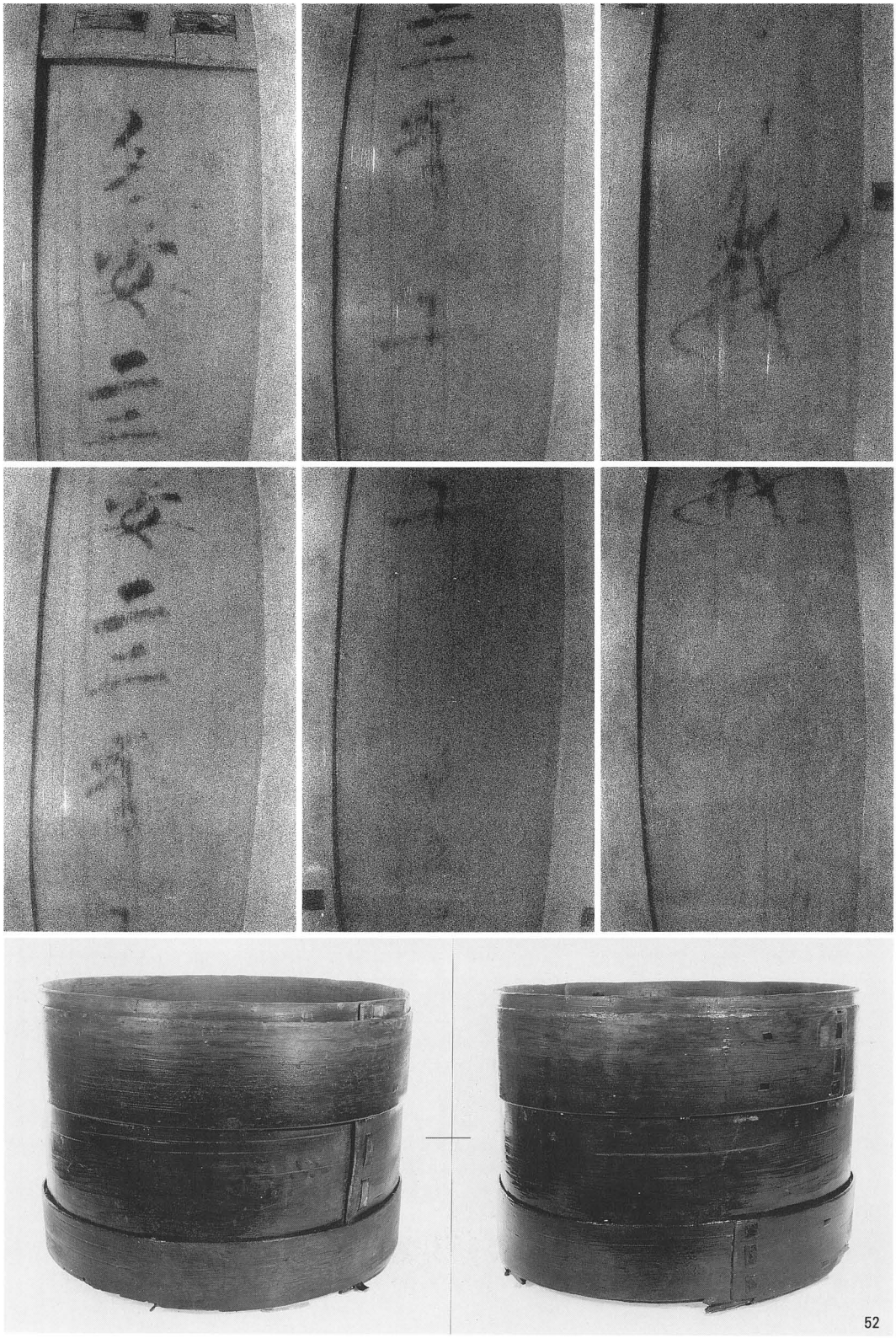




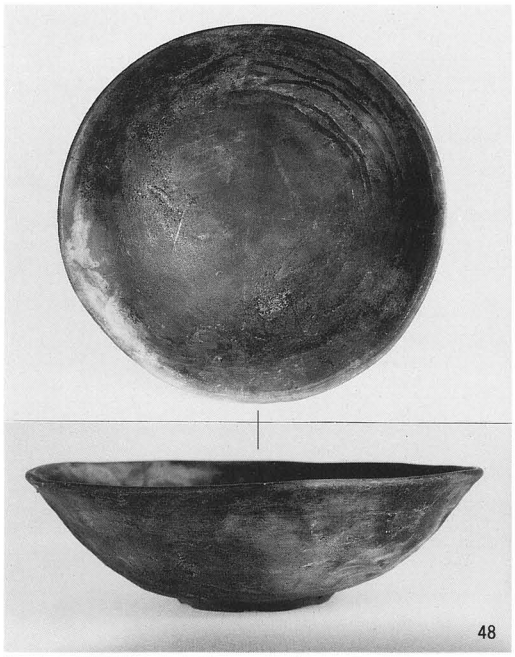


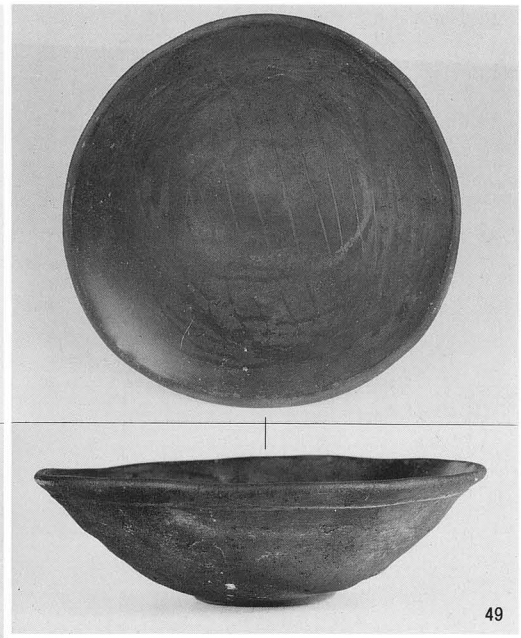
第３層（２・４）、第５層（23～29）、ＳＥ202（41～43）、ＳＫ206（59・60）

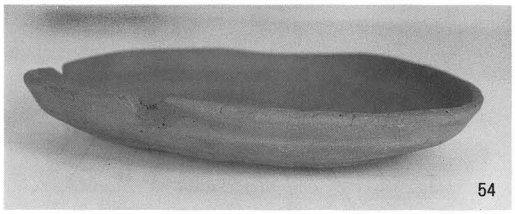
図版十二

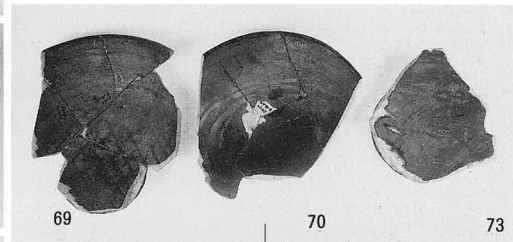


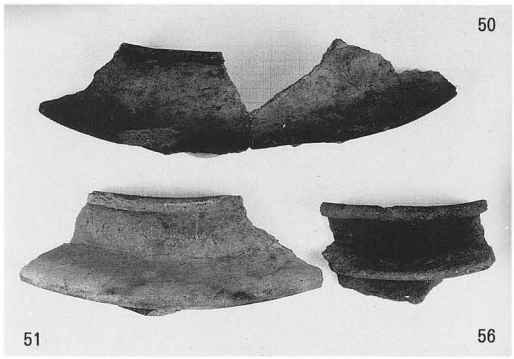
S E 204

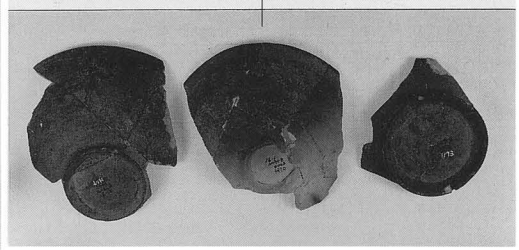


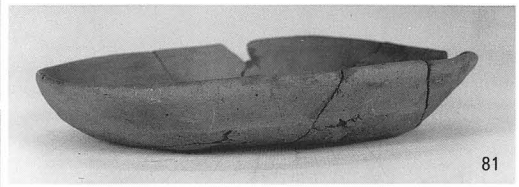


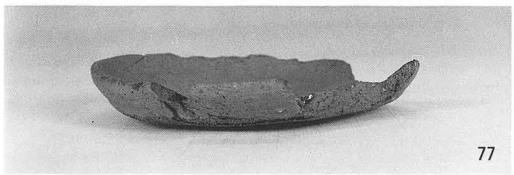


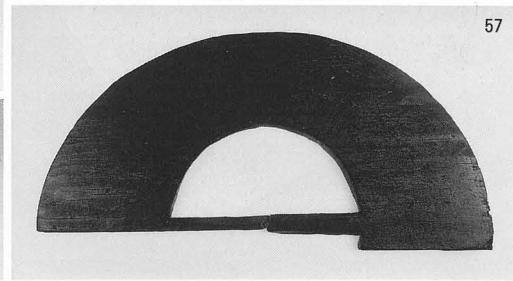


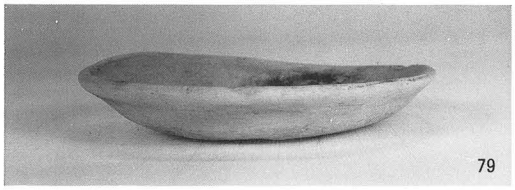






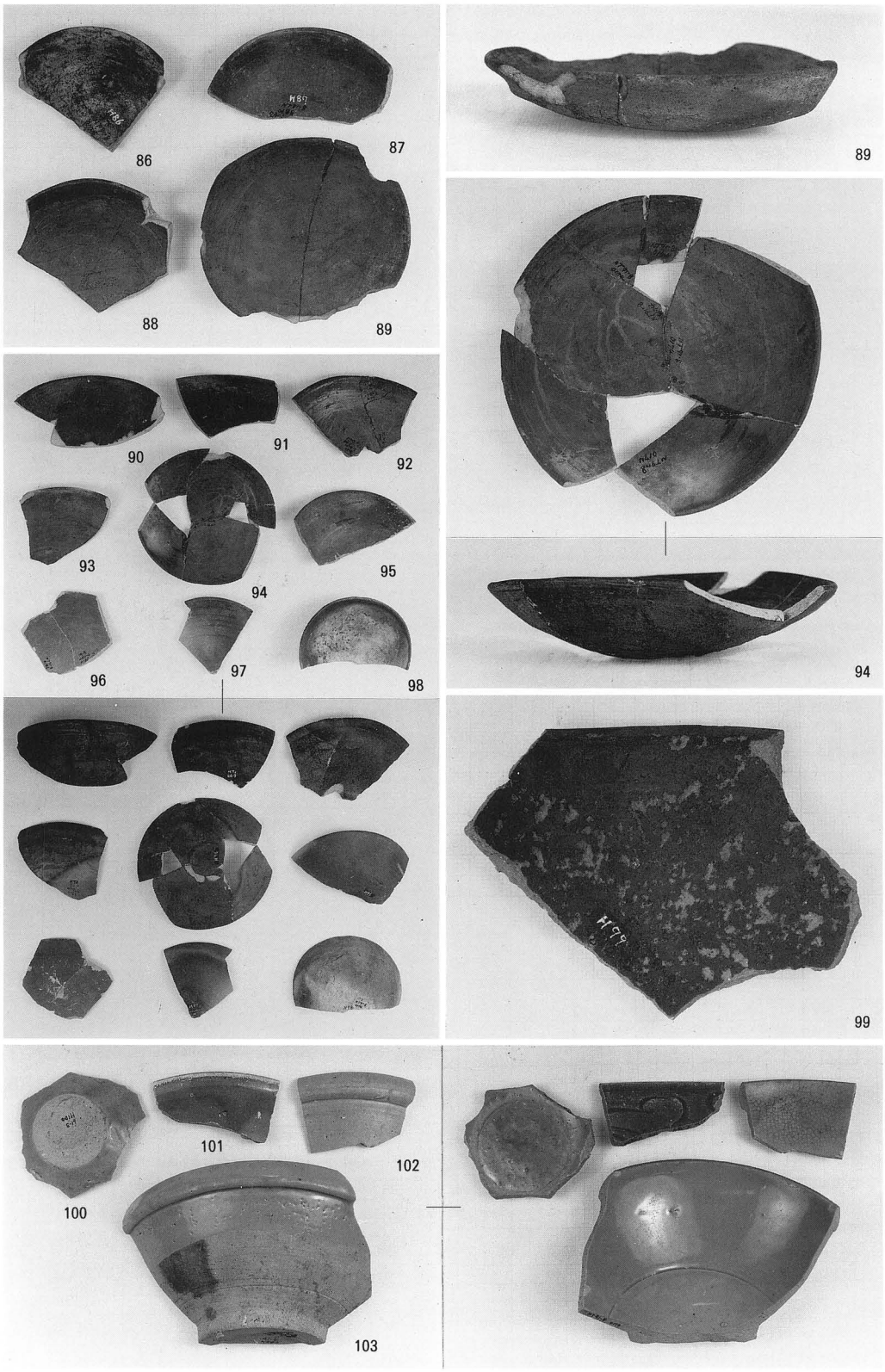




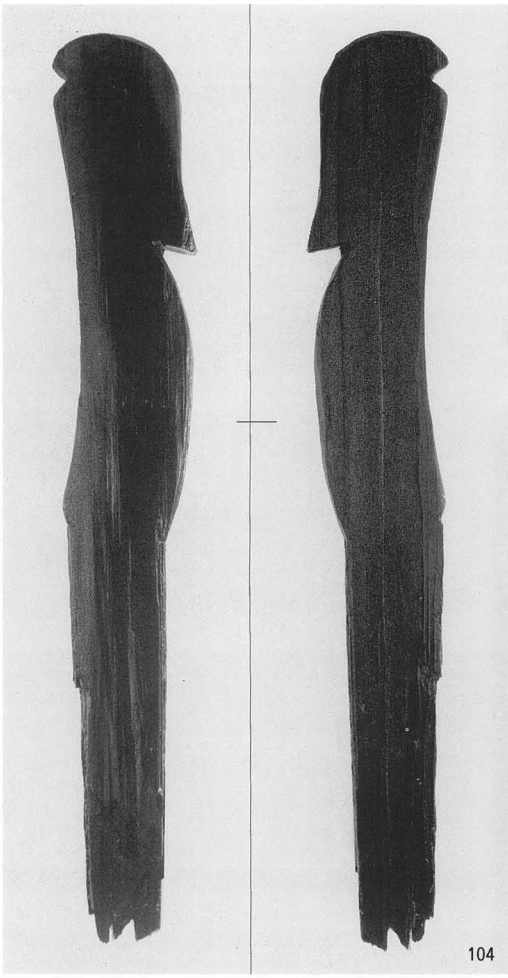


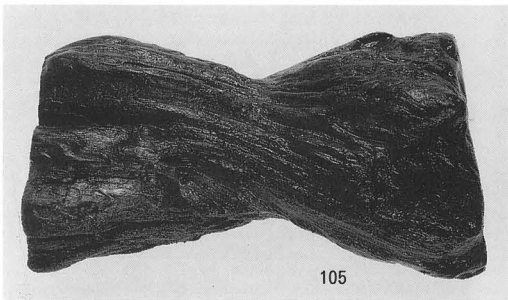
ＳＥ204（48～51）、ＳＥ205（54・56・57）、ＳＤ201（69・70）
ＳＤ204（73）、ＳＤ205（77・79・81）

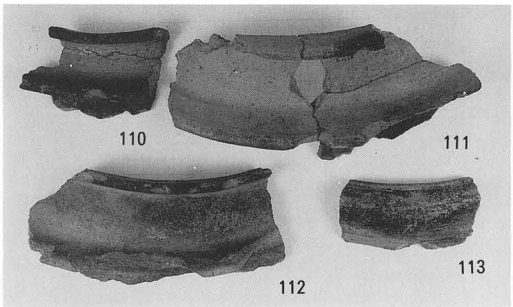
図版十四

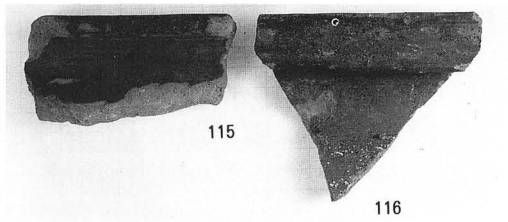


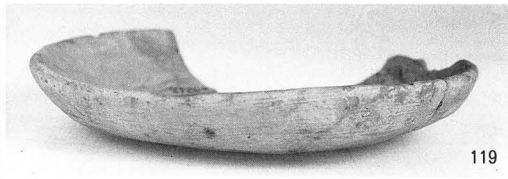
S D205

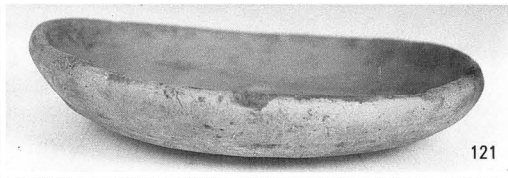


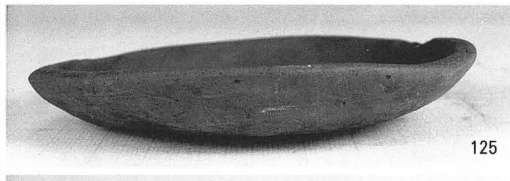


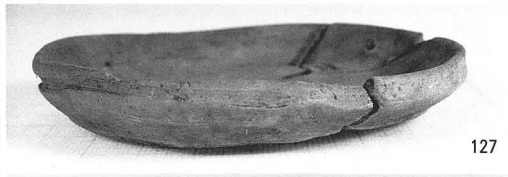


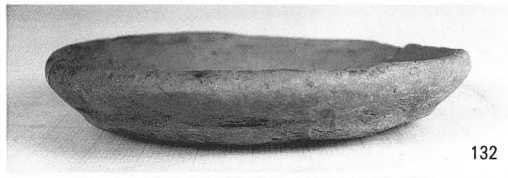


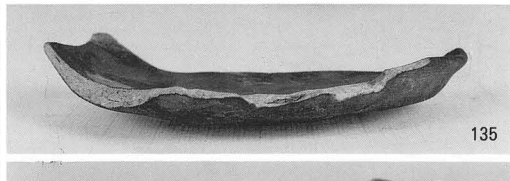


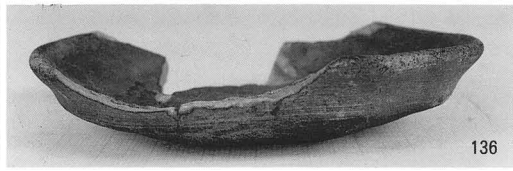






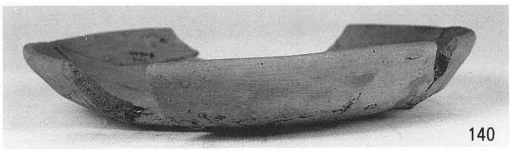


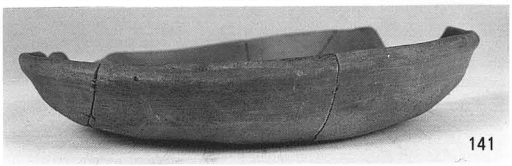


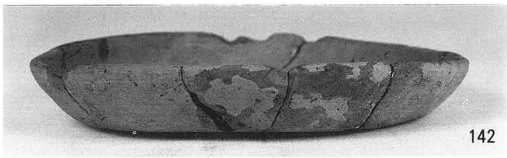


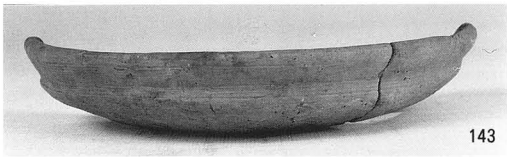
ＳＤ205（104・105・110～113・115・116）、ＳＤ206（他）

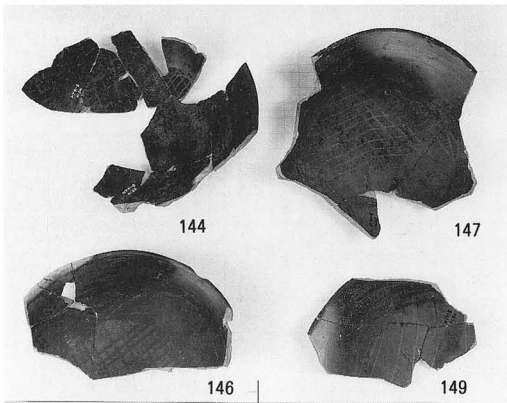
138

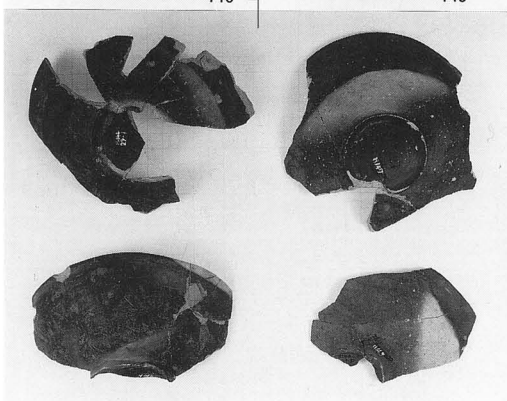

140

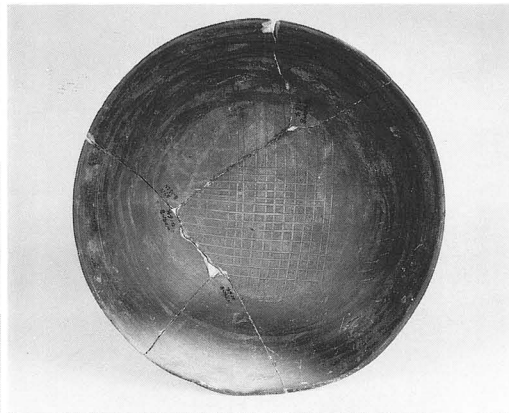

141

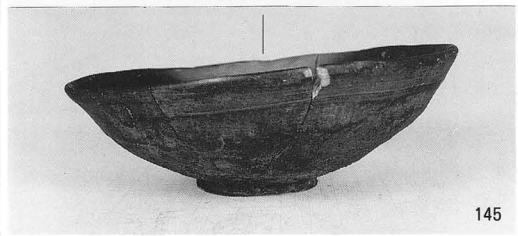

142

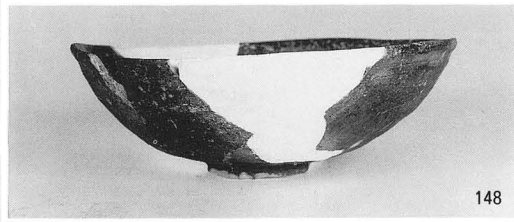

143



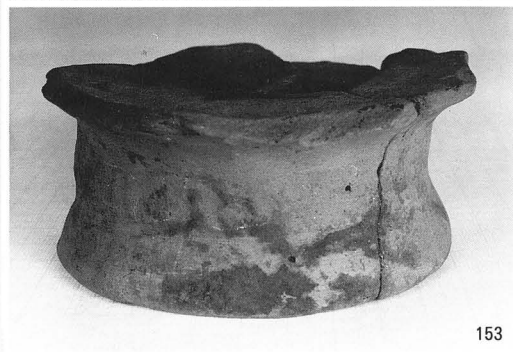




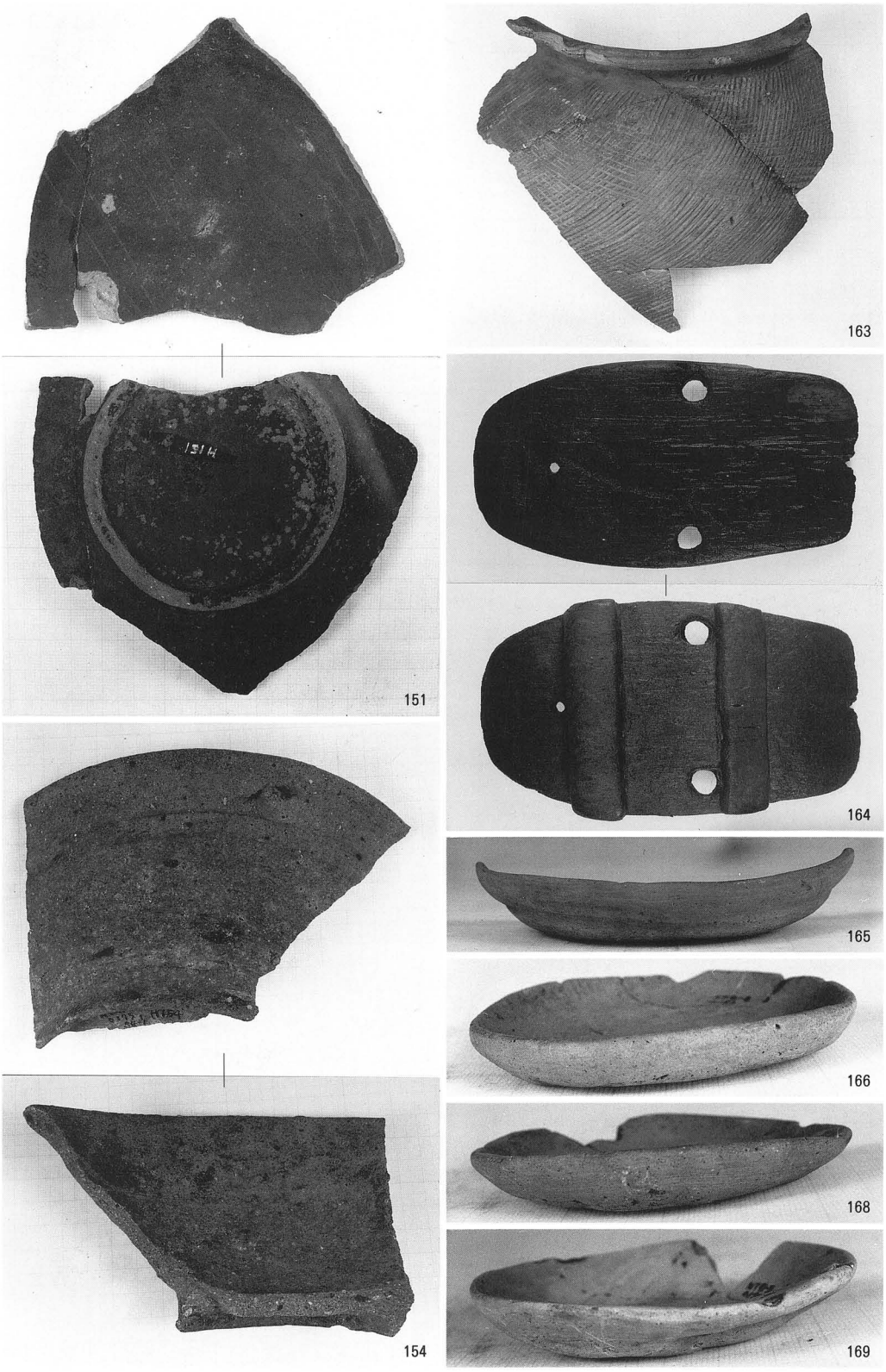

145


148

152

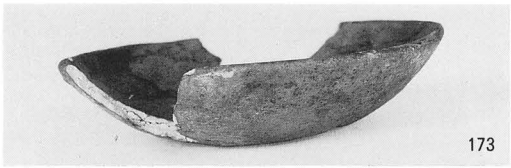

153

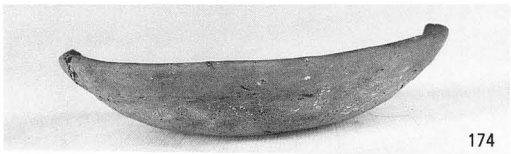
S D 206

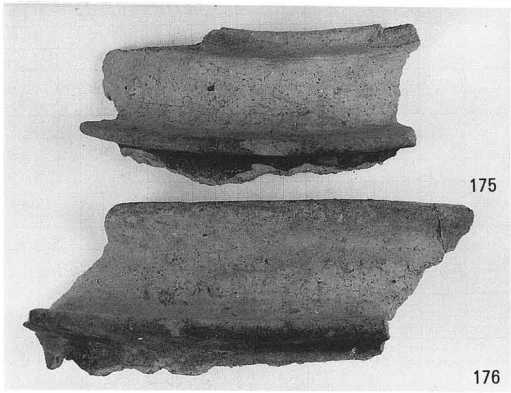


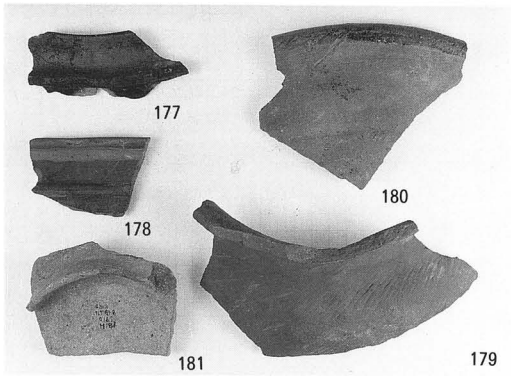
ＳＤ206（151・154・163・164）、ＳＤ207（165・166・168・169）

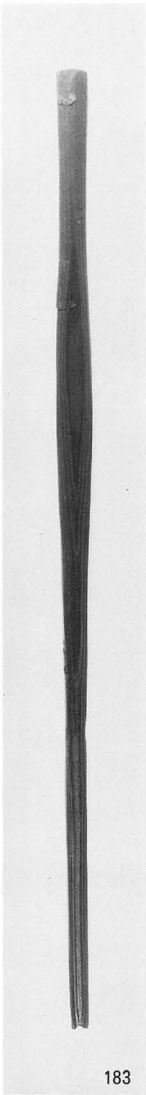
図版十八


173

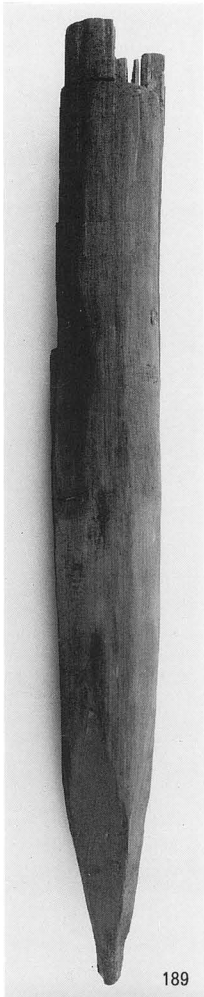

174

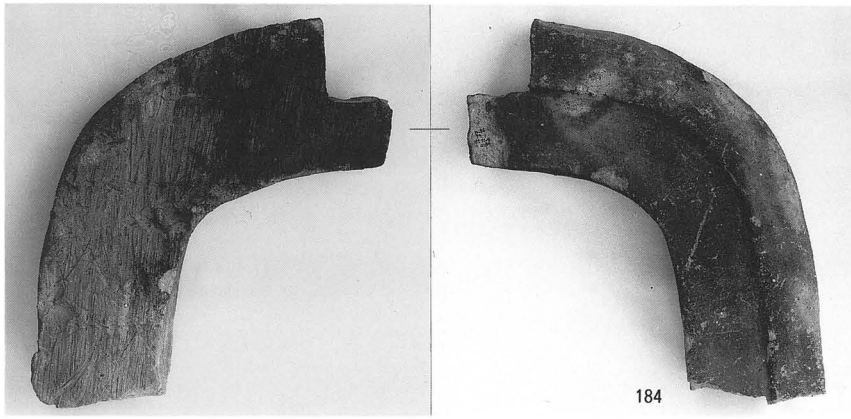

175
176

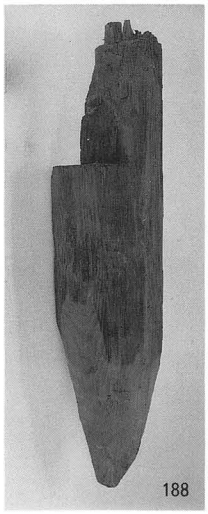

177
178
180
181
179


183

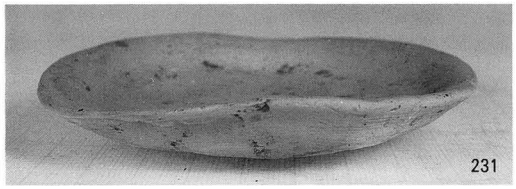
187

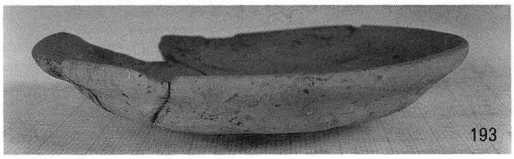

189

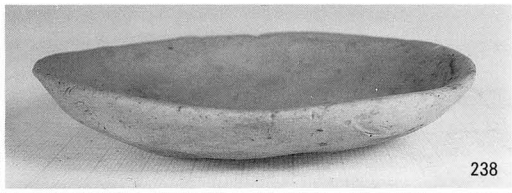

184

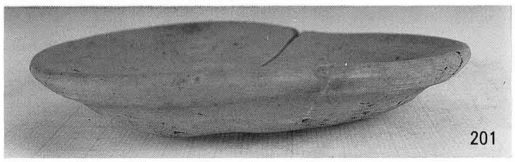

188

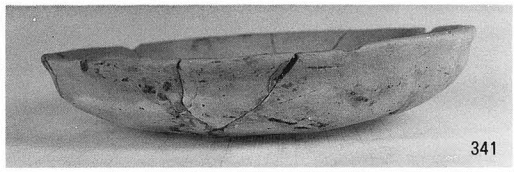
S D 207

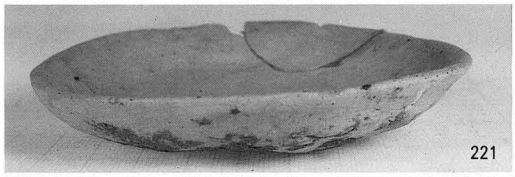


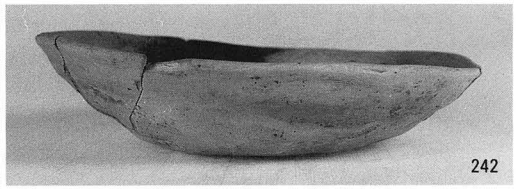


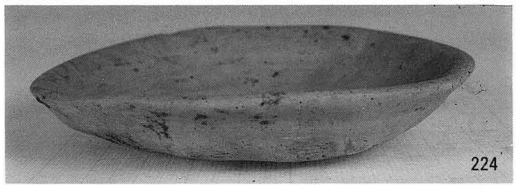


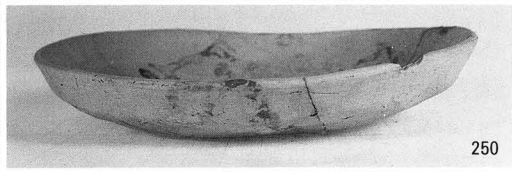




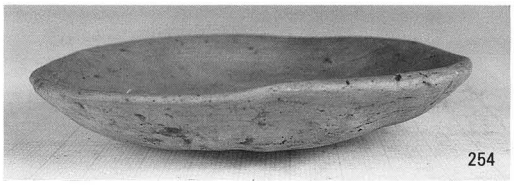


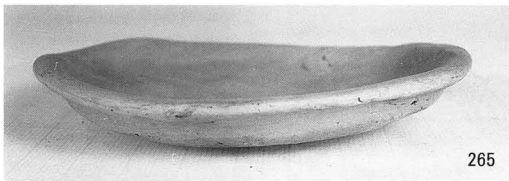


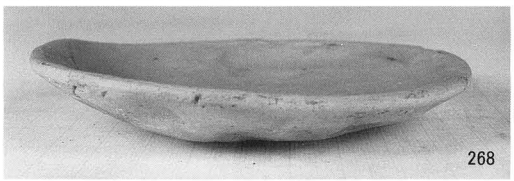


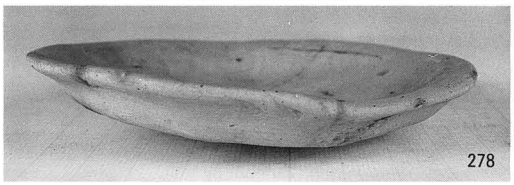


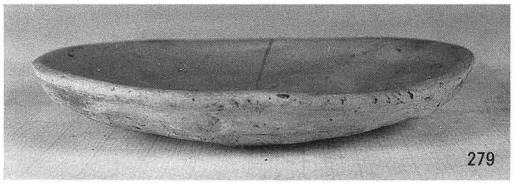
ＳＤ302（190）、ＳＷ301（他）

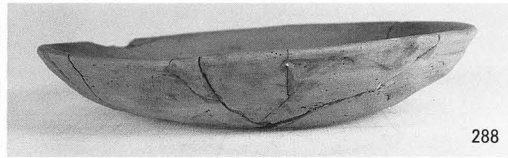


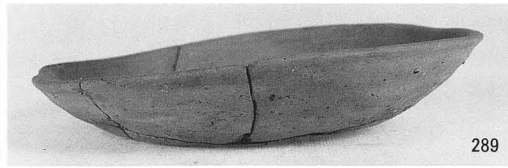


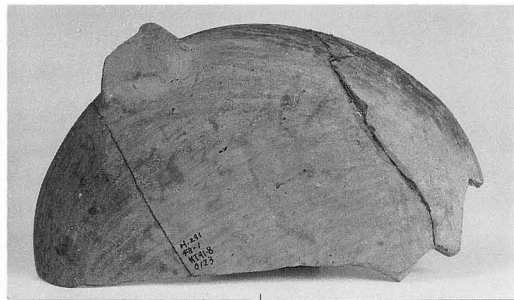


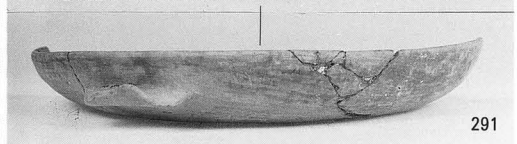


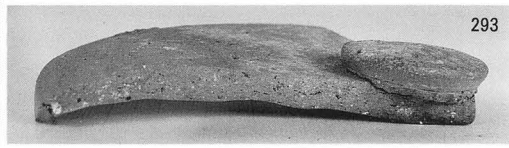












第８層（291・293）、ＳＷ302（他）

Ⅳ　中田遺跡第24次調査（NT94－24）

例　　言

1、本書は、八尾市刑部４丁目210－１で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1、本書で報告する中田遺跡第24次調査（NT94－24）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第151号　平成６年３月25日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が安堂清長氏から委託を受けて実施したものである。

1、現地調査は平成６年４月13日から平成６年４月26日（実働10日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積184㎡を測る。調査においては大見康裕・辻野優子・浜田千年・平沼寿隆・與儀徳保が参加した。

1、内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成７年５月31日に完了した。

1、本書作成に関わる業務は遺物実測－辻野・沢村妙子・田島和恵、図面レイアウト－原田、図面トレース－北原清子、遺物写真撮影－成海佳子が行った。

1、本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1　はじめに……85

2　調査概要……86

1）調査の方法と経過……86

2）基本層序……86

3）検出遺構と出土遺物……88

3　まとめ……94

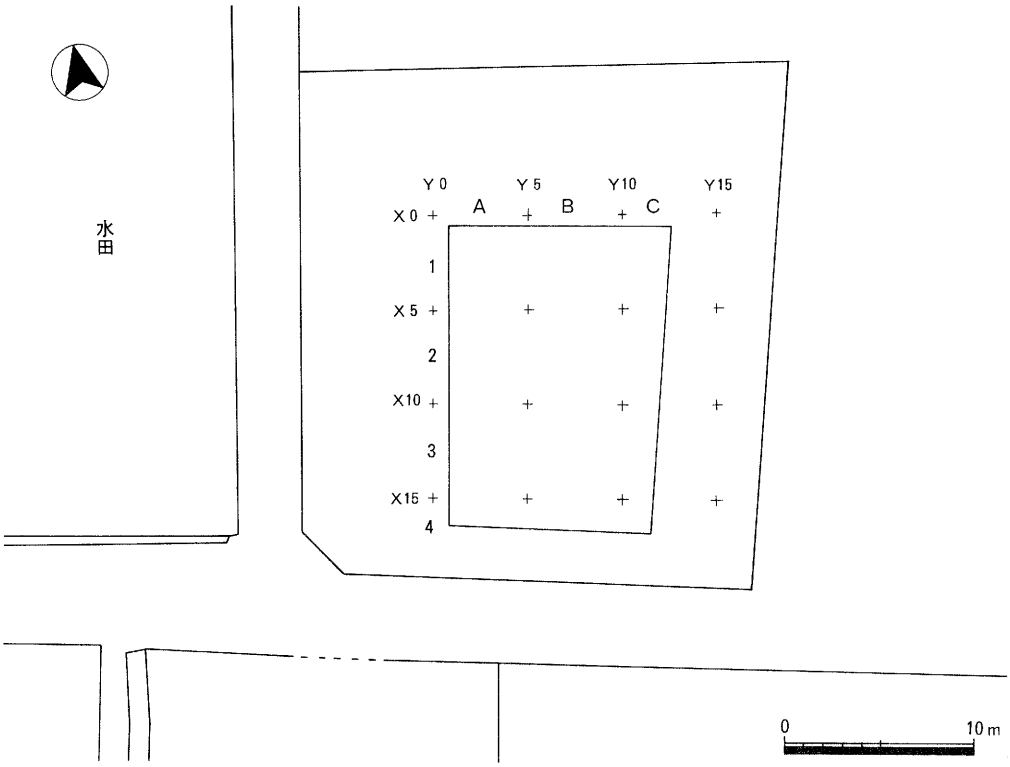
Ⅳ　中田遺跡第24次調査（NT94－24）

1　はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田１～６丁目、刑部１～４丁目、八尾木１～６丁目付近の東西1.1km・南北0.8kmがその範囲とされている。

地理的には長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地の標高10～11m付近を中心に展開している。当遺跡周辺にはこれらの地理的条件を背景として、南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡、北西に成法寺遺跡、北に小阪合遺跡が近接する位置に存在しており、遺跡分布が比較的密な地域であることが指摘できる。当遺跡内では、昭和45年以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施されており、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。

このような情勢下、安堂清長氏から八尾市刑部４丁目210－１において共同住宅建設の届出書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。この地点は中田遺跡範囲の東部に位置しており、



第１図　調査区設定図

近隣では、昭和54年に市教育委員会が南西約130m地点で実施した発掘調査で、古墳時代初頭に比定される吉備系土器群が多量に出土している。さらに、北西側に隣接する地点で平成5年に当調査研究会が行った発掘調査（NT93－17）においても、吉備地方の特殊器台に影響された弥生時代後期末の大型装飾器台3点が出土しており、前記調査地点と共に吉備地方に関連した遺物が数多く出土する地域として注目されていた。このような既往調査の結果を踏まえて、平成6年3月14日に八尾市教育委員会により遺構確認調査が実施された結果、弥生時代後期から中世に至る遺物包含層の存在が確認された。以上の経過を経て発掘調査を実施することに至ったもので、発掘調査は事業者・八尾市教育委員会・当調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき、当調査研究会が事業者から委託を受けて実施した。現地での発掘調査期間は、平成6年4月13日から平成6年4月26日までの10日間である。調査面積は184㎡を測る。内業整理および本書作成にかかる業務は、調査終了後平成7年5月31日まで随時実施した。（調査位置図はP－3参照）

2　調査概要

1）調査の方法と経過

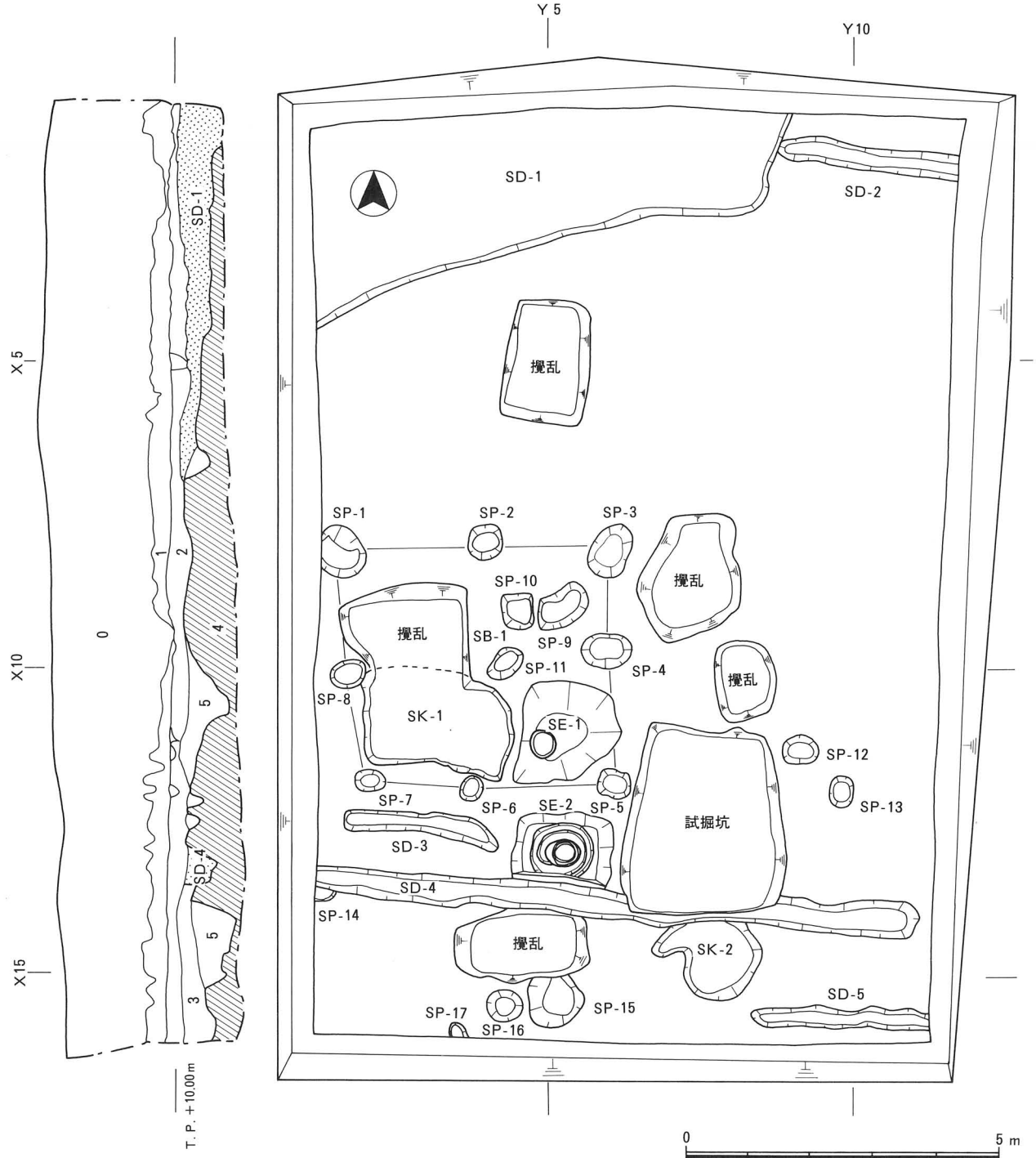
今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、建物の基礎工事で破壊される部分の東西16m、南北11.5mを調査対象とした。調査地の地区割については、調査地の北西隅のX0・Y0地点を基点として東西15m、南北20mにわたって設定した。一区画の単位は5m四方で、東西方向はアルファベット（西からA～C）、南北方向は算用数字（北から1～4）で示し、地区の表示は1A～4C区と呼称した。地点の表示には、東西線（X0～X15）・南北線（Y0～Y15）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、表土下0.6m前後までを機械掘削した後、以下0.2mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、表土下0.8～0.9m前後（標高9.90m前後）に存在する第4層上面で、平安時代末期に比定される掘立柱建物1棟（SB－1）、井戸2基（SE－1・SE－2）、土坑2基（SK－1・SK－2）、溝5条（SD－1～SD－5）、小穴17個（SP－1～SP－17）を検出した。遺物は遺構内および第2層・第3層からコンテナ箱に3箱程度が出土している。

2）基本層序

表土下0.8～0.9m付近で埋没河川が検出されており、この部分では粗粒砂～中礫を主体とする層相が認められた（第4層）。上層の第2層・第3層においても第4層の影響を受けたためか、細礫～中礫が優勢な層相であった。全体で4層を確認した。

第0層　盛土。層厚0.5～0.7m。上面の標高はT.P.＋10.7～10.9m。

第1層　旧耕土。N4/0灰色極細粒砂。層厚0.15m前後。



0　盛土
1　旧耕土　N 4/0 灰色極細粒砂
2　10YR 6/4 にぶい黄橙色極細粒砂（細礫～中礫を含む）
3　10YR 5/1 褐灰色極細粒砂　（　〃　）
4　7.5Y 8/1 灰白色細粒砂～中礫
5　2.5Y 5/2 暗灰黄色極細粒砂　（細礫～中礫を含む）

第２図　検出遺構平断面図

第２層　10YR６／４にぶい黄橙色細礫～中礫混じり極細粒砂。層厚0.1ｍ前後。古墳時代後期～近世に至る遺物を極少量含む。

第３層　10YR５／１褐灰色細礫～中礫混じり極細粒砂。層厚0.1～0.2ｍ。一部、欠損する部分がある。弥生時代後期～平安時代末期に至る遺物を少量含む。

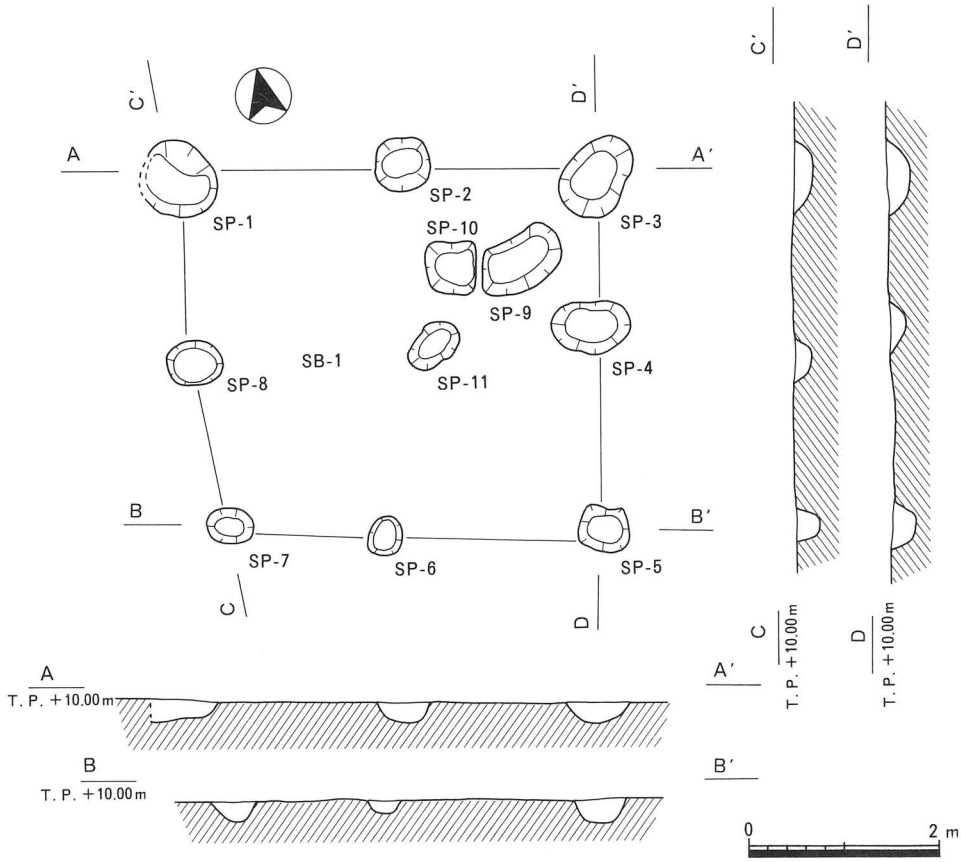
第４層　7.5Ｙ８／１灰白色細粒砂～中礫。層厚1.2ｍ以上。河川堆積土。弥生時代後期の遺物を含む。上面が平安時代末期の遺構検出面。

３）検出遺構と出土遺物

掘立柱建物（SB）

SB－１

２・３ＡＢ区で検出した。SP－１～SP－８で構成されている。東西２間（4.0～4.4ｍ）×南北２間（3.9ｍ）の規模を測る。主軸方向はほぼ磁北で、床面積は約16.4㎡を測る。建物を



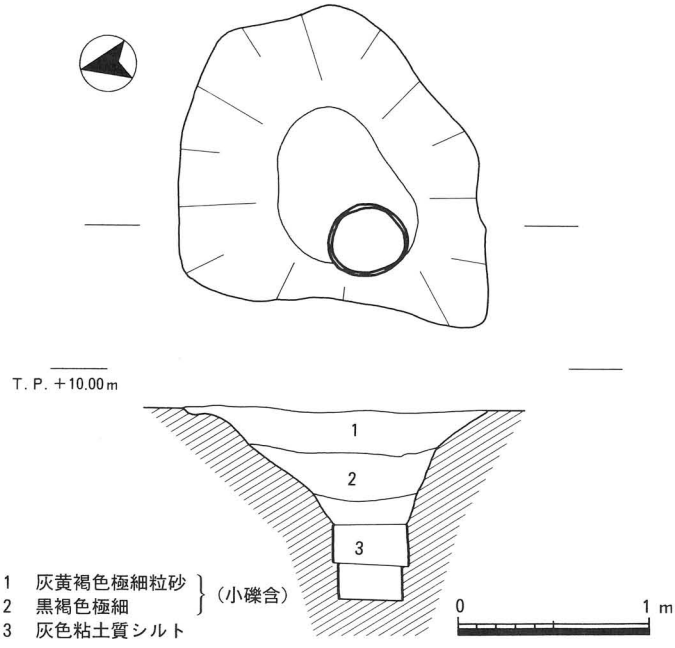
第３図　ＳＢ－１平断面図

構成する柱穴は、上面の形状が円形および楕円形を呈しており、径0.46～0.9m・深さ0.14～0.25mを測る。埋土は褐灰色細礫混じり細粒砂である。遺物はSP－2・3・5・7・8から弥生土器、土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

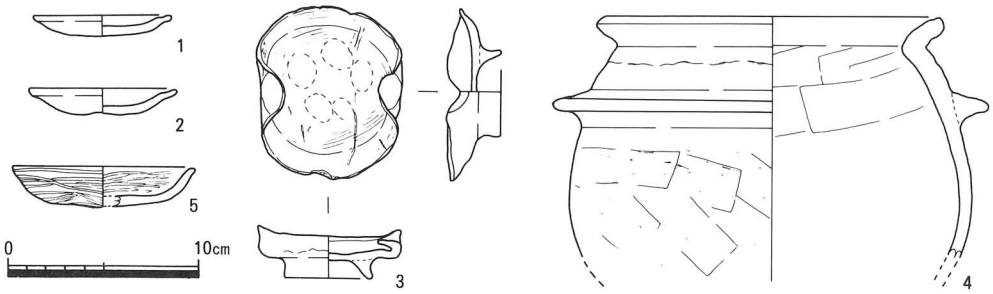
井戸（SE）

SE－1

3ＡＢ区で検出した。掘形の平面形状が不定形を呈する曲物積み上げ井戸で、東西幅1.58m、南北幅1.6m、深さ1.0mを測る。井戸側は、摺鉢状に掘られている掘形の南西部に設置されている。調査時点では最下段の井戸側（曲物－径35cm・高さ19cm）のみが遺存していた。埋土は、断面形状に沿って3層（第1層～第3層）が堆積しており、最下層の第3層は炭を含む灰色粘土質シルトである。遺物は第1層～第3層から土師器小皿・台付き耳皿・土釜、瓦器椀・瓦器小皿の小片が少量出土している。そのうち図化し得たものは、土師器小皿（1・2）・台付き耳皿（3）・土釜（4）、瓦器小皿（5）の5点である。（1・2）はともに1/6程度が遺存する土師器小皿の小片である。いわゆる「て」字状口縁を有する土師器小皿の最終段階の形態を呈するものである。胎土はともに精良で、色調は（1）が明灰白色、（2）が淡黄褐色である。（3）は高台付き耳皿で完形品である。口径9.2cm、器高2.8cm、高台径4.8cm、高台高1.0cmを測る。全体に丁寧な作りであるが、内底面には高台との接合の際に内側から押えたため生じた指頭大のくぼみが5ケ所認められる。胎土は精良で色調は灰白色である。（4）は口縁部の1/4程度が遺存する土師器土釜である。鍔は断面三角形でほぼ水平に貼付けられているが、上部の調整は丁寧でなく、一部には指頭整形による圧痕が残されている。胎土には石英・長石・チャートの小砂粒が多量に含まれている。色調は茶灰色である。（5）は1/4程度が遺存する瓦器小皿である。体部外面および底部内面に密なヘラミガキが施されている。胎土は精良で色調は淡灰色を呈する。出土遺物の特徴から、井戸の廃絶時期は12世紀前葉の一時期が推定される。



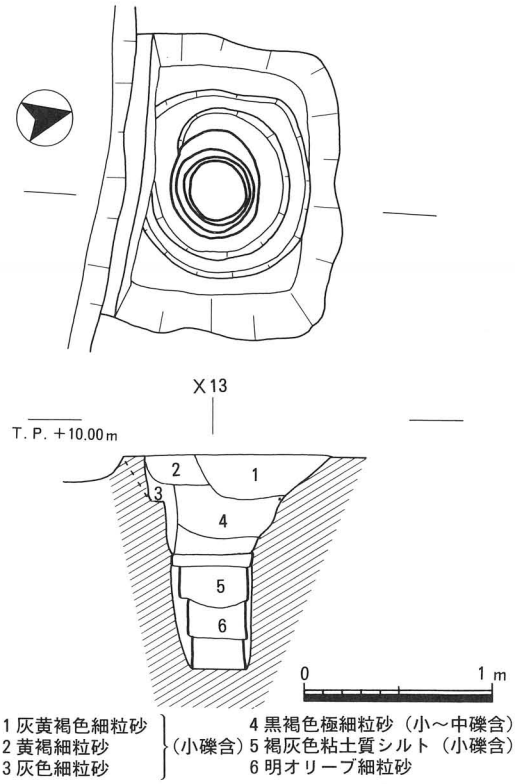
第4図　ＳＥ－1平断面図



第５図　ＳＥ－１出土遺物実測図

SE－２

SE－１の南側で検出した。SE－１と同様、曲物積み上げ井戸である。掘形の南部はSD－４により切られているが、検出部分からみて平面形状は隅丸方形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.58ｍ、南北幅1.1ｍ、深さ1.16ｍを測る。井戸側は摺鉢状を呈する掘形のほぼ中央部に設置されており、調査時点では曲物４段が遺存していた。埋土は６層（第１層～第６層）から成る。遺物は第３層を除く各層から、土師器小皿・中皿、瓦器椀・小皿、須恵器鉢の小片が少量出土している。そのうち、図化し得たものは土師器小皿（６）・中皿（７）、瓦器椀（８）・小皿（９・10）の５点である。（６）は1/4程度が遺存する土師器小皿である。内面および口縁部外面はヨコナデ、他はナデを施す。胎土は精良で色調は淡茶色である。（７）は復元口径が15.2㎝を測る土師器中皿である。口縁端部はヨコナデのため側面に明瞭な面を有する。胎土は精良で色調は淡茶灰色である。（８）は復元口径が14.4㎝を測る瓦器椀である。体部外面および体部内面は密なヘラミガキ、見込みには格子状ヘラミガキが施されている。胎土は精良で色調は淡灰色である。（９・10）は瓦器小皿で、ともに1/10程度が遺存する小片である。口縁部は（９）が斜上方に伸び、（10）は外反して伸びる。（10）は底部外面以外にヘラミガキが施されている。２点ともに胎土は精良で、色調は黒灰色である。遺物の特徴から井戸の廃



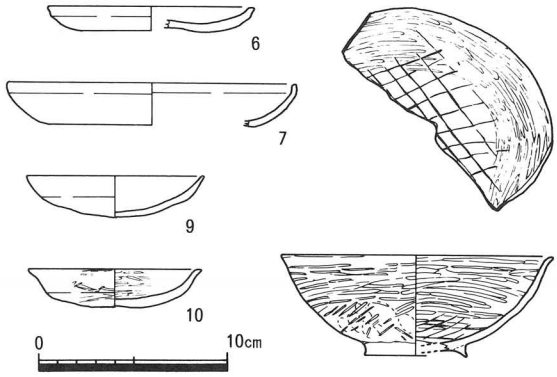
第６図　ＳＥ－２平断面図

絶時期は12世紀中葉の一時期が推定される。

土坑（SK）

SK－1

3Ａ区で検出した。北部が撹乱されており全容は不明である。検出部分では東西方向に長い不整方形を呈している。東西幅2.39m、南北幅1.5m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色細粒砂の単一層である。遺物は古墳時代後期～奈良時代の土師器甕、須恵器杯身のほか、平安時代末期の土師器小皿の小片が少量出土している。



第７図　ＳＥ－２出土遺物実測図

SK－2

3・4Ｂ区で検出した。不定形を呈するもので、北部はSD－4に切られている。検出部分で、東西幅1.79m、南北幅1.22m、深さ0.14mを測る。埋土は2層から成る。遺物は土師器小皿、瓦器椀の小片が少量が出土しているが時期は明確でない。

溝（SD）

SD－1

調査区の北部で検出した。北肩は調査区外に至るため不明である。検出部分では東西方向に直線的に伸びるもので、東端部分で屈曲し北東方向に流路を変えている。検出長7.4m、幅1.82～3.3m、深さ0.11mを測る。埋土は2層から成る。遺物は弥生時代後期の甕・高杯、古墳時代後期の土師器甕・高杯、須恵器杯蓋・甕、平安時代末期の土師器小皿・瓦器椀が出土しているがいずれも小片化したものである。

SD－2

調査区の北東部で検出した。東西方向に伸びるもので、東部は調査区外に至る。検出長2.42m、幅0.36m、深さ0.12mを測る。埋土は灰黄褐色中礫混じり極細粒砂の単一層である。遺物は古墳時代後期の土師器甕・高杯、須恵器壷・甕、平安時代末期の土師器小皿等の小片が少量出土している。

SD－3

3Ａ区で検出した。東西方向に伸びるもので、全長2.53m、幅0.33～0.4m、深さ0.11mを測る。埋土は灰黄褐色中礫混じり極細粒砂の単一層である。遺物は土師器・須恵器の小片が極少量出土したが時期は明確でない。

SD－4

3Ａ区から3Ｃ区にかけて東西方向に直線的に伸びるもので、西部は調査区外に至る。西からSP－14・SE－2・SK－2を切っている。検出長9.65m、幅0.5m前後、深さ0.12～0.15mを測る。埋土は上層の褐灰色極細粒砂と下層の灰色中粒砂の2層である。遺物は土師器・須恵器・瓦器椀の小片が少量出土している。

SD－5

調査地の南東部で検出した。東西方向に直線的に伸びるもので東部は調査区外に至る。検出長2.9m、幅0.27m、深さ0.06mを測る。埋土は灰色細粒砂の単一層である。遺物は土師器の小片が少量出土したが時期は明確でない。

小穴（SP）

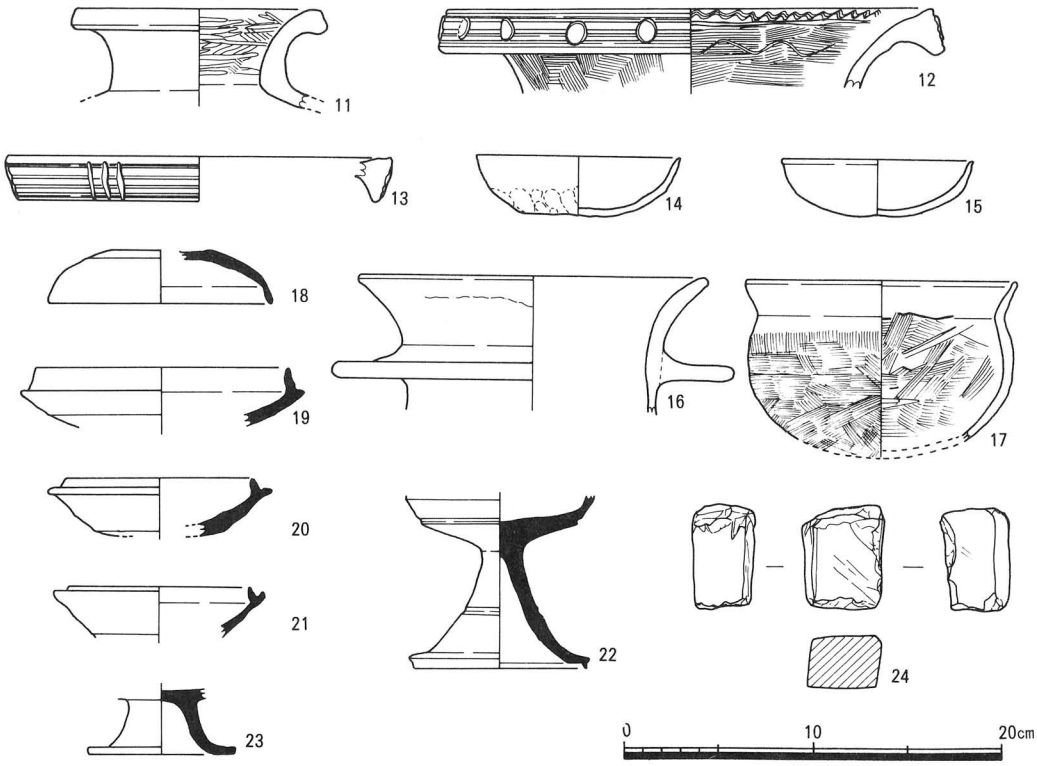
小穴は総数で17個（SP－1～SP－17）を検出した。概ね、調査区の中央部から南部にかけて検出されている。そのうち、SP－1～SP－8は掘立柱建物（SB－1）を構成する柱穴である。これらを除いた小穴9個SP－9～SP－17は、上面の形状では円形・楕円形・隅丸方形に区別できる。規模は、SP－9・SP－15が幅0.9mでやや大型である以外は、幅0.5m前後のものが中心である。深さは、0.04～0.2mで比較的浅いものが多い。埋土は褐灰色小礫混じり細粒砂の単一層である。遺物はSP－2・3・5・7・8・10・13～15から弥生土器・土師器・須恵器・瓦器の小片が極少量出土している。

包含層出土遺物

第3層を中心としてコンテナ箱2箱程度が出土した。全体に小破片で出土したものが大半を占めている。時期的には弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代末期から鎌倉時代初頭に比定されるものに大別される。そのうち、図化したものは14点（11～24）である。

弥生時代後期のものとしては、3点（11～13）図化した。（11）は口径12.8cmを測る広口壷である。口頸部が外反して伸びるもので、端部は垂下して面を有する。生駒山西麓産の特徴とされる茶褐色の色調で、長石・角閃石・黒雲母が多量に含まれている胎土が使用されている。（12）は口縁端部が垂下し、外面に面を持つ広口壷である。復元口径25.7cmを測る。口縁部外面に5状の沈線を巡らせた後、円形浮文が等間隔に貼り付けられている。口縁部内面はハケナデの後1条の波状文さらに2本の沈線を隔てて5本を1単位とする波状文が施文されている。胎土および色調は（11）と同様である。（13）は垂下する口縁部の小片で、器種は広口壷ないしは器台等が考えられる。口縁端面には4本の沈線を巡らした後、3本を1単位とする棒状浮文が設けられている。なお、棒状浮文・口縁端部下半・口縁部内面の一部に赤色顔料が塗布されている。胎土ならび色調は（11）と同様である。

古墳時代後期から飛鳥時代に比定されるものは11点（14～24）図化した。（14・15）は復元



第８図　第３層出土遺物実測図

口径が10cm前後を測る土師器坏である。口縁端部が尖り気味で終る（14）と口縁端部が小さく外反し外面に沈線が巡る（15）がある。２点ともに胎土は精良で、色調は（14）が赤茶色、（15）が明橙色である。（16）は土師器土釜である。口縁部は外反して伸びるもので、鍔は水平方向に貼り付けられている。色調は茶灰色で、胎土には長石・角閃石・赤色酸化土粒が含まれている。（17）は復元口径14.4cm、器高9.4cmを測る小型甕である。体部外面は下位が乱方向、中位が横方向、上位が縦方向に密なハケナデ調整が行われている。赤茶色の色調で胎土には石英・長石・赤色酸化土粒が少量含まれている。（18）は１/６程度が遺存する須恵器杯蓋である。偏平な器形で口縁部は下外方に下り端部は丸い。（19～21）は須恵器杯身である。３点ともに１/４程度が遺存している。（19）は立上りが内傾して伸びた後直立し、受部は水平に短く伸びる。（20・21）は立上りが内傾して短く伸びる。受部は水平に短く伸びる（20）と内湾して上方に伸びる（21）がある。（22）は須恵器高杯で脚部は完存している。裾部径は9.0cm、脚部高は6.4cmを測る。胎土には0.1～１mm大の小砂粒が多量に含まれている。焼成は堅緻で裾部外面および杯部内面に灰かぶりが認められる。色調は灰白色である。（23）は短脚の須恵器高杯である。裾部径7.8cm、脚部高3.8cmを測る。図化した須恵器類は（18～23）は概ね６世紀末～７世紀中葉に比定される。（24）は４面に使用面を認める砥石で、石材は流紋岩である。

3　まとめ

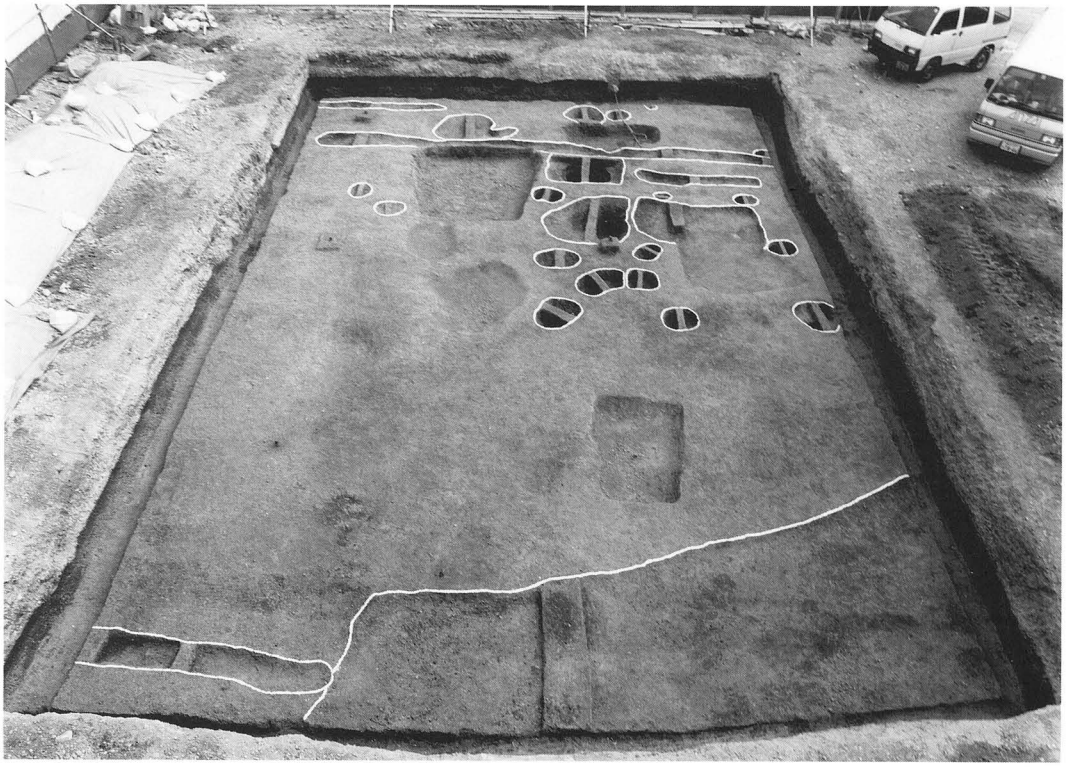
今回の調査では、小面積にもかかわらず、弥生時代後期から平安時代末期の遺物を含む包含層の存在と平安時代末期の居住域を構成する遺構を検出した。遺構を検出した第４層上面は、埋没自然河川の上面に対応するもので、下層確認調査においては少なくとも1.2ｍ以上の堆積が認められた。層相は、上部に細礫～中礫が混在し、下部では粗粒砂が優勢であることから、比較的流勢の早い自然河川であったことが推定される。上部を中心として弥生時代後期の遺物が出土していることから、この時期以前の埋没自然河川と考えられる。なお、同様の土層の広がりは、北西部の近接する位置で実施された発掘調査（NT93－17）[註1]では確認されていないことから、流路は南北方向に伸びるもので、その西端が当調査地の西部付近にあったものと考えられる。東部については、調査地から東300ｍ地点に位置する玉串川にかけて自然堤防が形成されており、今回検出した自然河川も旧玉串川に関連した河川の可能性もあり、今後も付近の調査には注意を払う必要があろう。

一方、平安時代末期の遺構については、掘立柱建物を中核とする居住域を検出した。検出した井戸２基はSE－１が12世紀前葉、SE－２が12世紀中葉に比定されるもので、約半世紀にわたって集落が営まれていたことが明らかとなった。特に12世紀中葉段階においては、掘立柱建物（SB－１）・井戸（SE－２）・溝（SD－４）を１単位とする遺構配置が想定される。これらの遺構以外にも南壁面には数多くの小穴の存在が確認でき、集落がさらに南部一帯に広がっていたようである。なお、調査地の南に近接する位置に、御剣神社が鎮座していることから、今回検出した集落はこれらを中心に展開していたことが推定される。

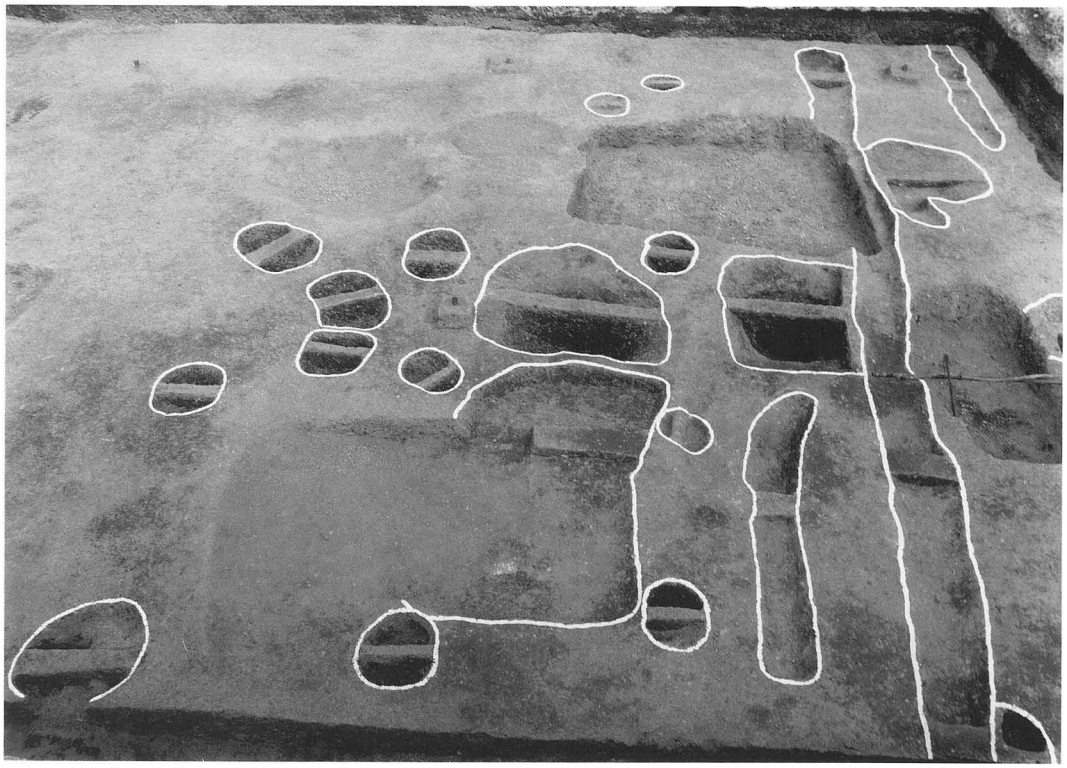
註

註１　高萩千秋　1993「Ⅱ中田遺跡（第17次調査）」『㈶八尾市文化財調査報告43』㈶八尾市文化財調査研究会

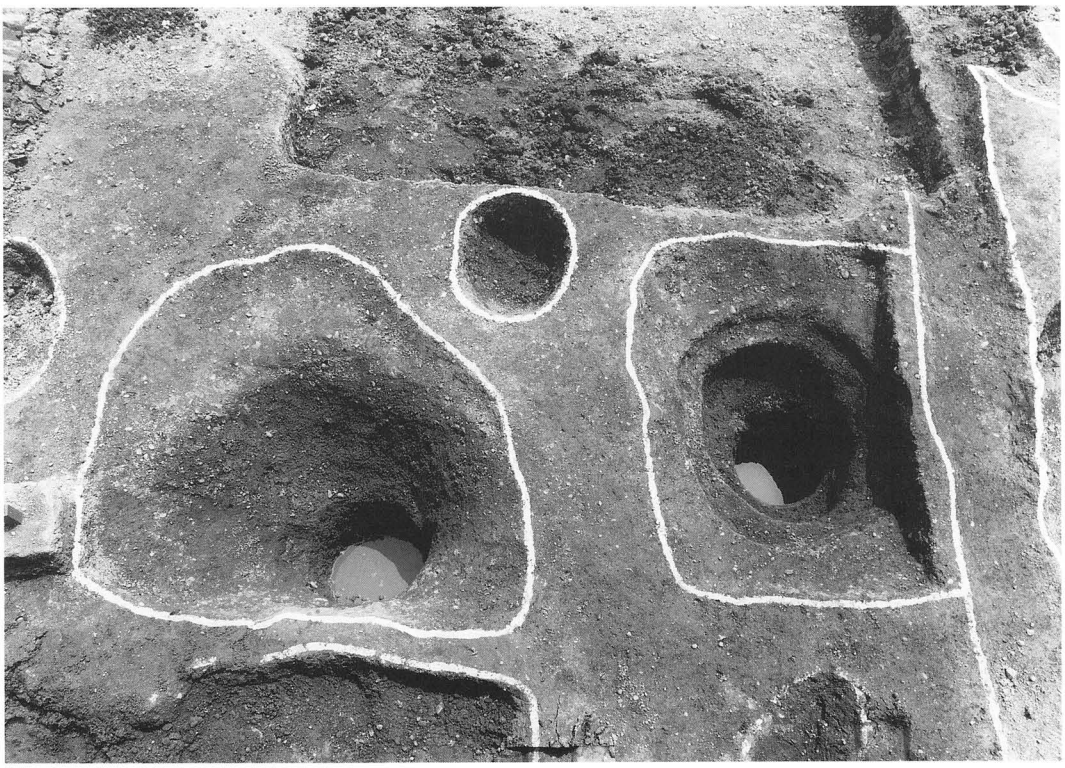
図　　版



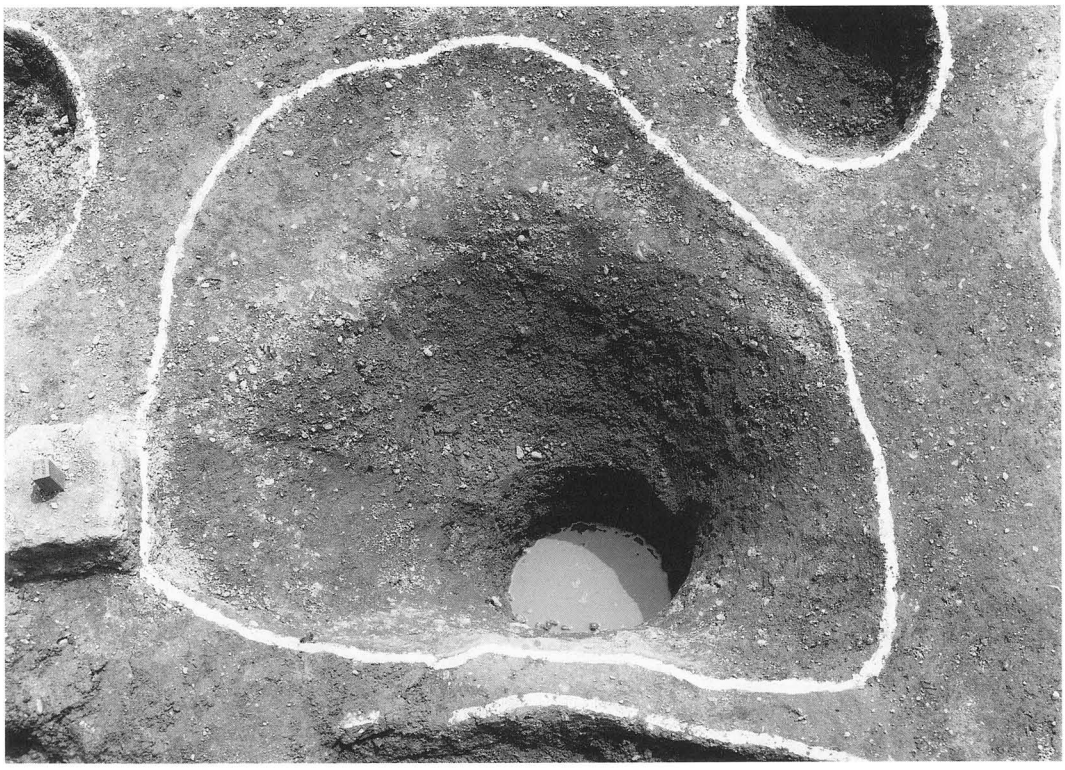
調査区全景（北から）



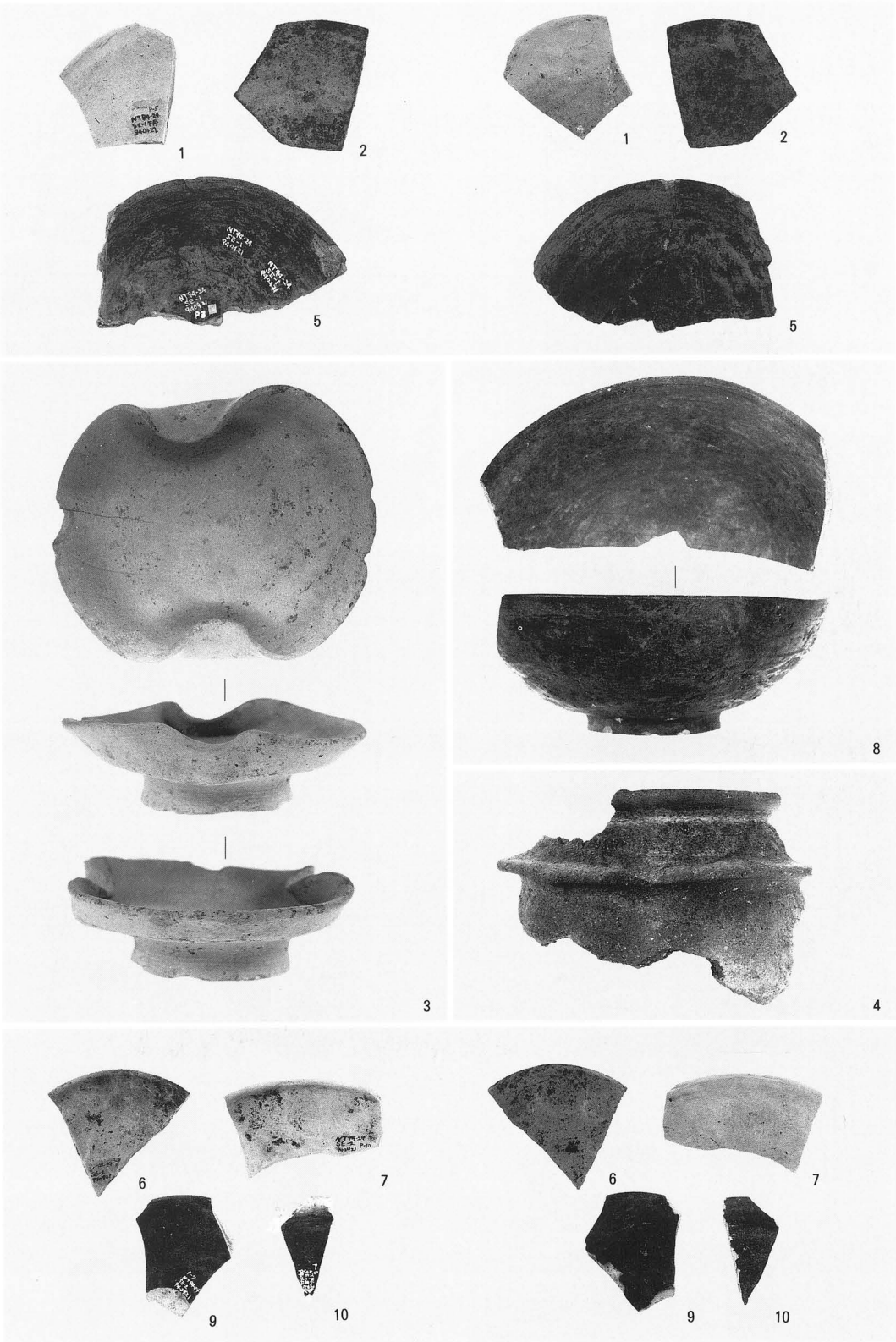
ＳＢ－１検出状況（西から）



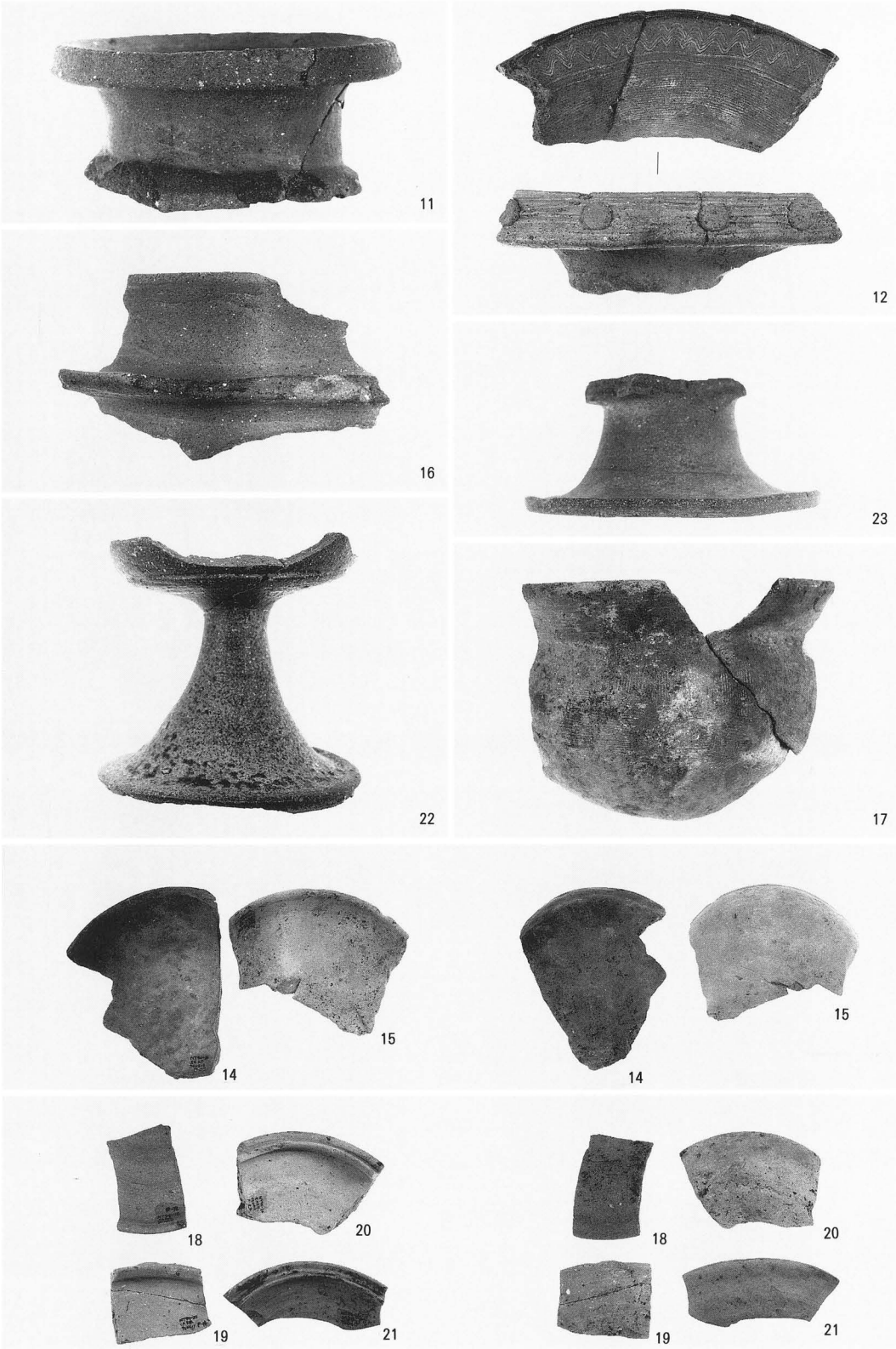
ＳＥ－１・ＳＥ－２検出状況（西から）



ＳＥ－１検出状況（西から）



ＳＥ－１（１～５）・ＳＥ－２（６～10）出土遺物



第3層出土遺物

V　中田遺跡第28次調査（NT94－28）

例　　言

1、本書は八尾市刑部２丁目地内で実施した公共下水道工事（平成６年度第５工区）に伴う発掘調査である。

1、本書で報告する中田遺跡第28次調査（NT94－28）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋297－３号　平成６年９月22日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1、現地調査は平成６年11月18日から12月５日（実働４日間）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は20.96㎡を測る。なお、調査においては中西明美、西村和子が参加した。

1、内業整理は、現地調査終了後実施し平成７年７月31日に終了した。

1、本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレース－中西、西村（和)、西村（公）が行った。

1、本書の執筆、編集は西村（公）が行った。

目　　次

1　はじめに……95

2　調査概要……96

1）調査の方法と経過……96

2）検出遺構と出土遺物……96

3　まとめ ……102

Ⅴ　中田遺跡第28次調査（NT94－28）

1　はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、中田１～６丁目、八尾木北１～６丁目、刑部１～４丁目付近にあたる。地理的には河内平野のほぼ中央部を流れる長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地にあたる。当遺跡の西には矢作遺跡が、南には東弓削遺跡が、北には小阪合遺跡がある。

当遺跡内では、当調査研究会が27件の調査を行っている他、大阪府教育委員会文化財保護課、八尾市教育委員会文化財室により調査が実施されており、弥生時代～近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回調査を行った場所は、八尾市刑部２丁目地内で、平成２年度に当調査研究会が実施した第６次調査地に隣接している。従来から当調査地近辺では発掘調査が行われており、弥生時代から近世に至るまでの遺構及び遺物が出土している。このことから、今回の工事に伴い発掘調査を実施するに至ったもので、事業者、八尾市教育委員会文化財課、財団法人八尾市文化財調

第１図　調査地周辺図

査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成６年11月18日～12月５日で、調査面積は20.96㎡を測る。

2　調査概要

１）調査の方法と経過

調査地は、到達立坑が１箇所と中間立坑が３箇所あり、到達立坑をNo.１、中間立坑を西からNo.２～No.４とした。

調査に際しては、周辺の調査成果をもとに、現地表下0.8ｍまでに存在する盛土を機械で掘削し、以下約0.8ｍは人力と機械を併用して掘削を行い調査を実施した。

また、到達立坑部分は、現地表下約4.0ｍまでの下層確認調査を実施した。

２）検出遺構と出土遺物

No.１

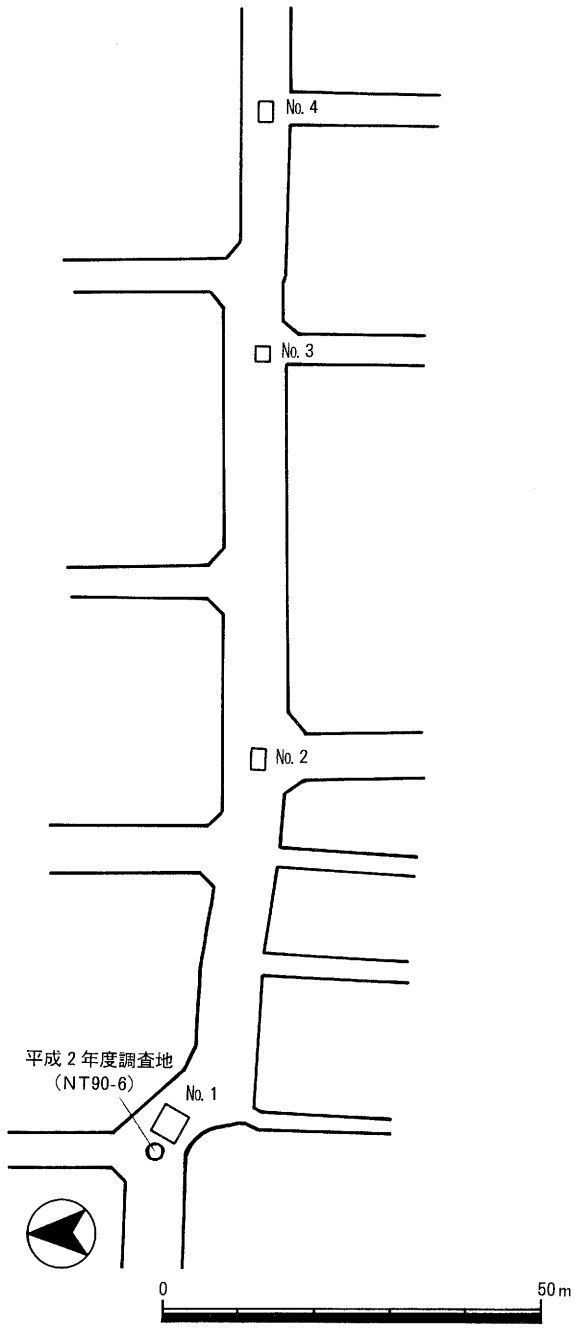
４×４ｍの到達立坑掘削工事の調査区である。

①　基本層序

第０層　盛土（上面標高T.P.＋10.6ｍ）。層厚0.7ｍ。

第１層　暗灰色（N　3/）細砂混粘土（旧耕作土）。層厚0.1ｍ。

第２層　褐灰色（10YR　4/1）細砂混粘土。層厚0.15ｍ。鎌倉時代末期頃の遺物包含層。



第２図　調査位置図

第３層　黒褐色（10YR　3／1）シルト混粘土。層厚0.1ｍ。

平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺物包含層。

上面で溝１条（SD-101）検出した。

第４層　黒色（５Ｙ　2／1）粗砂混粘土。層厚0.15～0.4ｍ。

奈良時代の遺物包含層。

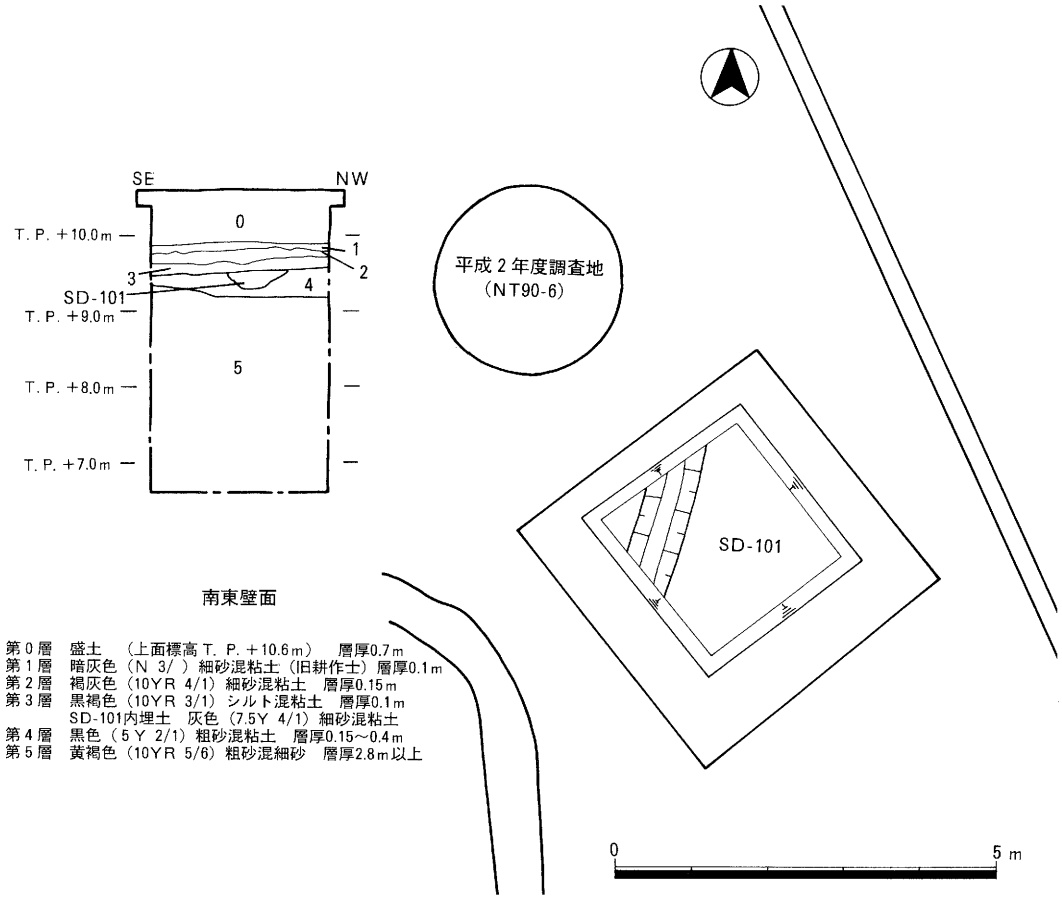
第５層　黄褐色（10YR　5／6）粗砂混細砂。層厚2.8ｍ以上。

②　検出遺構・出土遺物

溝（ＳＤ）

SD-101

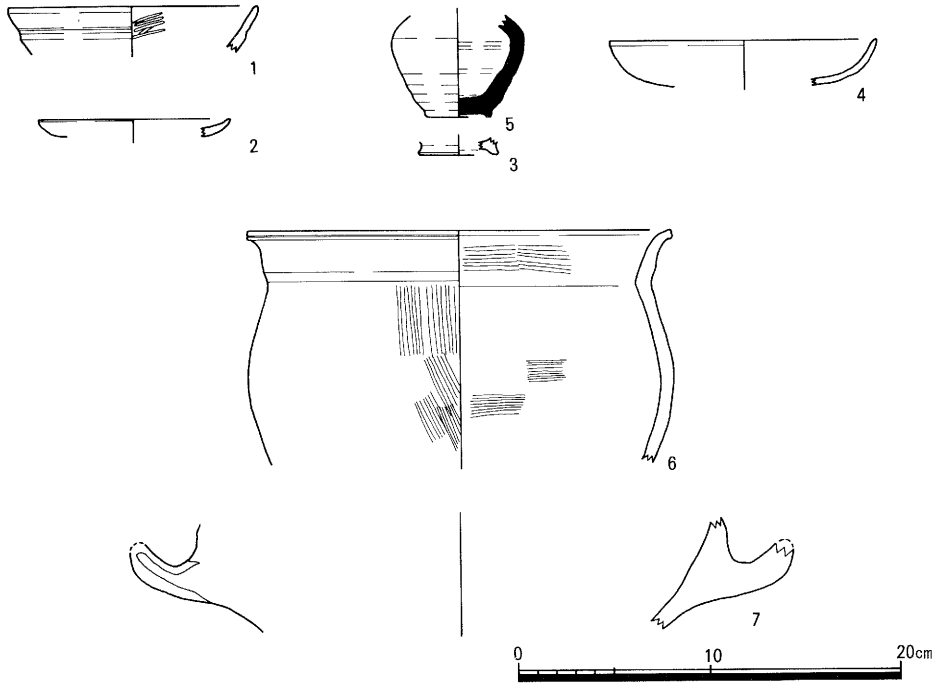
南北方向に伸びるもので、幅0.7ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は灰色（7.5Ｙ４／１）細砂混粘土で、溝内からは瓦器の椀（１)、土師器の皿（２）が出土した。



第３図　No.1　平断面図

また第３層内からは、瓦器の椀（３）、土師器の皿（４）、須恵器の壷（５）が、第４層内からは、土師器の甕（６）・鍋（７）が出土した。

第５層以下は粗砂混細砂層が現地表下4.0ｍまで堆積していた。この層内からの遺物の出土はなかった。



第４図　No.1　SD-101（１・２）第３層（３～５）第４層（６・７）出土遺物実測図

No.2

東西２ｍ×南北1.5ｍの中間立坑掘削工事の調査区である。

①　基本層序

第０層　盛土（上面標高T.P.＋10.7ｍ）。層厚0.7ｍ。

第１層　暗灰色（N　3/）細砂混粘土（旧耕作土）。層厚0.1ｍ。

第２層　灰黄褐色（10YR　6/2）シルト混粘土。層厚0.2ｍ。

第３層　褐灰色（10YR　4/1）細砂混粘土。層厚0.3ｍ。

平安時代末期頃から鎌倉時代の遺物包含層。

第４層　黄橙色（10YR　7/8）シルト混粘土。層厚0.3ｍ以上。

上面で小穴１個（SP-101）と溝１条（SD-101）を検出した。

② 検出遺構と出土遺物

小穴（ＳＰ）

SP-101

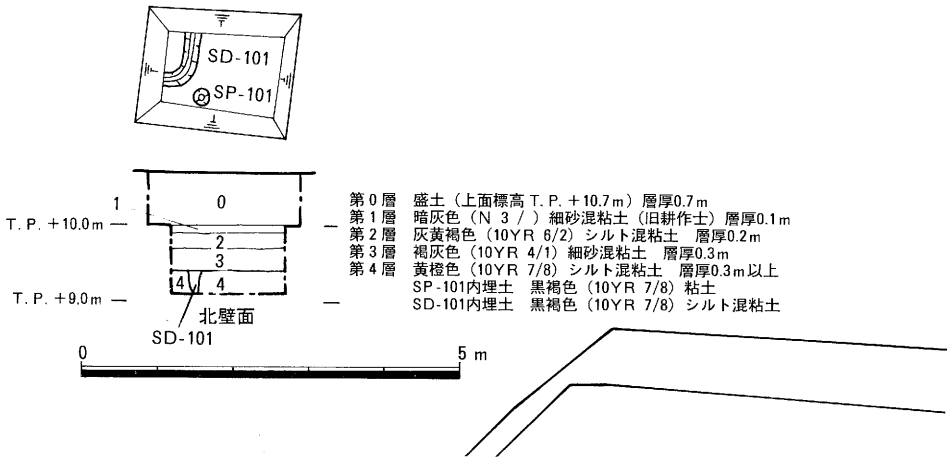
径0.2ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色（10YR 7/8）粘土で、小穴内からは、瓦器の椀（8）が出土した。

溝（ＳＤ）

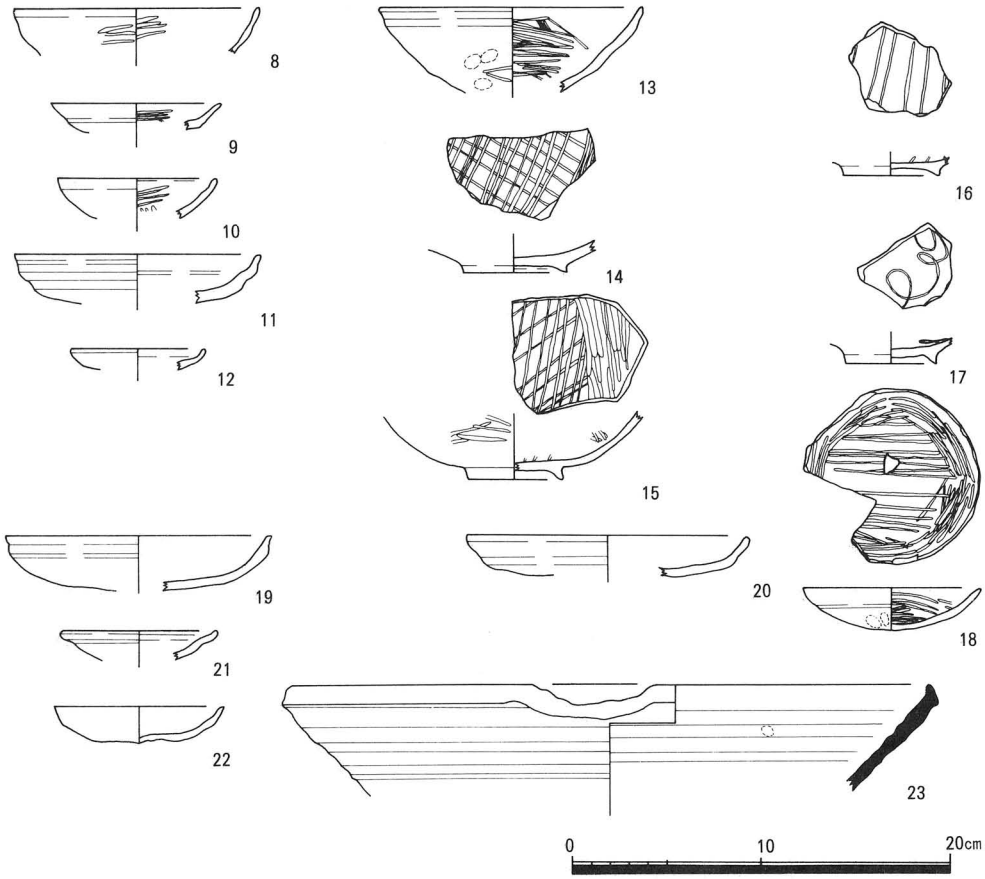
SD-101

南北方向に伸び、溝の南側は西に折れ曲がるもので、幅0.2ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色（10YR 7/8）シルト混粘土で、溝内からは瓦器の小皿（9・10）、土師器の皿（11・12）が出土した。

遺構面直上の第３層内からは、瓦器の椀（13～17）、瓦器の小皿（18）、土師器の皿（19～22）、須恵器の片口鉢（23）が出土した。



第５図　No.2　平断面図



第６図　No.２　SP-101（８）SD-101（９～12）第３層（13～23）出土遺物実測図

No.３

東西２ｍ×南北２ｍの中間立坑掘削工事の調査区である。

①　基本層序

現地表下0.8ｍまでは盛土が堆積し、調査地の南側は既設の水道管が埋設されており、本来の堆積土は壊されていた。本来の堆積状況が確認できたのは調査地の北側半分のみである。第３層上面で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。

第０層　盛土（上面標高T.P.＋10.9ｍ）。層厚0.8ｍ。

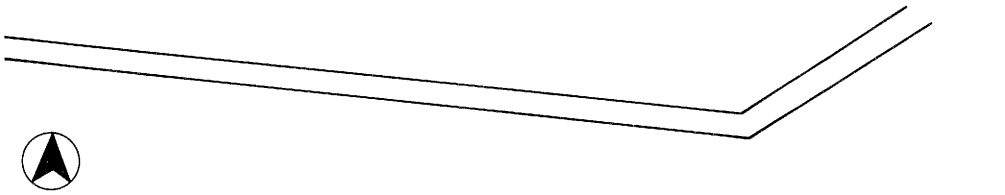
第１層　暗灰色（N　3／）細砂混粘土（旧耕作土）。層厚0.1ｍ。

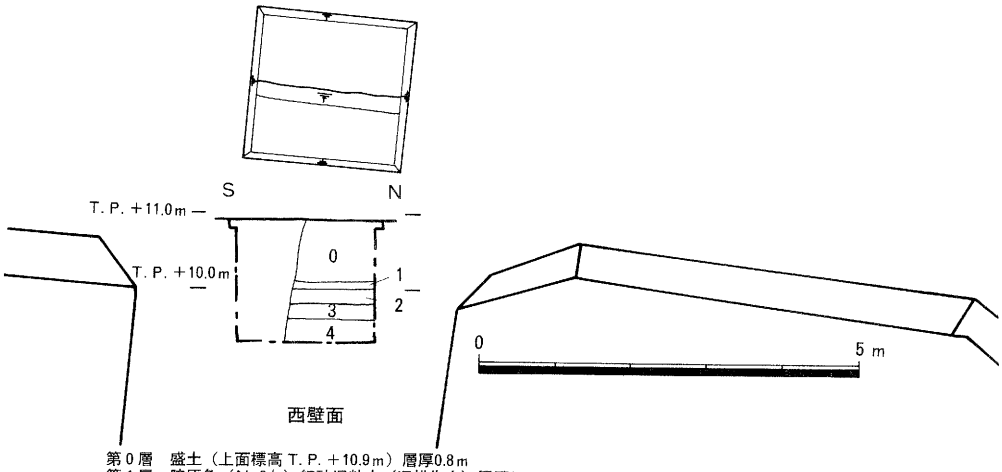
第２層　灰黄褐色（10YR　6／2）シルト混粘土。層厚0.2ｍ。

第３層　褐灰色（10YR　4／1）細砂混粘土。層厚0.2ｍ。

平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺物包含層。

第４層　黄橙色（10YR　7／8）粘質粗砂。層厚0.3ｍ以上。





第0層　盛土（上面標高 T. P. ＋10.9m）層厚0.8m
第1層　暗灰色（N 3/ ）細砂混粘土（旧耕作土）層厚0.1m
第2層　灰黄褐色（10YR 6/2）シルト混粘土　層厚0.2m
第3層　褐灰色（10YR 4/1）細砂混粘土　層厚0.2m
第4層　黄橙色（10YR 7/8）粘質粗砂　層厚0.3m以上

第7図　No. 3　平断面図

No. 4

東西2m×南北1.5mの中間立坑掘削工事の調査区である。

①　基本層序

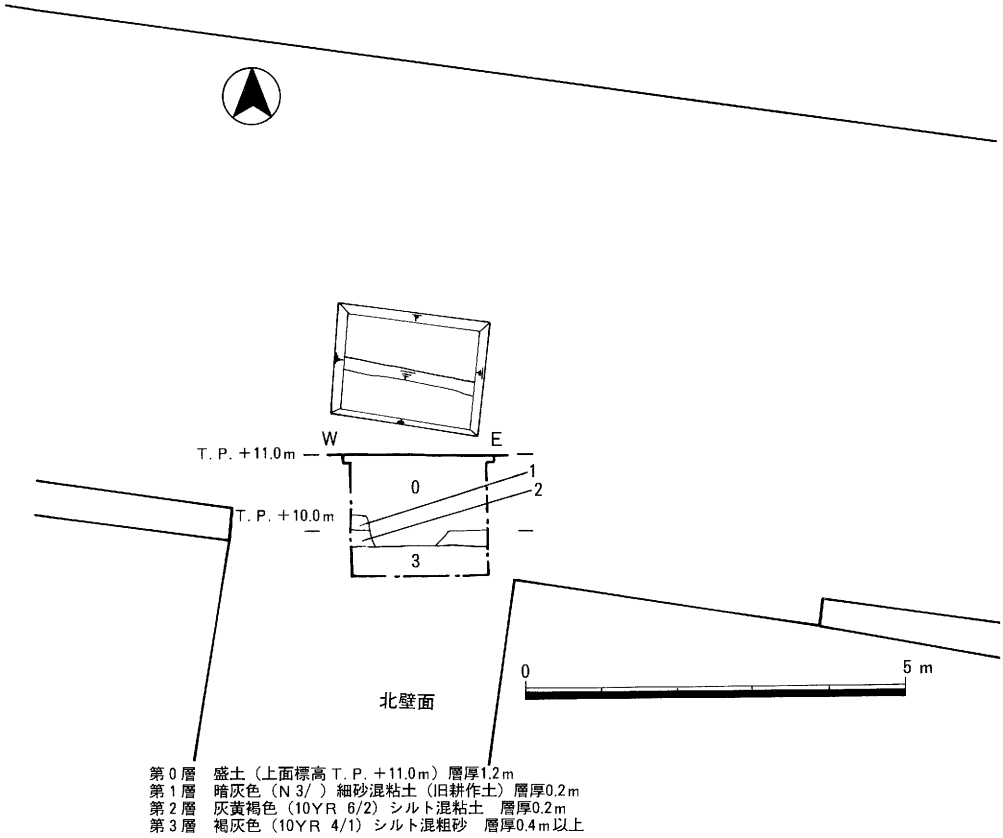
現地表下1.2mまでは盛土が堆積しており、本来の堆積土である第1層と第2層は一部壊されていた。また調査地の南側は既設の水道管が埋設されており、本来の堆積土は壊されていた。第3層上面で調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

第0層　盛土（上面標高T.P.＋11.0m）。層厚1.2m。

第1層　暗灰色（N　3/）細砂混粘土（旧耕作土）。層厚0.2m。

第2層　灰黄褐色（10YR　6/2）シルト混粘土。層厚0.2m。

第3層　褐灰色（10YR　4/1）シルト混粗砂。層厚0.4m以上。



第８図　No.４　平断面図

３　まとめ

今回の調査では、No.１とNo.２で平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺構を検出した。またNo.２では平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺物包含層を確認しており、今回の調査地付近一帯が同時期の集落であったことが判明した。

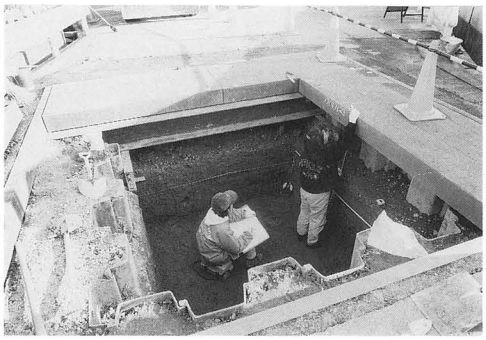
同時期の遺構は、当調査研究会が平成６年度に行った第24次調査地[註１]でも検出しており、少なくとも南北約100ｍの範囲内が集落であると推定される。

註１　本書　掲載「Ⅳ　中田遺跡（第24次調査）」

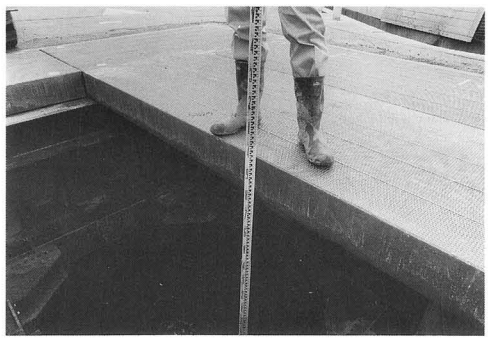
図　　版

No. 1　調査地周辺（西から）

No. 1　平断面（北東から）



No. 1　調査状況（北西から）

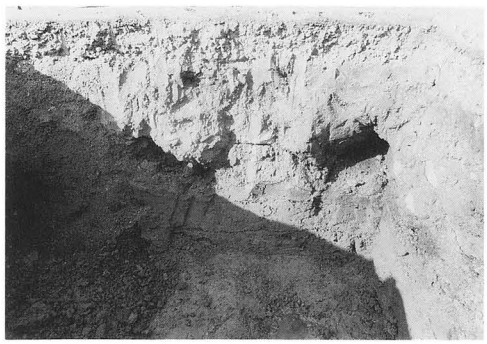


No. 1　下層掘削（北西から）

No. 1　調査地周辺（南から）

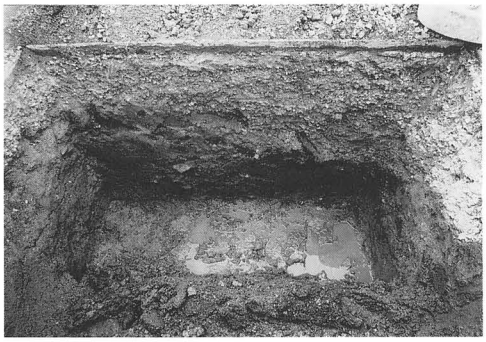
No. 2　平断面（南から）

No. 3　調査地周辺（西から）

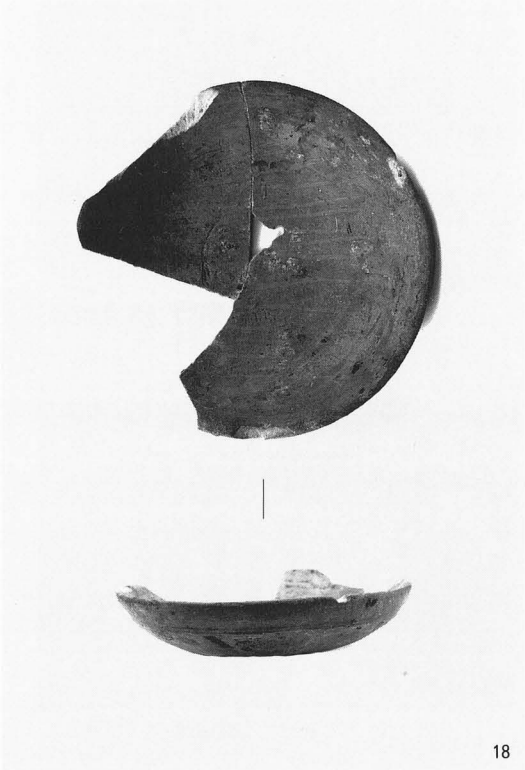


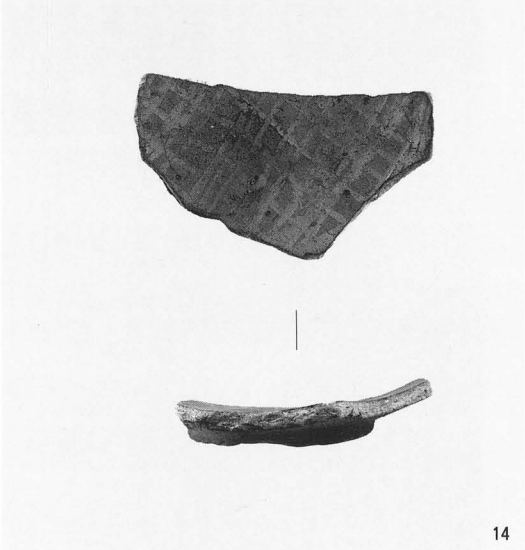
No. 3　平断面（東から）

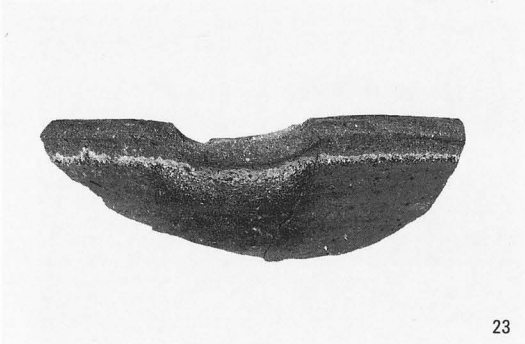
No. 4　調査地周辺（東から）



No. 4　平断面（南から）







No. 1　第４層（６）　No. 2　第３層（14・18・23）出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかたいせき
書名	中田遺跡
副書名	Ⅰ 第5次調査　Ⅱ 第6次調査　Ⅲ 第8次調査　Ⅳ 第24次調査　Ⅴ 第28次調査
巻次	
シリーズ名	(財) 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	49
編集者名	Ⅰ 成海佳子　Ⅱ 成海佳子　Ⅲ 坪田真一　Ⅳ 原田昌則　Ⅴ 西村公助
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581 八尾市青山町4丁目4番18号　TEL 0729－94－4700
発行年月日	西暦1995年11月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査面積
なかたいせき Ⅰ 中田遺跡 (第5次調査)	おおさかふやおしやおぎきた 大阪府八尾市八尾木北 1丁目37番2	27212		34度 36分 48秒	135度 36分 53秒	19901126 ～ 19901204	約80	送電鉄塔建て替え
なかたいせき Ⅱ 中田遺跡 (第6次調査)	おおさかふやおしやおぎきた おさかべ 大阪府八尾市八尾木北3～ 刑部2丁目	27212		34度 36分 41秒 ～42秒	135度 36分 47秒 ～37分 22秒	19910108 ～ 19910215	約180	公共下水道工事
なかたいせき Ⅲ 中田遺跡 (第8次調査)	おおさかふやおしやおぎきた 大阪府八尾市八尾木北 5丁目98～105	27212		34度 36分 31秒	135度 36分 55秒	19911105 ～ 19911201	約500	温泉旅館新築
なかたいせき Ⅳ 中田遺跡 (第24次調査)	おおさかふやおしおさかべ 大阪府八尾市刑部 4丁目210－1	27212		34度 36分 38秒	135度 37分 22秒	19940413 ～ 19940426	184	共同住宅建設
なかたいせき Ⅴ 中田遺跡 (第28次調査)	おおさかふやおしおさかべ 大阪府八尾市刑部2丁目地内	27212		34度 36分 41秒	135度 37分 23秒	19941118 ～ 19941205	20.96	公共下水道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
Ⅰ 中田遺跡 (第5次調査)	集落遺構	古墳時代前期	土坑	庄内系甕・布留傾向甕などの古式土師器	祭祀遺構か穿孔のある土器
	生産遺構	平安時代後期以降	土坑・鋤溝		
Ⅱ 中田遺跡 (第6次調査)	集落遺構	弥生時代後期以前	自然河川	弥生土器	
		古墳時代前期	小穴	古式土師器壷	埋納ピットか穿孔
		奈良時代	土坑	土師器鍋	埋納ピットか
		江戸時代以降	井戸・溝	陶磁碗	
Ⅲ 中田遺跡 (第8次調査)	集落遺構	平安時代後期	土師器皿集積	土師器皿	地鎮祭祀遺構
		鎌倉時代～室町時代	井戸・溝・堀・土坑ピット	土師器・瓦器・陶磁器・曲物・下駄・人形	堀には橋が架けられている井戸側曲物に墨書
Ⅳ 中田遺跡 (第24次調査)	集落遺構	平安時代末期	掘建柱建物・井戸・土坑・小穴	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器	
Ⅴ 中田遺跡 (第28次調査)	集落遺構	奈良時代	土師器		
		平安時代末期	小穴・溝	土師器・瓦器	

中　田　遺　跡

財団法人　八尾市文化財調査研究会報告49

Ⅰ　中田遺跡（第５次調査）
Ⅱ　中田遺跡（第６次調査）
Ⅲ　中田遺跡（第８次調査）
Ⅳ　中田遺跡（第24次調査）
Ⅴ　中田遺跡（第28次調査）

発　行　　1995年11月30日

編　集　　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市青山町４丁目４番18号
TEL・FAX　0729－94－4700

印　刷　　明新印刷株式会社
表　　紙　レザック66　〈260kg〉
本　　文　書籍Ｌ　〈 70kg〉
図　　版　マットアート〈135kg〉